
死舞人形・零

瑞代 杏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死舞人形・零

【Nコード】

N8344T

【作者名】

瑞代 杏

【あらすじ】

普通とは言い難いが、一般的な少年の織部小唄おりべこうたは、その日通った地下道の中で、時代錯誤な姿をした少女が、彼女を絡んできた不良を惨殺するのを目撃してしまう。少女は小唄に「死にたくないなら、私に協力しなさい」と言い、逆らえない小唄は彼女に協力することになった。

それが彼と、彼に関わってくる八つの歯車の物語の始まりだった――。

10／13 サイドストーリーを除く本編の分割及び文章修正作業

完了しました。ご迷惑をお掛け致しました。

第一話『邂逅』（前書き）

球体間接人形が登場する物語ではありません。予めご了承ください。

第一話『邂逅』

「うーん、今日は何にしようかな」

同じ買い物客に囲まれた中で、適度に冷やされた野菜を見つめながら唸る少年が一人。

「厚揚げとチンゲン菜の煮びたしにしようかな。でも三日前に食べたし、うーん……」

母親に今日の夕飯の材料を頼まれたのだろうか。少年は軽く唸りながら、並べられた野菜を吟味していた。野菜の新鮮度を調べる少年の手に淀みはなく、熟練の主婦と比べても遜色がない。

「よし、今日はシチューにしよう」

少年は軽くそう呟いて、吟味した野菜を買い物かごに入れ始めた。人参、ジャガイモ、玉葱、ほうれん草——少年の手が、鮮度が高い野菜を次々と選び取っていく。

「♪」

軽く鼻歌を歌いながら野菜と同じく鮮度を調べ、肉を買い物かごに入れる。

最後に数種類のスナック菓子と千五百ミリリットルのペットボトルを一本かごに入れて、少年はレジカウンターに買い物かごを置いた。

「うう、寒くなってきたなー」

店を出ると同時に、冷たい風が少年のコートをなびかせる。

今は春の初め、割と東に位置するこの町でも桜は咲き始めているが今は夕方、冬の寒気が残るこの時期の風はまだまだ冷たい。

「……たまにはこっちから帰ろうか」

逡巡^{しゅんじゅん}した後に、少年が目を向けた先には地下道があった。

この地下道は少年の家への近道で何の変哲もない、只の地下道だが灯りが少なく夜は利用者が少なく、更に珍走団紛いの不良が描いた、いかがわしいスプレーアートがそこら中に描かれているので、大半の人間はここを通過することを良しとしていなかった。

しかし、今は冷たい風を凌げるのと家への近道だということ、それらは利点だと少年は頭の中で結論を出し、地下道へと歩を進めていく。

それは、ある種の予感だったのかもしれない。

地下道へと続く階段を降りると、いかがわしいアートが早速少年を出迎えた。街の灯りは届いてないが、それは少年の目にもはつきりと見えた。

こんなの描いて何が楽しいんだろう、と少年は顔をしかめながら薄明りの地下道を進んでいく。

外見から年齢十歳かそれ以下と思われる少年も、それが何を表しているのか理解はしていた。だが、芸術性の欠片もないそれは害ある物以外の何物でもなく、ある種の悪意しか感じられなかった。

「……？」

地下道も半分を越え、残り四分の一程度にまで差し掛かった時――少年の目に複数の人影が見えてきた。

「……人がいる？」

別に人がいること自体はおかしくはない。しかし、その人影は何かを複数で囲んでいるように見える。少年は更に近づいて、よく目を凝らして見ると小さい人影が三つの大きい人影に絡まれている様子が伺えた。

「何？ 私はここを通りたいだけなんだけど？」

よく通る、凜とした声が地下道に響く。小さい人影が発した声は少女のものだった。声だけでは年齢は分からないが、明らかに変声期前で少年と同じくらいかもしれない。

すました態度が気に入らないのか、複数の大きな人影が口々に汚い言葉を叫ぶ。

「んだコラァ！！ てめえからぶつかってきいて謝罪の一つもねえのか！？ ああん！？」

大きな人影はどれも不良かチンピラのようなだった。そのうちの一人がズボンのポケットに手を入れながら一歩少女へにじみ寄る。少女は聞くに堪えないと云った様子でため息を吐き、やれやれといったジェスチャーをしながら心底呆れたような口調で言った。

「あのね……私はただここを通りたかっただけ。ぶつかったも何もわざとでしょ？ それを人のせいにするなんて頭おかしいんじゃない？」

「んだとこのクソアマ……」

「素直に謝れば許してやろうと思ったが、もう我慢ならねえ!!」

少女の正論に不良達の頭は怒り心頭といった様子か、それぞれのポケットからスタンガン、バタフライナイフ、メリケンサックといった得物を取り出して少女を威嚇した。

「へっ！ 謝れば許してやったのによ。馬鹿なガキだぜ!!」

「ふーん……」

不良達の得物を眺めた少女に恐怖の表情はない。それどころか、薄く笑っているようにも見える。

（――!!）

それを見た少年の背中を、冷や汗が流れ落ちる。

（なんだ、この感じ……）

少年はいち早く少女の変容に気づいていた。しかし、怒りで我を忘れた不良達がそれに気づけるはずもない。

「なんだ、死にたいなら早くそう言えばいいのに……!!」

少女の口が三日月の形に大きく歪み、愉悦の顔に浮かんだ目は大きく開かれ、突如地中から飛び出した幾本もの黒い杭が二人の不良を襲った。

「がっ!? ぎゃあああああああー!!」

「ぐげがああああああああ!」

黒い杭が不良の手、腕、足、脚、腹、胸、場所を問わず貫き、ただの悲鳴などというものではない、断末魔の悲鳴を上げさせる。

貫かれた不良のうちの一人は胸を貫かれて絶命していたが、ある意味運が良かったのかもしれない。

「ふふ、汚いオブジェね。芸術性の欠片もないわ」

運悪く生き残った不良に少女が血塗れの顔で笑いかける。

「がはあっ!! はあはあ……っ! な、なんなんだてめえは!？」

「私が何だろうと貴方には関係ないことでしょ。まあ、ひとつだけいいこと教えてあげる。その黒い塊はあるエネルギーで出来ていてね。目標を貫いた後は中心部にエネルギーが集まって、そして……爆ぜる」

「なっ!？ なんだと——」

不良が何かを言う前に破裂音が地下道に響き渡り、天井、地面、少女の顔、服——辺り一面に血と臓物がビチャビチャと生理的に不快な音を立て撒き散らかされた。

「ふふ……汚い花火ね。まあ、下種げすの最期には相応しいわ」

「ば、バケモンだあ!! 誰か助けてくれえ——!!」

臓物の饅すえた臭いを嗅いだ不良は、嘔吐しながらも必死に地下道の出口へと逃げ出そうとする。

死に物狂いで逃げようとする不良の背中を一瞥した少女の手には、いつの間にか拳銃が握られており、照準を不良の後頭部に合わせた少女が躊躇することもなく引き金を引く。

「――」

銃声の後、的確なヘッドショットが後頭部に弾をめり込ませ、悲鳴を発する間もなく生き残った不良を絶命させた。

（な、なんなんだあの子は！ 人間じゃない！？）

全てを見ていた少年は異常なまでの恐怖にかられ、その場から動けずにいた。それなりに離れていても地下に閉じ込められた臓物の饅^すえた臭いは少年の周囲にも漂ってくる。少年は喉の奥からこみ上げてきた酸っぱいものを何度も嚥^{えんか}下してやり過ごしていた。

（逃げなきゃ……殺される！！）

少年は震えてまともに動かない足を無理やり動かし少しずつ後退する。しかしその足元には小さな木の枝があり、運悪くも少年はそれを踏んでしまい、パキツと言う音が地下道に響いた。

「……ん？」

しまった――と思った時には既に遅く、少女の紅い双眸^{そうぼう}がはつきりと少年の姿を捉えていた。

「ひっ……！！」

「あら……？」

血と臓物^{まみ}に塗れ、両目を紅玉石の如く輝かせる少女がゆっくりと少年に近づく。得体の知れない術を使う少女の手には体軀に不釣合

いな拳銃。少年に逃げ場はなかった。

「貴方、何処から入ってきたの？」

手にした拳銃を突きつけることはなく、少女は心底不思議そうな表情をして少年に問いかける。しかし目の前の少女が恐怖の対象でしかない少年にどれだけ優しい言葉を掛けたとしても、それは悪魔の言葉にしか聞こえない。

「あ……ああ……」

「ふう、まあいいわ。残念だけど、見られた以上は殺さないね」

少女は少年の目の前に立ち、手に持った拳銃を少年の頭部に当てる。そのまま引き金を引けば少年の頭部は破裂し、脳漿を撒き散らすに違いない。のうしやう

少女が近づいた為に臓物の発する膻えた臭いがより酷くなる。汚物などとは比べ物にならない人間の内臓の臭いだ。並の人間に耐えられるものではない。

地獄とも思える臭いに耐え切れなくなった少年はその場で嘔吐してしまった。

「う、げええええええええー！ー！！」

嘔吐の刺激に涙を流しながら、胃液しか出なくなってからもまだ嘔吐し続ける。吐きに吐いた少年が顔を上げると拳銃の引き金はまだ引かれてはいなかった。

（僕は……まだ、生きている……？）

「貴方、名前は？」

「え……?」

「名前よ、名前」

「おりべ……織部小唄こうた」

少年——織部小唄——は未だ恐怖に震える声で自分の名前を言った。

「こうた? 平仮名で?」

「い、いや……小さいに口に貝かな」

なるほど、と少女が頷く。

「小唄、ね。では小唄、死ぬのが嫌なら私の手伝いをなさい」

「て、手伝って……?」

「質問は許さない。YESかNOか答えなさい」

「ひっ!!」

答えを急かすかのように小唄の頭部に銃口が押し付けられる。

もしここでNOといえれば少女はいとも容易く引き金を引き、小唄の人生を終わらせるだろう。彼が取れる行動は最初から一つしかなかった。

「……分かった」

「交渉成立ね」

少女は出会ってから初めて嬉しそうに笑い、押し付けていた拳銃をしまった。

「はぁー……」

助かったことで張り詰めていた気が抜けたのか、小唄はその場に座り込んでしまった。吐しゃ物の隣でいい気分ではないが、そんなことを気にする余裕はまだ彼にはない。

「まあ、手伝いといっても人間を殺させたり後始末をさせたりするわけじゃないから安心なさい」

「そ、そうなんだ……」

とりあえず人殺しにはならずに済むようだ、そう思った小唄は心から安堵し、改めて少女を見つめた。

年齢は小唄と同じかそれより少し上くらいだろうか、赤い瞳に絹糸のような金の髪、着ている服は血と臓物に塗れてよく分からないものになっているが、その辺の普段着などというものではなく中世のお嬢様がパーティに着ていくような、赤地を基調に黒で彩った古風衣装。イー・ク・ワンピース

どこまでも整った顔と人間の持つものとは思えない魔性の赤眼。

小唄は素直に、綺麗だ、と心の中で思った。

そんな小唄をよそに、少女は汚れた衣装を脱ぎ始める。

「え、ちょっ……何してるの!？」

「何って、只の着替えよ? 流石にこんな汚れたドレスじゃ地上に出たくないわ」

「それは分かるけど、一言言ってよ!」

慌てて、赤くした顔を背ける小唄に、少女は意地悪そうな笑みを浮かべる。

「何赤くなってるのよ。性交どころか精通もまだな子供の癖に」

「な! 君だって子供じゃないか!」

「ふふふ、小唄って面白いわね!。私の鞆から新しいドレスを取っ

て頂戴」

何か言おうとした小唄だったが先の件によって逆らう気は既になく、大人しく鞆を取りに立ち上がる。

それは鞆というよりは旅行用のキャリーケースであり、中には脱ぎ捨てたドレスと同じデザインのものが収められていた。

「……はい」

「ありがとうございます。ああ、その水を先に頂戴」
「これかな？」

血と臓物に塗れた髪と顔を洗うのだろう、小唄が渡した瓶の中身を少女は頭から被る。

「まあ、こんなところね。私の服を」

小唄からドレスを受け取り、慣れた手付きで着ていく少女。その手際の良さは、当たり前だがドレスやワンピースを着たことがない小唄から見ても感嘆に値するものだった。

「これで良し。……何？」

「いや、良くそんな難しいのを簡単に着れるなあって」

「ああ、慣れよ慣れ。何なら小唄も着てみる？」

「え、僕男だから……」

「男でも女でも似合えば問題ないと思うわ。機会があったら着せてあげる」

「えええ……」

困惑する小唄を見て楽しそうに笑う少女。気がつけば小唄も笑っていた。このような異常な空間でも笑えるのだ、と思うと自然に

笑みが零れた。

「そういえば自己紹介がまだだったわね、私はヴェルローズ。ヴェルと呼んでくれて良いわ」

「いい名前だね。これからよろしく、ヴェル」

「ふふ、ありがとう。さ、それじゃ行きましようか」

少女――ヴェルローズ――は、濡れた髪をポニーテール気味に束ねながら出口へと向かう。

ふと、小唄は後ろを見る。

（そういえば、この死体どうするんだろう？）

出口へと向かうヴェルローズに話しかけようと思ったが、既に距離が離れすぎていることに気づき、彼は慌てて後ろ姿を追いかけた。

――人気の無くなった地下道。

地面に残された、人間だった物の欠片と汚されたドレスが蠢き、轟々と燃え上がる。

それは全てを燃やし尽くす紅蓮の炎ではなく、漆黒の闇の黒い炎だった。

やがて、汚物は白い灰に変わり、汚されたドレスは跡形も無く消え、後には静寂のみが残されたのだった。

第一話『邂逅』（後書き）

第三話までは少し短めです。

第二話『使命』 Part. 1

「……」
「……」

——これからどうすればいいのか、一人は考えながら、もう一人は苛ついた空気を纏いながら、先程出会った二人は夜の街を歩いていた。

周りから感じられる好奇の視線、視線、視線……。この人間にとってはそんなに私が珍しいのか、とヴェルローズは軽く片眉を上げながら思う。

「まったく。前から思っていたけれど、この鬱陶しい視線は何なの」「気持ち分かるけど、仕方ないんじゃないかなー」

金糸の如く綺麗な髪に整いすぎている顔、魔性の紅い瞳、更には赤と黒で彩られたアンティーク・ドレスを彷彿させるワンピース。これだけ世間離れた条件が揃っていれば、一般から奇異きいの目を向けられるのは当たり前のことだ。

不機嫌な彼女をなだめる小唄だったが苛立ちは暫く収まりそうになかった。

「そういえば、気になったんだけど」「何？」

「さっきの地下道さ、夜は確かに人通り少ないんだけど、全くないってわけじゃないんだよね。でも——」

「あんなことがあったのに誰一人としてそこを通らなかった、そのことが気になるのかしら？」

小唄は軽く頷く。

「簡単な話よ。あの付近一帯に結界を張って誰にも見えないようにしたの」

「結界？ 漫画やアニメによく出てくる、空間を切り取って一時的に外部からの干渉を遮断してしまうようなもの？」

「……まあ、原理を説明したところで理解出来ないだろうし、それと同じようなものと考えていいわ」

ところで、とヴェルローズは一息入れて、前々から気になっていた事に話を切り替える。

「あの時も言ったと思うのだけれど、貴方……どうして私の結界に入ってこれたの？」

「え、なんでって……僕に言われても困るよ。別に何も感じなかったし……」

困惑するような小唄の返答を受けてヴェルローズは思考を張り巡らせながら赤い目で小唄を凝視し、一挙動たりとも見逃さないようにする。

「……」

「な、何？」

（何の力も感じないし、見た感じは普通の人間ね。けれど、普通の人間が外界から完全に遮断された結界内に入れるはずがない。しかも何の痕跡も残さずに入れるとなると、それなりに高位の術者でも

不可能なことだわ。残る可能性は、本人ですら気づいてない潜在的な力があるのか、それとも私の考えの及ばない何かがあるのか――」

「――それを確定するには、判断材料が少なすぎるわね」

「え、何か言った？」

「いえ、何も。可愛い小唄ちゃんを眺めていただけよ」

「うう……」

はぐらかすように微笑するヴェルローズだったが年齢的にまだ慣れていないのだろう、その真意が分からない小唄は視線から逃げるように紅潮した顔を背けた。

「――……やっと落ち着いたわね。そろそろ話してもいいかしら？」

賑やかな空間を抜けた二人は喧騒けんそうから程遠い夜の住宅街を歩いていた。

飼い犬か野良犬か分からない犬の鳴き声、家族の団欒、誰がやっているのか分からないゲームをしている音、それ以外は何も聞こえない静かな住宅街の真っ只中――。

好奇の視線が消えたのか、ヴェルローズの苛立つような表情もいつの間にか柔らかいものになっていた。

「うん……」

例の目的のことだろう、小唄は軽く身構えて彼女が話し始めるのを待つ。

「貴方にしてもらいたいことは二つ。一つは、私の目的を果たす為

の拠点の提供」

「拠点って、家のこと？」

「そうね。別に提供出来る別荘とかあるならそっちでもいいけど」

何故かは本人も知らないが小唄の家は非常に大きい。それは十数人同時に暮らしても全く差し支えない程で、住人が一人くらい増えたところで何も問題もなかった。

「少し掃除しないといけない部屋もあるけど、それでもいいなら。それで二つ目は？」

「ええ、それくらいなら構わないわ。二つ目だけど、私の妹……アルトリリィと一緒に探してほしいのよ」

「妹さん？」

小唄はヴェルローズの意外な言葉に立ち止まって目を向ける。少しの寂しさが含まれた表情で彼女は語り始めた。

「私と妹がこの国^{ヤパン}に来たのは、ほんの一週間前。来てから数日後に、一緒に行動していたはずの妹が突然姿を消した。それから二、三日くらい探し回ったけれど、妹の足取りは全く掴めなかったわ……」

一緒に行動していたのにも関わらず忽然と姿を消したなど、一般人である小唄には到底信じられない話だった。しかし彼女の表情は真剣そのもので、嘘を言っているようには到底思えなかった。

「分かった。僕も暇だし、協力するよ」

「ありがとう。それじゃ貴方の家に——っ!？」

小唄の快諾にヴェルローズは軽く顔を綻ばせて喜びの表情を見せ

だが、突如湧き出た不穏の気配に綻ばせた顔を引き締めて、何かと対面するように夜の闇を凝視する。

「な、何？」

「ここにもいるようね……。小唄、死にたくなければ私の側から離れないで」

「う、うん……」

話しながら小唄は空間が異質なものに变化していくのを感じていた。それまで聞こえていた住宅街の音が消えてゆき、すぐさま全ての音が消えた。

（これは、あの時と同じ……？）

「姿を見せなさい」

その言葉に応えるように、変質した空間に白い靄もやのようなものが見え始める。じょじょに密度を増す靄——やがてその中心に現れたのは黄色に輝く一つの目。

「カンゼンナニンギョウ、ニンゲントトモニキレルニンギョウ。
アナタハイマシアワセ？」

目の輝きは一層増し、何かを話し始める。その発音は酷く聞き取りにくいものだったが幻聴などではなく確かに言葉だった。

「さてね。たとえば私が幸せだったとしても、貴方には何の関係もないこと」

靄が微かに震える。

「シアワセナニンギョウ、ヤサシサニツツマレタニンギョウ。トナリニイル、ニンゲンハダレ？」

「……ただの協力者よ」

「タダノキョウリヨクシャ？ チガウ、ソノニンゲンハ、アナタニトツテトモタイセツナニンゲン。ソノキズナ、ネタマシイ」

「な、何言ってるのかよく聞こえないんだけど……」

靄とヴェルローズの会話は人間である小唄には殆ど聞き取れないものだった。

「気にしないで。それより……来るわ！」

靄が一層濃くなり、それと同時に目の輝きが更に増す。

「カンゼンナニンギョウ、コワシテヤル！！」

獣にも似た咆哮に合わせて、ヴェルローズが何処からか、サブ・マシンガンを取り出す。

その瞬間、空間が震えた――。

第二話『使命』 Part. 2

「——くっ！」

ヴェルローズは小唄を守るように前面に立ち、サブ・マシンガン
の引き金を引いた。

複数のマズル・フラッシュと射出音が鳴り響き、銃口から吐き出
された無数の銃弾が次々と靄に殺到する。しかし効いてないのか、
相手は靄を触手のようにしてヴェルローズに差し向けてきた。

「ちっ！！！」

触手に銃弾を浴びせることで強引に狙いを逸^そらせる。逸^そらされ
た触手は路肩に生えていた草を侵食し、雑草はまるで枯葉剤でも撒
いたかのように急激に枯れ果てていく。

「そんな！ 草が……」

「^{ドレイ・タイプ}吸収能力か……ちよつと厄介ね。小唄、危なくなったらこれで身
を守りなさい」

ヴェルローズが無造作に投げてよこしたものを慌てて受け取る小
唄。それは、重さはそれ程でもないが紛れもない本物の拳銃だった。

「ええっ！ こんなに使えないよ！！！」

「万が一の為よ。使わなくても済むように私が守るから——！？」

予告なしに飛んできた触手をヴェルローズは身を逸らしてかわした。

「セントウチュウニムダバナシトハ、ヨユウダナ」

「ふ……そうね。ここからが本番よ!!」

間髪入れず襲い掛かる触手をかわしながらサブ・マシンガンで靄を撃つ。先程と同じくあまり効果はないのか、靄の出す触手の勢いは衰えない。

しかし、後方で戦いを見守る小唄の目には小さな変化が見えていた。

（効果がないんじゃない。その証拠に銃弾は膜みたいになって靄の周りに張り付いてる。それが何のなのか僕には分からないけど、ヴェルは何かを狙ってるみたいだ……）

「ムダダ！ シネッ!!」

その変化に気づいた小唄が叫ぶ。

「ヴェル!!」

（ちっ！ 即死攻撃かっ!!）

警告を理解したヴェルローズが大きく右に避けるのとほぼ同時に、靄の中に黄色く輝く目が赤に変わる。直後——彼女の横を赤い光線のようなものが通り過ぎていった。

「サケタカ……。ダガ、コレデキズナハタタレル！」

嘲笑うかのように震える靄から触手が放たれる。その目的を理解したヴェルローズは小唄のほうを振り向き、叫んだ。

「しまった!! 小唄っ! その触手を避けるか撃つかしなさい!!」

「え、あ……ああ……!!」

弾かれるように迫り来る触手を見る小唄。触手の速度は非常に速く、避けられそうにもない。小唄は震える両手で銃を構え、何度も引き金を引くが、狙いが定まらず一発も当たらない。

「ムダダ。タダノニンゲンニソノチカラハツカエナイ……」

「も、もう間に合わない……! あ、ああああああ——っ!!」
「小唄っ!!」

そして、触手が小唄の体を貫いた——かに見えた。

「え?」

「ナニッ!?!」

何が起こったのかわからない小唄が自分を貫こうとしている触手に目を向ければ、自分の腹部と触手の間に出来た、透明なバリアのようなものが触手と火花を散らし合っているのが見えた。

「ま、魔法障壁ですって……?」

魔術の行使による攻撃を障壁によって無効または軽減する術である。当然、靄の触手も魔法物質から出来ているため妨害される。何の力もない人間が扱える能力ではない。

（この子、魔力を持っているわ。それも膨大な……）

その証拠に触手が障壁を貫けないだけでなく逆に触手に輝が入り、今にも砕けそうになっていた。

（何故この子が私の結界内に入ってこれたか分かったわ。今は無意識でしか扱えないようだけれど鍛えれば……。けれど、今は――）

改めて、困惑に震えている靄と向き合い、ヴェルローズは呪^{まじない}を高らかに唱えた。

「死舞人形が一体、闇の薔薇の名に於いて命ずる。狂気に囚われしものよ、汝の真の姿を取り戻せ」

呪文を彷彿させる言葉を聞いた靄が絶叫し、それと同時に障壁とせめぎあっていた触手が消滅する。

「ど、どうなってるの？」

「黙って見てなさい」

ヴェルローズの表情は真剣そのものだったが、その表情の中に悲しみがあるように見えた。

やがて靄が発していた絶叫が止み、靄から溢れ出した光は人の形を取り始める。それは三十センチメートルくらいの小さな人形の姿になった。

「に、人形？」

小唄が呟く。

『はい、ここはどこ……？』

人形の震える声にヴェルローズが優しく声を掛ける。

「ここは現世よ。貴女は何処から来たの？」

『わ、わたしは……。あ、ああ、ああ……！！ 痛い痛い！！』

もうやめて！！ わたしをこれ以上苦しめないでえええええー！！
ー！！！！

「やはり、この子も……」

悲しそうに呟き、何が何なのか分からない小唄に顔を向ける。

「これは人形の魂。そしてこの魂が狂気によって囚われると“コワレ”という、ただ彷徨い続け、時には人の世界に害なすだけの存在になってしまうの。あの子の主人も相当辛い目にあったようね……」
「あの人形自身じゃなく？」

「そう。全部が全部ではないけれど、主人に愛された人形はいずれ魂を持ち、記憶を共有する。そして……その記憶を忘れることはない。主人が死してからも記憶は残り続けるわ……」
「……」

一度だけ顔を伏せ、ヴェルローズは顔を上げて人形に近づいてその小さな体を優しく抱いた。

『え……』

「大丈夫。此処には貴女を傷つける者はいない。何があったのか話してごらんなさい」

『……はい』

――数分かけて、人形は全てを語った。

「っ！ そんなの親じゃない！！」

話を聞き終えた小唄は、そのあまりに凄惨な話に拳を握り締める。人形の主人だった少女は父親と母親と妹と仲睦まじく暮らしていた。しかしある日、母親の不倫が発覚し、そこから全てが崩れ始めた。

父親と母親は和解せずに離婚。妹は母親に引き取られ、少女は父親に引き取られた。

最初の一年は何の問題もなく少女は学校に通い、友達と遊んだりもしていた。そして父親は真面目に仕事に行き、休日には少女と出かけたりもした。

だが三年経ったある日、突然父親が会社から解雇を言い渡され、その日から父親は変わった。

それまで手をつけてなかった慰謝料でギャンブルに明け暮れて毎日のように豪遊。これだけならまだ救われたが、しかしその毒牙は間もなく少女にも向けられ、その後父親によって犯され続けた少女はその苦痛に耐え切れず入水自殺してしまったのだった。

「そう、だったの……」

ヴェルローズもまた小唄と同じく怒りと悲しみに握り締めた手を震わせて、爪によって破れた掌てのひらから血を滴らせていた。

「辛いことを話させてしまつてごめんなさいね。今なら道が見えるでしょう、その道を辿たどって主人の処へ行きなさい」

『うん、見えるよ。この道をたどっていいの？』

「そう、それは貴女と主人を結ぶ架け橋。その通りに行けば、必ず

主人に会えるわ」

『分かった。ありがとう、お姉ちゃん』

年相応の笑顔で笑った少女の人形はそのまま小唄のほうへ向かっていき、彼の目の前で止まる。どうしていいか分からない小唄にヴェルローズは優しく微笑む。

「優しく、抱いてあげなさい」

小唄はその言葉に従って少女の人形を優しく手に取り、その胸に抱いた。

『あったかい……』

抱かれた人形の表情は一層明るいものになり、心地良さそうに目を閉じる。

『ありがとう、ご主人さま……』

「え？」

「――！！」

嬉しさに包まれた言葉と同時に少女の人形は光となって空を昇ってゆく。小唄はその空の向こうに少女の人形と、人形によく見た見知らぬ少女が幸せに暮らす様子を見た気がした。

「……」

「……これが、主人に寵愛されながらも“死舞人形”となれずに“コワレ”となってしまったものを取り戻し、主人の元へと返す。私達“死舞人形”になったものに課せられた使命よ」

「そうなんだ……。でも、さっきの何だったんだろう」

「……ドール・マスター」

「ん？」

小さい呟きに小唄が反応する。

彼女が呟いたそれは、全ての人形の主人になれる素質を持つ者の名称――。

（まさか、ね）

「そうね……。きっと、小唄の優しさがあの子の主人のと同じに見えたのかしらね」

微笑したヴェルローズが結界の解かれた夜空を見上げる。暫くの間、二人は夜空の向こうにあるであろう少女の人形が辿った道を見ていた。

第三話『共生』 Part. 1

「――ただいま」

広すぎる玄関に、小唄の声が響く。

言葉が返って来ないのは分かっていた。それでも小唄は、長年の習慣だから、と言い聞かせて「ただいま」と言う。

「随分広いお家ね」

靴を脱いで上がったヴェルローズが物珍しそうに辺りを見回しながら言った。

「無駄にね。うちの両親ちょっとした科学者で、研究室とかもあるから広いんだ」

「ふーん。どんな研究してたの？」

「よくは知らないけど、何か最先端の科学技術がどうのこうの、って言ってた」

「詳しくは知らないのね」

「うん。二人とも何故かあまりお仕事の話はしてくれなかったから」

「そう。今お家にいるのかしら？ いるのだったら――」

「いないよ」

挨拶を、と続けようとしたヴェルローズの言葉は小唄の強い口調で遮られた。

「僕が六、七歳くらいの時、急にいなくなっただんだ」

はっきりと言う小唄の表情は、むしろさばさばしたものだっただ。

「そ、そう。思い出させてしまっただめんなさいね……」

「いいよ。もう七年近くも経ったから慣れたし。それより、部屋に案内するからついてきて」

話はこれで終わり、と言わんばかりに小唄はやや強引に背中を向ける。

（ごめんなさい、小唄……）

ヴェルローズは、心の中でもう一度その背中に謝った。

「……」

ここの部屋を使って欲しい、と部屋に通されたヴェルローズは少し疲れた表情でベッドの端に座った。ベッドから埃が舞うことはなく、この部屋は普段から掃除してあるのだろう、そう思いながらそのままベッドに体を沈めた。

「両親、か」

人間にはとても大事な言葉かもしれないが、人間ではない彼女にとってはただの言葉に過ぎない。両親と言う言葉に想いがあつたとなれば、それは死舞人形になる前の記憶だ。

「どんな人達だったかしら……」

軽く目を閉じ、記憶を掘り起こすように、思考の海に身を委ねる。瞼の裏に浮かぶのはパイプを燻らせる精悍な顔つきの初老の男性、皿いっぱい焼き菓子を楽しむ笑顔で運ぶ中年の女性、側に二体の人形を置いて焼き菓子を楽しみにしている少女、そして――

「……ん。少し寝ていたみたいね」

ヴェルローズは軽く瞬きをして立ち上がり、旅行鞆から取り出した衣服に着替えてから赤い液体の入った瓶を手し、階下へ降りる。リビングに辿り着くと同時に芳醇な香りが漂う。キッチンではエプロンを掛けた小唄が料理をしながら、スナック菓子を抓んでいた。

「あ、着替えたんだ」

「ええ。普段から正装しているわけじゃないのよ」

と、長い金髪を掻き分けながら言う。

髑髏どくろと共に赤く『DEATH』とプリントされた黒地のカッターシャツは七分丈。赤と黒の格子スカート、ワンポイントの赤薔薇が引き立つ黒地のオーバー・ニーソックス――今の彼女の服装は、所謂いわゆるゴシック・パンクスタイルに近いものがあった。

「ヴェルらしい服装だね。似合ってる」

「そう？　ありがとう。これ、冷蔵庫で冷やしておいてくれないかしら」

ヴェルローズは、手に持っていた瓶を小唄に渡した。

「これは……、お酒？」

「赤ワインよ」

まだ十三かそこらの小唄に酒を飲むという習慣はなく、怪訝けげんそうな表情でヴェルローズを見るのも仕方ないことだろう。

「私達は飲食しなくても生きていけるけど、嗜好という形で飲食はするわ」

「なるほど。確かワイングラスはあったはずだからこれ冷やしておくね。今日はシチューだけどヴェルも食べる？」

「ええ、いただくわ。先にお風呂入らせてもらってもいいかしら？」

「うん。お風呂場はそこから出て真っ直ぐ。バスタオルはもう用意してあるから」

「ありがとうございます。ご飯、楽しみにしているわ」

手を振りながらヴェルローズは風呂場へと向かっていった。

「楽しみ、か。そういえば、誰かのご飯食べるの久しぶりだな」

一人で食べるより二人で食べるほうが断然美味しい、楽しみながら食事が出来るから——そう考えると料理を作るのにも一層熱が入る。

今まで以上に美味しいシチューを作ろう、そう思った小唄は鼻歌を歌いながら鍋に材料を入れていった。

「いただきます」

「いただきます」

出来立てのシチューを口に運び、満面の笑顔を見せる二人。

「とても美味しいわ。小唄は男の子なのに料理上手なのね」

「二人がいなくなってから僕一人で全てやらなきゃいけなかったからね。いつの間にか覚えちゃった」

「そう。少し羨ましいわ」

暫し沈黙――。

スプーンを操作する音と、適当なバラエティ番組が流す、他愛も無い話題だけが部屋に響く。それは気まずいといった類のものではなく、寧ろ幸せに満た^{むし}されていた。

「さて、色々聞きたいこともあるでしょう。私に答えられることなら答えてあげるわ」

先にヴェルローズが沈黙を破り、小唄に質問を促した。少し逡巡した後、小唄は一番気になっていたことを聞くことにした。

「じゃあ……死舞人形って何なの？」

「当然の疑問ね」

予め予想できていたのだろう、ヴェルローズは驚いた様子を少しも見せずに話し始めた。

「死舞人形とは主人からの深い愛情を持って育てられ、その主人亡き後もその願望を叶えるために動き続ける、魂を持ったもの。分かりやすく言えば“生きた人形”ね。今日出会ったコワレもルナティックも死舞人形も基本的には同じものよ。ただし、死舞人形となる際に主人の“精神的な部分”を元に身体を人間のものに再構築するから、球体間接のドールとはまた違う存在ね」

「ふーん、だから血も赤いんだね。ところで、ルナティックって何？」

「ルナティックは“自我を持っているコワレ”のことを指すわ。自我があるからコワレよりも厄介な存在よ」

「そうなんだ。主人から深い愛情を受けた人形が全部、死舞人形になるの？」

「いいえ。人形が魂を持って死舞人形になるには、寵愛とも言える程の深い愛情ともう一つ……主人の強い願望が必要な」

「……夢を叶えたいとか？」

「そうね。特に、黒い願望——憎悪、殺戮、嫉妬といったものを——主人が持っていたら、その人形が死舞人形に昇華する可能性はずつと高くなるわ。更に今わの際だと百パーセント、ね……」

「百パーセント……！？ それって確実になるってことじゃ……」

「そう。この場合、その人形は必ず死舞人形になる。あまりの願望に狂わなければ、だけど」

「……そっか」

暫し静寂——。

スプーンを操作する音だけが部屋を支配する。バラエティ番組が流す他愛もない話題など最早聞こえてはいない。

皿の上にスプーンを置いたような乾いた音が部屋に響く。二人の皿はいつの間にか空になっていた。

「ごちそうさま。美味しかったわ」

「お粗末さまでした。僕はお風呂入ってくるから、そのお皿はキッチンに持っていてくれる？」

「ええ。ゆっくりしてらっしゃいな」

小唄の後姿を見送った後、皿をキッチンの洗い場に置いたヴェルローズは冷蔵庫から赤ワインのボトルを取り出し、食器棚にあった

ワイングラス軽く洗ってリビングに戻り、慣れた手付きで赤い液体をグラスに注ぐ。

「……まだ、全てを言えるような間柄じゃない」

独り言のように呟き、軽く揺らしてからグラスに口をつける。暫しの間、酸味の中に混じる甘味と苦味を口内で楽しんだ後に赤い液体を嚥下した。

「それにしても……ふふっ、後姿も可愛かったわねー」

たとえ闇に咲く薔薇だとしても、今は本質ではなく幸せの空間に身を委ねていたい。

彼と買い物に行く時とはとびつきり可愛い服を着せてあげよう、そう考えながらヴェルローズは赤ワインの味を堪能し続けた。

第三話『共生』 Part. 2

——次の日の夜、朝早くからアルトリイを探しに行っていた二人だが、陽が沈むまで搜索したにも関わらず、手掛かりの一つすら見つけられず、疲れた足で織部家へと戻ってきていた。

「何の手掛かりも見つからなかったね……」

「そうね。予想はしていたけど……」

二、三日前から探しているヴェルローズにとっては容易に予想できていたこと。故に彼女はそこまで焦ってはいなかった。

「気長に探すしかないってことかなー。ありゃ？」

冷蔵庫を漁っていた小唄が素っ頓狂な声を上げる。

「ジュース切れてるや。ちょっとコンビニまで行ってくるね」

買い置きしていたジュースがないことに気づいた小唄は財布を手に、玄関に向かうとする。

（私の思い通りだしたら、コワレやルナティック達が動き出す時間帯に小唄を一人で外出させるのは危険だわ……!）

「待って。私も行くわ」

「大丈夫、すぐそこだから待ってて」

「ま、待ちなさい！」

小唄はヴェルローズの制止を聞かずに外へと出て行った。

「……早めに警告しておくべきだったかしら。もう遅いけれど」

この辺の地理に詳しくないヴェルローズでは、既にそれなりの距離を歩いているだろう小唄を追いかけることは出来ない。せめて何事も起こらなければいいが、と彼女は不安な表情を隠せないままリビングに戻った。

「ありがとうございましたーっ」

小唄は明るい店員の声に見送られて店を出た。手に持ったビニール袋の中には、五百ミリリットル入りのペットボトルが数本入っている。近くのコンビニエンスストアで目的を果たした小唄は復路を歩く。

（……あの時のヴェルの行動は、まるで僕が一人で外出するのを阻止しようとしているみたいだった。でも、何で？）

科学者を両親に持つ小唄は実年齢以上に聡く、歩きながらも思考は止めずに答えを導き出そうとする。だが彼女の言葉と行動は謎が多すぎて答えを導き出すことは出来ない。

（そういえば、ヴェルが呟いたあの言葉……）

昨夜、ヴェルローズが小さく呟いた言葉を小唄は聞き逃していな

かった。そして、その言葉が小唄に向けられたことも見逃してはいなかった。

「ドール・マスター……」

一字一句間違えずに、その言葉を反芻する。

（人形の主人って意味かな。でも、それは誰に対しての主人なんだろう？　僕は人形なんて持ったことないし……）

「――！？」

突如、小唄の背中に悪寒が走る。

（これは……コワレってものが現れた時と似ている？　でも……）

背後から迫り来る気配に戦慄しながらも小唄は心の中で首を傾げる。圧迫するような気配はコワレの時と変わらない。しかしコワレと違って殺気が全く無かったからだ。小唄は意を決して後ろを振り返った。

「――これは……人形の魂？」

以前見たような靄に覆われた存在でもなく、狂気に侵された人形の成れの果てでもない。小唄のことをじっと見つめる人形の魂がそこにあった。

『……どうして』

「え？」

『どうして、わたしを捨てたの……？』

「僕が君を捨てた？ 何言ってるの……？」

手元に置いたことはおろか、今まで見たことすらない人形の言葉に小唄は戸惑う。それを気にしないまま、人形は小唄から目を逸らさずに言葉が続ける。

『あんなに愛してくれてたのに、気づいたらわたしはゴミ捨て場に捨てられていて身体は粉々にされちゃった。とても痛かったよ……』
「やめてくれ！」

『暗闇の中を何年もさまよい続けて、やっと見つけた。どうして、わたしを捨てたの……？』

「僕は君の主人なんかじゃない！！」
『どうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてドウシテ——』

（主人と他人の区別がついてない？ そうだ、ヴェルの言葉を思い出すんだ。主人から離れ、見失った人形の魂は確か——）

——狂気に囚われコワレとなる。

その証拠に、壊れたジュークボックスのように「どうして」を繰り返す人形の魂の周りは、黒い霧のようなもので覆われ始めていた。

『！！ い、いや……！ 助けて、ご主人さま……』
「っ！！！」

（そうだ、助けなきゃ……。僕はその方法を知っている……）

何故知っているのか、それを考える前に小唄の意思に反して体が自然と動き出す。気がつけば人形の魂を手にとって抱きしめていた。

『ご主人さま……?』

「僕は君のご主人さまではないけど、君を永遠の苦しみから解放してあげる」

（僕が知らないこの子の主人。主人でありながらこの子を苦しめたあなたにはもう、この子を側に置く権利はない。この子は僕のものにする……っ!）

「君に新しい名前を与えよう。その青い瞳にそっくりな、サファイエという名前を」

『サファイエ。それがわたしの新しい名前?』

「そう。君を見捨てた主人はもういない。今日からは僕が君のマスターになってあげる、サファイ」

『ありがとう、わたしの新しいご主人さま……。とても嬉しいよ』

とても嬉しそうに笑った人形の魂が光に包まれる。

（これでよかった、のかな――）

その光にどことなく懐かしさを覚えながら小唄の意識は闇へと落ちていった。

「――なさい。そろそろ起きなさい小唄」

「……」

すぐ近くから誰かの声が聞こえてきて小唄は少し重い瞼まぶたを開けた。

「……ん? もう朝?」

「何馬鹿なこと言ってるの？」

「……そういえば、帰り道で人形の魂みたいなものに会ったような。その後何があったのかよく覚えてないや」

「はぁ……突然気配が現れたからそれを辿って来たけど、無事ではなかったわ」

意外と暢気な小唄にヴェルローズは呆れたような反応を返す。

「しかし貴方も随分と無茶するわね。主人との繋がりを断ち切って自分の魔力で魂を浄化、再構築させるなんて……並の人間ならとつくに狂うか死んでいるわよ？」

「え！？ 僕そんなことしたのっ！？」

（自覚なしか。ということは無意識下での行動ね……）

「ええ、その結果がこの子よ。結果的にあなたはこの子を苦しみの世界から救い出した。それだけじゃない、その子に新しい世界を与えた。さすがはドール・マスターね」

（もっとも、小唄の場合は既に才能ではなく覚醒近くまで来ているのでしょけど）

苦しんでいる人形の魂を救うために動いた無意識での行動。それが何よりの証拠だった。

上半身を起こして小唄が確認する。視線の先に青い瞳の人形が宙に浮きながら小唄を見ていた。目覚めたのに気づいた人形が笑顔で小唄に近づく。

『おはよう、ご主人さま！』

「おはよう、サファイ」

覚えていないはずの言葉。しかしその名前は小唄の口から自然と出てきた。

「もう、その子は貴方の側から離れられない。貴方が自らその絆を断ち切らない限り、その子は貴方のために尽くすわ」

『うん、ご主人さまのためならわたし、なんでもしてあげる！』

「ははは、ありがとうサファイ」

（しかし……生まれ持った能力が超能力で媒体源が魔力とはね。小唄はこの子を介して安全に魔力を行使出来る……、戦う力を得たのも同然ね……。もう少し様子を見てから試してみようかしら？）

「ところで、なんでサファイは服着てないの？」

小唄の何気ない言葉にヴェルローズの思考が中断される。

「――サファイエはコワレともルナティックとも死舞人形とも違う存在。貴方の守護精霊というのが一番正しいかしら。この子の身体は貴方の魔力で構成されているわ。だから、小唄がイメージ喚起して服を着せてあげればいいのよ」

「イメージか……。とりあえずこんな感じかな」

裸だったサファイエの体に、どこかの学校の制服のようなブレザーが一瞬で着せられる。

『わあー！』

「近くの中学校の制服なんだけど、とりあえずこれでいい？」

『うん！　ありがとうご主人さまー！』

喜びを全身で表し、小唄の周りをくるくると回るサファイエ。

「さて、そろそろ帰りましょ。結界を維持するのもいい加減疲れてきたわ」

「あ……、誰かが通りかかったら怪しまれるもんね。ごめん」

「別に……これくらいなんともないわよ」

「んん……？」

何故か顔を背けるヴェルローズを不思議な表情で見る小唄にサファイエが耳打ちする。

『あのね、ヴェル姉さまがご主人さまに膝枕してたとき、とっても楽しそうな顔してたよ！』

「えっ!？」

「な、ななな何言ってるのサファイ!?! あ、あれは地面だと小唄が痛そうだったから……」

『あはは! ホントのことだもーん!?!』

「こら!?! 待ちなさいっ!?!」

『あははははー!?!』

意地悪そうな笑顔を浮かべて逃げるサファイエを、少し顔を赤くしたヴェルローズが追いかける。

「いつの間に仲良くなったんだろう……? ——— ああ、なるほど……だから頭が痛くなかったのか」

軽く後頭部の感触を確かめた小唄もまた、二人と同じように笑うのだった。

第四話『職人とセラピスト』 Part. 1

「……」

小唄がサファイエを仲間にした次の日の午後。ヴェルローズは難しい表情を見せながら路地を歩いていた。

その表情は非常に陰しく、ここぞとばかりに声を掛けようと思った数人の男がそのまま去っていく程で、彼女の周りには通行人によって出来た不自然な隙間があった。

その表情を崩そうともせずヴェルローズは己の思考に没頭する。

（狂う前とはいえ、人形の魂を取り込んで再構築……小唄はそれ自分の従者とした。これはドール・マスターだから、とその一言で片付けることが出来る。けれど、魔力のほうは説明がつかないわ。小唄の両親が潜在的な魔力を持っていたとは考えにくいし、となるとやはり……小唄の先祖には何かがあるのかしらね？）

ただ徒に彼のことを調べようとしているのではない。彼女には小唄のことを知らなければならぬ、それだけの理由があるからだ。それは彼女にとっても彼女にとっても非常に重要なことだった。

（私には探偵の真似事なんて出来ないし、これからの出会いに期待するしかなさそうね。……すぐその公園で少し休んでいきましようか）

まだ少し肌寒い春とはいえ、一時間も歩き回れば汗もかくし疲れ

も見え始める。近くに見えた公園にヴェルローズが入ろうとした時だった――。

「――っ!？」

肌を突き刺すような視線に彼女は思わず後ろを振り返る。そこには我関せずと先を急ぐ通行人の姿があるだけで、彼女を睨む者の姿はどこにも見えない。

(何、今のは……。刺すなんて可愛いものじゃない、とてつもない殺意が籠った視線だったわ……)

彼女の思うとおり、それは生易しい言葉で表現出来るような甘いものではなく、並の人間であれば射抜かれただけで心臓が止まってしまうような殺しの視線だった。そのような視線だったのにも関わらず、今はその一片すら感じられなかった。

「……何だったのかしら」

視線と同じ気配を探りながら、ヴェルローズは空いていたベンチに腰掛けて軽く息を吐く。

「あの二人は上手くやれているかしら？」

空を見上げて二人の顔を青空のキャンバスに思い描く。

一人は優しく心強い少年、もう一人は悪戯っ子のようなあどけない笑顔の女の子。二人の顔を描きながらヴェルローズは思い出し笑いをする。

「ふふ。まあ、そんな難しいことではないし大丈夫よね」

ドール・マスターの力に目覚めたばかりの小唄はまだ自分の力を制御出来ない。故にヴェルローズは彼に魔力の制御に慣れる練習をするように命令した。今頃はサファイエと共に家で魔力制御の訓練をしているだろう。

「……はあ」

（またこの視線か……。少ししつこいわね）

背後からの視線。だが先程感じたような殺意は一切含まれていないためか彼女の表情は変わらない。ヴェルローズはこの視線を大分前から感じ取っていた。往来の多い市街を歩いていた時から感じられるようになった視線は路地に入った時も、公園に入った時も、ベンチに座った時までも続いていたからだ。

「いい加減出てらっしゃい」

言葉に力を込めるようにして背後の木に話しかける。数秒後に茂みから、バツの悪そうな顔ではあるが悪びれた様子もない小柄な少女が姿を見せた。

「あは、もしかしてバレてた？」

小柄な少女が埃の付いたエプロンドレスを手ではたきながら言う。

「大分前からね。どこの誰かは知らないけれど、覗き見は感心しないわ」

「ごめんごめん。キミが珍しかったからつい後をつけちゃった」

謝ってはいるが、やはり悪びれた様子は見せずに笑うエプロンドレスの少女。

（誰かに似ていると思ったら、表情がサファイに似ているのね……）

ヴェルローズは目の前の少女を注意深く観察する。

彼女よりも更に幼く見える顔立ちに緑の瞳。大きな黄色いリボンで後ろ髪を飾った、ミドルとショートの中間辺りの長さに見えるやや濃い栗色の髪。ベージュ色のワンピースの上に掛けているエプロンドレスのお陰でメイドに見えるがワンピース、エプロン共にポケットが多いし、一部のポケットには工具のようなものが仕舞い込まれているようにも見える。

（メイドというより……どこかの職人に見えるわ。そして、この気配は……）

「まあ、いいけど。それで貴女はこの誰？」

「ボクはティーカ。キミのことだから正体はもう分かってるよね？」

「ええ……。同族ね」

先程から感じられる特定の気配、それはティーカと名乗った少女が同じ死舞人形である証拠に他ならなかった。

「それで、キミの名前は？」

「私はヴェルローズよ」

「あ、お姉さんなんだね」

「そうみたいね」

姉妹感動の再会、というにはあまりにも淡泊すぎる二人の会話。

それもそのはずで、死舞人形に姉妹という概念があるとすれば、それは双子か義姉妹として共に生きている者達だけであり、それ以外は横の繋がりはあるても縦の繋がりは一切ないからだ。

今のヴェルローズとティーカの会話も、どちらが先に死舞人形となったか、それを示すということだけだ。

二人の周りを少しだけ冷たい風が吹き抜ける。

「うう、まだ少し寒いねー。この近くにボクの店があるから移動しない？ 暖かいお茶とお茶菓子食べながら話でもしようよー」

「ふふ、ナンパのつもりかしら？」

「うん、ナンパナンパ♪」

「いいわ。けどその前に」

「うん？」

ヴェルローズの言葉に、ティーカが可愛く首を傾げる。

「換金したいのだけど、外国為替を扱ってる大きな銀行はないかしら？」

「どこの国のを換金するの？」

「瑞クローナを日本円に」

「それなら、〇〇△△銀行が取り扱ってるはずだから案内するよっ」

何がそんなに嬉しいのか、はしやぎながら先頭に行くティーカの後をヴェルローズはゆっくりとついていく。

（サファイとティーカが出会ったら……ふふ、賑やかになりそうね。それにしても——）

思考の切り替えと共にヴェルローズの表情が少しだけ引き締まる。

（ティーカが死舞人形なのは分かるけど、どこか違和感があるのよね……。まあ、今考えても仕方ないか）

その違和感の正体が分からなければ、考えたところで答えなど出るはずもない。軽く首を振ってヴェルローズは早足でティーカの後を追った。

「むー……」

『うーん……』

難しい、というには可愛らしさが残る表情をしながら首を捻る二人。

ヴェルローズから魔力制御の訓練を命じられ、織部家にて訓練中の小唄とサファイエだった。

「言葉では分かるけど、実践は難しいね……」

昨日の夜、小唄はヴェルローズから教えられていた。

小唄の持つ魔力のこと、その潜在魔力量は膨大であること、小唄はサファイエを通じて精霊魔術を行使することが出来ること、その魔力を引き出すことと魔術の行使、そのどちらも訓練と実戦で慣熟することが必要なこと。また、小唄とサファイエは同じ精霊属性を共有しているということも。

今、小唄達がしているのは一定の魔力を引き出してそこから魔力弾を作り、それをサファイエが作った魔法球——魔力の接触を感知すると弾ける球——に当てる訓練だった。一定の魔力を引き出して維持することは魔力の制御に繋がり、魔力弾を魔法球に正確に当てることが出来るようになれば制御と魔術の正確性にも繋がる。

家の中での訓練ではあるが、部屋の十メートル四方はサファイエの簡易結界で覆われているので問題はなかった。

『それじゃ、ご主人さま。もう一回やってみよっか』

「うん、準備するね」

精神の集中を始める小唄を見て、サファイエが魔力球を宙に浮かべる。

「くう……っ」

小唄は魔力を一定量以上流さないように慎重に魔力を引き出してサファイエへと渡してゆく。そして、サファイエによって加工された魔力が小唄の右手に集中し、じょじょに球のような形になっていく。

弁が開かれ活性化したことで流れ出ようとする内の魔力を小唄は汗を流しながら制御する。同時に、右手に形成されつつある魔力弾が暴発しないようにサファイエから流入する魔力量を調節する。

『いいよご主人さま、その調子！』

「く……くうっ……！」

サファイエの応援を受けて小唄の制御がより正確になっていく。内にイメージした弁はきつく締められ、魔力の流出が完全に収まる。やがて、右手の魔力弾が完全な球形となった。

『今だ！ 撃ってご主人さま!!』

「ぐうううっ——!! はあっ!!」

苦悶の表情を見せる小唄の右手から魔力弾が放たれ、魔法球へと

向かっていったが、球は魔法球の二十センチ程左を通過して結界に吸い込まれていった。

「はあー。また駄目かあー……」

『でも、さっきは三十センチくらいだったから十分効果は出てるよ！』

明らかに落胆する主人にサファイエが慰めの言葉を掛ける。

「そうかな……？」

『うんうん、ご主人さまは今日始めたばかりなんだし、上手くないのは仕方ないことだよ』

「そっか、ありがとうサファイ。じゃあもう一度——！？」

立ち上がろうとした途端に強烈な眩暈めまいと脱力感を感じる。体験したことのない感覚に小唄は床にへたりこんでしまった。

『だ、大丈夫？ ご主人さま……』

「うん。大丈夫だけど、たった一時間訓練しただけでこんなになっってしまうのか……情けないな」

サファイエと小唄が訓練を始めてから一時間。たった一時間で、と思うだろうが同じ条件で並の人間が訓練した場合、五分も持たずに眩暈と脱力感に襲われ、場合によっては失神してしまう可能性も十分にあるのだ。

『ヴェル姉様も急いでやれとは言ってなかったし、今日はもうやめよう？ これ以上無理してご主人さまが倒れちゃったらわたし……』

今にも泣き出してしまいそうな表情をして俯うつむくサファイエの頭を

小唄は優しく撫でる。

「分かってるよサファイ。無理をして上手くなる保証なんてどこにもないからね。今日は終わりにしてゲームでもしようか」

『……うん!!』

泣いたカラスはどこへやら。満面の笑顔を見せるサファイエに苦笑しながら小唄がテレビボードの下からゲーム機を取り出し、線を繋げていた途中——来客を告げるドアベルが鳴った。

「誰だろう? ちょっと見てくるね」

玄関に向かい、ドアを開ける小唄。

「はい、どちらさま……って二色野さん?」

「こんにちは、小唄くん。遊びに来たよっ」

ドアを開けた先には小唄の幼馴染である二色野由梨にしきの ゆりが、これ以上ない程の嬉しそうな表情をしながら小唄に手を振っていた——。

第四話『職人とセラピスト』 Part. 2

「――いらっしやい、ボクのお店へようこそっ♪」

ティーカはバスガイドのように手を広げ、客であるヴェルローズを招き入れた。

「お邪魔するわ。へえ、こじんまりしてるけど中々いいお店ね」

素直な感想を述べるヴェルローズ。ティーカの店は家具や内装など木をイメージさせるような色合いで纏められ、客に良い印象を残させる感じに構成されていた。

「へへ、ありがとっ。お茶淹れるねー」

ティーカが奥の部屋に行ったので手持ち無沙汰になったヴェルローズは辺りを見回した。

常連客と談笑する為だろうか、店の右側にテーブルが置かれ、その上の盆に数種類の菓子が並べられている。レジカウンターの近くには数十種類の鍵が見本のように並べられ、その奥に加工中のものでしょうかと思われるいびつな鍵が見えた。

（合鍵屋さんなのかしら？）

「お待たせっ♪ 熱いから気をつけてねーって何見てたの？」

奥から戻ってきたティーカが、三人分のお茶をテーブルの上に置く。

（三人分？ 他に誰がいるのかしら？）

「鍵がいっぱいあるからティーカのお店って合鍵屋さんなのかしら、
と思って見ていたのよ」

「そうだよ。ボクは合鍵屋を営みながら生活してるんだ。まあ、それだけじゃないんだけどね」

「他にも何かやっているの？」

ティーカが何かを警戒するかのように周りや店の入口を見つめる。

「今はお客さんも来ないみたいだしいいかな。ヴェルローズ、何か
適当なもの貸してくれる？」

「これでいいかしら？ それと、私のことはヴェルでいいわよ」

ヴェルローズは財布の中から適当なメンバーズ・カードを抜き出してティーカに渡す。

「ありがとー、それじゃ見ててね」

ティーカがカードを持った手に力を込め始めると共にカードの輪郭がぶれ、それが少しずつ右へとずれていく。ぶれが収まると一つだった筈のカードは二つになっていた。

「！？ これは……」

「これがボクの、“明朗なる偽造師” ティーカの想造能力。ボクは物を偽造することができるんだ。もちろん例外もあるけどね」

想像能力とは、想いの力で何かを形成することが出来る死舞人形特有の能力のことで、ヴェルローズが瞬時に拳銃等を取り出したのもこの能力によるものだった。

「これは偽造というより複製ってレベルね。寸分の違いもないわ……」

ヴェルローズは素直に感嘆の声を上げた。偽造されたカードを隅々まで眺めても、カード自体の変色もインクの滲みもなく元のカードそのものに違いなかったからだ。

「あはは、そのくらいのもなら複製といっていいレベルで仕上げれるけど、文書とか紙幣とか……そういうものはまだ無理だね。粗すぎて使い物にならないよ」

「いずれは紙幣も複製出来るようになる、そう言うことかしら？」

「あははっ、かもね♪」

「ふふふ」

談笑しながら少し温くなった番茶を飲む二人の耳に階上から足音が聞こえてくる。やがて姿を見せたのは、ゴシッククロリータ・ナースタイルとも言うべき不思議な衣装に身を包んだ少女だった。

「あら、ティーカ。帰ってきてたの？」

「あ、リリム。さっき帰ってきたとこだよ」

ティーカがリリムと呼ばれた少女に言葉を返す。

「そうなの。そちらの方は？」

「私はヴェルローズ。貴女は……お姉様みたいね」

「うふふ、同じ死舞人形なのね。始めまして、私はリリムと申しま

す。お姉様と呼んでも良いのですよ？」

「遠慮させていただくわ……」

「あら、残念ですわ……」

本気なのか冗談なのか、心底残念そうな顔をするリリム。

対するヴェルローズは今まで近くにいなかったタイプなのか、疲れたような表情を見せる。

「ところで、それが貴女の正装なの？」

ヴェルローズはリリムの服装について指摘する。

ティーカより六つは年上に見える顔立ちと身長、頭に過剰に装飾されたナース帽を被っている。目の色は淡い紫で、髪は銀糸に目と同じような紫が混じった、手触りが良さそうなウェーブ・ロングヘア。服は黒いパフスリーブ付きのナース服のようにも見えるが所々がフリルで彩られており、とても患者を看るような服装には見えなかった。

「うふふ、これは仕事着です」

「仕事着？」

「リリムは上でセラピストをやってるんだよ。専門はカウンセセリングだっけ」

「ええ、世の中には悩みを抱えた方が大勢おられますので」

「その服装で？」

怪訝そうな声を出すヴェルローズ。それもそのはずで、こんな怪しい格好をしたセラピストを頼ってくる普通の人間はまずいないだろう。

「私の所には、^{わたくし}こういったものがお好きな方が大勢訪れますのよ。」

うふふふ」

「はあ……そういうことね」

つまり、ここはそういう趣味の人間が訪れる場所ということらしい。

三人で他愛もない談笑をしながらお茶を楽しむ。たまにはこういうのもいい、とヴェルローズが菓子を口に運ぼうとした時、店のドアベルが甲高い音を立てて一人の男が入ってきた。

「やあ、お邪魔するよ」

「あつ！ ユウジだ！！ いらっしゃい♪」

「あら、祐治さん。お久しぶりですね」

突然入ってきた男に挨拶を返すティーカとリリム。男の正体が分からないヴェルローズは当然ながら何の反応も返さない。

「おや、そちらの子は始めまして、だね？」

「ええ、そうね。貴方は？」

「僕は高柳祐治。たかなぎ ゆうじ ティーカとリリムの知り合いつてところかな。もちろんこの子達が何者かも知ってる」

年は二十代半ば辺りだろうか、祐治はまだ少年の幼さが残ったような精悍な顔をヴェルローズに向ける。

（この子達は自分らが死舞人形であることをこの人に打ち明けている。相当信頼に足る人間でなければ到底無理な話ね……）

彼を認めたことでヴェルローズの表情から陰しさが消えた。

「そうだったの。疑ったりしてごめんなさいね。私はヴェルローズ

よ」

「なに、気にしてないさ。そうそう、今回は北のほうに行って来たからお土産にこれを買ってきたんだ」

祐治は紙袋から四本の長方形の何かを取り出し、テーブルの上に置いた。

三人は揃ってテーブルの上に置かれたそれを眺める。

——突然リリムが驚嘆の声を上げた。

「こ、これは……久慈羅餅!!」

「知っているのかっ、リリム!!」

「A県の某所で作られている餅で、甘すぎなくお茶に合うお餅の中に胡桃を入れた銘菓よっ!!」

「な、なんだってー!!」

身振りで大きさに表現するリリムと、それを盛り立てるかのよう
に反応するティーカ。

そんな二人を見て、ヴェルローズと祐治はただ溜息を吐く。

「この二人と一緒に生活しているって今はっきりと分かったわ……。いつもこうなの?」

「いや、ははは……。二人とも漫画とかアニメとかゲームが好きでね。ま、気にしないでやってくれ」

「そうね……」

「で、四本あるから一本は今食べちゃって、あと三本はそれぞれが持っていくといい」

「あら、祐治さんの分は?」

謎の世界から戻ってきたリリムが何事もなかったかのように聞く。

「僕は向こうで食べてきたからね。今食べる分を何切れか貰えばそれで十分さ。残りは三人で分けていいよ」

「わーい！ さっすが私立探偵、太っ腹♪」

「――！！」

それを聞いたヴェルローズの目は、彼の全ての挙動をも見逃さないかのように祐治を見つめ続ける。その目を見た祐治の目も鷹の如く鋭いものになってゆく。

「探偵は関係ないんだが、まあ喜んでくれて何よりだね」

「それじゃボクはこれ切ってお茶も淹れ直してくるねっ」

「ありがとうございます、祐治さん。そろそろ時間なので先に上を閉めてきますね」

「ああ、いつてらっしゃい」

「……」

後には鋭い視線を向けたままのヴェルローズと、それを真正面から見つめる祐治だけが残された。

「……………」

「……………」

二人にしか分からぬ、水面下での応酬。

「……何か用？」

ヴェルローズは視線を外さないまま祐治に問う。

「何か話したいのは君のほうじゃないのかい？　　っと、ここは禁煙だったな」

祐治は口に咥えた煙草をケースに戻し、代わりに電子煙草を取り出し口に咥える。

「どうして、そう思ったのかしら？」

「僕が私立探偵だということを口にした時からの君の目つきは、まるで獲物を狙う蛇のようになっていた。そのくらいの変化が分からないようじゃ探偵は務まらない。そして君は探偵である僕に頼みたいことがある。何か間違ってるかい？」

祐治が水蒸気だけの煙を吐き出し、ヴェルローズを見る。

「……流石ね。それで、受けてもらえるのかしら？」

「内容次第、と言いたところだがティーカとリムの友達みたいだからな、一件だけなら無料で引き受けよう。僕に何を頼みたいんだい？」

「……」

暫し静寂――。

「……………織部小唄とその両親、それと織部家の先祖について調べてほしいの」

「織部家……か。分かった、その依頼を引き受けよう。とりあえず三日ほど待っててくれ」

「ありがとう、助かるわ」

「ただし、このことはティーカに言わせて貰うよ。そういう約束なんだね」

「ええ、構わないわ」

仕事に必要なものを偽造してもらう際に言わなければならないの

だろう、予め予想していたヴェルローズはすぐに了承した。

「お待たせー♪ 二人で何してたのー？」

切り分けられた久慈羅餅と、淹れ直した番茶を持ってきたティーカが楽しそうな声で聞いてくる。

「ふふ、親交を温めてたのよ」

「そうそう、ヴェルローズさんは中々聡明だから話が弾んでね」
「んー？」

——その後すぐにリリムも降りてきて、三人は久慈羅餅の味を堪能しながら大いに盛り上がるのだった。

「ふう、楽しかったわ。こういうのも悪くないわね」

ティーカの店を出たヴェルローズが織部家に戻ってきた時、既に辺りは茜色に包まれていた。

（大分遅くなってしまったわ。小唄は上手く出来たのかしら……つて、誰か玄関から出てくるわね。あれは確か……近所の中学校の制服だったかしら）

「お邪魔しましたーっ」

玄関から元気のいい声が聞こえ、ヴェルローズの目にブレザーを着た少女の姿が映る。しかし少女からはヴェルローズの姿は見えないようだった。その証拠に、至近距離まで近づいたところでようや

く驚いたような反応を見せた。

「こんばんは。小唄のお友達？」

「あ……っ」

ヴェルローズはただ挨拶をしたつもりだったが、少女は急に顔を背け、そそくさと去って行ってしまった。

「……？」

「あ、ヴェル。おかえり」

『ヴェル姉様、おかえりなさいっ！』

入れ替わるように小唄とサファイエが出迎える。

「ただいま、小唄、サファイ。さっき帰っていったあの子は誰なの？」

「僕の幼馴染で一つ上の二色野由梨さん。今日遊びに来てくれたんだ」

「そう。幼馴染ね」

（あの子が顔を背ける前に一瞬だけ見せた視線……あれは決して友好的なものではなかった。私は多分——）

「あの子に嫌われているわね……」

「え、なにか言った？」

「いいえ、何でもないわ。これお土産に貰ってきたから食後にでも食べましょ」

『ヴェル姉様、これなーに？』

「久慈羅餅っていう、地方の銘菓らしいわ」

「へえー。美味しそうだね」

「そうね。小唄達のほうは上手くやれたの？」

『あのねヴェル姉様！　ご主人さますごいんだよー！？』

自分の成果のように小唄の訓練のことを嬉しそうに話すサファイエと、それを聞いて素直に小唄を褒めるヴェルローズ。小唄は赤くなりながらそそくさと家の中へと入っていったのだった。

織部家から約五百メートル離れた細道――そこで一人の少女が蹲っていた。

「うぐっ！　はぁはぁ……！！！」

少女の息は荒く、右手で胸を押さえている。ブロック塀の腹に左掌を押し付けながら少女は立ち上がったが息は依然荒く、右手は胸を押さえたまま。両足はその場から動かない。

（今日無理をすればこうなることは分かった。だけど……）

中学のブレザーに黒髪のポニーテール、少女は由梨だった。幼馴染である小唄も知らなかったことだが、由梨は先天性の心臓病を抱えていたのだ。

（だけど、小唄くんを守れるのはあたしだけだから――）

由梨は知っている。

両親が蒸発した後の小唄がどれ程悲しみに暮れ、どれ程の涙を流したかを。そして、その小唄が今のように元気な姿を見せるまで何年掛かったかを――。

（小唄くんには、二度とあんな顔をさせたくないから——っ!!）

「あたしが、小唄くんを……守るの……。他の誰でもない……あたしが……っ」

ブロック塀に左手を付きながら由梨は少しずつ足を動かす。

依然右手で胸を押さえたまま、苦痛に顔を歪めながらも由梨は彼女の家があるのだろう方向へと姿を消していった。

闇の薔薇と織部小唄のとある一日（前書き）

サイドストーリーです。本編にはあまり影響ありませんので、先を読みたい方は飛ばしてください。

この話には以下の内容が含まれます。苦手な方はご注意ください。

女装シヨタ 倒錯的 キスシーン

時系列は第四話終了後の翌日になります。

闇の薔薇と織部小唄のとある一日

世の中には、他人に理解されない行為を進んで行う者もいる。恐らくは、これもその一つなのだろう。

「はあはあ……待ってよ」

白と青の古風な衣装に身を包んだ少女が、前を歩く少女を追いかける。長い銀髪の少女が追うのは、長い金髪と紅い瞳、赤と黒の古風な衣装に身を包んだ、対となる少女。しかし、白と青の少女が息を吐きながら呼び止める声にも耳を貸さず、赤と黒の少女は歩を緩めずに先を歩く。

「……」

流石に可哀想と思ったのか、更に数歩歩いた先で赤と黒の少女の足が止まる。しかし、振り向いて白と青の少女へと投げ掛けられた視線は冷たかった。

「どうしたの、早く来なさい」

相手への気遣いなど到底感じられない、只々事務的に投げ掛けられた声。やがて、白と青の少女が追い付き、少し潤んだ瞳と紅が差した顔をそのままに、赤と黒の少女に言う。

「や、やっぱりやめようよ……こんなこと……」

「あら、どうして？」

白と青の少女が、周囲をしきりに気にしながら呟く。

「こ、こんな格好恥ずかしいよ……」

羞恥に下半身は内股気味に、潤んだ目は上目遣いに赤と黒の少女を見るが、その行為は赤と黒の少女の加虐心を煽るだけで、何の解決にもならない。

（いいわ、この表情もアルトそっくりだし、苛め——もとい、からかいがいがあるわねー）

「ふふ、とても似合ってるわよ小唄。男の子なんだから覚悟を決めなさいな」

「そ、そんなあ……」

「ほら、早く来なさい。それとも、このまま愚図って見世物になりたいの？」

「うう……恥ずかしい……」

白と青の少女の姿をしていたのは小唄で、先導する赤と黒の少女はヴェルローズだった。小唄は着慣れない衣装と周りを気にしながらも、この場に留まって見世物になるのは嫌なのか、足取りは遅くともしっかりと彼女の後をついていく。

何故小唄がこのような姿をしているのか、それは昨日の夕食時まで遡る——。

昨日、織部家の夕食中のこと――。

「小唄、明日一日私に付き合いなさい」

「ん？ いいけど、どこか行くの？」

特に変わらない様子で聞く小唄。

アルトリリイの搜索は義務だが、それ以外でヴェルローズが小唄を外に連れ出そうとするのは珍しいことだった。

「ええ、少し買い物をしたくて。それで、小唄に付き合って欲しいのよ」

「ああ、いいよー」

小唄の快諾に、ヴェルローズは顔を綻ばせ喜ぶ。

「ありがとう。言いにくいんだけど、サファイはお留守番しててもらえないかしら？」

『えー！　なんでー！？』

案の定、反発するサファイエ。

「ごめんね、お土産買ってきてあげるから、ね？」

『むー……分かった。でも、今度は連れて行ってね！』

納得してない様子が丸分かりだったが、サファイエは渋々引き下がった。

「――で、どこに行くの？」

聞こうか聞くまいか迷ったが、ヴェルローズが嬉しそうにしている様子を見て、小唄はもう一度聞いてみることにした。

「ふふ。まあ、明日を楽しみにしてなさいな」

「？」

（……明日の楽しみにしておこう）

笑ってはぐらかされてしまったが、小唄はこれ以上聞かないことにした。

その日の夜は、何事もなく過ぎていき、そして翌日の朝食後――。

「ヴェル、入っていいかな？」

「ええ、入ってきて頂戴」

「お邪魔します。……って、それは何？」

小唄が部屋に入って、まず目に留まったのはヴェルローズが手に持っていた白と青の古風なワンピースだった。まさに、目の前の彼女の対を思わせるデザインのアンティーク・ワンピース、小唄はそれを心の片隅で覚えているような気がした。

「貴方が想像した通りよ。これは、あの子――アルトの服、本物じゃないけどね。何時か着せようと思って、蟲屑のお店にオーダーメイドで作らせたの」

「そ、そうなんだ。でも、それ今日のお出かけに何の関係があるのかな……？」

嫌な予感しかしない小唄だったが、一応聞いてみることにした。聞きながらも、足は扉に向けて後ずさりさせる小唄の様子を見逃すようなヴェルローズではなく、口元を歪めながら彼を押し留める言

葉を言う。

「鈍いわね、小唄がそれを着るのよ。このシチュエーションで、それ以外に何があると言うのかしら？」

「――!？」

心では分かっているながらも頭の理解が追いつかない様子の小唄に、ヴェルローズが足早に近づき、彼の腕を強く掴む。突然掴まれたことに驚いた小唄は、その手から逃れようと試みるが、ヴェルローズがその腕を更に強く掴み、抵抗を許さない。

「じよ、冗談……だよね？」

「いいえ。私は本気よ、小唄。髪の色と目の色こそ違うけど、貴方はアルトと良く似ているわ。その、目の奥に映る光と戸惑いの表情は、まるでアルトが此処にいるかのよう……」

赤い瞳が妖しげに揺らめき、ヴェルローズは愛娘を愛でるように、その手で小唄の顔を撫でる。そうされているうちに、小唄も幾分か落ち着きを取り戻してきた。

「僕に妹さんの代わりをしろと？」

「誰もそんなことは言っていないわ、小唄。似てはいるけどアルトはアルト、小唄とは違う。貴方は貴方らしく振舞えばいいわ」

「……」

（そういえば、ヴェルはもう一週間以上も妹さんに会えてないんだ……。唯一血の分けた姉妹？だし、やっぱり寂しいんだろうな……。こういうところは、人間もヴェル達のような死舞人形も同じなのかな？）

「少し恥ずかしいけど……分かった。でも、着方なんて分かんないよ？」

「ふふ、それじゃこっちにいらっしゃい」

ヴェルローズは、小唄の腕を引いてドレッサーの前へと連れていき、古風な衣装の着方について細かくレクチャーを始める。最初は動きがぎこちなかった小唄も、レクチャーされているうちに慣れてきたのか、それとも元々そういう才能があったのか、数分後には淀みなく手を動かしていた。

小唄は、胸元を飾る五つの編み上げリボンを、形が崩れないように結び、最後に全体をチェックして鏡の前に立つ。仕上げとばかりにヴェルローズが銀糸のロングヘアー・ウィッグを頭に被せれば、そこには目の色と身長以外アルトリイと瓜二つになった小唄がいた。

「これが……僕？」

思わず、頬に手を当てて小唄は呟く。

「ふふ、小唄。その仕草、まるで女の子みたいよ？　女の子の服着て目覚めてしまったのかしら？」

「ち、違うよ。これは……」

「まあ、小唄も満更でもない様子だし、そろそろ行きましようか」
「だから違うってばー！」

一方その頃、サファイエは――。

『わぁー！ ご主人さまカワイイ！！ いいなぁー、わたしもああいうの着てみたいー！ そうだっ！ ご主人さまにお願いしてカワイイお洋服を作ってもらおっとー♪』

持ち前の念動力でドアを少し開けて、二人の様子を覗き見していたのだった。

――そして、現在。

「ヴェルの用事って……ここ？」

「ええ、そうよ。この店で買い物するの」

二人が訪れたのは、織部家から三十分程歩いた所にあるブティックのような洋服店だった。歩いている間、周りの視線に晒され続けた小唄の顔はまだ赤い。もっとも、それは視線のせいだけではなく、小唄は戸惑いの表情のまま視線を下――下半身を覆っている部分――に向けている。

（うう……膝中丈だけど、それでもスカートの下から風が入ってきてスースーするし、それよりも………）

小唄は視線を下に向けたまま、無意識に股間に手を持っていく。

（どうして、どうして……下着まで女物なんだよー！ー！ー！）

「小唄？」

「え？ あ……」

その視線に気づき、慌てて手を隠したが時既に遅し。羞恥の上塗りに、小唄の顔が更に赤く染まる。

「私は別に人の性癖についてとやかく言うつもりはないけど、公衆の面前で欲情するのはどうかと思うわ」

言いながらにやにやと意地悪そうに笑うヴェルローズ。からかっているのが一目瞭然だった。

「ち、違うよ！ 僕はそんな変態さんじゃないもん……」

「まあ、いいわ。こんなこととして喜んでる私が言えた義理じゃないしね。何をしているの、早く来なさい」

「ま、待ってよー！」

（うう……やっぱり意地悪だ……。でも、ヴェルも喜んでくれるなら少し嬉しいかな、ふふふ——って僕は何考えてるんだっ！？）

ヴェルローズが店に入ってしまったのを見て、小唄は慌てて中に入った。

店の中は少し照明を抑えているのか、やや薄暗い様子で洋服店としてはマイナス要素ではないかと思われたが、小唄は売っている服や小物を見て納得する。これならば、確かに照明を抑えたほうが雰囲気が出て良い。

「いらっしやいませ。本日はどのようなものをお求めでしょうか？」

「そうね。今日は――」

既に馴染みの店なのだろう、店員に話しかけるヴェルローズに一切の淀みはなかった。それを見ていた小唄は、手持ち無沙汰になったからか、ゆっくりと店内を見回し始めた。

（うーん。ヴェルからは何も言われてないから、好きにしていってことなんだろうけど……それにしても色々あるなあ）

見ているうちに段々と興味が出てきた小唄は、店内を回ってみることにした。

小唄が今着ているような古風な衣装もあるが、ロリータ関係の洋服が多く、ゴシック、ホワイト、スウィート、キャンディ、ピンク——と、非常に多くの種類が取り扱われているようだった。また、別の一角にはヴェルローズが普段着にしている、パンクスタイルのようなハードな洋服も置かれていた。

と、その一角のとあるコーナーで小唄が足を止める。

「うわあ……こんなのまであるんだ」

小唄に分かるはずもなかったが、彼が物珍しそうに眺めていたのはPVCやラテックス製の、所謂ボンデージと言われる衣装だった。ボンデージといっても、SMプレイでのミストレスや奴隷が着る扇情的なものではなく、ロリータ向けにアレンジされたもので、小悪魔ファッションと言えば分かりやすいだろうか、ファッションの一角としてのボンデージスタイルだった。

（うう……目のやり場に困るなあ、これ……）

しかし、ボンデージには違いなので露出する箇所が多く、初心な小唄は顔を赤くしながら露骨に目をそらした。が、その視線の先には——。

「いらっしゃいませー」

「わぁっ！」

先程の店員よりも小柄で派手なファッションの女性店員が目の前にいた。小唄は思わず大声を上げてしまったことで自分が男であることがバレないかと内心でビクビクしていたが、そんな小唄の様子に気にすることなく、その女性店員は気さくに声を掛けた。

「お客さま、こちらに興味がおありでしたら、ご試着してみてはどうでしょうか？」

「あ、いえ……大丈夫です。見てただけなので……」

「ああ、これは失礼しました。それではごゆっくりとー」

（なんか今の人、戻り際にくすくす笑ってた気がする……。はあ、もうヴェルのところ戻ろうと……）

余計に疲れた小唄はヴェルローズのところへと戻ってきたが、最初の女性店員とまだ会話中のようなだった。背後の小唄に気づいたヴェルローズが振り向いて声を掛ける。

「あら、小唄。ちょうど良かったわ」

「なに？」

何も分からないままヴェルローズに腕を引かれ、女性店員の前に立たされる小唄。そんな小唄を女性店員がまじまじと見回す。

「えと、小唄さんで良かったですか？」

「ええ、この子に合うのを数点見繕ってくれない？」

(え……?)

ヴェルローズの手が小唄の銀糸を掴み、そして——一気に外した。ウィッグが外されたことで黒髪のショートヘアが露わになり、小唄が慌ててヴェルローズに抗議する。

「ちょ、ヴェル!？」

「ああ、男の子だったんですか。どこからどうみても女の子にしか見えませんでした」

ヴェルローズとしても小唄を見世物にするつもりはないので、改めて小唄にウィッグを被せてやる。

「どうかしら？」

「勿論、大丈夫です。とても可愛いらしい方ですから、遊び——ごほん、選びがいがありますねー。どのようなコーディネートをお望みですか？」

「ちよっと、ヴェル……」

「そうねえ。元気いっぱいな感じがいいけど、ここは少し大人しめがいいかしら」

「……」

(ホントは全然よくないけど……ヴェルが楽しそうだし、いいや)

無視して話を続ける二人に、小唄は更に口を挟もうと思ったが事の推移を見守ることにした。

「では、少しだけ大人びた感じにして、避暑地でひとときを過ごすお嬢様といったコーディネートはいかがですか？ 色は……そうですね、今着ていらっしゃるのが白地に青色を加えているので、青

の代わりに、少し幼い印象を与える水色にしましょう」

「アリス・カラーね。ちょっと子供っぽくなりすぎるんじゃないかしら？」

「大丈夫ですよ。スカートは少し長めに、フレアーを抑え目にした膝丈のフレアースカート、同じくフリルや装飾を抑えたサマー・ブラウス、その上から白を基調に水色を散らしたサマー・カーディガンは同じ色のワンピースよりも大分大人っぽく見えます。これからの季節にぴったりだと思いますが、どうでしょう？」

「いいわね。白い麦わら帽子か日傘があれば完璧だわ」

「本当は試着していただければ良いのですが、そのお洋服では結構お時間を取らせてしまうので、マネキンに着せてみますね」

言って、女性店員は他の店員が持ってきた品物を次々とマネキンに着せていく。さすがプロというべきか、あっという間に飾り気のないマネキンに一式が着せられた。

「このような感じになりますね。あとは、髪の色をもう少し軽めに脱色すればより良くなると思いますよ」

「うん、子供っぽくもないし大人っぽくもないから中間的でもいいわね。小唄はどう思う？」

「え？ 僕？」

「何ボーっとしているの？ 貴方以外に小唄はいないでしょう？」
「う、うん。そうなんだけど……」

マネキンに着せられた服を見て、小唄は少し想像してみる。太陽は照り付けているが涼しい風の中、白いフレアースカートと白と水色のカーディガンを靡かせながら野原を散歩する自分、何もない場所にあるベンチで風を楽しむ自分、とある別荘で読書をしながら冷たい飲み物を飲む自分――。

（――って！ だから僕は何を考えてるんだっ！？ はっ！！）

「ね？ 小唄って面白い子でしょう？」

「ホントですね。私もこんな子欲しいなあー」

「~~~~~っ！！」

小唄の顔は、羞恥に次ぐ羞恥で茹蛸の如く真っ赤になっていた。

「とまあ、この子もお気に召したようだし、それに併せて靴と小物も選んでくれないかしら？」

「かしこまりました。では、少し足のサイズを測らせていただきますので、片方の靴を脱いでもらえますか？」

（はぁ……もう帰りたい）

最早何も言い返す気力がないといった感じで、小唄は素直に片方の靴を脱ぐ。測り終えた女性店員が他の店員に次々に指示を出し、白の麦わら帽子、ワンポイントの花が可愛い白い靴、小鳥の刺繍が入ったニーソックス。おまけなのか、髪を飾る二つのフリル付きリボンまで並べられた。

「これで全部ですね。リボンはサービスさせていただきます。折角着飾っているのに、髪を飾らないのはもったいないですからね」

「あら、ありがとう。全部でお幾ら？」

ヴェルローズは、そのリボンを手に取って小唄の銀髪に飾り付けた。送風機からの風で、左右に飾られた白に近いクリーム色のリボンが僅かに靡く。

「38, 760円になります。お支払いはカードで？」

「いえ、キャッシュよ」

（ひええ……そんなにするんだ。あれ？　でもヴェルいつお金手に入れたんだろう……）

金額に驚く小唄をよそに、ヴェルローズは女性店員に一万円札を四枚渡し、お釣りを受け取る。先ほどの一式が丁寧に入れられた、店のロゴ入りの紙袋を受け取り、そして小唄に渡す。

「はい、これは貴方のものよ」

「う、うん。ありがと……」

「ありがとうございますー！　またのお越しをお待ちしてまーす！」

小唄は戸惑いながらも受け取った紙袋を手提げ、女性店員に見送られながら二人は店を出た。途端に、正午近くの眩しい日差しが二人を容赦なく照りつける。

「少し暑いわね。でも、楽しかったわー。小唄の面白い顔を沢山見たし」

「うー……こんなの、どうしろっていうのさ……」

「着ればいいじゃない。服なんだから、着ないと意味ないわよ？」

至極正論だが、この場合はどうか、と小唄は思う。

「着れって言われても……」

「まあ、今の季節はまだ少し厳しいから家の中でも着てたら？　私もサファイも気にしないわ」

（おもちゃにはするけどね。ふふ……）

「う……」

言い知れぬ恐怖が背筋に走った小唄は、これ以上この話をするのは危険だと思い、話題を変えることにした。

「そういえば、ヴェルはどうやってお金を手に入れたの？」

（ちっ、露骨に話題を変えてきたわねー）

「簡単よ。私は日本円は殆ど持っていなかったけど、前いた国の金は結構持ってたからそれを換金しただけよ」

「あー、そういえばヴェルは海外から日本にやってきたんだっけ。

どこの国から来たの？」

スウェーデン

「瑞典よ。北欧の、白夜と湖が綺麗な国ね」

（スウェーデン？　なんだろ、何か引っ掛かる……）

スウェーデン——その言葉が小唄の脳裏に引っ掛かって離れない。しかし、幾ら考えたところで答えなど出るはずもなく、今はその言葉を中心の片隅に置いておくに留めた。

「さて、そろそろお腹すいてきたわね。お昼にしましょうか」

「あ、うん。どこで食べようか」

小唄達の服装で行ける場所となれば、かなり限られてくるだろう。ラーメン屋、牛丼屋は論外、ファーストフード店も目立ちすぎるのであまり良くない、ファミリ向けーではないレストランか、こじんまりとした洋食屋が妥当だろうか。

しかし、ヴェルローズは例の笑みを浮かべながら次の遊びを考え

ていたのだった。

「そうねえ——」

「あのさ、ヴェル……?」

「何? 小唄」

「これは……どういうこと?」

状況は分かるが理解が追いつかないといった様子で、小唄がヴェルローズに質問する。

二人が昼食場所を選んだのは、先程の洋服店から五分ほど歩いた所で見つけたハンバーグ屋だった。店員の案内で奥の禁煙席に座り、注文したのは何故か一人分で、しかもそのサイズは、小唄にしるヴェルローズにしる一人で食べ切れるものではなかった。

そして、ナイフで綺麗に切り分けられ、差し出されたフォークに刺さっている一切れが今、小唄の前にある。

「……すつごく恥ずかしいんだけど」

「……いいから早く口を開けなさい。いい加減腕が疲れてきたわ」
「~~~~~っ」

（くうっ……! 向かい合うんじゃないで、隣に座れって言ったから何かおかしいとは思ったんだっ!）

奥の席で人が少ないとはいえ、昼食時に人がいないわけではない。視線を向ければ、幾人かの客がこちらを見て軽く笑っていた。これ

以上晒し者になるわけにはいかない、小唄は観念して口を開けた。

「いい子ね。はい」

そのまま、フォークに刺さった肉を咥えて口の中に入れる。咀嚼そしゃくした途端に肉汁が溢れ、口内が芳醇な香りに包まれる。焼き加減も丁度良く、肉も相当な上物であることが分かる。

「お、美味しい」

「そう。良かったわ」

小唄の様子を見て嬉しそうに笑ったヴェルローズが、自分用に切り分けた肉を口に運ぶ。

「これは中々のものね。はい」

「んっ……」

小唄は、再びフォークに刺された大きめの肉を口に運び、咀嚼する。その様子を楽しみながらヴェルローズも自分の肉を口に運び、再び大きめの肉が刺さったフォークを小唄の口元に向ける。恋人同士がするようなことを数回繰り返し、残りの肉も少なくなってきたとき、小唄は一つの異変を感じ始めていた。

（あ、れ……？）

ただ肉を口に運んでいるだけ、それなのに小唄はヴェルローズの行動に妖艶さを感じ、少しづつ体が熱くなっていくのを感じ始めていた。その様子を見て、ヴェルローズが少し心配そうに声を掛ける。

「小唄？ どうしたの？ もうお腹いっぱいかしら？」

「あ、いや……そうじゃないんだけど少し暑くなってきたかな、って」

「確かに、そうね。それじゃ、デザートでも食べましょうか。好きなもの頼んでいいわよ」

（なんだろう……。ヴェルの顔を見ると少し、体が熱くなって胸の鼓動が速くなってく気がする……）

「うん……じゃ僕はチョコパフェにするね」

「私も同じのにするわ。ああ、その店員さん。追加注文いいかしら？」

「はい、ご注文どうぞ」

「チョコパフェを二つ頂戴」

「かしこまりました。そちらのお皿はお下げしても？」

「ええ」

「それでは、すぐお持ちしますので暫くお待ちください」

男性店員は注文を取った後、ハンバーグの木皿を持って持ち場へと戻っていった。

「んっ……」

「小唄？ 顔赤いけど……どうしたの？」

「ん、大丈夫。なんでもないよ……」

「そう、ならいいけど」

（んんっ……駄目だ。何故か知らないけど、ヴェルの顔どころか仕草にすら体が熱くなる……どうして？）

暫くして、別の店員がデザートを運んできた。

「おまたせしました、チョコパフェ二つです。ごゆっくりどうぞ」

「あら、美味しそうですね。さ、食べましょう」

「う、うん。いただきまーす」

口に運ぶと、チョコレートのビターな味わいと、バニラアイスの香りとアイスの冷たさが広がる。その冷たさが、体が火照って仕方ない小唄には心地よかった。

しかし、ヴェルローズの仕草を見ると心臓が早鐘のように鼓動するのは変わらず、根本的な解決にまでは至らない。

「んーっ、美味しいわね。小唄はどうかしら？」

「うん、美味しいよ」

小唄は、じょじょに速まってく鼓動と、アイスの冷たさを上回りつつある体の火照りを極力気にしないようにしながらパフェを食べ終え、昼食を摂り終えた二人はスプレーで口臭を消して店を出た。再び、強い日差しが二人を出迎える。

「お腹いっぱいになったし、次はどこ行きましょうか？」

「んっ……まだあるの？」

「当たり前じゃない。今日一日付き合うって約束でしょう？」

（あれ、そんな約束だったっけ？ 買い物だけだったような……？
あ、でも……今日一日って約束だった気もする。よくわかんないや）

「ん……そうだね。どこ行こう——」

と、最後まで言おうとした小唄が、前から現れた三人組の男を見て、思わず息を呑んだ。今時の流行ファッションにワックスで固め

た金髪、人を不快にさせるような顔つき、どこからどう見てもナンパ男の風体ふうていだった。

男の一人が、三人を代表するかのように声を掛ける。

「君たち可愛いねエ。俺たちと一緒に遊ばねー？」

「悪いけど、私達急いでるから貴方達と遊んでいる暇なんてないわ。行くわよ」

ヴェルローズは小唄の手を取った。

（あ……ヴェルの手、あったかいしどこか安心する……）

そのまま二人は男達の横を通り過ぎようとしたが、男達が移動し再び二人を阻んだ。

「……」

「ンなつれないと言わなくてもイイじゃん。遊ぼうぜエー」

（ヴェル……）

「……そうね。小唄」

「ん、なに……んっ——。~~~~っ!？」

あまりに突然のこと過ぎて、小唄には何が起こったのか分からなかった。気づけば、ヴェルローズの顔が真正面にあり、唇と唇が重なっていた。

「んっ……」

（あ、甘い……息が苦しいけど、もっとして欲しい……。こ、こう

すればもつと……)」

突然口内に侵入してきた舌を小唄は何の抵抗もなく受け入れ、自分の舌を絡ませて自ら快楽を求める。舌と舌が絡み合う淫靡な音が辺りに響くが、二人の目にはお互いの顔しか映っておらず、二人の耳にはお互いの音しか聞こえず、周りの喧騒など一切耳に聞こえてはいない。

「あむ……んっ……ちゅ……はむう……」

息も吐かせぬ激しさに小唄の意識は白濁していく。やがて、ヴェルローズが唇を離し、二人の唇の間から透明な唾液が糸を引き、名残を惜しむように地面に落ちた。時間にしてみればたったの十秒だが、その十秒の間に今まで体験したことのない程の衝撃と快感を受けた小唄は、その場に座り込んでしまった。

「こ、こんなトコでディープ・キスって……マジかよ!？」

「分かった? 私達はこのいう関係なのよ。見ての通り、この子もあまり具合が良くないの。悪いけど、ナンパなら他を当たって頂戴。これ以上邪魔するなら——容赦しないわ」

「お、オイ、マサシ……。コイツらなんかヤベェよ……!!」

「あ、ああ……。こんなガチレズに付き合ってるんねェよ! 行こうぜ!」

男達は、めいめいに好き勝手なことを言って去っていった。

完全に去ったのを確認したヴェルローズが小唄を見下ろす。地面に座り込んだままの小唄の息は荒く、焦点の合わない、潤んだ目でヴェルローズを見上げていた。

「小唄、立ちなさい。座っていいとは言っていないわよ」

「んっ……うう……」

その、強い言葉に小唄は立ち上がろうとするが、腰に力が入らないのか、再び座り込んでしまう。

（あー、ちょっとやりすぎたかしら。考えてみたら、多分……ファースト・キスがディープ・キスっていうのは可哀想だったわね。まあ、やってしまったものは仕方ないし慣れてもらおうとしましょうか）

「仕方ないわね、小唄は……ほら」

差し伸べられた手を取り、小唄はなんとか立ち上がったが未だ足元はふらついており、一人で歩ける状態ではなかった。

暫くして、ようやく腰に感覚が戻ってきた小唄は軽く足を動かしてみた。しかし、途端にたたらを踏んでしまう。

「少し、公園で休んでいきましようか。小唄、私から手を離しちゃ駄目よ」

「ご、ごめんね。ヴェル……」

「気にしないでいいわよ」

ヴェルローズは小唄の手を引きながら、人込みを避けるように公園がある郊外へと歩いていく。手を引かれている途中、小唄は思ったことを正直に口に出していた。

「ねえ、ヴェル……」

「なに？」

「ヴェルの手ってあったかいね。それに、気持ちいい……」

「……馬鹿ね」

手を引かれている小唄からは見えなかったが、その言葉を聞いたヴェルローズの頬もまた少し赤くなっていた。二人は、何ともいい難い、幸せなひとときを感じながら、公園へと歩いていくのだった。

この後、二人がどう過ごしたかは、また別のお話――。

闇の薔薇と織部小唄のとある一日（後書き）

すみません、変な位置に投稿してしまったので一度削除しました。

第五話『夜の密会』 Part. 1

——大抵の人間は寝静まったであろう、真の夜の中。市内某所にある事務所の一室は未だ煌々と灯りが燈り、中では一人の男がパソコンと向き合って作業をしていた。

男は三日間剃れずに伸びた顎鬚に軽く手を当てながら、空いている片方の手でキーボードを叩いている。

「……こんなものか」

男——祐治——はワードソフトに打ち込んだ調査報告書を一通り検めてから、カップの中の珈琲を飲んだ。しかし、一仕事終えても彼は難しい表情を崩さない。

（手軽に引き受けたが、こんなでかい案件^{ヤマ}になるとは思わなかったな……）

祐治は手元の資料を手に取り、難しい表情のまま眺める。

それは、どこかの家計図のようなものだった。

「……織部の家系を遡っていったら、まさか『鈴鳴』の名が出てくるとはね」

祐治の目線が家系図を遡る。女性と思われる名前を境に織部の苗字は消え、代わりに鈴鳴という苗字から始まる人物の名が出現する。鈴鳴——それはこの国に住むものならば知らぬのは幼子供のみ、と言っても過言ではない程知られた名前。だが、これは半分は正し

いが半分は間違っている認識だった。鈴鳴は極一部の人間しかその名を知らず、大多数の人間には鈴鳴レイメイ——黎明——国内最大の企業グループ——の名でしか知られていないからだ。

祐治は家系図ではない、若い女性の写真が貼られた書類を手にする。

（織部紗夜香おりべ さやか。失踪当時の年齢は二十八歳。科学のとある分野においては博士号を取得出来ると教授陣に言わせた程の才媛さいえん。国内の某研究所に勤務していた時に織部晋吾おりべ しんごと出会い、十九歳で結婚し退職。二年後に長男小唄が誕生するが七年後に晋吾と共に失踪……以後消息不明、か。織部小唄の話聞いたヴェルローズさんの話では、紗夜香と晋吾は家の中でも何らかの研究をしていたらしい。だが、そこは僕の力では調べられなかったからな……）

一旦書類をデスクの上に置き、煙草を取り出して一息吐く祐治。紫煙を数回吐き出したところで思考を再開する。

（……この家系図が正しいなら、織部紗夜香の母親は鈴鳴の三代目……その娘の紗夜香は鈴鳴の直系ということになる。しかし、何故だ？ 何故、鈴鳴の直系が科学者に？ 鈴鳴が直系の娘を外に出すなど、ましてや科学の道に進ませることなど許すはずがない。となると……勘当されたか家出したか、それとも別の理由があったのか——）

と、二本目の煙草を手をしようとした直前に机の上に置いていた携帯が震えた。二つ折りの携帯を開いて番号を確認する。待ち望んでいた者からの番号であることを確認した祐治は通話ボタンを押した。

「高柳です。先輩ですか？」

ややあつて、相手からも反応が返ってくる。

『ああ。お前さんに頼まれていたヤマだが、なんとかアポを取るこ
とが出来たぞ』

「本当ですか!？」

『ああ、かなり苦労したがな。そのうち酒でも奢ってくれ』

「ありがとうございます先輩。今度いい酒が揃っている所へ案内し
ますよ。もちろん僕持ちで」

『そいつは楽しみだな。それとだ、裕……』

祐治が先輩と呼んだ相手の声の調子が変わり、祐治は思わず顔を
強張らせる。

『お前さんがどういう理由でこのヤマを追っているのか、そこまで
は聞かん。だが、鈴鳴に関わるということは当然、その表情である
黎明も出てくる。鈴鳴本家にアポは取り付けたが、黎明がどう対応
してくるかは分らん。十分気を付けろよ?』

「……分かりました、先輩」

『書類は後で渡す。今日の午後一時に例の場所で会おう』

「はい、俺は少し寝ときますね」

『ああ、そうしとけ』

相手との通話が切れたことを確認してから、祐治も通話ボタンを
切った。

「ふう、先輩のお陰で何とかなったな」

祐治は二本目の煙草に火を付け、軽く吸い込んでから紫煙を吐き
出す。

祐治がこれまでも難しい案件を達成出来てきたのは、この先輩の力によるものが大きい。祐治よりも太い情報網^{パイプ}を持ち、政財界、芸能界、その他各方面にコネクションを持っている。今回の件にしても僅か三日でこれだけの調査が出来たのも、この先輩の情報網やコネクションを活用出来たからだ。祐治だけで鈴鳴本家にアポイントメントを取ることなど到底不可能なことだった。

「後はこれを印刷して……伝言役はティーカにやってもらうか」

短くなった煙草を灰皿に押し付け、ワードソフトに書かれた調査報告書と資料を印刷してパソコンをシャットダウンする。簡易ベッドに寝転ぶと、三日間ろくに睡眠をとっていなかった体はすぐ眠気を発し始める。瞼を閉じてから五分と経たないうちに祐治は眠りへと落ちていった。

太陽が照りつける日差しが眩しい、昼下がりを過ぎた織部家の午後――。

「これが最後だよ。ボスの主砲に気をつけてね」

『がんばれーヴェル姉様！』

「ええ。それにしても大きいわね……」

護衛の艦船を全て倒した後、最後のボスである巨大戦艦が圧倒的な存在感を出しながら迫り来る。同時に自機を狙って浴びせかけられる大小の弾幕。コントローラーを握るヴェルローズは十字キーを駆使しながら、今までのボスとは比較にならない程の弾幕をかわしながら機会を見計らって弾を撃ち込んでいく。

「危なくなったらボムをガンガン使って！」
「分かってるわっ！」

艦橋付近の対空砲と機銃から撃ち出された激しい弾幕をボムで切り抜ける。対空砲を全部潰したところでエネルギー残量はゼロ。宙返りも含めて特殊攻撃はもう使えない。

残る敵は副砲一基と主砲一基。ヴェルローズは被弾しないように、慎重に砲塔に弾を撃ち込んでいく。しかし、副砲を破壊した直後に主砲の砲弾が迫り、慌てて回避行動を取ったが右の主翼に被弾——自機は爆砕してしまった。

『GAME OVER』

『あーっ！』

「惜しかったね。あと少しだったのに」

「く……悔しいわね」

全ステージクリアを目の前にしてのゲームオーバーに、三人は落胆を隠せない。

——午前中の内に訓練と搜索を終えて手持ち無沙汰になった三人は、今はテレビゲームで遊んでいた。

（今日で三日経ったわね。結果はどうなったかしら……）

先の件を気にしながらヴェルローズが最初からプレイしようとした時、ドアベルが鳴り響いた。

「誰だろう。僕出てくるね」

小唄は急いで玄関まで行き、ドアを開ける。そこに、栗色の髪を

ツインテールにしてヘアピンとリボンで飾って黄緑色の涼しげなワンピースを着た、幼く見える少女がいた。

「あの、どちらさまですか？」

「こんにちはー、キミがコウタくん？」

少女が明るい声で挨拶する。向こうは小唄のことを知っているようだが、小唄には目の前の少女が誰なのか分からない。

「確かに僕は小唄だけど、君は？」

「ボクはティーカ。ヴェルの知り合いだよ。よろしくね」

少女の言葉に小唄は「ああ」と納得する。目の前の少女からヴェルローズと同じ、特有の気配が感じられたからだ。それをドール・マスターである小唄が分からないはずもなかった。

「ああ、ヴェルと同じなんだね。僕は織部小唄だよ、ティーカ……だっけ？」

「うんっ。それで用事なんだけど、今、ヴェルいる？」

「うん、いるよ。ヴェル、お客さんだよー」

呼びかけられたヴェルローズがすぐに姿を見せる。

「あら、ティーカじゃない。今日は私服なのね」

「こんにちはーっ。今日あつついからねー。今、いいかな？」

「ええ。小唄、少しリビングにいてももらえるかしら？」

「うん、分かったよ」

少し強引とも思えるヴェルローズの言葉に、小唄は少しも疑う素振りを見せずにリビングへと戻っていった。

ヴェルローズは顔を引き締め、改めてティーカと向き合う。

「例の話ね？」

「うん、ユウジに頼まれてきたんだ」

「分かったわ。私の部屋で話しましょう」

ヴェルローズはティーカを連れて二階へと上がり、自分の部屋のドアを開けて彼女を招いた。

「どうぞ」

「お邪魔します。わぁ、結構広い部屋だねえー」

「余分な椅子がないから、ベッドの端にでも座って頂戴」

ティーカをベッドの端に座らせ、自分は机から椅子を引き寄せて座る。

「それじゃ、聞きましょうか」

「おーけー。まずはユウジからの伝言ね」

「伝言？」

ヴェルローズは軽く眉を寄せる。調査結果なら態々（わざわざ）ティーカを伝言役にするようなややこしいやり方をせずに電話か郵送か直接ティーカに調査結果を渡しても良いだろうに、そう思わずにはいられなかったからだ。

「うん、伝言。電話や郵送で伝えるには事が大きすぎるので、ティーカに渡した地図を持って今日の午後九時に市内の某クラブへ来てほしい。入店には身分を証明出来るものが必要だからティーカから受け取るのを忘れずに、だって。これがそうだよ」

ティーカから一枚のカードを受け取り、彼女はそれを確認する。カードには“運転免許証”と書いてあり、住所、氏名、交付日などが書かれている。当然出鱈目だが、実際にありそうなので問題はないだろう。氏名を除いてだが。

「この紅乃薔薇菜^{べにのばらな}って何よ？」

「あははっ、ヴェルをイメージして付けた偽名だけど、どう？」

「……どう見ても偽名にしか見えないんだけど。本当にこれで大丈夫なの？」

「大丈夫だよー、そこまで厳しくチェックされないみたいだし。あと、ICチップみたいなのも埋め込んでおいたから、機械で調べられない限り大丈夫だと思う」

「そう、ならいいわ」

多少不安は残るが、そこまで言うのなら大丈夫なのだろう。ヴェルローズは彼女の言葉を信じることにした。

「それにしても態々クラブで密会とはね……そんなにヤバイことなのかしら？」

「ボクもユウジから、ちょっとしか聞けなかったけど……織部の家系を辿っていったらとんでもない家に辿り着いたって言ってたよ」

「とんでもない家、ね……」

「ああ、それで思い出したよ。クラブでは『ヴェルローズ』ではなく『紅乃薔薇菜』を演じてもらうからそのつもりで、とユウジが言ってたから気をつけてねー」

「？ ……ああ、そういうことね」

つまり、今日クラブに行くのはヴェルローズという少女ではなく『紅乃薔薇菜』という架空の女、ということだ。

「以上かしら？」

「うん、ユウジからの伝言はこれで終わり。で、ここからはボクの質問に答えてくれるかな？」

「……なに？」

ティールカは言葉を一旦切り、息を整える。そして、確かな意思を持った目をヴェルローズに向けて話し始めた。

第五話『夜の密会』 Part. 2

「なんで、ヴェルがあの子に拘るのか分かったよ。あの子はドール・マスターなんでしょ？」

「……何のことかしら？」

ヴェルローズはティーカを見据えながら知らぬ振りをする。

「隠しても無駄。コウタの側にいたあの子、あれはドール・マスターじゃないと創れないからね。ドール・マスターは全ての人形を寵愛する権利を持ち、全ての人形はドール・マスターから寵愛を受ける権利がある。ボクの言いたいこと、分かるよね？」

「……小唄を主人にでもするつもり？」

「ボクだけじゃない、このことをリリムも気づいたら多分同じことを言うと思うよ。ボクたちのような死舞人形^{タイフ}にとって、ご主人様は必要不可欠だからね」

「……」

「ヴェル、もしキミがコウタをご主人様にしないのなら、ボクがコウタをご主人様にする」

「……そう、好きにするといいわ。けれど——」

ヴェルローズは強い眼光でティーカを見つめ返す。

「私も、このまま引き下がるつもりはないわ」

ヴェルローズの視線を真正面から受け、ティーカもまた鋭い視線

を返した。

「分かった。それじゃボクはこれで帰るね」

ワンピースの裾を直して立ち上がり、ドアを開けようとしたティーカにヴェルローズが問い掛ける。

「最後に一つだけ。貴女達と私はどこが違うと言うの？」

「……ボク達は“達成済み”^{コンプリート}の死舞人形なんだ。それじゃ、またねー」

ティーカは振り向かないまま答え、階段を降りていった。最後はいつものティーカに戻っていた。

「達成済み、ね……」

ヴェルローズは彼女が残したその言葉について、暫し考え込むのだった。

「あれ、ティーカ。もう帰るの？」

玄関でミュールを履こうとしていたティーカを、小唄が呼び止める。

「あ、コウタ。うん、用事は済んだからねー」

「そっか。また遊びに来てよ」

「うんうん。あの、コウタ……」

「ん？」

急に俯いたティーカの側に、小唄が寄る。

「――!?」

まさに一瞬の出来事――。

俯いていたはずのティーカが小唄の首に腕を回し、自分の唇を小唄の唇に押し付けていたのだ。

時間に見れば、たった三秒のキス――。

しかし、小唄が現状を把握するまでに十秒以上は掛かった。

「な、な、な――」

「あははっ！ それじゃ、まったね〜♪」

ティーカは「してやったり」といったような顔を見せながら、楽しくて仕方ない表情のまま去っていった。

『あれ？ ご主人さまどうしたの？ お顔が赤いよー？』

「あ……ううん、なんでもないよ」

『んー?？』

唇に残る、柔らかな感触。小唄はしばらくの間、呆然と宙を見つめていた。

――夜の繁華街は煩い。^{うるさい}

それは、都会でも田舎でも変わらない。会社帰りのサラリーマン、どこかの会社のお偉いさん、既に出来上がっている酔っ払い達でごった返している。

そんな喧騒けんそうの中を一人の女が歩いていた。背格好からすれば少女が背伸びした格好をしているようにしか見えない、そんな感じの女だ。しかし、黒地に紅薔薇ルビイ・ローズを彩ったつば広の婦人用帽子に、黒を基調に紅でアクセントを付けたドレスにも紅薔薇と黒薔薇が彩られ、更に顔に施された化粧が少女を女主人か貴婦人に見せていた。

道行く人が皆、魅入られたかのように女を見つめるが、女はその全ての視線に意を返さずに最初から目に留めていた一人の男に声を掛けた。

「もし、その御方」

「ん、なんだいお嬢さん？」

女は黒絹の本繻子サテンの手袋をしたまま、手にした地図の一点を優雅に指で差す。

「此処へ行きたいのですけれど、何処か御存知ありませんこと？」

「ああ、ここは有名だから知ってるよ。案内してあげよう」

「まあ、有難う御座います」

よく利用しているのか、男に案内されてから五分も歩かない所にその場所があった。

「ここだよ」

「有難う御座います。助かりましたわ」

「いや、なに。それじゃ私はこれで」

男性が去っていくのを見送った女性は、店へと続く階段を降りていく。

程なくして店の入口が見えたが、その前に黒スーツに蝶ネクタイをした男性が二人立っている。どこかのSPを思わせるような屈強

な男性の一人が女を呼び止める。

「ここから先は身分証明が必要です」

「此れで宜しくて？」

女が手渡した運転免許証を、男は鋭い目付きで隅々までチェックする。それが偽物ではないことが分かると、男は運転免許証を女に返した。

暫くして、店の入口からサスペンダー姿の男が姿を現した。

「失礼致しました、紅乃様。高柳様がお待ちで御座います。どうぞ此方へ」

男の後について店へと入っていく女。店内はミラーボールが少し煩わしいが、BGMとして流れているアンビエントやニューエイジといった音楽が良い雰囲気を保っていた。

女が通されたのは、店の一番奥のボックス席だった。

「紅乃様をお連れ致しました」

「ああ、ご苦労。彼女に合う飲み物を一つ、作ってくれないか？」

「畏まりました」

祐治からチップを受け取った男性は、軽く会釈して踵を返した。

「ごきげんよう、祐治さん」

「ああ、しかし化けたね。別人みたいじゃないか」

「ふふ……女は殿方の為に化けるものですよ？」

そう言って、女――ヴェルローズ――は帽子を取って祐治に枝垂れかけた。

「別にそこまでしなくてもいいんだが……まあいいか。本題に入ろう」

「ええ」

祐治が話を切り出そうとした時、先程の男がカクテルを運んできた。

「お待ちせ致しました。ブラッディ・マリーをお持ち致しました」

ヴェルローズの前にカクテルが置かれる。

「それではごゆっくり。御用の際は其方の呼び鈴で、遠慮なくお申し付け下さいませ」

男は軽く会釈をして踵を返し、カウンターへと去っていった。

「これは、どのような飲み物なんですか？」

「ウォッカとトマト・ジュースのカクテルだね。あっさりとして女性に人気がある」

「まあ。わたくしの色にしては黒が足りませんが、有難く頂きますわ」

そう言ってグラスを口につけるヴェルローズ。ウォッカをトマト・ジュースで割っているせいか、そこまでアルコール度数は高くなくトマトジュースの酸味が口当たりを良くしている。

（あら、美味しいじゃない。今度、家でも作ってみようかしら）

「美味しいですわ」

「それは良かった。では、本題に入ろうか」
「ええ、お願い致しますわ」

二人は瞬時に表情を切り替え、祐治は一つ咳払いをしてから話を始めた。

「薔薇菜さんは、鈴鳴という名前を聞いたことがあるかい？」

「鈴鳴……？ いえ、聞いたことはありませんわね」

「では、レイメイという名前は？」

「レイメイ……街中でよく見かける、黎明電気の黎明ですの？」

「ああ、その黎明だ」

「それが、如何かしまして？」

「黎明は鈴鳴の、表の顔なんだ。僕は君に頼まれて織部家について調査してみた。その結果がこれだ」

祐治は一枚の書類を取り出し、ヴェルローズに渡す。内容を理解するにつれて、彼女の表情が驚愕へと変わっていった。

「――！！ こ、これは……真実なんですの？」

「ああ、本当さ。鈴鳴の実態は謎に包まれている。噂では、先祖は人間ではなくこの世界に迷い込んだ悪魔だとか。祭祀さいしと呼ばれる鈴鳴の指導者は、百年以上生きているにも関わらず若々しいままだとか……とにかく全てが謎なんだ。さすがの僕も、この名前に辿り着いた時は倒れるかと思ったよ……」

（……これが本当なら小唄のお母様は黎明……いえ、鈴鳴の直系の娘。そして小唄は直系の血を引く子供ということになる。小唄、貴方は一体何者なの……！？）

「鈴鳴が相手では、僕一人の力では到底無理だ。そこで、僕の先輩

に当たる人に鈴鳴本家へのアポをお願いしてもらった。明日の午前九時から十一時までなら、話に応じてもいいそうさ。場所はI県のH市。会うかい？」

「え、ええ……。会いますわ」

「よし、出発は午前五時だ。時間までにティーカの店に来てくれ」

「あら？ 如何してティーカさんのお店ですか？」

「ああ、なんかこの話を聞いたティーカが突然自分も行く、って言い出してね……」

「そうでしたの。午前五時、ティーカさんのお店に集合ですね。分かりましたわ」

（ティーカの奴、本気で小唄をマスターにするつもりね……）

「調査報告書と資料は全部これに纏めてあるから、帰ってからでも読んでおくといい。ああ、そうさ。織部小唄の両親は家の中でも何らかの研究をしていたらしい、と君は言っていただろう？ それは、こちらからは調べることが出来なかったんだ。機会があったら君のほうで調べてみてくれないか？」

ヴェルローズは祐治から手渡された書類ケースを受け取る。

「ええ、分かりましたわ」

祐治と同時にヴェルローズも立ち上がり、帽子を被り直す。そして、カードで支払いを済ませた祐治とともに店を出た。

「それにしても、君のその姿は綺麗だな。今度プライベートでも付き合ってくれないかい？」

「ふふ、考えておきますわ」

その返事として、ヴェルローズは男を惑わせる魅惑の視線を返し

た。

「それでは、祐治さん。ごきげんよう」

「ああ、また明日」

繁華街の喧騒が耳に戻ってきた所で二人はそれぞれ正反対の方向へと歩き出し、ネオンの向こうへと消えていった。

第五話『夜の密会』 Part. 2 (後書き)

すみません、カクテルあまり詳しくないんです……。。

第六話『鈴鳴』 Part. 1 (前書き)

この話には以下の内容と、残酷な描写が含まれます。苦手な方はご注意ください。

拘束しての一方的な暴力

第六話『鈴鳴』 Part. 1

——東北の地にある一つの県。原初の自然が色濃く残る市から山へ向かうように北へ、舗装された道路が途切れてもまだ山奥へ。荒れた山道の果てに見えてくる石段を登った先に、その屋敷は存在する。

人の侵入を許さぬ場所に存在するにも関わらず周囲は竹槍の柵。唯一の入口である正門の前には二人の屈強な門番が常に目を光らせ、鼠一匹たりとて通さない。そんな、下界から隔離された屋敷の奥で正座をする一人の女が深い思考に目を閉じていた。

「……」

部屋に女の以外の人影はない。聞こえる音は呼吸に胸が上下した時に発せられる、着物と襦袢じゅばんが擦れる音のみ。

女が静かに瞼を開ける。直後——障子の向こうに何者かの人影が姿を見せた。

「鏡花です」

「入りなさい」

女は鏡花と呼んだ人物の伺いに対して振り向かず言葉だけで応え、入室を促した。

「失礼します」

音もなく障子が開かれる。純和風の屋敷にはあまりにも不釣り合いな、紺色のロングのワンピースの上にエプロンドレスの長い黒髪

女性が姿を見せた。入室した時と同じく静かに障子は閉められ、黒髪くろかみの女性は正座をしている女性に一礼をする。

「玲歌様、黎明より連絡がありました。客人は三名で到着時刻は予定通り、とのこと。如何致しましょうか」

鏡花の報告を受けて、玲歌と呼ばれた女は再び瞼を閉じる。しかしその目はすぐに開かれ、鏡花は静かに主の指示を待った。

「分かりました。こちらも予定通りにお願いします。鏡花」
「はっ」

玲歌は静かに立ち上がり、鏡花と向き合う。その表情は何時もの事務的なものではなく、友人に向けるような明るいものだった。

「お氣をつけて。貴女のことだから大丈夫だと思うけれど」
「……！ ええ、まっかせなさい！！」

友人の暖かい言葉の返礼に笑顔を返した鏡花は、上機嫌で部屋を去っていった。

広い和室に、再び静寂が訪れる。

「……曾孫あのこは連れて来ませんでしたか。まあ、良いでしょう。隠し続けたとしてもいづれ分かることです」

玲歌の手から、ザ・ハーミッツ・ホーイル・オブ・フォレスト・バシグドマン 隠者、運命の輪、吊された男、ザ・タワザ・ワールド 塔、世界——計五枚の大アルカナが零れ落ちる。零れ落ちたカードには興味を示さず、正座をし直した玲歌は来るべき刻まで瞑想きんざうを続けるのだった。

「……ここは、どこかしら？」

懐かしい香りがしたような気がして、少女はゆつくりと目を開けた。

小高い丘の上に立つ、煉瓦作りの家。辺り一面には色彩々の花々が咲き乱れており、庭に置かれたテーブルの周りには数人の人影。その、皆が楽しそうに話をしているのが分かる。

「ヴェル、アルト。一緒にクッキー食べましょうー！！」

人影の一つが少女の姿になり、明るい声で庭先に佇む少女を呼ぶ。

「姉様、行きましょ？」

「え、ええ……」

いつの間にか隣に現れていた少女に手を引かれ、庭先にいた少女は木製の椅子に座った。

（ああ、これは――の夢だ。そして、この人達は……）

少女が思うと同時に、残る二人からも黒い影が取り払われる。一人は白い顎鬚を蓄えた、パイプの似合う初老近い初老の男性。もう一人は手作りのエプロンと笑顔が印象的な、中年の女性の顔が明らかになった。

「さあ、ヴェルちゃんもアルトちゃんも沢山食べてね」

三人の少女の前に、山盛りのクッキーが入った皿が置かれる。

「いっただきまーす！ うーん、やっぱりママのクッキーおいしいねっ！！」

「あらあら。——ちゃんたら、こんなに零して。お行儀良く食べないと駄目よ？」

少女の母親が呼んだその名前は、どこからか聞こえてきた酷いノイズのせいで少女の耳には届かなかった。

金髪に紫の瞳の少女に倣って、少女達は出来立てのクッキーを口に運ぶ。

少女を満たす、どこか懐かしい匂い。どこか懐かしい感触。どこか——懐かしい味。

「美味しい……」

「ヴェル、泣いてるの……？」

「え……？」

紫色の瞳が少女を心配そうに覗き込む。気づけば、少女は泣いていた。

「違う、違うの……」

少女は、受け皿から溢れ出る涙をそのままに思う。

ああ、これが夢ならこの後に起こることも夢なら良かったのに、と——。

「——ル！ ヴェル起きて！！」

「……ん」

夢から戻ってきたヴェルローズが目を開ける。彼女のすぐ先には
ティーカの顔があった。

（夢か。随分と懐かしい夢を見たものね）

まだ少し寝惚けている頭を叩き起こすように、ヴェルローズは多
少乱暴に自分の頭を振って残っていた眠気を払う。

「もう少しで着くよ。二人とも、準備して」

手にしていた新聞から、窓の外へと目を向けた祐治が言う。その
言葉を予想していたかのようにアナウンスが流れ始める。

『まもなく、H泉に到着します。お出口は左側です。お降りの際は、
お忘れ物等ありませんようご注意ください』

「あと少しで着くから、そろそろ移動しよう。忘れ物はないかい？」

「うん、大丈夫だよー」

「ええ、問題ないわ」

念のため、もう一度確認してから三人は出口へと移動する。数分
後にドアが開き、新幹線から降りた三人は思い思いに新鮮な空気を
吸い込んだ。清浄な空気が三人の肺を満たしていく。

「本当に良い空気ね」

「この辺はまだ開発が行き届いてないからね。僕らが住んでいる場
所とは大違いさ」

（ここに、鈴鳴の本家があるのね……小唄——）

ヴェルローズは連れてこれなかった小唄のことを思い、構内から軽く空を見た。

「早くいこっ」

ティーカに急かされながら改札口へと向かうヴェルローズ達だったが、改札口を抜けた直後――十名前後の黒服姿に取り囲まれる。黒服の男達は皆一様にサングラスを掛けていて、その表情は見えない。中には、懷に手を入れている者さえいた。

「な、なんだ!？」

「……」

黒服達は答えない。

(間違いなくプロだな。それも、相当訓練された連中だ。どうするか……)

祐治が思考を張り巡らせた時、黒服の中でも何の構えも取らなかった中央の男が一步前に進み出て彼らに言葉を掛けた。

「高柳様、ヴェルローズ様、ティーカ様で宜しいですか？」

「!？ ……ああ、そうだが？」

「そうですか。お前達はもう下がれ」

「はっ!」

黒服の中でも隊長格の男なのか、男が命令してから十秒も立たない内に黒服の姿は見えなくなった。

「失礼致しました。私は黎明に仕える者です。これから皆様を本家

へとご案内させていただきます。こちらへどうぞ」

黎明の男は慇懃に一礼する。

駅の出口には黒塗りの自動車が、乗せるべき者を待っていた。

（こいつ……言葉こそ丁寧だけど、逆らったら即殺すという感じね。私とティーカは問題ないけど祐治さんは分からない……ここは、従っておいたほうがいいわね）

全員乗ったことを確認してから男が運転席に座り、ハンドルを握って路肩から車を走らせる。

「いい車だな」

最高級のシートが背中に心地良く、祐治は素直な感想を述べる。

「黎明がお客様を乗せる車ですから」

ハンドルを操作しながら、男は面白くもないといった表情で淡々と返した。その様子を見たティーカが、小声でヴェルローズに耳打ちをする。

「なんか無愛想な人だね、ヴェル」

「そうね、分かっていると思うけど……」

「うん、大丈夫。ユウジは死なせないよっ」

ヴェルローズもまた小声で返すが、しかしティーカの言葉に被せる様にして男は運転席から声を割り込ませてきた。

「今日の私は、ただの案内役です。お嬢さん方から仕掛けてこない

限りは何もしませんよ」

「聞こえていたの。耳聡い男ね……」

「これくらい出来なければ、黎明に勤めることなど到底出来ませんので」

そう話している間にも車は市街を外れ、山のほうへと進んでいく。そのうちに民家らしきものも見えなくなり、車内から見えるのは緑の景色のみとなった。

「少し揺れます。危険だと思ったら、何かに掴まってくてください」

車は舗装されていない山道に入る。小石や枯葉がぶつかり合う音が聞こえ、凹凸の激しい道を軽く跳ねながらも進んでいく。

「すごい道だな。鈴鳴の本家はこんな場所にあるのかい？」

祐治は、あまりの揺れに舌を噛みそうになりながらも男に聞く。

「本家は神聖な場所ですので。我々黎明ですら、中に入ることは許されていません」

「そうか」

山道を登り切ると長い石段が見え、車はその手前で停車した。

「この石段の先に鈴鳴本家があります。それでは、また後ほど迎えに上がります」

三人が降りたことを確認した男は、慇懃に一礼すると狭い山道を器用にUターン。山道を下っていった。

「……」

思わず石段の先を見つめるヴェルローズ。ざっと数えても百段近くの、年季の入った石段が聳^{そび}えていた。

「さて、行こうか」

祐治が先導して歩き出し、ヴェルローズとティーカもそれに続く。

「うんうん」

「ええ」

石段はかなり急勾配に配置されており、半分も登らない内に疲れが見えてくる。陸上の選手であっても、ここの上り下りは敬遠するに違いない。

「失敗した……。正装で来るんじゃないわ」

「ボクのはまだマシなほうだけど、ヴェルは大変そうだねー」

ティーカは膝丈のワーク・ワンピース。ヴェルローズは丈が足上近くまであるアンティーク・ワンピース。どちらが歩きにくいかは言うまでもなく、ヴェルローズの額には早くも玉汗が浮かび始めていた。

それでも、三人は十分足らずで石段を登り切った。目の先に門と、屋敷を囲むように建てられた柵。更にその奥には大きな屋敷が見える。

「ここが鈴鳴本家か。大きいな」

「ええ、行きましょう」

「うん、行こう」

祐治が時計を見ると八時三十分。約束の時間まで余裕はあまりないことを確認し、三人は目の前に見える門へと向かう。やがて、屋敷の全容が明らかになる。門には、足上丈のメイド服を着た女が入口を守るように立っていた。

「高柳祐治様、ヴェルローズ様、ティーカ様ですね。お待ちしていただきました」

女は舞いを魅せるかのように、優雅に一礼する。

「君は？」

「私は鈴鳴本家で侍従長を勤めさせていただいております、櫻鏡花さくらきょうかと申します」

「それで、貴女はこのまま、鈴鳴の主の下へ案内してくれるのかしら？」

ヴェルローズには彼女の返答が分かつてはいたが確認の意も含め、敢えて言葉にした。

（ここまで、強い気を叩きつけてこれちゃね……分からないはずがないわ）

「あら、ヴェルローズ様には通じなかったようですね。祭祀さいしの意思に従い、貴方がたに鈴鳴を知る権利があるかどうか、少し試させていただきます！」

言って、気合を入れると鏡花は扇子は取り出して構えを取った。

第六話『鈴鳴』 Part. 2

相手はメイドだが、鈴鳴に仕える者が只者であるはずがない。鏡花が瞬間的に発した気を受けて、三人は瞬時に戦闘態勢を取った。

「やっぱりね。行くわよ、ティーカ」

「おっけー♪ ユウジは下がってて！」

「ああ、二人とも気をつけてな」

ヴェルローズ達の実力と相手の無駄がない身のこなし。自分の出る幕ではないことを悟った祐治は、大人しく後ろに下がる。

祐治が安全な位置まで下がったのを確認したヴェルローズは、三点バースト付きの拳銃を想像能力で作り出す。続くティーカも鞆から小型の手斧を取り出してカバーを外し、身構えた。

「さあ、どこからでもどうぞ」

鏡花は、扇子を閉じたまま動かない。

（彼女の能力が分からないうちは、迂闊に手は出せないわ。それなら――）

「言われなくてもっ!!」

先手必勝。銃を構えた直後にマズル・フラッシュ三回。銃口から吐き出された三発の弾丸が鏡花に襲い掛かる。彼我の距離は約二十

五メートル、普通に考えると避けるのはまず不可能な距離。しかし鏡花は慌てることもなく静かに扇子を開き、ただ一言――

「――硬！」
コウ

三発の弾丸は全て扇子に突き刺さったが貫通するには至らずに鏡花の足元に落ち、そのまま転がっていった。

「っ!？」

「この程度の力で鈴鳴に仕える者を倒せるとでも？　今度はこちらの力を見せて差し上げます。水！」
スイ

裂帛れっぱくの気合と共に作り出された幾つもの水の球が、鏡花の周囲に浮かぶ。

「針！」
シン

その言葉によって水の球が球状から針状へと変わり、その切っ先がヴェルローズ達に向けられたことに気づいたティーカは地属性の精霊魔術を発動させる。

「ま、まずい!!　土塁障壁!!」

「弩!!」
ド

鏡花の声と共に全ての水針が全てを穿つ勢いで打ち出された。無数の水針は土の壁に突き刺さりせめぎあうも、変化はすぐに訪れた。

「だ、駄目!　抑え切れない!!」

水針は土の壁を容易に破壊してヴェルローズとティーカに突き刺

さり、彼女達に呻き声を上げさせた。

「くっ！」

「うわあああああああつ！！」

ヴェルローズはそうでもなかったが、地の精霊属性を持つティーカーはただでは済まない。水針の威力にティーカーは数十メートル後ろへと吹き飛ばされる。

「ティーカー！！」

「精霊属性相関で地は水に弱い。地で水を抑えようとするなど、愚かですね」

「ティーカー！ 大丈夫か！？」

祐治が急いでティーカーへと駆け寄る。派手に転がったティーカーだったがそこまでダメージは大きくなかったのか、すぐさま立ち上がった。

「へへっ、大丈夫大丈夫。頑丈さがボクの取り得だからねっ」

言いながら、ヴェルローズにウィンクをするティーカー。数秒の逡巡の後に意味を理解したヴェルローズは、片目を睨り返して魔力を右手に集める。

右手に赤い炎を生み出し、ヴェルローズは鏡花と向き合った。

「炎、ですか。火もまた水に弱い、無駄だと思いますが？」

「さあ、それはどうかしら？ 行きなさい！！」

ヴェルローズの右手から炎が放たれ、鏡花に襲い掛かる。対する鏡花は興味が失せたのか、何の行動も起こさない。

「この程度の炎っ！ 水！ 伸！^{シン} 壁！^{ヘキ}！！」

鏡花は直撃する直前に水の球を伸ばし壁を作り、炎を阻んだが――

「何っ！？」

（しまった！ これは……闇の炎か！！）

赤い炎の中から黒い炎が飛び出し、水の壁を浸食するように呑み込み始める。

黒い闇の炎を通常の炎で擬装する、^{カムフラージュ}闇の下位精霊魔術^{ローエント・エレメンティカ}。元から火と闇の属性を持つ彼女にとって、それを扱うのは造作もないことだった。

「隙を見せたわねっ！ 闇よ、束縛せよ！！」
「くっ！？」

足元に広がる影に嫌な予感がした鏡花は、すぐさまそこから離れる。直後に漆黒の腕が影の中から出現したが、空ぶった腕は空気を抱擁して闇へと還っていった。

（ここが、狙い目――っ！！）

「まだまだっ！！」

間髪いれずに銃を構え、ある一点を狙って引き金が引かれる。連続攻撃に動揺した鏡花だったが、それは読めていたのか即座に扇子を構える。

「甘い！ 硬！！ うー！？」

扇子を硬質化し、射線上に扇子を翳^{かざ}そうとした鏡花。だが、左腕が動かないことに気づく。見れば、地面から生えた蔓のようなものが彼女の左腕に巻き付いていた。

（これは、地の束縛魔術！！ してやられた！！）

鏡花は悔恨の視線をティーカに向ける。

「へへ、確かに地は水に弱いけど、束縛系ならあんまり影響ないもんなね！ この勝負、ボク達の勝ちだ！！」

勝利を確信して、ティーカは親指を上 に 立てた。

水の壁はまだ闇の炎に呑み込まれていない。彼女の術の特性上、この状態では同じ言霊は使えない。それでも鏡花は左腕を脇に寄せて、銃弾の直撃は避けた。

「くっ、かすり傷とはいえ、私が傷を追うとは……。いいでしょう、貴方がたに鈴鳴を知る権利があることを認めます。ですが、その前に」

鏡花は大きめの水の球を一つ生み出し、ヴェルローズ達の上に浮かべる。直後に弾けた水の球が雨となってヴェルローズ達に降り注ぎ、彼女らの傷を癒していった。

癒しの雨が止んだ時には、傷の一つすら残っていなかった。

「では、そろそろ祭祀のところへご案内致します」

死舞人形的能力で破れた服の修復も終えた二人と祐治は、物珍し

そうに辺りを眺めながら鏡花の後を続いた。

「——お待たせしました」

部屋に案内されてから数分後。穏やかな声と共に障子が開き、着物姿の若い女が姿を見せた。

黒地に金色の刺繍が施された着物。それに相応しい、整った和風美人の顔立ち。長い黒髪を簪で纏め上げている女は、ヴェルローズ達の前に座って優雅に一礼をする。

「遠路遙々《はるばる》、ようこそお越しくございました。私が鈴鳴の現当主……そして、祭祀である鈴鳴玲歌すずなり れいかです」

良く通る声で、玲歌と名乗った女は丁寧に自己紹介をした。その様子を見ながらヴェルローズは、訝しげながら内心で考える。

（この女が鈴鳴の当主？ それらしい力も感じないし、怪しいわね。少し試して——）

「では、試してみますか？」

「——!？」

気が付けば玲歌の目はヴェルローズだけに向けられており、目を通して鈴鳴の魔力の一端を叩き付けてきていた。それは嵐と言っても差し支えない程のもので、彼女は背筋に冷たいものを感じた。

（何て魔力量なの!？ これは、私達が束になっても敵う相手ではないわ。格が違いすぎる……）

「いえ、やめておくわ。試すような真似をしてごめんなさいね」

ヴェルローズは素直に非礼を詫びた。流石にあれだけの格の違いを見せ付けられれば、彼女と言えども引き下がらざるを得ない。

「ご理解していただき、ありがとうございます。それでは――」
「待ってくれ」

言葉を続けようとした玲歌に割り込むようにして祐治の声。ゆっくりと振り向かれる黒い瞳に気圧されないように、祐治は言葉を続ける。

「割り込んですまない。だが、どうしても確認しておきたいことがある。あなたは、本当に鈴鳴玲歌なのか？」
「それは、どういう意味でしょうか？」

玲歌の目が俄かに細くなり、祐治を見つめる眼光も鋭さを増す。

「疑うつもりはないんだが……こちらの調査では、あなたは別の名前で載っているんだ」

言って祐治は鞆から資料を取り出し、和風のテーブルに広げた。それに目を通した玲歌は祐治達を見回し、穏やかに微笑みを浮かべた。

「なるほど。どなたかは存じませんが中々優秀な腕をお持ちですね。ですが、ここに書かれている名前の半分は偽名です」

「偽名？」

「ええ。鏡花」

「はっ」

有事の際に待機しているのだろう、すぐに障子の向こうから返事が返ってくる。

「家系図を持ってきなさい」

「御意」

数分の後、部屋に入ってきた鏡花は一本の巻物を玲歌に渡して一礼する。そのまま静かに部屋を辞した。

「どうぞ。こちらが鈴鳴の家系図です」

調査で得た家計図と、本家の家系図を見比べる祐治。確かに、鈴鳴に強く関わっていると思われる者の名前が本家の家系図と異なっていた。

「……確かに」

祐治は、家系図を丁寧に丸めて玲歌に返した。

「ご理解いただけただけで何よりです。では、そろそろ本題に入りましょうか。本日は何用で、この鈴鳴本家まで来られたのですか？」

祐治とティーカは同時に、赤と黒の少女に視線を向ける。

（当然か。私の問題だものね）

「どうやら、そちらの方に関係するお話のようですね。お聞きしましょう」

「ええ。織部と鈴鳴の関係、それと小唄の母親について教えて欲しいの」

「ふむ……」

玲歌はヴェルローズの目を見る。彼女の目は真剣そのもので、興味本位や遊び半分に聞こうとしているようには見えなかった。

「……いいでしょう。ですが、それには鈴鳴の歴史について先に知っておいたほうがいいでしょう。お時間のほうは大丈夫でしょうか？」

三人は顔を見合わせ、代表として祐治が答える。

「時間は大丈夫だが、十一時までの約束では？」

「ああ、それはあなたの方が鏡花に認められなかった場合です。どちらにしろ、十一時までは話を聞くつもりでしたので。あなた方の目を見ても、興味本位に話を聞きに来た感じではありませんから」

本当に興味本位なら鏡花に門前払いされているはずですから、と玲歌は付け加えた。

「どうやら、お時間のほうは大丈夫のようですのでお話しますね。……言うまでもないことですが、鈴鳴に関する話は他言無用です。もし破ってしまったら、翌日の朝日は拝めない——そう思っておいてください」

玲歌は念を押すように語気を強め、眼光鋭く三人を見回す。完全に気圧けおされた三人は揃って頷いた。

「では、鈴鳴の歴史から」

玲歌は湯呑みに注がれた抹茶を一口飲み、
厳おごそかに話し始めた。

第六話『鈴鳴』 Part. 3

「鈴鳴の開闢かいびやくがどれ程昔のことなのか、それは私達にも正確なところは分かりません。ただ、先代が残した書物によると、今から五百年以上前——酷い怪我を負った一匹の魔ノ世の住人が現世うつしよへと迷い込み、一人の女童めわらしと出会った。女童のお陰でその者の傷は癒され、動けるまでに回復した。魔の者は言った。『娘よ、我を救ってくれた札に我の力を汝に与えよう』と。しかし娘は『そんな力いらないわたしのことを分かってくれたあなたが側にいてくれたらそれでいい』と言い、魔の者の力を受け取ることはなかった。女童は疎ぼろまれながら生まれた子で父母からすらも受け入れられず、檻ぼろ樓小屋に一人で暮らしていた。そのことを知った魔の者は『我は、汝が我を必要としなくなるまで汝の側に居よう』と言い、二人は共に暮らすうちに子を授かった——この子供が、鈴鳴の始まりとされています」

「ということは、鈴鳴の人間は……」

ヴェルローズは思わず呟きを漏らす。

「ええ、その通りです。鈴鳴の直系には、魔族と人間——両方の血が流れています」

「……」

「そして、ご存知かもしれませんが魔族と人間では時間の流れが違います。魔族は総じて長寿です。祖先が契約したとされている魔族『リッチ』、死を司るこの魔族もまた長寿……故に私達鈴鳴の直系は、普通の人間よりも遥かに長い刻を生きています」

「玲歌は何歳なのー？」

話の流れを気にしない様子で割り込むティーカ。この図太さだけは真似できない、とヴェルローズと祐治は揃って思った。

「記憶に間違いがなければ、今年で二百五歳のはずです」

「うわ、長生きだねえー」

「ふふ、退屈なだけですよ」

言って笑うティーカに、玲歌は微笑みを返す。

「一つ良い？ 小唄の母親も鈴鳴の直系なら、その息子の小唄も鈴鳴の直系を引いていることになる。小唄も長寿ということ？」

「はい。あの子も鈴鳴の血を引いていますから。ただ、織部の血が混じり薄まっているはずですから……長く生きたとしても百五十年くらいかと思います」

「そう……。そろそろ、小唄の母親について聞かせてくれるかしら？」

ヴェルローズは急かすように先を促す。彼女が一番聞きたいのはこの一点だったため、それも仕方のないことだった。

「分かりました。小唄の母親……孫の紗夜香は歴代鈴鳴の中でも高い魔力と資質を持つ子でしたが、同時に魔術の修練や精神鍛錬を嫌う、変わった子でした。そして、中学を卒業した日の夜にあの子は言いました。『科学の勉強をするからここを出て行く』と。私と、紗夜香の母親である志鶴香は『二度とそのようなことを言っはならぬ』と厳しく叱り、激しく打擲ちやうちやくしました。その次の日の朝に紗夜香は下山し、行方を晦ましました。私は搜索しようと云ったのですが志鶴香は『あれはもう娘ではない、放っておけ』と勘当同然のこ

とを言ったため、黎明を動かしてまで搜索するようなことはありませんでした」

一呼吸置いて、玲歌は抹茶を一口飲む。

「あとは、あなた方が調べた通りです。国内の研究所に入所後、織部晋吾と出会い結婚。二十一歳のときに小唄を出産し、その七年後に失踪……以降は消息不明。ですが、私達はこれ以外のことを一つ掴んでいます」

「それはどのような？」

今まで静かに話を聞いていた祐治が問う。

「失踪後、二人は海外に渡った形跡がありました。詳しい行き先は調べられませんでしたが、形跡から見て欧羅巴^{ヨーロッパ}方面だと思われます」
「……」

（科学者二人が渡欧？ まさかとは思うけど……）

常識で考えればありえないこと、しかし頭の警鐘は鳴り止まない。聞こうか聞くまいか迷ったが思考の結果、ヴェルローズはそれを口にする。

「その、紗夜香が得意だった魔術などはあるのかしら？」

「ええ。あの子は傀儡^{くぐつ}系の魔術が得意でしたが、それが何か？」
「――!？」

（糸が繋がった？ いえ……まだ特定は出来ないわ。せめて国名が分からないことには、まだ百以上も候補があるもの）

「どうしたの？ ヴェル」

突然顔を引きつらせたヴェルローズを見て、ティーカが心配そうにその顔を覗き込む。心配させまい、と彼女は努めて冷静な表情を返した。

「なんでもないわ、ティーカ。では、これが最後の質問。鈴鳴の子供が極端に少ないのはどうして？」

これは、ヴェルローズだけではなくティーカと祐治も気になっていたことだった。二百年以上も生きているのにも関わらず玲歌の子供は志鶴香のみ、志鶴香の子供もまた紗夜香一人のみ。長寿故に跡取りは一人で良いことも考えられるが、それを差し引いても奇妙なことだった。

「お答えしましょう。鈴鳴のしきたりで、親は子を一人しか持つてはいけないことになっているのです。鈴鳴の直系の女は子を産んだ時点で……方法は言えませんが二度と子を産めないように処置され、婿は欧羅巴、^{アメリカ}亜米利加へ魔術修行に出され、修練の後に魔術結社へ入ります。そして、鈴鳴の子は例外なく魔術に関わらせません。それがたとえ、才能のない子でも」

「……過酷ね」

妻は二度と子を産めなくなり、その婿は二度と妻の所へは帰れない。子は魔術に縛られ、その子が才無しならば——地獄にも等しき光景が容易に想像出来た。

「後継者争いを避けるためでしょう。この魔力でお分かりになると思いますが、鈴鳴同士が衝突したら、山ごと本家が吹き飛んでしまいますから」

「でしょうね。とりあえず、こんなところね」

軽い空腹を覚えたヴェルローズが壁の時計を見ると、針は十一時半を回ろうとしていた。

「お疲れ様でした。今から駅まで行くのは空腹で大変でしょう。一緒に昼餉ひるげは如何ですか？」

まるで、友人を誘うかのように玲歌は言う。

「いいわね、いただくわ。ティーカと祐治さんは？」

「お腹すいたし、ボクも食べてく〜！」

「僕もいただくよ」

満場一致。三人は玲歌と昼食を共にすることにした。

「決まりですね。鏡花！」

「はっ」

「昼餉の用意は出来てますか？」

「急がせてはおりますが、もう少し掛かります。あと、十分程お待ちください」

「分かりました。この方々にも膳をお願いします」

「畏まりました、玲歌様」

離れていく鏡花を目で見送った玲歌は再びヴェルローズ達と向き合い、微笑みを浮かべる。

「昼餉が出来上がるまで、羊羹ようかんでも食べていきましょうか」

玲歌はこれ以上楽しいことはないくらいに微笑み、皿と羊羹を取

り出したのだった。

「フフフフ……」

夜——市内の、とある廃ビル。幽霊や化物の類が毎晩宴会していてもおかしくない、妖気や瘴気すら漂ってきそうな場所で一人の少女が薄笑いを浮かべながら下界を見下ろしている。

エメラルドの長髪、エメラルドの瞳、コルセット付きの、エメラルド色のロングドレス——彼女は、翠の体現者と言ってもいい程、翠に包まれていた。

少女の視界の遥か下では様々なものが我先にと蠢いている。実際には『動いている』のだが、ここからでは『蠢いている』ようにしか見えない。

「ふん、醜く這いずり回るだけの蛆虫どもめ。フッ！」

少女は手に浮かべた緑色のモノに息を吹きかけて下に流した。何とも形容し難い^{がた}それは、風に乗って地上へと降りていく。道を歩いていた一人の男の背中にそれが吸い込まれた途端、男は絶叫を上げて苦しみだした。

「つまらない、飽きたわ」

誰かが呼んだのだろう、救急車の鳴らすサイレンの音が辺りに鳴り響く。既に興味を無くした少女は壁際から離れ、鉄柱のほうへと近づく。それにつれて、何者かのくぐもった息遣いと鉄と鎖が擦れるような音がはっきりと聞こえてくる。

「フフ、死舞人形っていうのは便利ね。あれだけボロボロにしたのに、次の日にはもう服が元通り」

「……—なあなたにはない能力だものね。ざまーみろ」

鉄柱には一人の少女が鉄鎖で縛られており、乱れた銀髪に蒼の瞳が目につく。白を基調に青で彩られたアンティーク・ワンピースが、対となる誰かを髣髴^{ほうふつ}させる。長時間の拘束により顔は憔悴^{しょうすい}しているが、目の光はまだ失われてはいない。少女は嘲笑するような表情と共に舌を出した。

「……」

その言葉と態度が余程気に入らなかったのか、翠の少女は近くに置いていた革ではない鞭——鉄製の発条^{ばね}が仕込まれた鞭——を手にとった。そして、それを無防備の少女に向けて一切の容赦なく振り下ろす。

「っあああー!!」

少女の悲鳴と打撃音が辺りに響く。それが終わった時には、少女のワンピースは見る影もなく引き裂かれていた。

「はぁ……はぁっ……」

翠の少女は鞭を持ったまま少女に近づき、その腹部を——強く蹴り上げる。

「おぐうつぁ……!」

数日間食物を摂取してないためか嘔吐はしなかったが、そのあま

りの衝撃に少女は床に倒れそうになる。だが、両手を縛る鉄鎖がそれすらも許さない。

そんな少女の様子もお構いなしに、翠の少女は乱暴に銀髪を掴み無理やり顔を引き上げさせた。

「いたっ！ 痛いっ！！ 離して——！！」

「アンタ、自分の立場ってものを分かってる？ アンタなんか今すぐ殺してもいいのよ！？ なんなら、その皮を全部剥いでそこから落としてあげましょうか？」

「い、いやあ……！！！」

「アンタ一人いなくても地球は回るのよ？ 無残な死に方をしたくないなら、アタシには逆らわないことね」

「うう……」

銀髪から乱暴に手が離され、少女は鉄柱に後頭部をしたたかに打ち付ける。これでもようやく休める、そう思っていた少女を予期せぬ激痛が襲った。

「あああああがあああああうああああああつ——！！！」

「何勝手に休んでんのよっ！ アンタの役目はアタシを悦ばすことでしょっ！！」

翠の少女が先程の打擲で開いた傷に鞭の柄を押し付けた。無理やり傷口を拡げられる激痛に、少女は引き裂かれるような感覚を覚える。口から絶叫を垂れ流しながら手に繋がれた鎖を必死に動かすが、その程度では鉄の鎖はびくともせず何の解決にもならない。

「あああああ痛い痛い！！ 痛い！！ 助けて姉様あ——！！！」

「ちっ、煩いわね。これでも啞えてなさいよっ」

「む……むぐうううううううー！！」

先程まで傷口を拡げていた鞭の柄を少女の口内に突っ込む翠の少女。すぐに少女の口内が鉄錆の味で満たされ、吐き気を催す。だが、口の奥深くまで突っ込まれた柄が嘔吐して楽になることを許さない。翠の少女は自分の指で少女の傷口を更に拡げ始め、鮮血に染まった自分の指を舐めて愉しみながら行為を続ける。

「――！！」

「フフ……アハハハハハッ！！ 何を言ってるのか全然分らないわぁ。アンタのお姉様とやらもアタシの『招待状』を受け取りつつあるし、そろそろ気づく頃ね。そしたら、この『ベリティエ』がアンタの目の前で惨たらしく殺してあげる！！ アハハッ！！」

（姉様……っ！！）

暫くの間、声にならない絶叫と愉悦に溺れる狂ったモノの声が広すぎる空間に響き渡っていた。

「……アルト？」

懐かしい声が聞こえた気がして、ヴェルローズは思わず辺りを見回した。しかし、部屋にいるのは彼女だけ。他には誰もおらず、音楽を聴いているわけでもなかった。

「空耳かしら。今日は色々あって疲れたわ……」

今日のことを振り返りながら、ワイン・グラスに口を付ける。

（玲歌との会話……彼女は小唄を早めに鈴鳴に來させたいようだけれど、小唄に話すのはまだ早い。ここでやるべきことが全て片付いてからね）

その回想を中断させるように、ドアからノックの音が聞こえてくる。

「ヴェル？ まだ起きてる？」

「ええ、もう少し起きているわ」

「そう。僕はもう寝るから。おやすみ、また明日」

「ええ、おやすみなさい」

遠ざかっていく小唄の足音。それを聞きながらヴェルローズはデスクの上から、一枚のカードを手取る。それは、帰る直前に玲歌から渡された一枚のタロット・カードだった。

（大アルカナの第十六番『塔』^{ザ・タワー}か。ティーカが言うにはこれの正位置の意味は『予期せぬ災い』らしいけれど、誰に対する災いなのかしらね）

ふと、ヴェルローズは天井を見上げる。煌々とした灯りは変わらず部屋中を照らしている。

「ねえ、貴方はどう思う——？」

この部屋にはいない、しかしはっきりとした誰かの声がヴェルローズの耳に聞こえてくる。

「そう、かもしれないわね……」

その声を聞きながらヴェルローズはワイン・グラスを傾け、赤い液体を舌で転がす。

ワイン・グラスが空になるまで、彼女は酒の味と会話を楽しむのだった。

第六話『鈴鳴』 Part. 3 (後書き)

リッチの設定は当作品のオリジナルです。実際のものとは大きく異なります。

第七話『二つの夢』 Part. 1

（――ここは、どこ？）

誰かの声が聞こえたような気がして、小唄はふと目を覚ました。辺りを見回すと白亜の壁と天井、視線の先には複数の小さな人影のようなものがある。

「はーい、みんなー！ 今日も歯車の仕組みについて勉強しましょうねー！」

「はーい！ ――先生！」

隣から聞こえてきた少し大人びた声に、視線の先に見えてきた複数の幼い子供達が元氣よく返事する。

夢を見ているのだろうか、小唄は隣に立っている人物を確認しようとした。だが、体は錆付いた機械のように動かない。

（体の感覚はあるのに目しか動かせない……。どういうこと？）

「まずは昨日のおさらいから。この時計の歯車に形の合わない歯車をかみ合わせたらどうなるか、覚えている子はいますかー？」

先生と呼ばれた女に向けて、複数の小さな手が挙がる。

「はーい、じゃあ……。――ちゃん答えてみてー」

「はあい！ えっとお……。動かないか、かみ合わせがわるくてちゃ

んと動かなかったと思いますーすっ!」

(あれ? あの子、どこかで見たことあるような……?)

小唄は内心で首を傾げながらも他の子供達をよく見てみる。すると、最近出会った者達の顔付きによく似ていることに気づく。見たことがない顔の子も何人かいたが、それ以外は小唄のよく知る者達に似ていたのだ。

「はい、よく出来ましたっ! ——ちゃんの言うとおり、形の合わない歯車ではちゃんと動きません。今日は、形の合う歯車をかみ合わせてみましょうー!」

先生が小唄の視線のほうに手を伸ばし、一つの歯車を手に取って子供達に見せる。興味津々に注がれる視線。女性は側面が鈍色にびいろに覆われた歯車をはめ込み、置き時計のスイッチを入れた。

しかし――

「あれ、先生ー。この時計動かないよー?」

「動かないねー、どうしちゃったんだろうねー? 誰か、分かる子はいるかなー?」

子供達に分かりやすいように、先生は再び時計の背面を見せる。今回は少し難しいのか、すぐに手は挙がらない。

「――ちゃんはどうかかなー?」

女性に声を掛けられた、長い銀髪をポニーテールに纏めている子が可愛らしく首を傾げながら考える。

「うーん、なんだろうー……あっ！ さっきはめこんだ歯車の横のところが……あれ？ なんていったっけ……？ うーん……あ、そうだ！ さびついちゃってるから動かない、のかなあ？」

「——ちゃん大正解！ よく出来ましたー！ 形の合う歯車でも錆付いてしまった——死んでしまった歯車はかみ合わないからよく覚えておきましょうねー！」

「はい！」

（さっきから名前を聴こうとしているんだけど、その部分だけ変な雑音が入ってきて聞こえない……）

名前の部分だけは小唄に聞かれたくないかのようにその部分にだけノイズが混じり、誰一人の名前も分からない状態が続いていた。

「それじゃあ、次はちゃんとした歯車をかみ合わせてみましょうー！」

言い終わると小唄のすぐ近くまで先生の手が迫る。手足が動かさない小唄は抵抗することも出来ず、いとも容易く体をその手に掴まれ、持ち上げられた。

（えっ！？ これは……僕が、歯車になってるのか……！？）

何処とも知れない場所で、小唄は一つの歯車になっていた。そして、目の前まで持ち上げられたことで、小唄は先生の顔を初めて見ることが出来た。

年は小唄より二つから三つ程上だろうか。金糸に銀糸が混じった不思議な色合いの長い髪に、光の差す角度で瞳の色が変わって見える異質の双眸。雰囲気すらも人間離れしすぎている、と小唄は思う。

（何故だろう。この人は、何か懐かしい感じがする……）

そう思っているうちに小唄という名の歯車は時計にはめ込まれ、再びスイッチが押される。すると、それまで動かなかった時計の針が規則正しい音を周囲に響かせ始めた。

「わぁ！ 動いたー！！」

「うん、ちゃんと動いたねー！ みんなも自分に合った歯車を見つけてるんだよー？ 分かったかなー？」

「はーいっ！！」

「それじゃあ、今日はここまでにしましょうー！」

「……起立、礼」

（あ、あれ……？）

抑揚に乏しい黒髪の子の声を聞いた途端、小唄の視界が明滅――辺り一面が白に染まる。

白から黒へ、暗転――。

視界に色が戻り、場面が切り替わる。

小唄は、二体の人形を抱えながら部屋の隅で怯え震えている少女を見下ろしていた。

（……この子は、誰？）

見ている方向から暴力的な音が聞こえてくるたびに身を竦ませる少女は、胸に抱えた人形達を強く抱きしめていた。

『ひっく、パパ、ママ……誰か助けて……』

小唄の耳にしゃくりながら呟く少女の声が聞こえたが、それは聞いたことのない国の言葉だった。

隣から響く音が段々大きくなってくるにつれて、微かに聞こえていた悲鳴や呻き声が聞こえなくなる。少女は近づいてくる暴力の足音に耐えるかのように、より強く人形達を抱きしめる。

『ヴェル、アルト……』

（――!? い、今確かに……聞こえた）

少女が呟いた一言、それは小唄もよく知っている名前だった。たとえ、少女の言葉が分からなくても固有名詞だけはどこの国の言葉でも発音は変わらない。この時点で小唄は、あることをほぼ確信していた。

（これは、まさか……ヴェルと妹さんの――）

その瞬間――木製の扉は鈍い音を立てて破られ、三つの黒い人影が姿を見せた。

『ひっ……!!』

見つかりませんように、と少女は目を閉じて祈りを捧げる。しかし、三人の動きはゴロツキや強盗の類ではなく訓練された軍隊のようなものだった。すぐさま発見されてしまい、人影の一つが少女の前に立ちはだかる。

『ひぐ……っ! た、助けて……!!』

『隊長、見つけましたぜ。で、ホントにやっちゃってもいいんですかい?』

ガスマスクのようなものを着けているのか、隊長と呼ばれた男がくぐもった声を男に返す。

『ああ。出来るだけ絶望と恐怖を与えてから殺せ、と上からの指示だ。可哀想だが仕方あるまい……』

『了解でさあ。というわけだ、お嬢ちゃん。悪いが、これも命令なんだな。時間掛けて死んでもらうぜ』

『い、いやああああああっっ!!』

死という言葉聞いて、少女が暴れ出す。男は少女の服を脱がそうするが、想像以上の抵抗に実力を行使し始めた。

『うるせえ！ 静かにしやがれ!!』

『きやうっ!!』

男の無骨なグローブが、少女の鼻先に突き刺さる。それだけで少女の華奢な体は吹き飛び、胸に抱いていた金糸の人形と銀糸の人形は別の場所へと離されてしまった。

『ひう！ やだやだあ……』

『へへ、大人しくしてりゃ少しくらいは優しくしてやるよ』

男は手に持っていた大型の軍用ナイフで少女の服を引き裂く。慣れた動作で上着からスカートへと刃を滑らせる。これから嫌にでも訪れる恐怖に泣き震える少女。それを余所に男はショーツをも切り裂き、丸めて少女の口へと突っ込んだ。

『むぐううー！ー！?』

『こんな時間じゃ誰もこねえとは思うがな。騒がれちゃあ困るんで

ね』

（な、何をする気なんだ……？）

金属同士がぶつかり合う音。何かをずり下げる、冒涇の音が月明かりの部屋に響く。

泣きながら必死で首を横に振る少女の両足の間に、男は体を割り込ませ——。

「——っ！？ はあっ、はあっ……！」

あまりの夢に、小唄は毛布を跳ね飛ばして上半身を起こした。心を落ち着かせて辺りを見回すと見慣れた自分の部屋、机の上の置き時計は午前五時丁度。起きるにはまだ少し早い時間だった。

「はあはあ……夢か。それにしても、酷い内容だったな……」

安堵の息を吐く小唄の横で、もぞもぞと動く気配。訝しげに小唄が視線を向けると、長い金髪の少女が身を震わせていた。

「んん……寒いわ……」

「……え？」

——何故、彼女がここに？

理解できない小唄は狼狽しそうになるが、思考を集中させて平常心を保たせた。

（どうしてここで寝てるのか分からないけど、それよりも——）

「ヴェル、起きて」

「ん、ん……おはよう、小唄」

「おはよう……じゃなくて」

「？　こんにちは、と言うにはまだ早すぎる時間よ？」

「……どうして、ヴェルが僕のベッドで寝てるの？」

軽く睨まれて、ヴェルローズは軽く目を閉じて記憶を探る。数秒後——把握の意味だろうか、彼女は両の掌を叩き合わせた。

「夜中に喉が渴いて水を飲んで戻ってきたら、貴方の部屋から呻き声が聞こえてきたのよ。そ、それでドアを開けたら貴方がとても苦しそうだったから暫くついていてあげようと思って……。いつの間にか寝てしまっていたみたいね」

だからといって他人のベッドに潜り込むのはどうかと思うが、そう思った小唄だが追求はせずに素直に感謝することにした。

「そ、そうなんだ。ありがとう、ヴェル」

「私が好きでやったことよ。それで、どんな夢を見たのかしら？」

小唄は夢で見た場面の欠片^{ピース}を集め、思い出しながら話を始める。

「僕が見た夢は二つ。一つ目は白い教室みたいな場所で僕より少し上の女の子が小学生くらいの女の子達に授業していて、その授業の内容が時計の歯車をかみ合わせて動かすというものだったんだ」

「歯車、ね」

「うん、それで僕はその夢の中で歯車になってたんだ。僕は形の合う歯車だったみたいで、はめ込まれたら時計が動き出したよ」

「面白い話ね。他に何か変わったことは？」

「変わったこと……そういえば、先生って呼ばれてたその子が僕を持ち上げたときに顔が見えたんだ。金髪と銀髪が混じり合ったような不思議な髪色で、目の色も光の差し加減で色々な色に変わる不思議な目だった。あと……授業を受けていた女の子の中にヴェルやテイーカに似た子がいた気もする」

オリジン・アイ
「……原初の瞳」

「え？」

意味有りげな呟きに小唄が反応した。

「なんでもないわ。それで、もう一つの夢はどんなものだったのかしら？」

急かすように先を促され、小唄は気にしながらも話を続ける。

「……もう一つは、場所は分からないんだけど木造だったか煉瓦造りの部屋だった気がする。そこで、女の子が隅っこで震えてたんだ。でも、女の子の言葉は日本語じゃなかった。それで、その女の子は二体の人形を抱いていた気がする……。いや、抱いていた？」

「小唄？」

小さな変化を感じたヴェルローズが軽く肩を揺する。何か良くないものでも感じたように、彼の体は小刻みに震えていた。

「そうだ、その女の子は二体の人形を抱いていたんだ。部屋の向こうから誰かの悲鳴や呻き声が聞こえてきて、でも……それも少ししたら聞こえなくなった。そしたら部屋に三人の男が入ってきて、あの子は泣き叫びながら男の為すがままにされて……！ 僕は、それを見ていることしか出来なかった……！ その全部を、床に投げ出された人形達が見ていた……っ！ あの夢は多分ヴェル達の――――」

「落ち着きなさい小唄!!」

「あっ……」

力強い一喝に、小唄は自分の心が急激に冷やされていくのを感じた。

「ご、ごめん……」

「可哀想に、夢の内容に中^あてられてしまったのね……顔色が悪いわ。水、持ってきてあげるから少し休んでなさい」

言いながら頭を優しく撫でるその手は、夢で荒みかけた小唄の心を癒していく。

「あ、ありがとう……ヴェル」

その言葉に従って、小唄は毛布を掛けなおして再び横になる。部屋を出る間際にヴェルローズは小唄を振り向き、彼が思わず声を詰まらす程に彼女らしからぬ顔で言った。

「……………小唄、貴方のそれは只の夢よ。早く忘れなさい」

ドアは静かに閉められた。

（ヴェルのあんな顔、初めて見た……）

普段から余裕綽々といった表情を決して崩さない彼女が初めて見せた、何かを思い詰めるような悲痛の表情――。

「やっぱり、あの夢は……」

あの子達に關係することなのだろう、そう思っ
てはいても今は静かに待つことしか出来なかった。

「……」

蛇口から注がれる水が、受け切れなくなったコップから次々と溢れていく。それに気づかないヴェルローズは先程よりは幾分和らいだとはいえ、未だ気難しい表情のまま深い思考の海に身を沈めていた。

（小唄の夢の話……共有が始まっているのは間違いないわね。いよいよ選択の時間が近づいてきた、ということか……選ばれれば、私という時計が正確に刻を刻み始める。選ばれなくても機会がなくなるわけではないけれど——私は、ここで退くわけにはいかない……！）

静かに瞼を開けた瞬間——

『ヴェル姉様？ お水溢れてるよー？』

「きゃっ!？」

突然横から聞こえてきた声に、ヴェルローズは慌てて横を見る。いつ頃からいたのだろうか、サファイエが心配そうな表情で彼女を見ていた。

「サファイ、驚かさないで頂戴……」

『ご、ごめんなさい……。でも、ヴェル姉様なにか難しいこと考えてみたいだったから……』

「いいのよ。そうね……貴女に隠しても仕方ないことよね」

普段は主人から離れて色々やっているが、サファイエの寢床は小唄の中。そのサファイエが先程の会話を聞いていないはずがなかった。

『あれ……どっちもヴェル姉様たちに関係する夢なんですよ？』
「……ええ。とても……大事な夢よ」

そう言つて、ヴェルローズは水の入ったコップを持って台所を出ていった。後に残されたサファイエが小さな眩きを零す。

『わたしにもっと力があつたら、ご主人さまやヴェル姉様をもっと助けてあげられるのに……』

数種類の魔術や念動力を使っても経験が圧倒的に足りないサファイエは、自分がまだ弱いことを自覚していた。

その眩きは、今は他の誰にも聞かれることなく静かに消えていった。

第七話『二つの夢』 Part. 2

「――確か、この辺だったわね。二人とも、どうかしら？」

ヴェルローズは後ろを振り向いて二人に聞いた。

その日の午後――ヴェルローズは小唄とサファイエを連れて件くだんの公園の近くを歩いていた。目的は言うまでもなく、先日から数回感じていた強い視線の正体を暴くためである。

それなりに日差しが照り付ける五月晴れの中、涼しい姿の三人はそれぞれ精神を集中させているようだった。サファイエの姿は本人が意識しない限り、小唄や関わりのある死舞人形達以外には見えない。よって、実際に見えるのは二人だけだ。

「うーん、僕のほうは駄目だね。ティーカとリリムの気配は分かっただけど、ヴェルの言う――強い気配はちょっと分かんないや」

『わたしもー。探査魔術で探ってみたけど、それらしいのは引っかけなかったよー』

小唄にイメージして作ってもらった新緑のワンピースを風ではためかせながらサファイエが言う。

「そう……」

（小唄でも感知出来ないなら、少なくとも相手は死舞人形ではないわ。となると、コワレカルナティックか。コワレでは、あそこまで強い気配は出せない……ルナティック以外には考えられないわね）

相手をルナティックと仮定したヴェルローズの額から汗が一つ零れ落ちる。

死舞人形とルナティック。総合的に見れば圧倒的に死舞人形のほうが上だが、ある一点においてはルナティックのほうが上だからだ。それは、純粹な力の差である。ルナティックは、コワレが自我を持った存在――故に一部を除いては手加減が一切利かない。自我を持っていたても狂気に侵されているから、常に最大の攻撃を繰り出せる。この一点からルナティックは、死舞人形から見ても厄介な存在なのだった。

『あ……』

思考の途中、サファイエが思い出したような声を上げた。

「どうしたの、サファイ？」

『これ、なんだろう？　なんかすごく弱い気配……』

「微弱？　方向は分かる？」

『ちよつとまってー』

言われて、サファイエは再び精神を集中させる。

『うーん、これは……ヴェル姉様達と同じ気配みたい。なんでこんなに弱いのか分からないけど……。方向は……あ、拡散しちゃった。ヴェル姉様、ごめんなさい……』

「いいのよ、貴女のせいじゃないわ」

俯くサファイエの頭を優しく撫でるヴェルローズ。撫でられたサファイエは再び笑顔を見せ始めた。

「ヴェル、僕達が知っている死舞人形でまだ出会ってないのって……」

「……ええ、考えたくないけど恐らくアルトね。あの子、一体何をやってるのかしら」

「どうする、ヴェル？」

小唄の視線を受けて、ヴェルローズは少し思考する。

（私でも感知できないほど微弱ということは、どう考えてもまともな状態じゃないわね。今すぐ会いに行きたいけれど、場所が分からない以上……闇雲に動くのはあまり良くないわ）

「とりあえず、ティーカのお店に行ってみましょう。何か知っているかもしれないわ」

「分かった、それじゃあ行こう」

『はい！』

三人は途中のコンビニで軽い食べ物を買って、ティーカの店へと向かった。二人とも道は覚えているので世間話をしながらでも、すぐに店の前まで辿り着いた。

「こんにちは」

ドアベルが鳴り、ティーカの目に見知った少女と少年の顔が映る。

「いらっしやーい！ あ、ヴェルとコウタだ！」

「あら、ヴェルローズさん。お久しぶりですね」

テーブルのほうから知った声が聞こえてきたので、ヴェルローズが視線をそちらに向けるとリリムが笑顔で手を振っていた。今日はいつぞやのゴシッククロリータ・ナーススタイルではなく、清楚という言葉がそのまま当てはまるような服装をしていた。

「お邪魔するわ、ティーカ。リリムも久しぶりね。今は休憩の時間かしら？」

「今日予約のお客様が少なかったので、午前中に終わってしまったのですよ。それで、そちらがティーカの言っていた……？」

リリムの視線が小唄に向けられる。

「うんっ！ この子がコウタだよっ！！」

「そうでしたの。うふふ、初めまして小唄君。私はリリムと申します。ヴェルローズさんやティーカと同じ死舞人形です。といっても、小唄君はもうご存知だと思いますけど」

「う、うん。織部小唄です。よろしく」

「うふふ、小唄君は噂通りの可愛らしさですね」

そう言って、リリムは怪しげに微笑む。一方の小唄は、いつか感じたことがある視線に軽く身震いする。

（この人の視線、どこかヴェルに似てるなあ。実は似たもの同士なのかも？ うう……）

「ヴェルもコウタも座って座って！ 今お茶持ってくるからーっ」

ティーカに促されて二人は席に着いた。暫くして小唄は、微笑みながらリリムが自分のある一点を見ていることに気づく。

「な、何かな？ リリムさん……」

「いいえ。肩に可愛らしい女の子を乗せていると思ひまして」

「――！？ リリムさんにはこの子が見えるんですか？」

何気ない言葉に小唄は驚きを隠せない。サファイエは存在を極限にまで薄くしており、今は小唄とヴェルローズ以外には見えないはずだからだ。

「小唄君。私に敬語は必要ありませんし、呼び捨てで良いですよ。そういえば、まだ私の想造能力を教えていませんでしたね」

リリムは、微笑みを崩さないまま言葉が続ける。

「私の能力はヴェルローズさんやティーカのように、実際に形にするようなものではありません。^{リペアー}“修復”と^{アナライズ}“探査”、“修復”はそのままの意味で、想造の力で破損箇所や傷を修復するものです。“探査”は私の想造の力を集中もしくは範囲放射させることで、個人また範囲の事象を調べることが出来ます」

『あー、それでわたしが覚えてたんだねー』

これ以上姿を隠すのは意味がないと判断したサファイエは、その存在を他の死舞人形達には見えるくらいまで濃くする。

「あら、この子は人形の魂を守護精霊みたいな存在にしたものなのですね。なるほど……小唄君の娘さんですね。くすくす……」

「ええっ！？」

「下らない挑発に乗らないの……。悪いのだけど、茶飲み話をしにきたわけじゃないのよ」

「あら、残念ですわ」

「……」

強い意志が籠^{こも}ったヴェルローズの瞳の光を確認したりリリムはゆっくりと佇まいを直し、改めて彼女と向き合う。

「本当に真面目な話のようですね。ティーカが戻ってきてから聞きましようか」

「聡明なお姉様で助かるわ」

暫くして、戻ってきたティーカも交えてヴェルローズは話を切り出した。

「二人とも、最近感じるようになった強い視線について何か知っているかしら？」

「視線って、前に駅前を通った時感じたって言ってた奴？」

小唄がいる前で詳しいことを言うわけにはいかず、ティーカは地名を避けて聞き返した。

「ええ、その視線よ。何か、他に感じたことはない？」

「うーん、ボクは何も感じてないなあ……。リリムはー？」

「残念ですけど……私もそのような視線は感じたことないですね」

二人の返答から、ヴェルローズは一つの結論を導き出す。

（どうやら、これは私のみに向けられているようね。私に何か用事でもあるのかしら……）

「じゃあ、次ね。先程この子が探査魔術で微弱な死舞人形の気配を感知したのだけど、ティーカとリリムは何か感知してない？」

「うーん、ボクはそういうの疎いからなあ。リリムのほうが詳しい

と思うよ」

言いながらティーカはお茶請けのスクーンに手を伸ばす。全員の視線が紅茶を飲むリリムのほうへと向けられる。動じない様子でのリリムはティーカップを静かに置き、口を開いた。

「微弱な気配、ですか。それについては、私も数日前から感じておりました。ただ……あまりにも弱すぎて特定は困難です」

「場所は分かる？」

「範囲放射させると私の力はかなり弱くなってしまうので、その死舞人形の気配も微弱すぎて……場所の特定は不可能ですね。ヴェルローズさんは、この気配に何か心当たりでもあるのですか？」

「ええ……。この気配は恐らく私の妹。何故、こんなに弱っているのかは分からないけどね……」

「えええっ!!」

素直に驚きを表したティーカに対して、リリムは眉根を寄せる。

「もしそうだとしたら、良くないですね……。これだけ微弱ということは身体の自動回復機能も停止しているでしょう。なるべく早めに助けてあげないと、死舞人形といえど取り返しの付かないことになりかねません。助けたら、すぐ私のところに連れてきてくださいね」

「ええ、そのつもりよ。お茶ご馳走様。行くわよ、小唄」

「うん、分かったよ」

「えー？ もう帰っちゃうのー？」

店を出ようとする小唄達に不満の声を上げたティーカが、三人を引き止めようとする。

「これから、もう少し探してみるわ。落ち着いたら、遊びに来るわね」

「むー、分かったよ。また来てねーっ」

元氣よく手を振るティーカとは正反対に、リリムは冷静に忠告する。

「最後に一つ。ここ三日くらい前から、コワレの姿を全くと言っていいくらい見なくなりました。これが何を意味するかは分かりませんが、何かの前触れかもしれません。お気をつけて……」

それは、ヴェルローズも感じていたことだった。夜に外出してもコワレに遭遇しない——それは一人の時でも小唄と一緒にの時でも同じで織部小唄という救いの存在がいるのに、と彼女もまた奇妙に思っていたのだ。

気づけば、西の空が茜色に染まろうとしていた。三人がティーカとリリムに見送られながら店の外に出た、その瞬間だった——。

『——フッフ』

「——！？ 誰！？」

「ヴェル？ いきなり大声上げて、どうしたの？」

突然聞こえてきた声に、ヴェルローズは辺りを見回して発信源を探る。サファイエの会話法に似ているがサファイエではない。それより遥かに禍々しい声。

(これは……あの時の視線!!)

ヴェルローズの頭の中に再び、声が響く。

『——もう少し探してもらうつもりだったのだけど、いい加減飽きてきたからこちらから出向いてきてやることにしたわ。精々感謝することね』

(これは、視線に霊力が魔力を乗せて話してきている……？ 小唄達には聞こえないようね)

その証拠に、小唄もサファイエもヴェルローズの様子に首を傾げている。二人の会話が聞こえているようには見えなかった。

『——一応自己紹介しておこうかしら。アタシはベリティエ。“翠の毒牙”とも呼ばれているわ』

(っ!!) ルナティックはルナティックでも“墮落”した奴か。これは……かなり厄介ね)

『——もう分かっていると思うけど、アンタの妹さんはアタシの手にあるわ。取り返したいのなら、明日の二十時に街外れの廃ビルの四階まで来なさい』

『随分と余裕ね。何か理由があって妹を攫ったんじゃないのかしら？』

ヴェルローズは今にも激昂しそうになる感情を抑えつつ、霊力に言葉を乗せて聞き返す。

『――別に。ただ、飽きただけよ。だって――壊れたオモチャ相手じゃ愉しめないじゃない?』

『……なんですって?』

彼女の頭の中で、何かが切れた音がした。

『――アタシはイキのいい獲物が好きなのよ。コイツもう何をしても反応してくれないし、死んだ魚を鰯^{なぶ}つても面白みも何もありやしないでしょ? それと同じことよ。別にフライングや遅刻は構わないけど、明日中にアンタが来なかったらコイツは殺すわ』

『そう、分かったわ。お前はこれ以上ないくらい惨^{むご}たらしく殺してやる。首を洗って待っている……っ!』

ここに来てからは一度も出してない“本質”を視線に乗せ、相手に叩き込む。並の者なら、それだけで狂気に陥ってしまう程の強力なモノを。

それを身体から滲ませる彼女は、憎悪の化身と言っても良い程の黒い気を辺りに放出していた。

『へえ、これがアンタの“本質”ってヤツね。中々心地良いわあ。

ああ、そういえばアタシの“声”は毒を持っているわ。その二人は危ないかもしれないわね。アハハハッ!!』

『なんですって!?!』

狂ったような笑いを最後に、ベリティエからの視線念話は一方的に切られた。ヴェルローズが慌てて小唄とサファイエの側に駆け寄る。二人とも、頭を押さえながら苦しそうな声を上げている。辺りを見回せば、関係のない一般人までが頭痛や吐き気を訴えていた。

「小唄! サファイ! 大丈夫かしら!?!」

「う……頭痛い……」

『わたしもー、これなんなのおー？』

「すぐにここを離れるわよ！！」

小唄に肩を貸しながら急ぐヴェルローズ。しかし、付いてくるはずの気配が一つ足りない。振り向けば、サファイエがヴェルローズを凝視したまま呆然としている。

「どうしたの、サファイ？」

『ヴェル姉様だよね……なんだか、雰囲気が違う……よ？』

怖いものでも見ているかのように怯えるサファイエ。ヴェルローズは怒気を放出させっぱなしだったことに気づき、急いで“本質”を遮断した。

「ごめんなさいね。これでいいかしら？」

『あ、いつものヴェル姉様だー！』

「さあ、ここに留まるのは良くないわ。早く離れましょう」

先の出来事のせいか、禍々しく見える夕日に見送られながら三人は毒の空間から離れる。途中でヴェルローズはベリティエがいる廃ビルの方向を向き、二人に聞こえないように強い言葉を吐いた。

「“翠の毒牙”ベリティエ……お前は、私が必ず殺すわ……」

瞬間——風に乗って、翠の女の笑い声が聞こえた気がした——。

第七話『二つの夢』 Part. 2 (後書き)

少々核心に触れるお話。ここから物語が動き始めます。

第八話『憎悪と狂気』 Part. 1

「——くっ！ このっ！！」

両手に想造した拳銃を操り、左右から襲い来る緑色の物体に銃弾を浴びせかける。通常弾ならば何ら影響なく受け入れてしまうのだろうか、彼女の拳銃に込められているのは霊力の弾丸。その銃弾を浴びた物体から順に溶けていく。

「どうやら、何らかの方法で作られた粘着生物スライムのようね。味な真似してくれるじゃない——！？」

息を吐こうとした直後に背後からの気配。ヴェルローズは即座に反応し、振り向くと同時にバックステップでかわして一発ずつ銃弾を打ち込む。銃弾を撃ち込まれた緑色の粘着生物は跡形もなく溶け消えたが、背中の違和感が残ったまま消えない。手を回して確かめると、粘着生物に触れられた部分が少し腐食していた。

「さしずめ、毒から作られたスライムってところかしら」

ヴェルローズはすぐ霊力を操作し、腐食した生地を修復する。

（ベリティエの能力は恐らく“毒物想造”ね。まあ、すんなり通してくれるとは思ってなかったけれど。中々手厚い歓迎をしてくれること……）

拳銃をチェックしながら、彼女は先を急ぐ。

予定時間より一時間程早く着いたヴェルローズは廃ビルの中に入った途端、四体の粘着生物に襲われた。入る前から準備をしていたので冷静に対処出来たが、粘着生物はその後もしつよう襲撃を繰り返してきた。

これまでに倒した数は既に二十を超えている。この後、ベリティエとの対決を控えているヴェルローズにとって霊力の消費は頭の痛^ずい問題だった。

それ以上に重要な問題もあった。言うまでもなく、彼女の妹であるアルトリリイのことだ。ここまで近づけばアルトリリイの様子が分からないはずもない。その状態が非常に危険であることがヴェルローズに焦りを与えていた。

ヴェルローズは辺りを警戒しながら歩く。人間には暗すぎる場所だが死舞人形の視力は人間より遥かに良く、戦い慣れしている者であれば夜目も利く。彼女にとって、この程度の暗闇は昼間と大して変わらない。

「……」

やがて、視線の先に階段が見えてきたが手前の通路を塞ぐように十数体の粘着生物が蠢いているのが見える。既にヴェルローズを認識しているはずの距離だが、襲い掛かってくる気配はない。が、退く気配もなかった。

（ただの邪魔物のようね。これだけ数が多いと弾の再装填^{リロード}にそれなりの霊力を裂くことになるわ……消費は大きいけれど、ここは――）

一体ずつ倒すよりは、一気に倒したほうが霊力の消費は少ない。いつもとは違う完全な正装だが、貯蓄している霊力も魔力も無限ではない、結論したヴェルローズはすぐさま銃を構え、銃内部に注入した霊力が十分に増幅されるのを待つ。銃口から光が溢れ出しそう

になった瞬間、彼女は引き金を引いた。

（――左からっ！）

銃から十分に増幅された霊力とともに撃ち出された徹甲弾が射線上にいた粘着生物を全て貫き、光条は長い廊下の向こうの床に突き刺さって消えた。

「次っ！！」

続けて右に、同じく一発。弾は射線上の粘着生物を全て貫き、周囲が再び静寂に包まれた時には緑色のモノは完全に消えていた。

弾倉を霊力弾のものに再装填しながら、ヴェルローズは軽く息を吐く。

（やっぱり、霊力の消費がきついわ……小唄達にも来てもらうべきだったかしら？ いえ、これは私が解決しなければいけないことね。ごめんなさい、サファイ……）

夕方のことを振り返りながら、ヴェルローズは二階への階段を上がっていった。

――刻は、その日の夕方に遡る。

ヴェルローズは自分の部屋のベッドの端に腰掛け、静かに瞼を閉じていた。彼女がこれからやらなければならないことはそれほど多くはないが、どれも重要なことばかりだった。故に、考えなければならないことは多かった。

(……どう考えても、今回ばかりは本気でいかないといけないわね。相手はルナティック……だけど“墮落”のルナティックは通常のそれじゃないわ)

ルナティックは“自我をもったコワレ”だが、ルナティックの誕生にはもう一つの稀少例^{レア・ケース}がある。それが“墮落”という現象だ。死舞人形が何らかの理由で狂い、死舞人形として主人の願望を叶えることが出来なくなってしまうことを“墮落”という。“墮落”した死舞人形は以降、ルナティックとして扱われる。簡単に言えば、死舞人形＋ルナティックということだ。

死舞人形としての能力とルナティックの狂気性。この二つが加算された純粋な破壊力は非常に高く、普通の死舞人形よりも強いことが多いことをヴェルローズは知っていた。

「そろそろ、準備しましょうか」

ヴェルローズは目を開いて、机の上に置いていたキャリア・ケースを両手で開ける。更に奥に収められた小箱を開け、中から左に赤薔薇、右に黒薔薇を飾り付けた、ヴェルローズのワンピースと同じ柄のヘッドドレス。同じく薔薇をあしらった一組のピアス。不可思議な銀細工のペンダントの三つを取り出した。

首にペンダントを掛け、両耳にピアスを装着する。暫く身に着けていなかったからか耳の穴に針を通す際に鈍痛を感じたが、気にせず強引に針を通す。

最後にヘッドドレスの紐を首元で結^ゆわい、ベッドから立ち上がって全身をチェックする。どこもおかしい箇所はない、と彼女は軽く霊力と魔力を操作する。久しぶりの完全正装だったが、異常がないどころかすこぶる調子が良いようだ。

「……」

（――私は負けない。そして、アルトを連れてまたここに戻ってくるわ）

部屋を出る時、ヴェルローズは一度だけ振り返って全体を見回した。少しでも寂しい表情を見せてドアを開ける。静かにドアが閉められた時、彼女の顔にもう迷いはなかった。

一階では、小唄とサフィがお笑い番組を見ていた。声を掛けようか掛けまいか迷っているヴェルローズに、小唄のほうから声を掛ける。

「あれ？　ヴェル、どこか行くの？」

先に声を掛けられて少し動揺したヴェルローズだが、悟られまいと努めていつもの表情を保ちながら返す。

「え、ええ。ちょっと呼ばれたから行ってくるわ」

「呼ばれたって？　ティーカかな？」

「そうね。遅くなるから今日の夕ご飯はいらないわ」

「うーん……。分かった、いってらっしゃいー」

どこか不審な様子なヴェルローズに小唄は内心で首を傾げる。しかしあまり詮索するのもよくないと思い、深くは聞かないことにした。

（ヴェルにもヴェルの事情があるんだしね。触れて欲しくないことだってあるよね）

「ええ、行ってくるわ」

靴を履いて、ヴェルローズは玄関のドアを開ける。

“実年齢以上に賢く聡い”という小唄の利点は、今はマイナスでしかなかった。彼はそこまで気にしてなかったが、サファイエはそうではなかったのだ。

「あはは、この芸人さん面白いねー。ねえ、サファイーあれ、サファイ？」

小唄の隣にいたはずのサファイエは、いつの間にか消えていた。

『……』

ヴェルローズが外に出た途端、目に飛び込んできたものは進路を塞ぐように浮いているサファイエの姿だった。いつもの陽気な少女ではなく、存在感のある気配を醸し出^{かも}していた。

「……何の真似かしら？」

『ヴェル姉様、どこ行くの？』

サファイエは、感情を押し殺すような声でヴェルローズに聞いた。

「さっきも言ったでしょう？ ティーカに呼ばれたのよ」

『それ、嘘だよね？』

「……っ」

何の躊躇いもなく、嘘と言い切るサファイエ。ヴェルローズは苛立ちを覚えながらも、平静を保ちながら言葉を返す。

「私が嘘を吐いているとでも？」

『ヴェル姉様。あまり、わたしを甘く見ないで。確かにわたしは力も弱いし使える魔術も限られているけど、他の人の心情については別。わたし、これでも一応超能力者だからね。今、ヴェル姉様の心の中に見えるのは、あせりと、何者かへの怒りと……大事な人への想い……。違う？』

心情共感——感受性が強いサファイエが持っている超能力の一つで、感受性が強ければ強いほど能力の質も上がる。その効果は、相手の心情を読み取ることである。

「なるほど。……どうして、私の周りには鋭い人が多いのかしらね？
それで、貴女はどうするつもりかしら？」

——たとえ相手が親しい者でも邪魔はさせない。
ヴェルローズは、いつでも対応出来るようにしながら鋭い眼光とともに言った。

『別にどうするつもりもないよ。でも、一つだけ聞かせて？
どうして、一人で行こうとするの？』

毅然としたサファイエの表情に悲しみが浮かぶ。その表情にヴェルローズの心は些少揺れたが、ここで引き返すわけにはいかなかった。

「これは、私の問題よ。小唄や貴女は巻き込めないわ」
『……』

サファイエは無言のまま俯き、ヴェルローズはその横を静かに通り過ぎる。が、サファイエに背を向けて歩き始めた瞬間——背中に

冷たいものが迫るのを感じたヴェルローズは、咄嗟に横へと身を逸らした。

視線の先を、幾つかの氷の弾が通り過ぎていった――。

「……何のつもり？」

不意打ちされて黙っていられる程、温厚な性格ではない彼女は怒気を孕^{はら}んだ目でサファイエを振り返る。

『――悪いけど、その程度の覚悟のヴェル姉様を……行かせるわけにはいかない!!』

同時にサファイエの周りに風が吹き荒れる。普通の風ではない、魔力の放出によって吹き出された風だ。

「そう……いいでしょう。この“闇の薔薇”ヴェルローズが貴女の姉として、貴女の成長ぶりを確かめてあげるわ」

ヴェルローズとサファイエが対峙する、約二十メートル四方が異質な空間で覆われ始める。この、死舞人形特有の結界の中では何をしようとも現世には一切影響しない。

「さあ、来なさいな！」

『言われなくても――“火の飛礫”!!』

先に動いたのはサファイエだった。魔力で形成された幾つかの火の小玉がヴェルローズに襲い掛かる。彼女は避ける動作すらせず、火の小玉は全て直撃した。

すぐに状態が露わになる。ヴェルローズの体はおろか、服に焦げ目一つすら付いていなかった。

「私の属性は火と闇よ。その程度の火では私の服に綻び一つ付けることすら出来ないわ。もっと良く“精霊属性相関”を学びなさい」

と、ヴェルローズは教え子に諭すように言った。一方のサファイエは既に次の行動に掛かっていた。

『次はこれっ！ “氷の細槍” ！！』

今度は火ではなく、細く鋭い氷の槍がサファイエの手から撃ち出された。だが、ヴェルローズが少し火の魔力を身に纏っただけで全て溶かされてしまう。またしてもサファイエの攻撃は、彼女には届かなかった。

『くっ……！！』

「甘いわね。基本的に氷は火に溶かされる。火は氷の天敵よ。良く覚えておきなさい」

再び教え子に諭すヴェルローズ。この戦い、彼女は本気を出す気など毛頭なかった。彼女にとってこの戦いは“戦闘”ではなく“教育”そのものだからだ。

（火も氷もダメ……地はもっとダメ、素早いヴェル姉様には当たらない。それなら……これっ！）

『——“雷の投槍” っ！！』

雷の光を纏った槍が、人間には視覚出来ない速度でヴェルローズに襲い掛かる。雷属性の魔術は発動までの過程が非常に短く、隙が出にくい。サファイエの取った行動は正解ではあるが、ヴェルロー

ズは発動直前には既に行動を起こしていた。結果、身を逸らした彼女のすぐ横を雷の槍が空しく通り過ぎていった。

『そんなっ！ どうして!?!』

「雷属性のを使うまではよかったわ。けれど、発動の直前に溜めを作ったわね？ 雷属性の魔術は全てイメージ喚起で詠唱とするのが上策よ。良く覚えておきなさい」

『……っ!』

「筋はいいけれど、まだまだね。心配しなくても私はちゃんと帰ってくるわ。大人しく待ってて頂戴な」

これで終わり、と言わんばかりにヴェルローズはサファイエに背を向けて歩き出す。だが、サファイエは己の未熟さに打ちひしがれながらも未だ諦めてはいなかった。

『さ、サイコネシブル・バインドっ!!』

「——なっ!?!」

サファイエの渾身の一撃はヴェルローズの体を見えない縄のようなもので束縛し、行動を不可能にした。予想出来なかったのか、ヴェルローズは少し驚いたような表情をサファイエに見せる。

『や、やったの……!?!』

「……なるほど、超能力による束縛術ね。悪くないわ……けれど、順番が逆だったわね」

『え?』

少し呼吸を整えて、ヴェルローズは体からオーラののようなものを立ち昇らせる。彼女を束縛していた超能力の縄に輝^{ひび}が入り始め、ガラスが割れたような音を立てて瞬く間に消滅した。

『くっ!! まだだよ——』

サファイエは更なる行動に移ろうとしたが——

『——え?』

何か硬いものが掠っていった気がして、サファイエは思わず頬に手を当てる。一般的な生物ではないので血こそ流れてなかったが、そこには一筋の傷があった。一体何が、とサファイエは顔を上げてヴェルローズを見る。彼女の右手には黒光りする拳銃が握られていた。

『ひっ!?!』

「悪いけど、もう時間がないのよ。これ以上邪魔するなら——言わなくても分かるわね?」

普段は見せない鋭い眼でヴェルローズはサファイエを見る。それを真正面から受け止めさせられたサファイエの顔は恐怖、畏怖といった感情に彩られる。

サファイエは理解した。自分ではもう止めることは出来ないのだ、ということ。故に彼女は最後に一つだけ聞いた。

『絶対……絶対戻ってくるよね?』

「ええ、もちろん。だから、安心して待ってなさい」
『分かった……絶対だからね!?!』

力強く頷いたヴェルローズが踵を返して歩き出す。そんな彼女の背中をサファイエは涙を堪えながら見送る。

やがて、ヴェルローズの姿が完全に見えなくなってからサファイ

エは家の中に入った。

小唄はサファイエの表情の変化に気づいていたが、その時は何も言わなかった。時間が経つにつれて彼もまたヴェルローズの行動に再び疑問を持ち始めたが、今から追いかけることは出来ない。

小唄は、どうすればいいのか考えあぐねるばかりだった。

第八話『憎悪と狂気』 Part. 2

——そして、現在。

「この上にアルトとあいつがいるのね……」

数々の敵を撃ち抜き、ヴェルローズは三階にまで上ってきていた。ここに来るまでに撃った敵の数は数え切れない。魔力も霊力も相当に消耗している。これ以上の浪費は何としても避けたいところだが、そんな彼女を嘲笑うかのように今までの比ではない合成生物が立ちはだかった。

それは、巨大な恐竜のようなものだった。体中から緑色の液体を滴らせていることを除けば、トリケラトプスに似ているかもしれない。それが、ヴェルローズの姿を見て咆哮を上げる。

「ガアアアアア!!」

「無茶苦茶だわ。もう何でもありね……」

既に戦闘態勢に入っている恐竜とは対照的に、ヴェルローズは嘆息する。

（これ以上無駄に力を使うわけにもいかない……一撃で決めるしかないわね）

自分の霊力・魔力残量を即座に計算し終えたヴェルローズは、即座に行動に移った。魔力を引き出し、両手に集中させる。それに気

づいた緑の怪物が猛毒のブレスを吐き出した。

「はっ！！」

ヴェルローズはそれを難なくかわし、引き出された魔力が十分に満ちる。赤く光り輝く両手を地面に着き、彼女は術を発動させた。

「――“煉獄の炎柱群”！！」

叫ぶと同時に地面が鳴動する。程なくして緑の怪物の足元が赤く染まり、幾本もの炎柱が顔を覗かせた。怪物がそれに気づいた時には赤と黒が混じり合った魔の炎が怪物の体を貫通し、次々とその体を燃やしていった。

――一分後。そこには蒸発し切れなかった緑の液体が些少残されているだけで、怪物の姿はどこにもなかった。

「はぁ、はぁ……っ」

だが、それを放ったヴェルローズもまた無傷というわけにはいかなかった。“煉獄の炎柱群”は現在の彼女が出せる、最大威力の術といってもいい。魔力は貯蓄分を引き出せばそれで済むが、本人はそうはいかない。術を行使するための精神力は、術者本人が消費しなければならないからだ。

（魔力、霊力共に五割。まだやれるわ！）

気合を入れるように拳を握り締め、ヴェルローズは踏みしめるように階段を登り始める。

（アルト……もう少しの辛抱よ）

「……」

ヴェルローズが四階への階段を登り切ると同時に広い空間が彼女を出迎えた。元は何かの催事場であつたのだろうか、ただ広い空間に剥き出しの鉄骨の柱が幾本かあるだけで他には何もない。

否——ヴェルローズの赤い瞳は、この暗闇の中でもそれを認識していた。薄い緑のドレスに薄い緑の長髪、その近くで力なく項垂れうなだている者の姿も。

（落ち着け私……今はまだ早い……）

「お前がベリティエか？」

ヴェルローズは感情を抑えながら、しかし強い口調で闇の先に向かって言った。

「そう。アタシが“翠の毒牙”ベリティエよ。よくここまで来れたわね、褒めてあげるわ」

「ふん、あんな雑魚で私を止められるとでも思ったのか？　まあ、いい。とりあえず私の妹は返してもらおうか」

ヴェルローズはベリティエの足元で、鉄柱に両手を拘束されている少女を見た。そして、それを見た途端——彼女の表情が瞬時に憤怒へと変わる。

「……その子に何をした」

表情とは正反対の、どこまでも感情を押し殺した声。ヴェルローズの紅い瞳は、ベリティエが手に握っている“鞭とは比べものにな

らない程の凶悪なモノ”を見ていた。それは、鉄鎖鞭の中に刃を仕込んだ“月桂樹”と呼ばれる代物だった。

「フフフ、さっきまでは良い声で鳴いてたんだけどね。今は気絶中よ。殺しちゃいけないから安心しなさい」

ヴェルローズを挑発するように、ベリティエはつま先で足元にいる者を揺り動かす。

「う、姉……様……」

「アルト！！ くっ、貴様あ！ そこから離れろ！！」

ヴェルローズは即座に拳銃を想造して発砲する。弾道は既に読まれていたのか、素早い身のこなしでベリティエは銃弾をかわした。

「まあ、怖い怖あい」

揶揄するように言うベリティエ。ヴェルローズはそれには耳を貸さず、アルトリリイの状態の把握に集中する。

（状態から見て、再生機能は完全に停止しているわね……。殆ど気力だけで持っている状態……時間は掛けられないわ！）

「さあ、そろそろ始めようか。貴様のドレスを朱に染めるにはいい夜だろう？」

「フフ、そうね。だけど、メインディッシュはまだ先よ。先にオードルを食べてもらわないと、ね！！」

不適に笑うベリティエの四方から、半透明の靈魂と思しきものが現れた。靈魂には黄、青、緑とそれぞれ違う色が着いている。それを見たヴェルローズは、最近コワレを見なくなった理由を理解した。

「なるほど、お前が街中のコワレを統率し始めたからか……」

「フフ、行きなさい——」

ベリティエの指示と共に四体のコワレが咆哮にも似た叫び声を上げ、ヴェルローズに殺到した。それをヴェルローズは軽快なステップでかわし、コワレを誘導するように広い場所へと移動する。

『ヒ……ヒヒ……』

当然コワレはヴェルローズを追ってくる。それが、このコワレ達の統率者であるベリティエの意思だからだ。コワレ達は基本的に格上には逆らえない、例え罠の中に突っ込むになろうとも——。両手を赤く輝かせ、ヴェルローズは懺悔するかのように呟く。

「ごめんなさい、今貴方達を救ってあげることが出来ない。ベリティエに操られてしまった自分達を恨みなさい……」

『フヒ……ヒ？』

「せめて苦しまないように、一瞬で焼く尽くしてあげる！ “煉獄の炎柱群”——」

紅く輝いた右手を地面に着けると同時に、地獄の罪人を焼く複数の炎の柱が四体のコワレを一瞬で焼き尽くした。叫び声を上げる間もなく、コワレ達は消滅する。後には灰すら残らなかった。

改めて、ヴェルローズとベリティエは向き合う。

「さて、これで前座はお終いか？ ならば、後は小細工抜きで全力

で死合おうじゃないか」

「フッフ、そうね。本番はこれからよ」

不敵に笑い、ベリティエは“月桂樹”を構える。

対するヴェルローズもまた不敵に——否、ベリティエ以上に凶悪な笑みを浮かべて口の端を歪ませる。

「くくく……誇っていいぞ。これを見せるのは妹以外では貴様が初めてだ」

「へえ？ 何を見せてくれるのかしら？」

「——憎悪の化身を、だ！」

「っ!？」

夥しい程の黒い気がヴェルローズに集まり、背中に集まってゆく。そして、集まりし気は収束し形を成す。黒き気が形成したのは赤と黒。今にも怨嗟の声を響かせるであろう——憎悪の両翼。

残された気が瘴気となり、ヴェルローズの周囲を渦巻く。今、本質を解放した憎悪の化身が圧倒的な気配を以ってベリティエの前に立った。

「ふうう、待たせたな。さあ、始めようか」

「ふ、フフ……中々面白い余興だったけど、その程度では私は驚かないわよ？」

言葉通り、ベリティエが驚いていたのは最初だけで、以降は平静を取り戻していた。

「くく、そんなことは如何でも良い。悪いが、“憎悪”を解放した私は一切の手加減が出来ん。だが、関係なからう？ 貴様は今日、この私——“闇の薔薇”ヴェルローズによって惨殺されるのだから

な」

「さて、そう簡単にはいかなくてよ？」

不敵に笑い、睨み合う。

ヴェルローズは柱に拘束されているアルトリイの様子を一度だけ見た。その表情は見えなかったが、ヴェルローズは安心させるかのように薄く微笑んだ。

（すぐに助け出してあげるわ。だから、少しの辛抱よ、アルト）

視線をアルトリイから外したヴェルローズは拳銃を構える。何時もの拳銃ではない。銃口から闇が凝縮された剣のようなものが生えている。“漆黒の銃剣”とでも言うべきものだ。

依然睨み合う二人。突如、外からサイレンが聞こえてきた。誰かが事故ったのだろうかそれは二人にとってどうでも良いことだ。ただ、それは戦闘の開始を告げる良い合図となった。

「おおおおおおっ！！」

「ハアアアアア！！」

一瞬で距離を零にし、“漆黒の銃剣”と“月桂樹”がぶつかり合い剣戟を響かせた。お互い一步も引かぬまま、銃剣と鞭による力比べが続く。柱の側で僅かに動いた気配に気づく余裕などあるはずもなかった。

「う……」

俯き、荒く息を吐きながらアルトリイは言葉にならない言葉を呟く。

（姉様……ベリティエと戦っては駄目……っ!!）

振り絞った気力も尽きてしまったのか気絶してしまったのか、心
の中の呟きを最後にアルトリイは動かなくなった。

双子故、ヴェルローズに余裕があればその忠告が聞こえたかもし
れない。だが、それがヴェルローズに届くことはなく、ここに“憎
悪”と“狂気”の死闘が始まった――。

第八話『憎悪と狂気』 Part. 2 (後書き)

月桂樹は実際の拷問具として使われたことはなく、威圧用だったと思います。がうる覚えなので突っ込み等のご遠慮願います。

今回はベリティエ前座戦をメインにお送りしましたが、ようやく死舞人形の謎の一つである『本質』を出すことが出来ました。

『本質』は死舞人形に様々な影響を与えます。プラス面だけではなくマイナス面も。

第九話『開幕』 Part. 1 (前書き)

この話には暴力的な表現や残酷な描写が含まれます。苦手な方はご注意ください。

第九話『開幕』 Part. 1

——運命が、時を詠み始める。

5——

「……？」

リリムは紅茶の入ったティーカップをソーサーに置き、窓に目を向けた。左隣りでテレビを見ていたティーカも釣られてそちらに目を向けたが、いつも通りの夜景が見えるだけで変わりはない。

「どしたの？ リリム」

「いえ……今何か感じなかった？」

「何か？ うーん……」

（そういえば、この子は少し鈍いのでしたね……）

「感じなかったのならいいの。あまり気にしないで」

首を傾げて考えるティーカを慌てて手で制するリリム。

「そう？ ならいいけど」

それで納得したのか、ティーカは再びテレビの画面に視線を戻し

た。リリムもまた、しかし視線は鋭いままティーカップを手に取り、そのまま紅茶を一口飲み、ティーカップに口を付けたまま瞼を閉じる。

（一瞬……本当に一瞬だけ感じられたあの気配には覚えがあります。ですが……ヴェルローズさんが普段から出している気配とは似ても似つきません。それほどまでに黒く邪悪で、凶暴な気配……）

リリムは静かに瞼を開け、ティーカを見る。

「――ティーカ。悪いのだけど小唄君の家に電話して、ヴェルローズさんがいるかどうか聞いてみてくれる？」

「ん？ いいけど、ヴェルに何か用事でもあるのー？」

「やっぱり、少し気になるの。私の思い過ごしならそれでいいのだけれど……」

「ん、分かったー」

ティーカは少しも疑うことなく携帯電話を取り出し、以前教えてもらった織部家の電話番号を呼び出した。数回の呼び出し音の後、相手が電話に出る。

「あ、もしもしコウタ？ うん、ティーカだよ。あのさ、今ヴェルいる？ ……え？ そんな約束してないし、ここにも来てないよ？ 家にいないの？ ……そっか、分かった。後でまた電話するねー」

通話を終えたティーカは、慌てたような表情でリリムに振り向いた。

「ヴェル……今、家にいないって。なんか、コウタの話だとボクたちと約束があるから店に向かったって言ってた。でも、リリムもそ

んな約束してないよね？」

「なんですって……っ！」

「ど、どしたの……？」

普段のリリムからは想像できない大声に、ティーカは僅かにたじろいだ。

（昨日の今日で小唄君やサフィちゃんを置いて出かけた。なら、その行き先は一つしかありません……っ！）

「昨日言っていた妹さんを一人で助けに行ったのね。なんて無茶を……」

「え、ヴェル一人で行っちゃったの！？ どうして……」

「恐らく、二人を巻き込みたくなかったのでしょうね。だけど……この場合は無謀すぎるわ」

「で、でもヴェルは強いし大丈夫だよねっ！？」

彼女の強さを目の当たりにしているティーカは笑顔で言う。だが、リリムの口から出た言葉はティーカの望むものではなかった。

「いいえ、あの子でも勝てないかもしれない」

リリムは静かに首を横に振り、言葉続ける。

「ここ最近コワレを全く見なかったことと、街に出てもそこまで強い気配を感じなかったこと。これは私の勘だけ……妹さんを監禁してる相手は多くのコワレを統率出来て尚且つ、ずっとそこに留まっただけの問題ないということになるわ」

「それって、まさか——」

「そう、あの子が相手するのは、“私達”にとって最悪の“型”か

もしれないってことよ……」

「――!!」

暫し、店内が沈黙に包まれる。

沈黙を破ったのはリリムの嘆息だった。

「――ふう。全く、ティーカ以上に世話が掛かる妹だこと……」

「リリム？」

その言葉と裏腹に、表情には楽しそうな笑みが浮かんでいたのをティーカは見た。それはティーカが彼女が困らせた時、怒らせた後にいつも見てきた“家族”を愛しむ笑みだった。

「ふふふ、まあ手の掛かる子ほど愛しいものですしね。ティーカ、もう一度小唄君に電話掛けてくれる？ 呼び出し音が鳴ったら私に代わって頂戴」

「うん、いいよー」

ティーカが再び携帯電話を操作する隣でリリムは静かに目を閉じ、心の中で言葉を紡ぐ。

再び瞼を開いたリリムは言葉を視線に乗せるかのように、“妹”の気配がした方角を見つめた。

『――小唄君や皆が、貴女が無事で帰ってくるのを待っています。あまり無理はしないで……』

「……ん？」

誰かの声を聞いたような気がしたヴェルローズは、戦闘中にも関わらずその場に立ち止まって辺りを見渡した。当然、それを見逃さなかったベリティエは距離を詰め――

「戦いの最中に余所見とは余裕ねっ!!」

間合いから月桂樹を振り下ろす。当れば致命傷だが、ヴェルローズは深い笑みを浮かべながら、

「ふ、そういう台詞は――」

左にステップして月桂樹を、続けて足元に放たれた緑色の物体も難なくかわした。緑色の物体に触れたコンクリートが僅かに溶解していたが、そんな些細なことで驚くようなヴェルローズではない。

「――私に一撃当ててから言うんだな」

「はあはあ……中々やるじゃない」

ベリティエは、肩で大きく息をしながら月桂樹を構え直す。一方のヴェルローズは、息を切らすこともなく悠然としている。二人が死闘を始めてから、一時間が経過しようとしていた。

戦闘は最初からヴェルローズの優位だった。どの距離であってもベリティエの攻撃は全てかわされ、逆にヴェルローズの攻撃はベリティエの服を裂き、いくつかの傷をも負わせていた。

「ふん。貴様の能力は予想通りの“毒物想造”だな。厄介で危険極まりない能力だが、持ち主が未熟では能力が衰れと云うものだな」

「言ってくれるじゃない。今までののは、ほんのウォーミングアップよ。ここから本番よ。アタシの本気を見て恐怖しなさいな」

「精々吠えてろ。最後は、私の“憎悪”に引き裂かれる運命以外にないのだから」

「フ……御免被るわ——ねっ!!」

急接近するベリティエを、ヴェルローズは真正面から迎え撃つ。

月桂樹と黒き銃剣がせめぎ合い、火花を散らせる。二人はそのまま数合打ち合い、得物同士が再び拮抗する。

その中で、ベリティエの笑みがじょじょに深まっていくのをヴェルローズは見えていなかった。“憎悪”の開放によって直情的に、今の彼女は“獣”と大差ない状態だった。よって、いつもの注意深さは完全に欠落していた。

より注意深く観察していれば理解出来たはずだ。ベリティエの固有能力は“毒物の想造”、ただそれだけなのだ。ならば、あの粘着生物達は何処から来たのか——。

それを知るのは、ベリティエ本人ともう一人——

「はあはあ……姉……様……っ!!　ごほっ!　げほっ——!!」

彼女は先程から“それ”を姉に伝えようとしていた。急激に訪れる激痛に気を失いそうになりながら、それでも姉に伝えようとしていた。

アルトリリイの喉は酷い火傷でも負ったかのように焼け爛れて^{ただ}いた。その上には幾筋もの裂傷。明らかに、喉に劇薬か何かを塗られた上に刃で傷つけられた痕^{あと}だった。

それでもアルトリリイは、喉を震わせる度に走る激痛を無理矢理無視して言葉を伝えようとしていた。しかし、伝えるべき言葉は喉に引っ掛かって口まで届かない。そのうちに更なる激痛が彼女を苛^{さいな}ませる。

「はあっはあっ……ぐっ!!」

耐え難い激痛にアルトリリイの意識は朦朧しかけていたが、彼女の蒼い瞳はしっかりと二人の戦いを見つめていた。

そして声に出来ないのなら、と心の中で叫ぶ。

(ダメ……姉様……。ベリティエの恐ろしさは能力じゃない……。お願い……。気づいて——っ!!)

その“声”が姉に届くように——。

3——

——時間は、月下の死闘から少し遡る。

「……」

『……』

ヴェルローズが出掛けた後、小唄とサファイエは黙々とバラエティ番組を見ていた。時折、テレビの内容について軽い会話を交わす他に会話は無い。

ここに勘の鋭い者がいたならばこう思うだろう。お互い話を切り出すタイミングを見計らっている、と。

事実、小唄はいつ話を切り出そうか迷っていた。サファイエも小唄と同じく、ヴェルローズとの一戦で聞いた話をどう話そうか悩んでいた。

——その均衡を破ったのは一本の電話だった。数回鳴らさせて悪

戯電話の類ではないと思い、小唄は急いで受話器を取る。

「はい、織部ですが。あ、ティーカ？」

電話の相手はティーカだった。今は午後八時を少し回ったところ――夕飯時とはつくに過ぎてしまったので時間的な問題はない。話しながら小唄は、ティーカの声がいつもの陽気を帯びたものではないことに気づいた。

『うん、ティーカだよ。あのさ、今ヴェルいる？』

「ん、ヴェルならティーカと約束があるって店に向かったよ。まだ、着いてないの？」

この瞬間まで小唄はヴェルローズの不審な行動を気にしてはいたが、ティーカとの約束があることを信じていた。故にティーカからの返事もそれに相応しいものだと思っていた。

しかし、ティーカから返ってきた言葉は小唄の予想とは異なるものだった。

『……え？ そんな約束してないし、ここにも来てないよ？』

「なんだって……！？」

突然大声を上げた小唄にサファイエは驚き、彼の顔を見上げる。

（ご主人さま……？）

『家にいないの？』

「うん。夕方くらいに出ていったんだ。一体どこにいったんだ……」

『……そっか、分かった。後でまた電話するねー』

「うん、こっちでも調べてみるよ。また後でね」

小唄は静かに受話器を置いた。その横で、サファイエは心配そうな表情で小唄を見ていた。

『ご主人さま。今の電話……』

「うん……ティーカは約束なんかしてないって。一体どこにいったんだろう……」

『……』

サファイエは決心する。もう、迷っている時間はない――。

『ご主人さま……』

「ん、なに？」

『実は、わたしさっきヴェル姉様の足止めをしようとしたの。結局無理だったけど……』

「え!?! でも、そんな気配は全然――」

『多分、ヴェル姉様はご主人さまに知られたくなくて強い結界にしたらんだと思う。そうしなきゃ、ご主人さまに感づかれてしまうから』

サファイエの予想通り、ヴェルローズは霊力の五パーセントを結界に充てていた。彼女の霊力の五パーセントも消費して結界を展開されれば、それを感知するのは小唄でも難しいことだった。このため、小唄はヴェルローズとサファイエの一戦があつたのを知らなかったのだ。

「そうか……それで、ヴェルはどこにいったの？」

小唄は、じっとサファイエを見る。少し目を逸らして考えたサファイエは、すぐに視線を戻して答えた。

『ヴェル姉様は、大事な人——多分、妹さんを助けにいったんだと思う。でも……やっぱり、相手の素性も分からないのにひとりでなんて無茶だよ。だから、ご主人さま……助けに行こ？』

「……分かった。だけど、どこにいったのかが分からないと……。闇雲には動けないよ」

『それは……—』

二人が考え込み始めた時に再び電話が鳴る。小唄はティーカが再び掛けてきたのかと思って受話器を手取るが、

「はい、織部ですが——あれ？ その声は……リリムさん？」

相手はティーカではなくリリムだった。

『はい、リリムです。少し小唄君に話があるのでですけど、今いいですか？』

小唄はサファイエを見る。“それ”に気づいたサファイエが頷き返す。今は、リリムの話を聞くことが肝要だということを二人は熟知していた。

「はい、大丈夫です」

『ありがとうございます。それでは、今から聞くことに対して包み隠さず話してください。とても重要なことです』

第九話『開幕』 Part. 2

「分かりました。何ですか？」

『最近、何か変わった夢とか見ませんでしたか？ 例えば……歯車が出てくる夢とか』

「――！！ どうしてそのことを……？」

受話器の向こうから一つ、息を吐く音が聞こえた。

『その反応だと見たことがあるのですね？ でしたら、ヴェルローズさんの居場所が分かるかもしれません』

「え！ 本当に！？」

『ええ、その夢は兆候なのです。小唄君……貴方はヴェルローズさんの主人になる資格があります。近いうちにヴェルローズさんからも話があるでしょう。その上で訊きます。小唄君、ヴェルローズさんを助けたいですか？』

サファイエが見守る中、小唄は少しだけ考える。それは、本当に少しだけのこと。何故なら、答えはもう決まっているのだから。

小唄は迷いのない表情をし、リリムに聞こえるようにはっきりと言う。

「うん、勿論。僕は、ヴェルローズを助ける」

小唄は、それを聞いたリリムが微笑んだ気がした。

『ふふ、あの子のことよろしく願いますね。それでは、その・
・≫方法についてご説明します。心静かにヴェルローズさんの姿を

イメージしながら魔力を放射、彼女を探查してみてください。小唄君ならきつと出来ます』

「分かりました。やってみます」

受話器を置いた小唄は静かに目を閉じ、精神を集中させ始めた。

（ヴェルの姿をイメージして魔力を放射……）

「……真っ暗だ」

確かに、魔力は放射された。だが、瞼の裏には暗闇しか映らなかった。

落胆しかけた小唄の手を、サファイエが小さな両手でぎゅっと掴む。

「サファイ？」

『大丈夫だよ、ご主人さま。もう一回やってみて？ 今度は絶対成功するからっ』

「う、うん……」

サファイエの表情は、失敗するとは微塵も思っていない程の自信に満ち溢れていた。それを確かめた小唄も力強く頷き、再び魔力を放射し始めた。

『ご主人さまの魔力を、わたしの中で増幅させるよ……』

放射した魔力を吸収するサファイエの体は光り輝き、増幅された魔力はより一層の輝きを持って放射される。

（まだ見えない……暗闇のままだ。何も見えない……——ん？ あ

れは、光？ そうだ、光だ。向こうに光が見える。というより光がこっちに近づいてくる——！？）

「くっ！？」

『ご主人さまっ！？』

「大丈夫、何でもないよ」

迫り来る光は小唄に多少の痛みを与えたが、視界はすぐに開ける。コンクリートに包まれた薄暗く広い場所。無傷の赤と黒の少女、幾つもの傷を負って肩で息をしている緑に身を包んだ女。正しく今、彼女達が戦っている刻そのものだった。

（——戦いはヴェルが押している。だけど、何か変だ……。この緑の女の人、本気を出しているように出していないように見える。それに……。薄笑いを浮かべながら戦ってるのも気になる。まるで、何かを狙ってるみたいだ）

更に良く見極めようと視線を集中させた瞬間——何者かが小唄の視界を遮った。

「っ！？」

闇夜の中に不気味に光る、無機質な薄紫色の双眸。その瞳の持ち主は見えないはずの小唄の顔を見据えて、

——God K v ? i l l , K u l a t t t r ? f f a s .

無表情を顔に貼り付けたまま、彼が聞いたこともない言葉を口にした――。

「!! うわああああっ!!」

得体の知れぬ恐怖に小唄は思わず後ずさりする。その際にテーブルの端に頭をぶつけてしまったが、その衝撃は彼に冷静さを取り戻させた。

『小唄君？ 何かありましたか？』

電話口からリリムが、慌てて側に飛んできたサファイエが小唄に心配の声を掛ける。

「あ、いえ……大丈夫です」

『そうですか。それで、ヴェルローズさんの居場所は分かりましたか？』

「はい。特定は出来ませんでした……広いフロアのある廃ビルのような場所で、ヴェルは緑色の女の人と戦ってました。多分、三階か四階だと思います」

『廃ビルですか。その相手に何か特徴等は？』

「……見た目はヴェルが押してるんですが、相手が一方的にやられているように見えて何かを狙っているような感じでした。詳しく見極めようとしたら、誰かが目の前に立ち塞がって……そのまま弾き飛ばされました……」

受話器の向こうでリリムが驚きの声を上げる。

『探査を妨害された!? その者の特徴を覚えてますか？』

「銀髪の……僕と同じくらいの少女だったと思います。ロボットか何かのように無表情で……薄紫色の目がとても怖かった……」

『……………そうですか。小唄君、その条件に該当する廃ビルは二箇所しかありません。私とティーカは西にある廃ビルに向かいますから、小唄君とサフィちゃんは東にある廃ビルに向かってください。お気をつけて……』

「はい、分かりました。リリムさん達も気をつけて」

小唄は受話器を置き、サファイエを振り返る。

「行こう、サフィ！」

『うんっ!!』

二人は仕度を終えてすぐに外へと飛び出す。しかし、徒歩や走っているような場所ではない。タクシー乗り場へと走りながら小唄は考える。

（今のヴェルは間違いなく冷静じゃない。そして、あの女の人の薄笑い……絶対に何か企んでる。いつもの冷静さを取り戻さないと、確実に負ける——!!）

とある廃ビルの入口——。

「……あの距離から探査を成功させるとは、流石はドール・マスタ——と云ったところでしょうか」

人通りの絶えた場所で、少女が夜空を見上げながら呟いた。
フリルをふんだんにあしらった純白の古風衣装と、ややティアーアンティーク・ブラウス

ドの入った純白フリルのミドル・スカート。そして、無機質な薄紫色の瞳。先程、小唄の探査を妨害した者の姿に酷似していた。

「まあ、大した問題ではありませんね」

くるりと廃ビルに背を向けた少女は、複数の男達に囲まれていた。

「G o d K v ? 1 1」

少女の言葉に男達は顔を見合わせ、怪訝な表情でひそひそと話を始める。

「な、なあ……今のは何語なんだ？」

「お、俺に聞くなよオ。でもよオ、言葉通じねえってことは襲つちまえば後はどうにでもなんじゃねエか？ よオ、俺たち暇なんだけど遊ばねえ？」

「……？」

少女が男達の様子を見ながら可愛らしく首を傾げるが、目に感情がなければどんなに可愛い行動を取っても冷たいものでしかない。少女の異様さに気づいた男の一人が、革モノの上下とシルバー・アクセサリーで固めている男を引き止める。

「おい、やめとけよ。コイツなんかおかしいぜ？ 関わんねえほうがいいって」

「ああ？ 俺アこういう変わった奴が好きなんだよ。なあ、俺たちと楽しいコトしようぜ？」

五人の男のうち一人は多少は常識があるように見えるが、一様に下卑た笑みを浮かべている残りの四人は下衆以外の何物でもない。

——にも関わらず少女は自ら進んで一步前に出て、にこりともせず男達に言った。

「ええ、良いですよ。私も暇していたところですし。とりあえず、裏路地にでも行きましようか？」

「フ……へへ……日本語しゃべれんじゃねエかよ。ンじゃ、お嬢ちゃんのお望み通り裏路地でやってヤンよ。フヒヒ……」

少女の好感触に男達は下種の表情を一層深め、連れ立って更に人通りのない場所へ去っていく。

この後、自分達に降りかかる災厄など知る由もなく――。

2――

小唄とサファイエが家を飛び出したのと同時刻、ティーカの店――。

「ティーカ、準備は出来た？」

小唄達はもう家を出ただろう、こちらも急がなければならない。
リムが確認のためにティーカを振り向くと、彼女は愛用の手斧マチェットをチェックしているところだった。

「もう少し……よしっ、準備出来たよ！」

手斧にカバーを掛け、小型のリュックに詰め終えてティーカが立ち上がる。

「小唄君の話では、相手は何か企んでいるみたい。急ぐわよ！」
「おっけー、早く助けに行こっ！」

西の廃ビルまでは小唄達と違って交通機関を使うほどの距離ではないが、急がなければならぬことには変わらない。二人は家を出ると同時に西の廃ビルへと駆け出した。

1――

――月が見守る、廃れた舞台^{ビル}。

「はあ、はあ……っ」

「どうした？　もう終わりか？」

そこには、先程小唄が視た通りの光景があった。

翠の衣を引き裂かれ、倒れ伏しながら肩で大きく息をしているベリティエ。それを絶対者の視線で悠然と見下ろすヴェルローズ。勝敗の行方は最早見えたも同然だった。

「クッ……まさかこれ程までとはね……」

檻樓切れ同然にされながらも、ぎらついた目に闘志と殺気は失われていない。ベリティエはふらつきながらも立ち上がり、構えを取った直後――

「――っ!？」

「満身創痍でも闘志を失わないのは結構なことだが、動きが緩慢すぎるな。それ、簡単に捕らえたぞ」

ベリティエが後悔の表情を見せるがもう遅い。気づけば、ベリティエの体は黒い鎖のようなもので束縛されていた。

「や、闇の束縛魔術か！ 油断したわ……っ！！」

闇の精霊の力を行使する下位精霊魔術だが、消耗し切ったベリティエが相手なら十分効果はある。ベリティエは抵抗するが、闇の束縛からは逃れられない。

「くっ、この――！！」

ヴェルローズは抵抗を続けるベリティエから視線を外し、アルトリイを見た。体力の限界が来ているのか、俯いたままの彼女の表情は見えない。

（アルトはもう限界ね。これで決めるわ……！！）

「うっ……」

ベリティエの視界が赤く染まる。魔力を右手に集中させたヴェルローズが、紅い輝きを彼女に見せ付けていた。

「本当は貴様など八つ裂きにしてやりたいところだが、これ以上長引かせるわけにはいかないのでな。感謝するがいい。一瞬で焼き尽くしてやる」

「チィッ……！！」

ヴェルローズの右手の炎が赤く輝き、少しずつ根元から黒に染まってゆく。

だが、絶望の淵にあるはずのベリティエは薄く笑みを浮かべただけだった。そして、不気味と言える程静かにその時を待っていた。絶対の勝利を確信しているヴェルローズは、それが意味するところを知らずに右手を地面に置いた。

「焼き尽くせっ！ “煉獄の円柱群” ！！」

すぐさまベリティエの足元から猛る炎の柱が幾柱も立ち昇り、瞬く間に身を包んだ。獲物を消化した地獄の炎が在るべき場所へと還ってゆく。断末魔の悲鳴を上げる間もなく、ベリティエは跡形も残さずにこの世から消滅した。

「終わった……な」

先の怪物やコワレ達に行使したものは比べ物にならない程の魔力が込められた“煉獄の円柱群”。ヴェルローズの魔力も底を尽きかけており、これ以上本質を維持することは出来ない。彼女は“憎悪”を霧散させ、妹の元に向かった。

「終わったわアルト。さあ、帰りましょう」

声に反応して、アルトリリイがゆっくりと顔を上げる。そこには、待ち望んだ最愛の姉の姿があった。しかし、彼女は微笑まない。まだ何か心配事があるかのように――。

「ね、姉様……ベリティエはまだ……」

「ん、何か言ったかしら？ 鎖を解いてあげるから大人しくしてて」

どれ程頑丈に束縛したのか、アルトリリイの両腕は雁字搦めに拘束されていた。きつく巻き付かれていただけだったのか、それでも

最後の鉄鎖以外は難なく外すことが出来た。

最後の鉄鎖は幾重にもきつく巻きつかれ、簡単には外れないようになっていた。両腕には痛々しいまでの鎖跡。長時間無理な体勢を取らされたことで血行が阻害され、腕の一部は紫色に変色してしまっている。

（細胞が壊死してないのは幸いだったわね。幾ら死舞人形の自己再生能力でも、壊死した細胞を再生させることは出来ない……）

ヴェルローズが鉄鎖と格闘している間、朦朧としていた意識が覚醒してきたアルトリリイは先程よりも大きな声で姉に言った。

「姉様……ベリティエの型は……——っ」

「型？」

一瞬だけ妹に目を向けてヴェルローズは作業に戻る。その横でアルトリリイは息を呑んだ。姉に対してではない。突如として湧き上がった暴虐の気配に対してだ。

ヴェルローズの背後に明らかな黒影が現れる。檻樓切れのような翠の衣と、銀に光る残虐の得物を手に持って。

——声が聞こえる。誰かが秒を読む声だ。何かの意思が謡い、踊りながら秒を読む。運命の踊り手の声が聞こえる。

そして——

第九話『開幕』 Part. 2 (後書き)

God Kv?il ↓ こんばんは
Kul att tr?ffas ↓ はじめまして

第九話『開幕』 Part. 3

0――

月光が、開幕の旋律を奏でるように降り注いだ――。

「いやあああああああ――！！ 姉様逃げてええええええ――！！」

絶叫するアルトリイ。爆発的に膨れ上がる気配にヴェルローズは背後を振り向――否、振り向けなかった。がっしりと首を極められ、何かが塗られた右手の指を口に突っ込まれる。

「――っ！？」

強引に振りほどいて距離を取り、急ぎ吐き出す。だが、それは既に体内に投与された後だった。口から食道を通って胃へ――それはヴェルローズの体内で時が来るのを待つ。

「くっ！ 何をした！？」

既に魔力霊力共に尽き掛けており、再び“憎悪”を開放するだけの力はもう残されていない。故にヴェルローズは、眼光鋭く先程焼き尽くしたはずの敵の姿を見ることしか出来なかった。

「フッフ。体の中で暴れまわる、とびっきりのお薬よ」

「な、何……があっ——！！？」

鈍痛を通り越していきなりの激痛がヴェルローズを襲った。いや、激痛などという言葉で表せるような生易しいものではない。毒に侵された内臓が断末魔を上げる、死へと至る痛みというべきものだ。先程とは真逆。ヴェルローズは地に倒れ伏し、ベリティエは笑みを浮かべて悠然とヴェルローズを見下ろす。

「な、何故……“煉獄の円柱群”の直撃を受けても無傷なの……！！？」

言い終えたヴェルローズが激しく咳き込む。口からごぼりと吐き出されたそれは、黒い——腐敗した血液。

（な、内臓を壊死させる毒か！！　まずいわ、残りの霊力を生命維持に——！！）

「何故？ アンタ、本当にあんなお子様な技でアタシを倒せると思ったの？　だとしたらとんだ大馬鹿ね」

「……どういふことかしら？」

それを聞いたベリティエが、小馬鹿にしたような溜息を吐く。

「まあ、いいわ。冥土の土産に教えてあげる。アタシはアンタ達のような、ご主人サマがいなければ百パーセントの力を発揮出来ない出来損ないとは違うってコトよ」

「な、に……」

ヴェルローズは驚愕する。

彼女もその可能性を考えなかったわけではない。だが、今まで会ってきたコワレ、ルナティック、そして同じ死舞人形。それらの体験からそれと遭遇する可能性は限りなく低い、そう結論付けていたのだ。

「完全独立型……っ!!」

「フフフ、正解。アタシにはご主人サマなんてモノは必要ないのよ。その最強とも言わべき型を持っている私に、アンタなんか敵うわけないでしょ?」

「く……今までののは全て演技だったとでも言うつもり!?」

ベリティエはますます笑みを深める。

「フ……それなりに痛かったし、これからたっぷりとお返ししないと——ねっ!!」

ノー・ウェイトで月桂樹が振り下ろされる。転がることで辛うじて避けたヴェルローズだが、その動作が更に毒を侵食させる。

「がはっ——!!」

「アハハッ、いいザマね。それっ!!」

無防備に蹲る背中に、月桂樹が振り下ろされる。激しい打撃音と共に刃が布地を切り裂き、白肌に赤く線を刻む。

「く、あつ……ああっつ!!」

「それそれえっ!!」

その様子が面白くてたまらない様子で、ベリティエは何度も月桂樹を振り下ろす。その度にヴェルローズの赤と黒の古風衣装は次々

と布切れに変わる。背中の傷口から血が流れ出し、赤い布切れを更に紅く染め上げていった。

「姉様っ!! お、お願い……もうやめてええ——っ!!」

凄惨な光景に耐え切れなくなったアルトリイが叫ぶ。その声が届いたのか、ベリティエが月桂樹を振り下ろす手を止めた。

（お願いを、聞いてくれた……の？）

「そうね。なんか飽きてきたし、やめてあげるわ」

言いながらベリティエは、緑色の雲のようなものを発生させてヴェルローズを浮かせる。

（はぁ、はぁ……。これは、何かしら……）

荒い息をしながらベリティエを睨み付けるヴェルローズに、彼女は口の端を吊り上げた。

「安心なさい。それは物質を浮かせる雲。毒ではないわ」

（物質を浮かせる……？ そんなものを何故今……はっ——!?!）

ヴェルローズの危惧通り、雲は彼女を乗せたまま動き始めた。格子も窓硝子すらない窓だったものを越え、夜風に彼女の体が晒される。思わず下に目を向けてしまうと、灯りの少ない薄暗闇の街がそこにあった。

「な、何をする気……!?!」

ヴェルローズの顔に初めて明確な恐怖が浮かんだ。答えなど決まっているだろうが、そこまで考える余裕は今の彼女には一分もなかった。

「死舞人形って体に穴開いたって死なないけれど、衝撃にはどれだけ耐えられるのか、前から試してみたかったのよね」

（……このダメージで四階から落ちる程の衝撃を受けたら……!!
それなら——!!）

「くっ、当たれっ!!」

ヴェルローズは残った霊力で拳銃を想造し、狙いを付けて引き金を引いた。弾丸は狙い通りに飛んで行き、鉄を弾いたような音を響かせた。

ヴェルローズは銃を撃ったままの格好でアルトリイを見て、目で語りかける。

（姉様……? はっ、鎖が……!）

「アハハッ、どこ狙ってんかしら? じゃあ、サ・ヨ・ウ・ナ・ラ」

ヴェルローズを浮かせていた雲が霧散する。

「—————っっっ!!」

同時に、声にならない叫びを上げながらヴェルローズは地上に落ちていった。何かが潰れるような鈍い音が聞こえ、廃ビルの四階は再び静寂に包まれる。

「フッフ、アンタが生きていたらまた相手してあげるわ。さて、と……あら？」

振り向いたベリティエが首を傾げる。視線の先で、断ち切られた鉄鎖が空しく揺れていた。

「チッ、あれは鉄鎖を狙った一撃だったのね。暇つぶしがなくなっってしまったわ」

まあいいわ、と月桂樹を柱に立て掛けたその時、

「あーあ、逃げられちゃったね」

すぐ側から聞こえてきた声。だが、ベリティエは慌てることなく声の主を振り返る。

「別に、大した問題じゃないわ。アタシにとっても、アンタ達にとってもね。だからアンタも捕まえなかったんでしょ？　ねえ？　“幼き宙”」

“幼き宙”と呼ばれた、ティーカよりも更に幼く見える子供が無邪気に笑いながら答える。

「あはは、そうだね。ルナ達は月の光のお姉ちゃんをさらって、闇の薔薇のお姉ちゃんを怒らせて覚醒へと導くのが目的、ベリティエのお姉ちゃんは暇つぶしにいたぶるのが目的だもんねー！」

「そして、どっちも目的を達成したからあのコはもういらない、と」「うんうん。あ、それよりもさあ……」

“幼き宙”が可愛らしく口を膨らませながらベリティエを睨み付けた。

「何よ？」

「ベリティエのお姉ちゃん、なんでルナのことをルナって呼んでくれないのお……？」

「はあ？ 呼び名なんてどうでもいいじゃない」

「むー！ どうでもよくないよっ。ルナにはルナテラって可愛い名前があるんだから、ルナって呼んでよー！」

剥れながら、ベリティエの袖を思い切り引っ張るルナテラ。

（……はあ、頭痛くなってきたわ。適当に合わせておこうかしら）

ベリティエは僅かに痛み出した頭を軽く押さえながら、安易な方法を取る事にした。

「はいはい、ルナ。そう言えば、今日は“白衣の人形殺し”は一緒にじゃないのね」

「わあい！ あ、お姉ちゃん？ お姉ちゃんは男の人達と遊んでるみたい。かわいそうにねー、あの人達。明日の朝日は拝めないねー！」

「そういうことね。で、ア……ルナは確かめにきただけかしら？」

アンタ、と言おうとしてルナテラに睨まれてベリティエは名前で言い直した。

「んー、それもあるけど……お腹すいたからご飯食べにきたのっ」
どこかのコンビニで買ったのだろう、ルナテラは見たことがある

ロゴが入ったビニール袋を掲げる。

「……」

フロアには先程の戦いの血の臭いがまだ充満している。そんな中で食事をしようとは、このルナテラもやはり普通ではないのだろう。

「ま、好きになさい。アタシは奥で着替えてくるわ。殆どボロキレだし血と汗でベトベトなのよ……」

「見せられないよっ、あきらめなー!」

「……誰に言ってるのよ?」

笑いながら茶化すルナテラを無視して、ベリティエは着替えが入ったバッグから身軽な服を取り出す。所々に血の付いた体をポリタシの水で体を洗い流してから着替える。

戻ってくると同時にいつもの様に話をせがまれ、やれやれとしながらもベリティエは昔話を語り始めるのだった。

「はぁ……はぁ……姉、様……どこ?」

ヴェルローズの機転で拘束から開放されたアルトリイは、体力ではなく気力を振り絞って一階まで降りて来ていた。

体力はとうに底を尽き、気力さえも尽きようとしている。その前に姉を発見しなければならない。もたついていると追手が来るかもしれない。アルトリイは残り僅かな気力を消費し、廃ビルの外に出て姉の姿を探す。

「姉様は……いたっ!」

外に出てすぐ左。四階から地面に叩き付けられ、微動だにしない姉にアルトリリイが駆け寄った。名前を呼びながら強く揺するも、意識が戻る気配はない。

側に人気がないのが幸いだった。

（傷が再生しない……機能が完全に停止してる！？ いけない、このままじゃ……）

アルトリリイはヴェルローズの胸に手を置いて静かに目を閉じ、双子の死舞人形特有の能力で姉の記憶を探る。暫くして彼女の脳裏に二人の別な死舞人形の姿が浮かんできた。

（このひと達に会えれば――！！）

目を開けて立ち上がり、ヴェルローズの手を自分の肩に回させて担ぐ。霊力も気力も残り僅か。だが、ここで倒れるわけにはいかない。決意を蒼い瞳に込め、アルトリリイは目的地に向けて歩き出した。

――アルトリリイが決意した頃、その対岸ではリリムとティーカが近くなってきた西の廃ビルを見上げていた。

「この廃ビルだと思うけど、何の気配もしないね……」
「そうね……もう決着が着いたのでしょうか……」

ティーカとリリムは揃って顔を見合わせ、首を傾げる。

「とりあえず、突入してみる？」

「そうね。何か手掛かりがあるかも——待ってティーカ」
「ん？」

走り出そうとしたティーカをリリムが引き止め、薄明りの向こうを凝視する。

「誰か来るわ」

闇の先に、やがて重なり合った人影が姿を見せ始めた。

その姿を認めた二人が驚きの表情を見せる。彼女達にとって、担がれている者は十分すぎるくらい見慣れた者だったからだ。そして、担いでいる者も髪色と瞳の色や正装の色から容易に予想出来た。

「ヴェルローズさん！？ ティーカ、祐治さんに電話して車を回してもらって！！」

「分かった！！」

尋常ではない様子に気づいたリリムが慌てて駆け寄り、同時にティーカは携帯電話で祐治を呼び出す。リリムの姿を認めたアルトリイはゆっくりと顔を上げ——

「私は“闇の薔薇”ヴェルローズの妹、“月の光”アルトリイです。お願い……姉様を、助けてっ——」

それが最後の気力だったのだろう、アルトリイはそのまま意識を失った——。

——一方、小唄達は東の廃ビルの前に来ていた。

「来たけど、静かすぎるね」

『うん、こっちじゃないのかなあ……？』

周りには他に人はおらず、時折遠くから聞こえてくる機械の駆動音以外は夜の静寂に支配されていた。

戦っていれば銃撃音や剣戟の音くらいは聞こえてくるはずだが、それすらも聞こえてこない。

「サファイ、上見てくれる？」

『はい！』

小唄の頼みを笑顔で快諾したサファイエは、透き通った四枚の翅^{はね}を羽ばたかせながら四階の高さまで上昇する。これ以上の高さは厳しいが、四階程度ならサファイエにとって何の問題にもならなかった。

中の様子を確認したサファイエが小唄の側に戻ってくる。

『こっちはハズレみたい。中に誰もいなかったよ』

「そっか。ティーカ達のほうが当たりみたいだね。どうしようか……」

と、これからの行動を小唄が考え始めた時——ポケットの中が震えた。

手を入れて取り出すと、液晶に『着信アリ』の文字が表示されている。普段は持ち歩かないが、連絡用にと小唄が久々に持ち出した携帯電話だ。

「ティーカからだ。はい、もしもし……——なんだって！？ うん、

分かった。すぐ向かうよ！」

通話を切った小唄は、待っているサファイエに急いだ様子で言った。

「ヴェルと妹さんを無事確保したけど、二人とも意識不明だって……。すぐティーカの店に行こう！」

『う、うんっ!!』

小唄はタクシーを拾うため、大通りに向かって駆け出した。

「……」

とある裏路地。

日中も夜も闇しかないこの場所にも、月は穏やかな光を差し込ませる。

月の光に照らされた先で、一人の少女が佇んでいた。

純白の衣装は鮮血に染まり、右手に持った歪な刃を持った剣から血と脂が滴り落ちる。物言わぬ細切れの肉塊を踏みつけながら、少女は呟く。

「“月の光”は開放され、“闇の薔薇”の下へと帰りました。全てはこれからです。開幕の旋律は奏でられました」

汚れた剣をいずこへとしまい、少女は血に濡れた顔と薄紫色の無機質な瞳で月を見上げる。

「彼女がマスターを得て、再び“翠の毒牙”と対峙した時が再会の

刻。“月の光”、そして“闇の薔薇”。幾ら逃げようとも、過去からは決して逃れられませんよ。ふ……ふふふ……」

少女は月を見上げながら、無表情のままに暗く笑い続けるのだった。

第九話『開幕』 Part. 3 (後書き)

第九話をお届けしました。

これで役者が揃いました。次話よりいよいよ、死舞人形そして『歯車』について、核心に迫っていきます。

第十話『死舞人形』 Part. 1

「――ヴェルと妹さんはっ!？」

突如、突風をドアに叩き付けたような衝撃にティーカは後ろを振り返った。彼女の視線の先では、小唄とサファイエが息を吐いていた。

「落ち着いてコウタ。今、リリムが上で治療してるから大丈夫だよ」
落ち着き払った声をティーカは二人に返した。

（んん？ ティーカさんってこんな落ち着いた人だっけ？）

その声にサファイエは違和感を覚えたが、心が乱れている今の小唄はそれに気づけない。

「それでっ、二人は大丈夫なのっ!？」

「……大丈夫だから落ち着いてよ」

今の二人は真逆だった。怖いくらいに落ち着き払ったティーカと、心乱れたまま焦りに焦る小唄。どうしてそこまで落ち着いていられるのか、と苛立ちを覚えた小唄は、

「ティーカってばっ!！」

『ご主人さま!？』

それに気づいたサファイエの静止も聞かず、激昂に身を任せるままにティーカに掴みかかった。直後――

「落ち着けて言ってるでしょっっ!!」

「――っ!？」

怒号にも似たティーカの叫び声が店内を奮わせた。あまりの迫力に小唄は掴んでいた手を離し、後ずさりする。彼の体は大人に叱られた幼子の如く、小刻みに震えていた。

そして、小唄は改めて理解する。たとえ外見が小学校高学年くらいにしか見えなくても人間とは違いすぎる――遥かに老獺ろうかいで超自然の存在。彼女もまた死舞人形なのだということを。

「ここでボク達が騒いでどうなるっていうの？ 騒いであの二人が助かるならボクだって騒ぐよ。でも、治療の術を持たないボク達ではどうすることも出来ない。だから、ここはリリムを信じて待つしかないんだよ」

小唄は握り締めたティーカの拳から血が流れ、床に落ちるのを見てはっとする。彼女もまた、何も出来ない自分に耐えていたのだ。握り締めた両手をわなつかせながら、爪が掌に食い込むのも厭わずに。

「ご、ごめん……ティーカのこと考えないで……」

小唄は、感情を制御出来なかった自分を恥じて素直に謝った。それに対してティーカは怒ることもなく、いつもの笑顔を見せながら彼に笑いかける。

「ううん、気にしないでいいよ。コウタはまだまだ子供だしねー。」

大丈夫っ！ リリムは“名医”だから二人をきつと助けてくれるよ！
あっ、喉乾いたでしょ？ ボクお茶淹れてくるねーっ」

（あれ？ さり気なく馬鹿にされたような気が……）

『くすくすっ』

小唄が横を見れば、サファイエが口元に手を当てて笑っていた。

（明らかに嫌な笑い方だ……）

「……何さ？」

『べっつにー♪』

「くうう……どうせ僕はまだまだ子供ですよーだ……」

『くすくす、よーしよし』

拗ねる小唄を宥める^{なだ}ように、サファイエは小唄の頭を優しく撫でる。どう見ても子供扱いされているのが小唄には少し気に入らなかったが、険悪な雰囲気は完全に払拭されたので為すがままにされることにした。

程なくして、ティーカがティーポットと四人分のティーカップを持って店内に戻ってきた。彼女は慣れた手付きでポットの中の紅茶をカップに注ぎ、それぞれの場所に置く。二人が無言のまま、紅茶で冷えた体を温めていると階上から軋む音が聞こえてきた。

「あ、リリム！」

ティーカに釣られて小唄もそちらを振り向くと、階段を降りてくるリリムの姿が見えた。治療中に付いたものなのか、洋服のところどころに赤い斑点が付着しており、その表情はとても疲れているよ

うに思える。

「……ふう」

「リリムさん。ヴェルと妹さんはどうなんですか？」

倒れこむように座るリリムに、小唄は静かに二人の容態を聞く。先程のように激昂することはもうない。リリムは紅茶を一口飲み、一呼吸置いてから口を開いた。

「どちらとも人間であれば確実に死んでいる傷でしたが、二人とも命に別状はありません」

その言葉に三人は安堵したが、続けられた言葉に再び身を強張らせた。

「ただ……アルトリイさんは全身に拷問によって出来たと思われる裂傷、首は裂傷に加えて毒物を塗られたことによる火傷……という程度ではありませんね……ケロイドと言っても過言ではない状態です。更に長時間の拷問と拘束による精神の衰弱が激しく、死舞人形の自己修復機能を以っても最低一週間は安静にしている必要があります」

「そんな、酷い……。ヴェルは……。ヴェルはどうなんですか？」

小唄の質問にリリムは軽く目を伏せたが、何かを決心したようにすぐさま言葉を続ける。

「ヴェルローズさんは……傷自体は大したものではありません。ですが……何か強い衝撃を与えられたのか、私達死舞人形の核である“思慕石”の九十パーセントが機能を停止。自己修復、自己再生機能とともに停止している状態です」

「九十パーセント!？ それじゃあ、殆ど機能してないってこと!？」

同じ死舞人形であるティーカが驚愕する。

“思慕石”は彼女達の全てを司る中枢であり、その機能の殆どが停止しているということは死んでいるのとはほぼ同義だからだ。

「そ、そんな……」

全てではないが、その意味を理解した小唄の表情に落胆と恐怖がありありと浮かぶ。

話から察するに、“思慕石”は人間で言えば脳や心臓に当たる重要な器官。人間は脳や心臓が停止してしまったら殆どの場合はそのまま死んでしまう。それを脳裏で想像した小唄は大いに恐怖した。

「ヴェルは……治るんですか？」

最悪を予期して、声を震わせながら言う小唄にリリムは優しく答える。

「“思慕石”は一種の永久機関です。今のままでもヴェルローズさんが死ぬことはありません。ただ……目覚めるまでに数ヶ月から半年、いえ一年は掛かるかもしれません。そこで、ヴェルローズさんの“思慕石”を直接修復する“術式”を行います」

「“術式”？」

聞きなれない言葉に小唄は聞き返し、サファイエは首を傾げた。

「人間の世界では言えば“手術”に当たります。勿論、“手術”とは違います、これをすればヴェルローズさんは完治するはずです。

ですが、これにはある程度広い部屋が必要なのです」

「……」

小唄は少し考えたが、すぐに顔を上げてリリムに言葉を返した。

「分かりました。僕の家に行きましょう。ヴェルの部屋なら十分広いと思います」

決意の籠った言葉にリリムは微笑みながら頷き、視線をティーカに向ける。

「ティーカ。祐治さんはどこにいったの？」

「食べ物買いに行くって。そろそろ戻ってくると思うよ——ほら、来た」

予言するようなティーカの口ぶりに皆が入口を向くと、ビニール袋に食料を詰めた祐治がドアベルを鳴らしながら入ってきた。

「おっと、もう皆揃ってたか。お腹すいてるだろ？ 色々買ってきたし、好きな食べていいよ」

と、おにぎりやカップ麺、パンをテーブルの上に広げたが手を伸ばす者は誰もいなかった。

「祐治さん。申し訳ないのですが、私達を小唄君の家まで乗せていって貰えませんか？」

何か言おうとした祐治だが、小唄達の真剣な表情を見て瞬時に察する。

「ああ、分かった。誰が乗っていくんだい？」

「私と小唄君とヴェルローズさんの三人です。サファイちゃんは小唄君の肩の上で問題ありませんから。アルトリイさんは絶対安静で動かさませんので、ティーカ」

「分かってる。任せておいてー」

「お願いね。それでは、私は準備してきます。五分後に出発しましょう」

――五分後。助手席に正装したりリム、後部座席に小唄とサファイとヴェルローズを乗せた祐治は車を滑らせた。

「……」

車内では誰一人として喋らず、ラジオの流すジャズだけが音として響いていた。

小唄はヴェルローズを見る。彼女は未だに微動だにせず小唄に身を預けていたが、顔色は悪くなく小唄は軽く安堵の息を吐いた。

その様子をサファイエは小唄の肩の上で心配そうに見ていた、しかし、大丈夫と分かると再び外の景色に視線を向けた。

――慎重にしながらもいつも以上のスピードで車を運転した祐治のお陰で、織部家へは十分足らずで到着した。

到着してすぐにヴェルローズは祐治に抱きかかえられ、自分の部屋のベッドに寝かされる。

「二人とも少し外に出ていてください。小唄君は私が呼んだら入ってきてくださいね」

「それじゃ僕は下で寛いでいるよ。何かあったら呼んでくれ」

「あ、祐治さん。下の飲み物は好きに飲んでもいいですよ」
「ああ、ありがとう」

小唄の言葉を受けた祐治は、二人に手を振りながら一階に降りていった。

「さて、それじゃ僕も外に出てるね」

「はい。お願いしますね」

小唄が部屋の外に出たのを確認したりリムはベッドの上のヴェルローズを振り返り、丁寧に服を脱がせて上半身を露わにする。その手をヴェルローズの胸に翳し、彼女は静かに紫の瞳を閉じた。

(……“思慕石”は未だに機能を停止したまま。万が一を考えて保険を掛けておきましょう)

瞼を開いたりリムは、持参したバッグの中から漏斗ろうとと厳かな容器に入れられた薄い水色の液体を取り出す。そして、ヴェルローズの口に漏斗をかませてその液体を流し込む。水色の液体がヴェルローズの体内に染み渡るのを確認したりリムは漏斗を外し、精神を集中し始めた。

「“癒しの天使”リリムの名に於いて、滅菌の結界を展開します——」

その言葉と共に部屋の大半が結界に覆われる。その中に居た、目に見えない雑菌や害虫の全てが消毒され消滅した。

(……ヴェルローズさんの身体情報を元に精神体を立体展開——完了。これで準備は整いました)

「小唄君、部屋に入ってきてください」

ドアの開閉音と共に小唄が部屋に入る。すぐさま結界の中に入り、小唄も同じように消毒されて滅菌状態になる。その小唄はベッドの上に寝かされているヴェルローズを見るなり、目を背けてしまった。

「？ どうしましたか？」

「ど、どうして裸なの！？」

まだそういう年ではない小唄にとっては当たり前の反応だ。しかし、リリムは気にしない様子で語り始めた。

「必要だから、ですよ。この“術式”はヴェルローズさんの精神体を切開し、“思慕石”を摘出して直接修復します。ですが、この不便な所は実体をなぞらなければいけないのです」

「だから、上半身を裸にする必要があったということ？」

「ええ。“想造”によって精神体を介して実体に影響を与える”、これが私に与えられたもう一つの想造能力“修復”です。実体をなぞらなければ効果が発揮出来ないのです、他の子達に比べると大分不便な力ですけどね」

そう言ってリリムは軽く笑ったが、瞬く間に真剣な表情に戻る。

「では……“術式”を始めます」

自らの声で開始を宣言したリリムは、右の人差し指でヴェルローズの胸部の中央付近をなぞり始めた。

見た目は指でなぞっているだけだがリリムだけに見えるヴェルローズの精神体には、まるでメスで切開したような鋭利な切り口が付

いていた。これはリリムの意思次第で小唄に見せることも出来たが、まだ小唄の年齢では衝撃が強いということを考慮して彼には見えなようにしていた。精神体なので出血はしないが、術者であるリリムは体内の詳細を知る必要があった。実体の内臓や組織などは非常にグロテスクであり、小唄にはまだ早いと思ったのだろう。

そうこうしている間に、リリムによる“術式”は進められていく――。

第十話『死舞人形』 Part. 2

「小唄君は」

順調に進められる“術式”の半ば、作業の手を止めずにリリムは小唄に問うた。

「？」

「小唄君は、私達死舞人形のことをどう思っていましたか？」

「……えーと」

すぐには答えられず、小唄は返答に詰まらせる。リリムの問いは過去形であり、即ちヴェルローズがこのような状態になる前のことを暗に指している。それを小唄は頭の中では理解していたが、どのような言葉で表せばいいのか悩んでいた。

「……強くて気高くて、どんな逆境にも打ち勝ってしまいそうな勇者……かな」

その答えにリリムは微笑むが、

「なるほど。確かに私達は強く気高き存在です。異能の力を持ち、人間が忌避^{きひ}し畏怖する霊術や魔術を自在に操る……そして一度強固な結界を張れば、地上の如何なる兵器を以^もってしても私達を滅することは出来ないでしょう。ですが……」

悲しみの表情をヴェルローズの顔に向けて、リリムは軽く瞼を伏せる。

「今のヴェルローズさんのように“思慕石”に重大な損傷を受ければ只の精巧な人形に成り果ててしまう、そんな弱い存在でもあるのです。この傷から察するに、戦闘をしていた四階から落とされたものと思います。それと、恐らく“脆弱化”も掛けられていたのでしょう。そうでもなければ強固な“思慕石”がここまで損傷するはずがありません。この子はそんなことにすら気づけなかった」

「……」

「“本質”を開放して自分を見失わなければこんなことにはならなかったでしょうに。馬鹿な妹……」

瞼に伏せられた紫の瞳から雫が零れ落ちた。純白を水色で彩った、アンティーク・ワンピースヴェルローズ達より大人らしく洗練された古風衣装にひとつふたと染みを作っていく。

「――！！」

（そうか。前にヴェルから死舞人形には双子と義姉妹以外は姉妹なんていない、って聞いてたけど……その定義や概念が彼女達にないだけで実際は絶対的な縦の関係で結ばれているんだ。だって、リリムのヴェルに対する表情はまるで――）

リリムの表情は悲哀に覆われており、それは傷ついた家族を見るものと同等だった。

そのまま暫く瞼を伏せていたが、再び凜とした表情に戻ったりリムは作業を開始する。その瞳に涙はもうない。

「……」

「……」

無言の二人。置き時計と壁時計が時を刻む音だけが部屋に響く。
やがて静寂に耐え切れなくなったのか、小唄は先程聞いてから気
になって仕方がなかった単語について質問した。

「リリムさん。一つ聞いてもいいですか？」

「はい、私に答えられることなら」

「“本質”って何ですか？」

リリムは拒否することもなく、作業を続けながら答える。

「“本質”は私達死舞人形の特性そのものと言いましょるか、開放
することによってその特性を極限まで高めることが出来ます。例え
ば、私リリムの“本質”は“慈愛”。これを開放している時は、相
手を癒す行動をしている時の効果が極限まで高まるのです」

余裕がない小唄は気づかなかったが、リリムの背中には“本質”
を開放した証——天使の両翼を象った光の粒子——が確かに見えて
いた。

「へえー、とっても便利なものなんですね」

小唄は感心するように言ったがリリムは静かに首を横に振り、

「いいえ、良いことばかりではありません。維持するためのコスト
はかなりのもので完全正装時にしか使えませんし……この子に直接
触れているのと残滓から分かったのですが、ヴェルローズさんの“
本質”は“憎悪”……これは開放時にこの子の霊力や身体能力に莫
大なプラス補正を与える反面、思考能力を極端に低下させてしまう

のです」

と、穏やかに言った。

「そんな……」

小唄は思わず身震いする。

（迷惑を掛けたくなかったのもあるんだろうけど、“憎悪”で変質した自分を見せたくなくて……ヴェルは僕とサフィを置いて一人で行ったんだ。だけど……）

「小唄君が今思った通り、ヴェルローズさんは貴方達に“本質”を知られたくなくて一人で行ったのでしょう」

「……」

小唄は言葉を返せ——いや、返さなかった。リリムはそれを無視して言葉を続ける。

「この子は普段はとても大人ですが、根っこの部分はまだまだ子供なのです。ですから、時に間違った行動をしてしまいます。電話でも言いましたが“歯車”や私達に関係する夢は兆候であり、貴方がその子の主人になる資格を得たということ」

「僕が……ヴェルの主人になる……」

一度は決心した小唄。しかし今になって現実感が沸かなくなり、目の前が軽く揺れる感覚を覚える。

「そして、貴方には“これ”を見る権利があります。少し目を閉じてください」

「う、うん……」

言われるままに小唄は目を閉じた。直後——リリムはヴェルローズから何かを取り出す動作をする。紅蓮の紅き光と漆黒の闇の如き黒き光の光芒が部屋中を照らし、それに反応するかのようにヴェルローズの体がぴくりと動いた。やがて光は収まり、

「もう、目を開けていいですよ」

「——……っ!？」

目を開けた小唄が、リリムの掌にあるものを見て更に目を見開く。

「は、歯車……!？」

「そう、これが私達の全てを司る“思慕石”。“歯車”の夢とは、この“思慕石”の夢のことなのです——」

リリムの掌の上で、紅と黒の混沌色カオス・カラーに染められた歯車が妖しく煌いていた。

「——……んんう」

「あ、気がついた？」

ベッドからのくぐもった声に気づいたティーカが笑顔で呼びかけた。

「あなたは……？　ここは……っ!？」

上半身を起こそうとしたアルトリリイに激痛が走る。体内を稲妻

が駆け抜けたような衝撃に、アルトリリイはそのままベッドに倒れ込んだ。ティーカは僅かに乱れた掛け布団を掛け直し、彼女に安静を促す。

「まだ動かないほうがいいよー。キミの傷は修復中だけど、首の傷や精神の衰弱を合わせると一週間は安静にしなきゃダメってリリムが言ってたから。あ、ボクはティーカ。ここはリリムの“病院”だよ」

言ってからティーカはしまったと思ったが、“治す所”には違いないので問題ないということにした。

「そっか……私はアルトリリイと言います。姉様共々助けてくれてありがとうございます……姉様はっ!？」

アルトリリイは慌てて隣のベッドを見たが、そこに姉の姿はなかった。

「ヴェルはキミより酷くはなかったんだけど、衝撃で“思慕石”の殆どが機能停止してたから特別な治療が必要なんだ。今はコウタの家で治療中だよ。あ、それと――」

「? 何ですか?」

「実は敬語苦手ですよ? ボクに敬語なんていらなから……アルトと呼ばせてもらっていいかな?」

と、楽しそうに笑いながら言うティーカ。見抜かれていることにアルトリリイは驚いたが彼女もまた楽しく笑い返して、いつもの碎けた口調に切り替える。

「あは、じゃあ遠慮なく。私のことはアルトって呼んでね♪――っ! ごほっげほっ!」

「ご、ごめん！ 無理に喋らせちゃったね……はい、お水だよ」

ティーカは楽しさに感じて完全に失念していた。無数の裂傷に首のケロイド。その状態でも言葉が話せるのは死舞人形の回復能力が為せる技だが重傷には変わりなく、一つ言葉を発する度に鋭い痛みが走っていたに違いないのだ。

「ううん、このくらいなら大丈夫だよ。ありがとね」

「だーめ。リリムからきちんと看病するように言われてるからね。無理はさせられないよ」

そう言ってティーカはワーク・デスクの上からメモ用紙の束を取り出し、ボールペンと共にアルトリリイに渡した。筆談でもアルトリリイに負担が掛かることには違いないのだが、ティーカは彼女に聞いておきたいことがあった。早めに聞いておいたほうがいいとティーカは直感で感じていたのだ。

「アルトに聞きたいことがあるんだけど、いいかな？」

アルトリリイがメモ帳にボールペンを走らせる。

『うん、いいよ。何？』

「アルトを拉致して拷問したのって、どんな奴だったの？」

『“翠の毒牙” ベリティエ。髪も服も翠色の、“墮落” したルナティックだよ。“墮落” 前は“完全独立型” の死舞人形だったみたい』

（なるほど、リリムの予想は当たってたんだね……）

ティーカは心の中の表情を洩くする。

“完全独立型” と主人を必要とする型ではかなりの差がある。主

人を必要とする型は一つしかない“完全独立型”と違い、“主人依存型”、“人形恋慕型”、“相思相愛型”など更に細分化される。しかし、その何れも主人を得る前では“完全独立型”に遠く及ばない。

「ふむふむ、じゃあ次ね。ヴェルの話では突然いなくなったみたいなんだけど、そいつがアルトを拉致したのかな？」

ティーカは前々からこの一点について疑問を抱いていた。ルナティックは縄張意識が強く、その縄張内で“狩り”を行う。その活動頻度はそう多くなく、諸々の理由からルナティックに遭遇する確率はそれほど高くはないからだ。故にアルトリイが掲げたメモ帳に書かれていたことを、ティーカはある程度予想出来ていた。

『ううん。私を拉致したのは白い服に薄紫色ラベンダーの瞳の子。それしか見えなかったけど、あの速さは人間じゃない。けど、死舞人形とも違う感じだった』

「……」

（やっぱり敵は複数いる？ となると、ただ単に拉致しただけじゃなさそうだね……後でヴェルに聞いてみようか）

『ねえ、ティーカ』

「ん、なあに？」

小悪魔の笑みを浮かべたアルトリイがメモ帳を掲げる。

『色々教えてあげたんだから、私のお願いも聞いて欲しいな』
「いいけど、どんなこと？」

新しいメモ帳に筆を走らせるアルトリイ。それを見たティーカは――

「えええ！？　ダメだよそんなこと！　ボクがリリムに怒られちゃうっ！！」

『お願い！　どうしても会いたいのだっ！！』

「うーん……困ったなあ……」

（アルトが真剣なのは分かるけど……）

リリムは普段は物静かだが、怒ると般若並に怖い。それはティーカが一番知っている。しかも、今回は本業モード。勝手なことをしたら雷が落ちるだけでは済まないかもしれない。

協力するべきか、拒否するべきか――ティーカは頭を抱えながら大いに悩むのだった。

第十話『死舞人形』 Part. 3

「――これが“思慕石”……」

小唄は、リリムから手渡されたヴェルローズの“思慕石”をまじまじと見つめた。

外見は完全な歯車であり、赤と黒の混じり合いが不気味なコントラストを放っている。表面はぬらぬらとした光沢に覆われており、しかし体液ではなくさらりとしている。とても不思議な感覚を小唄は感じていた。

「あったかい……」

掌ごしに小唄の中に伝わってくる柔らかく暖かい感覚。まるで赤子が母親に抱かれているような、懐かしく優しい感覚に小唄の目頭が思わず熱くなる。

「――って、あの……“思慕石”をヴェルから取り出しちゃって大丈夫なんですか!？」

慌てながら聞く小唄に、リリムは取り乱すこともなく答える。

「大丈夫だ、問題ない。まあ、十分くらいなら何の問題もありませんよ」

「? はあ……ならいいですけど」

リリムは今流行りらしい言葉を返したが、小唄には通じなかったようだ。

少し疲れたような様子で、小唄はリリムに“思慕石”を返す。リリムはそれを軽く握り、手をヴェルローズの胸に置いた。

「――!?」

一瞬、赤と黒の光が漏れたがそれもすぐに収まる。リリムの手の中にあつた“思慕石”は消えていた。

「あとは精神体の傷口を縫合して――これで術式終了です。直に目を覚ますでしょう。小唄君、それまで昔話を聞きたくありませんか？」

「昔話、ですか？」

小唄は首を傾げる。昔話についてではない、リリムがヴェルローズの顔をちらちら見ながら口元を笑わせていたからだ。

（何か変なこと考えてそうだな……からかうネタとか。リリムさんそういうの好きそうだし）

「んー、じゃあ聞きたいです」

怪しい様子が見え見えだったが、興味を抱いた小唄は軽く頷いた。

「うふふふ。それではそれでは、昔話の始まりです。今は遙か昔、神代――」

「――それは貴女の役目じゃないでしょ？ お姉様」

「――!？」

「あら、もう目覚めたのですか。お早いですね？」

突如に横から聞こえてきた声に小唄は驚き、リリムは相変わらず口元を笑わせながらやんわりと返した。小唄の目に、ベッドの上ではつきりと目を開けているヴェルローズの姿が映る。彼女はリリムを睨みつけながら、意識を取り戻した直後とは思えない程はつきりとした声で言った。

「白々しいわね。“思慕石”が機能を再開し始めた時点で意識が戻るようにしていたのは、どこの誰だったかしら？」
「うふふ……今回は保険を掛けるという意味で“エリキシル”を使いましたので、すぐに目覚めるとは思ってたわ」

（“エリキシル”？）

彼には聞きなれない、その言葉を聞いたヴェルローズが軽く片眉を上げながら小唄に説明するように言う。

「“エリキシル”、別名“万物の霊薬”よ。そんな代物をよくこの時代に作れたわね……」

「本人たつての頼みでしたので……」

「……そう」

“エリキシル”の生成には有機物の魂が不可欠で、知的生命体であればあるほど質が良いとされる。リリムの表情を見るに、ヴェル

ローズに投与された“エリキシル”には人間かそれに近しい者の魂が使われているのだろう。ヴェルローズはそれ以上追求しないことにした。

「貴女のお陰で助かったわ。ありがとう」

「いえいえ、当然のことをしたまでです。お礼は要りませんわ。…これからお話を？」

「ええ……」

「……分かりました」

しっかりと頷いて、リリムは立ち上がった。

「言っておきますが、“思慕石”が直ったといっても貴女の状態は本調子には程遠い。最低三日は安静にしてくださいね。その間お酒も禁止です。アルトリイさんも完治するのに最低でも一週間は掛かるでしょう。今は私の施療院でティーカに看てもらってます」

三日間の飲酒禁止を聞いたヴェルローズは即座にブーイングを飛ばす。

「えー、お酒くらいいいじゃない」

「駄目ですっ！」

（まあ、隠れて飲めば問題ないわね）

そんな邪なことを考えるヴェルローズだったが、

「ああ、私も今日から小唄君の家に泊まらせていただきますから、私の目を盗んで飲もうなどとは思わないことです」

「……」

リリムに釘を刺され、そのまま固まってしまった。

「あ、リリムさん。空いてる部屋は好きに使っていいので。祐治さんにもそう伝えてください」

「分かりました。ありがとうございます、小唄君。それでは私は一階におりますので、何かあったら呼んでくださいね」

そう言って、リリムは見惚れる程の丁寧な動作で部屋を辞し去った。

後には小唄と固まったままのヴェルローズが残され、微妙な空気が流れる。

どうしようか、と小唄が悩んでいるとヴェルローズのほうからふっと表情を緩ませて小唄に微笑んだ。

「久しぶりね、小唄」

「う、うん……久しぶりって言っても七時間振りくらいだけどね」

「ふふ、それもそうね」

「……………」

「……………」

沈黙。二人とも言葉が続かず、部屋が再び静寂に包まれる。聞こえてくるのは、外からの蛙の鳴き声のみ。

どう切り出そうかと悩んでいたヴェルローズの耳に、か細い声が聞こえてくる。

「ねえ、ヴェル」

「何？」

「どうして……一人で行っちゃったの？」

「……貴方達を巻き込みたくなかったのよ。これは私とアルトの間

題だから」

「“憎悪”の“本質”も見せなくなかったんでしょ……？」

「……リリムに聞いたのね。そう、私の“憎悪”は一旦開放すれば破壊力を増大させる代わりに思考能力を極端に減少させてしまう。それでも仲間を傷つけないくらいの制御は出来たけれど、保証は出来なかったのよ。だから貴方達は連れて行けなかった」

「……」

「……小唄？」

些細な変化に気づいたヴェルローズは小唄の顔を覗き込んだが、やや俯き加減でその表情は分からなかった。最初、ヴェルローズは自分が小唄達に黙って一人で行ってしまったから怒っているのだと思っていた。それもあるのだろうが、だが今は違う理由だということに彼女は気づいた。

「……て……でよ」

「え？」

「置いて……いかないでよ……」

「っ!？」

一度言葉にしてしまえば、もう止めることは出来ない。まるで堰き止められていたダムが一斉に放水を始めるかのように――抑えていた小唄の感情が一気に流れ出した。

「僕を置いていかないでっ……!! 寂しい思いはもう――っ!!」

小唄の目から涙が溢れ、受け切れなくなった涙が次々と頬を伝って流れてゆく。

それは、ヴェルローズに向けられた言葉ではなかった。小唄はヴェルローズの後ろに誰かを見ていた。今は遠き二人の姿を。

（そうか……小唄は両親が蒸発してから六、七年を一人で生きてきた。あの幼馴染の子が色々世話していたのだろうけれど、それでも四六時中居られるわけじゃない。一人の時はご飯を食べる時も、テレビを見るときも、寝る時も……孤独と戦わなければいけなかった。幾ら聡明とはいえまだ十三の子供だもの……そんな生活が耐えられるはずがない。この子はもう限界だったのね……）

そんな時に彼女が現れ、二人で過ごしている内にサファイエとも出会った。三人で暮らす日々小唄の心も大分癒されていった。だが、それで今まで心の奥底に押し込み溜め込んできた感情が消えるわけではない。長い間、限界まで溜め込んできた恐怖と寂寥感。決壊は時間の問題だったのだ。

ヴェルローズは上半身を起こして、泣きじゃくる小唄を優しく抱き寄せる。

「辛かったのね……。大丈夫、もう二度と貴方達を置いてどこかに行ったりしないわ」

「ひう……えぐっ……もう、一人に……しないでっ」

「ええ。これからは私がずっと側にいるわ。安心なさい」

「えう……ひっく……ほん……っど？」

「こんなこと冗談で言えると思って？ 本当よ」

「う……うう……うわあああああああああああああああ
っっ——！！ 寂しかった……っ、ひとりでいるの怖かったよお
お——！！」

「よしよし……そんなに泣かないの。男の子でしょ」

ヴェルローズは抱かれたまま泣き続ける小唄の頭を優しく撫でながら、天井を見上げる。

（私も馬鹿ね。確かにアルトは私の大切な妹。でも……一時の感情に流されて自分を見失って、この子達に悲しい思いをさせてしまうなんて……）

彼女の目から、一滴の涙が頬を伝って流れ落ちる。

小唄は、ヴェルローズの胸に抱かれながら今まで溜め込んでいた全てを涙と声に乗せて流す。それを愛しみながらヴェルローズは、小唄が落ち着くまで優しくゆっくりとその頭を撫で続けた。

「落ち着いた？」

「う、うん……あ、ありがとう……」

落ち着きを取り戻した小唄の顔は茹蛸の如く真っ赤になり、ヴェルローズから顔を背ける。

今、二人は並んでベッドに腰掛けている。小唄が気づかないうちに、彼女はいつの間にか寝間着に着替えていた。

（可愛いけれど、これじゃ話が出来ないわね）

ヴェルローズは、やや強い口調で小唄を振り向かせる。

「小唄、私を見なさい」

おずおずとヴェルローズに顔を向ける小唄。視線の先には、いつもどおりの凜とした彼女の顔があった。

「そう、それでいいのよ。泣くことは恥ずかしいことじゃないわ。」

私は小唄が弱いところを見せてくれて嬉しかったわよ？」

「ううー……ヴェルの意地悪……」

「ふふふ……」

「……あははっ」

小唄の顔にもようやく笑顔が戻り、声も明るいものになった。

再び部屋が静寂に包まれる。しかし先程のような悲しいものではなく、暖かい雰囲気が二人を抱擁していた。

「お話、してくれるんでしょう？」

「ええ、聞いてくれるかしら？」

「……うん、聞かせて」

ヴェルローズは小唄の顔を見る。彼の目から確固たる決意を汲み取った彼女は、一呼吸置いて静かに語り始めた。

「――それでは、二つの昔語りを始めましょう。一つ目は、今は遙か昔、神代と呼ばれる時代よりも更に昔の、“フルツカミヨ”と呼ばれる時代のお話よ」

第十話『死舞人形』 Part. 3 (後書き)

第十話をお届けしました。

小唄とヴェルのシーン、実は割と書くのが苦手な箇所でした。上手く書けてれば良いのですが：(汗

エリキシルはFFシリーズでおなじみのエリクサーのことですが、生成方法と材料は作中のオリジナルで実際のものとは異なります。予めご了承ください。

おまけ

死舞人形の型(一部)

A. 主人が必要ない型

1. 完全独立型 : 主人なしで100%の力を発揮できる型。何者にも束縛されない型と言えるので野心が高くなりがちになる。
2. 自己媒体型 : 自分の力を媒体にして他の死舞人形に分け与える型。レアケース。

B. 主人が必要な型

1. 主人依存型 : 主人に依存(恋や愛じゃなくても良い)することで100%の力を発揮する型。
2. 人形依存型 : 逆に主人から依存してもらうことで100%の力を発揮する型。
3. 主人恋慕型 : 主人に恋慕(愛じゃなくても良い)することで100%の力を発揮する型。
4. 人形恋慕型 : 逆に主人から恋慕してもらうことで100%の力を発揮する型。
5. 相思相愛型 : 主人と死舞人形が共に愛し合うことで100%の力を発揮する型。

6. 主人病愛型 ： 主人に病的な愛情を注ぐことで100%の力を発揮する型。この型を持つ死舞人形は大抵が悲劇的な結末を迎える（主人も同様）

第十一話『昔語りと真相への道』 Part. 1 (前書き)

冒頭から現代FT外ですが、ご了承くださいm () m

第十一話『昔語りと真相への道』 Part. 1

——“フルツカミヨ”。それは現存する殆どの神々も知らぬ、古の神々が栄世の時代。

“白き神々の宮”と呼ばれていた場所に、古の創造神とその娘——それに付き従う神々が平和な刻を過ごしていた。

古の創造神を始めとする古の神々の大半には野心というものがなく、当時の各世界はそれぞれの創造主によって管理又は支配されていた。

古の創造神は男神であつたが、優しく平和を愛する神でもあつた。神同士の争いがあればそれをすぐに諫め、他世界に害を齎さない様にする。俗に言えば正義感が強く、行動力に長ける神でもあつた。しかし、全ての神々が古の創造神に付き従っていたわけではない。今で言う『過激派』の神々も少なくもなかった。その神々は事あるごとに古の創造神に、

「創造主と言えども我らと比ぶれば遙かに愚昧であり兎戯も同然。全ての世界は我らによって管理されるべきです！」

と言い迫つたが古の創造神は、

「其方らの言うことも道理ではある。然し、我らが全ての世界を管理するとなれば其方らの如く反発する者も少なからず出る。さすれば、争いは避けられぬ。全ての気は腐敗し、数多の者が生き絶えて大地は死に至るであろう。私は、そのような世界は見たくないのだ」

と、静かに諭し続けた。

幾ら論そうとも、過激派の神々の大半は納得しなかった。だが、絶大な力を誇る古の創造神に表立って反旗を翻す者もまた居なかった。

そんな、一概に平穏とは言えない刻の中——古の創造神の一人娘であるエルファリシアは父神の寵愛を受けながら、何事にも影響されずに真っ直ぐと育っていった。

ある刻、エルファリシアは父神である古の創造神に聞いた。

「お父神様。どうして、あの方々は全ての世界を自分達で管理したがるのですか？ わたしやお父神様は今のままで良いと言っておりますのに。そんなことをすれば、必ずや大きな争いが起きてしまいます……」

分かり合えない悲しみを表に出すエルファリシアに、父神は優しく答える。

「そうだね、エル。私も同じ考えだよ。彼らは野心が強すぎるが故に、本当にすべきことを理解出来てないのだよ。だが、我らの生は悠久だ。何れは理解^{わか}って貰えるだろう」

そう言って、父神は娘を優しく撫でた。

——それから幾星霜が過ぎた。古の神々は表面上は変わらず平和な刻を過ごしていたが、とある出来事が平和な刻に終わりを告げた。禁忌に触れようとした者達によって一つの世界が崩壊した。次元を揺るがす程の衝撃は各世界に多大な影響を与え、それは“白き神々の宮”も例外ではなかった。内部に損害はなかったが、外部の建物の半分近くが崩壊。幾柱かの古き神が次元の歪みへと消えた。

この大事件には流石に古の創造神も動かざるをえず、神々の軍隊によって首謀者達の魂は捕らえられた。裁きの結果、転生を許されずに全員が永久幽閉の刑に処される。だが、過激派の神々はこれだけでは納得しなかった。そして、紛糾したのは過激派の神々だけではなかった。

古き神々によって統制されてきた、新たな神々である。新たな神々は世界崩壊の恐ろしさを目の当たりにし、このまま創造主だけに管理させるのは良くないと次第に過激派の神々と協調を取り始めたのだ。

「今、我らが全ての世界の管理に乗り出したならば再び同じ事が起こるであろう。其方らは何故それが分からぬのだ」

何時にもまして静かに論ずる古の創造神と、

「今、我らが全ての世界の管理をしなければ誰彼が再び禁忌に手を出すか分かりませぬ。さすれば、同じ事態を引き起こすかも知れません。彼奴らは愚かなる者共なのです。何故それが分からないのですか!？」

声高に論ずる過激派の神々と新たな神々。そのどちらも一歩も譲ることはなかった。何故ならば、どちらも全ての世界の事を案じた正しい言い分なのだから。

長い間繰り広げられた議論は平行線を辿る一方であった。そして、決裂——過激派の神々は新たな神々と共に軍勢を集め、時を待った。

——漸く世界崩壊の余波によって崩れた建物の修復が済んだある刻、“白き神々の宮”を過激派の神々の軍勢が襲った。

古の創造神に従う神々はすぐさま応戦したが、過激派の神々の軍

勢は十万を超えていた。次々と斃たおされてゆく古の神々。捕らえられた古き神々の係累けいるいは例外なく根絶やしにされた。軍勢の中には、神々が使役するとは到底思えぬ醜悪な魔獣も混じっていた。魔獣達は逃げ遅れた未だ力なき神の子達を容赦無く喰らい、蹂躪じゅうりゃんした。

古の創造神の係累を討ち取らんとする軍勢は“白き神々の宮”の内部まで侵入した。古の創造神とエルファリシアと直属の神々は最後まで抵抗し、過激派の神々の多くもまた討ち取られた。しかし多勢に無勢——長き戦いの末に古の創造神とエルファリシアは討ち取られ、“白き神々の宮”は過激派の神々によって制圧された。その後、軍勢によって崩壊した“白き神々の宮”は次元の奥深くに封印される。過激派の神々と新たな神々は新たに造られた“白亜宮”に移り、全ての世界は“神界”の神々によって管理されるようになった。

こうして、古の神々の系譜は絶やされた。しかしエルファリシアは討ち取られる瞬間に己の心を八つに分け、誰にも悟られぬように“歯車”の形状にして次元の歪みへと送り込んでいた。

八つの“歯車”はお互いに引き寄せられるかのように同じ世界に落下し、刻が来るまで眠りにつく。

そして、永きとも云える刻が過ぎた現代——目覚めた“歯車”は己の意思で人の形をしたものに入り込み、覚醒と共に活動を始める。死舞人形の核である“思慕石”として——。

「……少し、休憩しましょうか」

記憶に刻まれた物語を一通り話し終えたヴェルローズは、語った疲れを吹き飛ばすように大きく伸びをした。小唄も同じように伸びをしたが意外と緊張していたのか、そのままベッドに倒れこんでしまった。

「あ、あれ？」

「ふふ、よほど緊張しながら聞いていたのね。そんなに難しい話だった？」

ヴェルローズは目元を笑わせながら、倒れこんだ小唄を楽しそうに覗き込む。

「んー……正直スケールが大きすぎてあまり理解出来なかったけど、一つだけ気になった点が。前にヴェルから聞いた話だと、死舞人形の数はそれなりに居るってことだったよね？ でも……今の話を聞いたら、“思慕石”を持つ八人以外は死舞人形と呼べないんじゃないかな？」

（流星は小唄ね。最も重要な箇所を突いてきたわ）

いい質問ね、とヴェルローズは人差し指を立てて、

「確かにどちらも死舞人形には違いないのだけど、“思慕石”を持つのは“オリギン・オッタ原初の八体”だけ。小唄にも分かる言葉で言えば、オリジナル・エイトということね。“原初”以外は主人に愛された人形が“思慕石”の影響を受けて自我を持ち、時には私達に匹敵する力も手に入れる……正確な呼び名はないけれど、私達は普段“リブライカーン模倣”と呼んでいるわ。“思慕石”の影響が強ければ強い程、強力で歪んだ力を持った“模倣”が生まれやすい。あのベリティエのようにね……」

一旦言葉を切った彼女は、憎しみの眼差しでカーテンの向こう岸の月を見上げる。

「ベリティエって、さっきまでヴェルが戦ってた？」

「ええ、そうよ。“翠の毒牙”ベリティエは“模倣”でありながら“墮落”したルナティック。それだけなら私の敵ではなかったけれど、あいつは“完全独立型”……主人を必要としないレプリカントだったのよ。まあ、自分を見失っていた私が悪いのだけだね……」

その時のことを思い出したのか、小唄から目を逸らすヴェルローズの頬に僅かな紅が差す。小唄は彼女に悟られないように軽く笑いながら、脳裏ではとあることを真面目に考えていた。

（ヴェルって普段は凜々しいけど、こういうところ可愛いんだよね。まあ、それは置いといて……人形かぁ。そういえば父さんと母さん、よく人形を買ってきて僕に見せてくれてたっけ。あれは結局どこにいったんだろう？）

小唄がまだ小学校に入る前の話だが、そのことはよく覚えていた。彼の両親はことあるごとに人形を買ってきては、それを小唄に見せていたが一回見た後はどの人形も部屋に飾られることはなかった。小唄がそのことを母親に聞いたが、母親の返事は常に「あまりにも綺麗だから大事に閉まっちゃったのよ」だった。故に今でも小唄は、その人形達がどこにあるのか知らない。

（……そういえば、すごく怒られるかもしれないからって、父さん達の研究室には入ったことなかったな。まさかとは思うけど、そこに――？）

「――唄？ 小唄？」

「えっ？」

突然片耳から聞こえてきた声に小唄はハッと体を起こし、ヴェル

ローズの顔を見た。彼女の表情を見て、思考に没頭するあまり一時的に意識が飛んでいたことに気づいた小唄は軽く頭を振る。

「あー……ちょっと考えすぎてたみたい。ごめんね」

「別に謝らなくてもいいわ……大分疲れているみたいね？　続きはまた明日にしましょうか」

今日は色々なことがあったので小唄も相当疲れているだろう。しかし、案じて言うヴェルローズに小唄ははつきりと返した。

「ううん、大丈夫。もう一つ、昔話があるんでしょ？　聞かせて」

小唄の目を見るヴェルローズ。確かに疲れは見えるが、それを隠し通そうとしているようには思えない。一呼吸置いて、彼女は小唄に頷き返した。

「分かったわ。それでは、二つ目の――私自身の過去の物語を語りましょう」

聞いて小唄は思わず佇まいを直す。彼が聞くための態勢を整えるのを待ってから、ヴェルローズは時折遠くを見つめるような目をしてながら語り始めた。

「私が死舞人形として目覚めたのは約十年前。小唄も夢に見た、あの夜のことよ。あの日……あいつらは前触れもなく家に押し入って、あの子の父親、母親、そしてあの子を散々犯して^{なぶ}弑したの。何故だか分かるかしら？」

「んーと……」

ヴェルローズの鋭い視線を受けて小唄は考える。

『あの子』が、彼女とアルトリイを寵愛していた最初の主人を差す言葉ということは分かっていた。しかし縋り殺した理由となると該当する言葉は多数あるが、その中からぴったりと当てはまる言葉を見つけ出すのは小唄でなくとも困難なことだった。

「……ごめん、ちょっと分かんないや」

考えた末に、小唄は正直に答えた。

「でしょうね。大方、当てはまる言葉が多すぎて定まらなかったところかしら。前にも言ったけれど、死舞人形になるには持ち主が強い感情を持つことが必要。そして、それが今わの際であれば主人に愛された人形はほぼ死舞人形になるわ。あいつらは何らかの手段でそれを知り、私達を死舞人形として覚醒させるために家族とあの子を殺したのよ……」

小唄は静かな言葉の裏に激しい怒りを見た。その時の全てを見ていたのだろうヴェルローズとアルトリイ。二人の心情はどのようなものだったのか。それは煮え滾る^{たぎ}ような怒りと、相手を恐怖させる憎悪だったに違いない。

「全てが終わった深夜に私達は“闇の薔薇”ヴェルローズ、“月の光”アルトリイとそれぞれ名乗り、“原初”の死舞人形の二人として覚醒した。これはあの子が私達に付けてくれた大事な名前。覚醒してお互いを認識し合った私達は誓ったわ。あの子の人生を滅茶苦茶にした拳句に縋り殺したあいつらを許さない。必ず地獄に叩き落してやる——とね」

その時のことを思い出しているのだろうか、ヴェルローズは紅い

瞳をぎらつかせながら視線の向こうに敵の姿を見ているかのようだった。それを横目で見た小唄は言い知れぬ恐怖に身を震わせる。

「あいつらは、幾度となく私達に向けて兵を差し向けてきたわ。私達はその兵達を殺し、幾人かは目的を聞き出すために拷問を繰り返した。所詮は下っ端だから詳しいことは何一つ聞き出せなかったけれどね……」

（……やっぱり気になる。思い切って聞いてみよう！）

それまで静かに話を聞いていた小唄は、話の最初から気になっていたことを話に割り込むようにして口を開いた。

「あのさ、ヴェル。一つ聞いていいかな？」

「……何かしら？」

既に予想していたのだろう、ヴェルローズは紅い瞳で小唄の顔を見ながら先を促す。

「あいつらって、誰のことなの……？」

「——っ！！」

瞬間——ヴェルローズから禍々しい気が漏れ出す。察知した小唄は慌ててヴェルローズを見たが、厳しい表情の他はいつもの彼女に変わりはないかった。

（あれ……？）

逡巡の後に一つ息を吐き、ヴェルローズは忌まわしきその名を言う。

「……ヴァンゲル―デ製薬。見た目は一介の製薬会社……だけど、その裏では自分達の目的のためだけに違法な実験を繰り返している――社長とそれに与^{くみ}するイカれた教授、その兵隊共のことよ……！」

静寂の外で、初夏の夜風が哭^ないた――。

第十一話『昔語りと真相への道』 Part. 1 (後書き)

オッタ↓「数字の」 8 ? t t a

第十一話『昔語りと真相への道』 Part. 2

「――……あら？」

一階のリビングでは祐治とリリム、そして祐治にはまだ認識出来ないサファイエが揃ってテレビ番組を観ていた――はずだったのだがリリムが御手洗いから戻ってきた時には、祐治のみならずサファイエの姿までもが消えていた。
観る者のいないテレビが、誰もいないリビングに空しく映像を流す。

「祐治さんとサファイちゃんはどこにいったのでしょうか……？」

リリムは首を傾げながらもソファアに座り、一人テレビ番組を観ながら彼らを待つことにする。

それから、十五分程経っても二人は戻ってこなかった。

「……」

薄明りの廊下に、布地と木の床が擦れる音だけが響く。

自然の灯りを頼りに注意深く辺りを見回しながら最低限の音を立てて歩いていたのは、先程までリビングでテレビを観ていた祐治だった。

（不自然に長い廊下だな。まるで、この先に見られたくないものでもあるかのようだ……）

祐治の言葉通り既にそれなりの時間を歩いているのにも関わらず、未だに変化は見えてこない。正門から入った祐治は知らないが、織部家はL字型の構造をしていた。彼が今歩いているのは、一階の渡り廊下に当たる場所だった。

歩きながら、祐治は思考を張り巡らせる。

（僕の勘が正しければ、この奥に二人の研究室があるはず。何か確証を得れるものが残されていればいいんだが……）

物盗りや興味本位でこの家を探索しているわけではない。以前ヴェルローズに頼んだ話だが、こうして自らが調査する機会を得たならば自分から動くのが一番良い。そしてこれは小唄にとっても悪い話ではない。祐治は、そう確信していた。

果たしてそれが正しいのか否か、ようやく薄明りの向こうに変化が見えてくる。祐治が更に歩いて確かめると壁に突き当たった。

（行き止まりか？ ……ん？）

不審に思った祐治が辺りを見回すと、左側に更に奥へと通じるドアがあった。

早速ドアノブに手を掛けるが、ガチャガチャと硬い反応が返ってきただけでドアは開かない。

（まあ、当たり前か。こんなときは――）

祐治はジャケットの内ポケットに手を入れ、ピッキング・ツールを取り出す。先が妙に曲がった金属製の棒を鍵穴に差し込んだ時――

『――そこから先は立ち入り禁止だよ。何してるのかな?』

「っっ!？」

祐治の頭に少女の声が直接響いてきた。声の主を探して首を左右させて後ろを振り向くと、そこには燐光を放ちながら祐治を見ている妖精のような存在があった。

薄明りの中で光の欠片を零しながら浮いているその存在は、幾ら可愛い姿をしていても一般の人間からすれば十分ホラーだ。だが、リリムやティーカ等の人外の存在が近くにいる祐治は冷静だった。

「君は？」

落ち着き払った声で、目の前の妖精を見つめながら言う。

『わたしはサファイエ。ご主人さまに付き従う、守護精霊のようなものだよ。――で、もう一度言うよ?　そこで何してるのかな?』

主人は誰か――それは言うまでもない。この先が立ち入り禁止だと言うことを知っている。祐治が調査を頼んだヴェルローズからはこの部屋のことば聞いていない。ならば彼女は小唄の守護精霊に違いない、と祐治は心の中で結論付けた。

(それよりも――)

祐治の額から汗が流れる。

目の前の男を不審者と認識したサファイエは既に臨戦態勢に入っており、下手なことを言った瞬間に祐治は吹き飛ばされているに違いない。一般の人間である祐治でさえも、ある程度感じ取れる程の殺気をサファイエは周囲に漂わせていた。主人に害なすものは全て排除する、それが守護精霊の本来の役目だからだ。

真実を話して信用してもらえない。祐治はありのままに話すことにした。

「僕は、ヴェルローズさんから織部家の調査を頼まれていてね。小唄君の両親がどんな研究をしていたか、それだけはどれだけ資料を集めても分からなかったんだ。だから、今回の機会を得て調査することにした。家捜しとかそういうのじゃないから安心して欲しい」

祐治の弁解に対するサファイエの視線は変わらなかった。しかし信用は出来る人物と思ったのか、周囲を覆っていた殺気は霧散した。

『ふーん。まあ、一応信じてあげる。でも、最後に一つだけ聞かせて。それは、ご主人さまのためになること?』

「ああ、最終的には彼の懸念けねんが一つ減ると思う」

祐治は淀みなくはっきりと答えた。

『分かった。じゃあ、わたしもついていく! 変なことしたら容赦しないからねっ?』

「ははは、オーケー。よろしくな、サファイエちゃん?」

『あ、わたしのことはサファイでいいよ』

「分かった。よろしくな、サファイちゃん」

鋭い視線はいつの間にか元に戻り、サファイエはいつもの笑顔を
見せながら祐治の周りを飛び回る。その様子に苦笑しながら祐治は、
鍵穴に差し込んだ金属棒を上下左右に操作する。数分の格闘の後、
鍵穴からカチリと小さな音が聞こえた。祐治とサファイエは頷き合
ってドアノブに手を掛けた瞬間――

「――そういうことでしたら、私も付いていきますね」

「おわっ!？」

『ひゃあっ!？』

突然の声に驚いて思わずドアノブから手を離れた祐治と、可愛ら
しく驚きの声を上げるサファイエ。二人が後ろを振り向くと、正装
したままのリリムが微笑みながらそこに立っていた。

「り、リリム……いつからいたんだい？」

「サファイちゃんが貴方と接触した時ですね。何やら只ならぬ雰囲気
でしたので、サファイちゃんの殺気に紛れ込ませていただきました」

「殆ど最初からじゃないか……」

『わたしも全然気づかなかったよ……』

がつくりと肩を落とし、脱力する二人。

「うふふ、まあ良いではありませんか。それで、私も付いていつて
よろしいですか？」

と、リリムは手元を口に当てて微笑みながら聞く。

「どうやってここまで来たのか、聞きたいことは他にもあるが今は時間が惜しい。祐治はリリムの協力を快諾した。」

「ああ、人手は多いほうがいいからね。お願いするよ」

「ありがとうございます」

リリムは丁寧にお辞儀をした。祐治は再びドアノブに手を掛け、右に回す。ややさび付いたドアがギィーと怪しい音を立てる。祐治が一步足を踏み入れた途端――天井の蛍光灯に灯りが燈り、コンクリート製の壁と階段が三人を出迎えた。

「なるほど。人が進入すると勝手に蛍光灯が点く仕組みのようですね」

リリムが関心したように頷きながら言う。

「そうだね。あるのは地下に通じる階段だけ、か……。サファイちゃんはこの先のことを何か知ってるかい？」

『ううん、知らない。ご主人さまこの先に行くの何か怖がってるみたいだったから……』

サファイエは静かに首を横に振った。

「そうか……。まあ、この先に何かあるのは確実だ。行ってみよう」

祐治を先頭に三人は階段を降りてゆく。それほど長い階段ではなく十数段で地下に到達し、すぐ先にドアが見えた。祐治はドアノブを回してみたが、やはり鍵が掛かっている。ドアは開かない。

「当然か……」

祐治は再びピッキング・ツールを取り出し、鍵穴と格闘し始めた。今度は先程よりも短い時間で鍵の解除に成功する。

「よし、開いた。中に入るよ？」

『う、うん』

「気をつけてくださいね……」

何か仕掛けられているかもしれない、と祐治は慎重にドアノブを回す。さび付いてないドアは音を立てることなく開いた。祐治が一步足を踏み入れる。すると、地下への階段と同じ仕組みなのか天井の蛍光灯が勝手に辺りを照らし始めた。全員が中に入り、ドアを閉めると――

「な、なんだ!？」

何かから吹き付けられるような音が聞こえてきた。やはり何か仕掛けられていたのか、と祐治が辺りを見回す。しかし、正体が分かった途端に慌てていた自分が恥ずかしくなった。何のことはない。単にエアコンが起動しただけだった。恐らく、人の存在を感知して部屋を快適に保つ仕組みなのだろう。

「それにしても、ここがお二人の研究室ですか……」

『なあーんにもないね……』

軽く溜息を吐きながら言うリリムの言葉をサファイエが繋げた。研究室と思しき部屋には、空の棚と何も置かれてない机と大きめのテーブル。それに、幾つかのビニール椅子が置かれているだけだった。

「とりあえず、何か残されてないか探してみよう」

『うんっ』

「分かりました。サファイちゃんは私と一緒に。あちらの机を探しましょう」

三人は頷き合って部屋の中を探し始める。

地下にあるためかそれとも空調設備のお陰か、埃は殆どなく作業は順調に進んでゆく。

十分後、祐治とリリムはそれぞれ見つけたものをテーブルの上に置いた。

「祐治さんが見つけたのはノートで、私が見つけたのはこの箱ですね。どちらから確かめますか？」

ノートはあちらこちら黄ばんでおり、年季を感じさせる代物。箱も古くなった木独特の香りを漂わせており、長い間そこに置かれていたことを証明している。迷った末に祐治は、箱の中身を確認めることにした。

「箱を開けてみよう」

リリムとサファイエが見守る中、祐治は箱の取っ手に手を掛けた。少し抵抗を覚えたが、取っ手はすぐに外れる。箱の中に覗き込むと、都市伝説のコトリバコの如く子供の指が――ということではなく、赤色をした歪な形の何かが入っているだけだった。

「なんだこれ？」

訝しげながら祐治はそれを手に取り、テーブルの上に置く。歪いびつな

形をしているが、ハートの形にも見えなくもない。中央から分けるようにして筋が入っているそれは人間の心臓を彷彿ほうふつさせる。それを興味津々に見るリリムとサファイエ。そっとリリムがそれに手を触れた途端、彼女の表情が見る間に変化していった。

「リリム、どうした？」

「こ、これは……」

信じられない、とでも言うような面付きでリリムは口を開く。

「ア、人工生体核！アーティファクティカル・バイオニクスコア それもここまで精巧な……」

『人工生体核？』

聞きなれない言葉にサファイエが聞き返し、落ち着きを取り戻したリリムは平静に答える。

「無機物の中に埋め込み、あたかも有機物であるかのように命を与えるものです。高度な人工知能を持ち、何れは自律するまでに至ります。今の技術では完全なオーバー・テクノロジーのようですが……なるほど」

「何か、わかったのかい？」

「ええ、この人工生体核……内部に魔術式の反応があります。それも、相当高度且つ難解に織り込まれた式です」

『あ、確かにわたしも感じる。けど……どうしてご主人さまのご両親が魔術を？』

首を傾げるサファイエの横で祐治は考える。

（そう、二人は科学者であって魔術とは無縁のはずだ。……いや、待てよ？ 何か忘れているような……そうだ！ 織部晋吾の妻、紗

夜香は鈴鳴の直系。そして、玲歌さんが言っていた彼女が得意とした魔術は――)

「“傀儡”魔術……！」

「えっ？ いきなりどうしたのですか？ 祐治さん」

『何か気になることでもあったのー？』

祐治は思わず声に出してしまったことに気づき、問題ないことを身振り手振りで心配そうに気にかける二人に示した。

「ああ、なんでもないよ。こっちのノートも見えてみようか」

祐治の行動にリリムとサファイエは不審を感じたが今は追求せず、共にノートを見ることにする。

祐治がノートをめくり、最初のページを開く。書かれていたのは予想通りの、研究の過程や成果だった。前半は見ても理解出来ない難解な式や構造図で埋め尽くされており、後半からは研究成果に関する日記が書かれていた。

第十一話『昔語りと真相への道』 Part. 3

『この日、ようやく私達の苦勞が実った。

私が作った人工生体核に妻が“傀儡”の魔術式を組み込み、それを埋め込み前にテストしてみたところ、正常に動作したのだ。

人工生体核の成功作第一号の完成に私と妻は喜び、それを実験に使う人形に埋め込んでみた。
ファースト・コア

しかし、実験は失敗に終わった。

人形に人工生体核を埋め込み動作させた途端、高度すぎる魔術式に人工生体核が耐え切れず、人形ごと破裂してしまったのだ。

だが、成功の糸口は掴めた。

素材の選別が今後の課題となるだろう。

この技術が未来に役立つに違いない、と私は思うのだ』

277

「……小唄君のお母様は、“傀儡”の魔術使いだったのですね……。それも相当な使い手、これなら彼の異常な魔力資質にも頷けます」

『そうだね……。ご主人さまの魔力は人間が扱えるような量じゃないし、ご主人さまのお母さまはどんな人だったんだろうー？』

「……」

思い思いの感想を述べる二人。それを確認した祐治は更にページをめくる。

人工生体核の成功作第二号は素材と魔術式の相性が悪く、テストの段階で不具合が発生したと日記の中で書かれていた。それは、先程の箱の中に仕舞われていたものだということが分かった。
セカンド・コア

そして金属生命の可能性がある珪素^{シリコン}を素材にした、完全な成功作らしい第三号について書かれていた次のページをめくった瞬間――全員が固まり、呻き声のような声を上げた。

「な……!?!」

「こ、これは一体……っ」

『えっ、これってどういうこと……!?!?』

『完全な成功作である第三号を作った数日後、私達宛に一通の手紙が届いた。

住所は不明。差出人は生体工学の権威らしい、シュルト・オツペンハイムと名乗る者だった。

内容は「貴殿らの研究を高く評価し、是非とも我々の研究チームに招き入りたい」というもので、封筒の中には瑞典までのファースト・クラスの航空券が二枚入っていた。

乗機日は五日後になっていた。私と妻は迷ったが、この申し出を受けることにした。

私達の研究は結局、学会では評価されないどころか相手にもされなかったからだ。

三日もあれば仕度は整うだろう。この成功作^{サード・コア}第三号はサンプルとして持つて行くことにする』

ここまでは問題ない。彼らを驚愕させたのは、この下に書かれていたことだった。

『勿論、私達の子である小唄も連れて行く。』

どちらの実家にも頼れず、私達がいなくなれば身寄りがなくなるこの子を置いて行くことは忍びない。

自分達の研究のせいでありこの子に構ってやれなかったが、これから自然に囲まれた中で伸び伸びと育ててゆくことが出来るだろう』

この日を最後に日記は途切れ、後は幾らページをめくろうとも白紙だった。

事の大きさに祐治は唇を震わせながらも、脳裏では思考を展開し続けていた。

（これは玲歌さんから貰った情報と一致する。ここに書かれていることが本当なら、本来なら予定通り五日後に三人で渡欧していた。しかし、実際には小唄君だけ置いていかれた。その前に二人の身に何か起こったからだ。間違いない……織部晋吾と紗夜香は瑞典にいる）

結論付ける祐治の横で、不安の色を隠せないリリムとサファイエが彼に語りかける。

「祐治さん……これ、どうしましょう？　これが本当のことなら小唄君の御両親は……」

『うん……ご主人さまに教えるにはショックが大きすぎるかも……』

「……そうだが、近いうちに話さないといけないだろう。僕に任せてくれないか？」

力強く言う祐治に、二人は小さく頷いた。

出来る限り痕跡を消し、ノートと箱を持って三人は研究室を後にする。小唄達に気づかれないうちに祐治はノートと箱を車のトランクに仕舞い、三人は集中出来ないまま、再びテレビ番組を観るのだった。

——祐治達が地下室から戻った頃、ヴェルローズの昔語りも佳境に差し掛かっていた。

「あいつらは兵隊の他にも数多くの、兵器として改造された人形を繰り出してきたわ。でも、それは心を持たない……ただ只管に命令通りにしか動かない悲しい人形。あいつらが創ったもので自我を持っていたのはたった二人だけ。私達はその二人と戦い続けたけれど決着は着かなかった。それから、馬鹿馬鹿しいことだけど……地元ひたすらの古い師の予言を信じて日本に飛んだわ。そして、あの日……あの場所ひたすらで貴方と出会った」

「……」

小唄は無言だった。話だけ聞けば利用するために小唄に近づいた、とも取れるがそうではない。これから彼女がすること、そして彼が言うべき言葉——その全てが理解出来ていたからだ。

「あ……」

小唄に触れる、柔らかな温もり。気づけば、ヴェルローズが彼を軽く抱きしめていた。

「勘違いしないで。小唄を利用するために近づいたわけじゃないの

よ？ 私には貴方が必要で、貴方には私が必要……。私が言いたいこと、分かるわね？」

（あはは、ヴェルらしいや）

端から見れば傲慢極まりない言い方だが実に彼女らしい、と小唄は苦笑しながらも確かに頷いた。

「小唄、私を選びなさい。そうすれば私は全ての災厄から貴方を守り、貴方と永遠に時を刻むでしょう。そして、私はもう逃げない。必ずこの手であの子の仇を討つわ」

前半分は謡うように、後半分は確かなる決意を込めてヴェルローズは誓いの言葉を言う。

小唄はそれを真正面から受け止め、

「うん、分かった。でも、守られているだけじゃ嫌だから僕もヴェルを守るよ」

彼もまた、誓いの言葉を力強く言った。その様子に、ヴェルローズは満足そうに微笑み、

「ふふ、期待しているわ。これからよろしくね小唄。では――」

微笑みを崩さないままに紅の瞳を閉じる。

「口付けを交わして“死舞人形との契り”と為す。“闇の薔薇”ヴェルローズの唇に、熱い口付けを――」

（……綺麗だ）

瞳を閉じて微笑みを湛えるヴェルローズの顔は、あたかも高貴で精巧なアンティーク・ドールそのものだった。その表情の美しさに小唄の心臓は早鐘を打つ。怖々と顔を近づけ、彼はそっと彼女に口付けた。

暫くの間、二人は抱き合いながら熱い口付けを交わし続ける。どちらからともなく唇を離すと、二人の頬はほんのりと紅く染まっていた。

「ふふふ、相変わらず小唄はキスが下手ね。もっと練習なさい」

「うう……そんなこと言ったって……やり方なんて知らないし……」

ヴェルローズの優しい視線に、小唄はますます頬を紅く染めて俯く。

「女性を喜ばせるには必要なことよ。勿論、悦ばせる時もね。さて、後は“思慕石”に任せて……私たちは寝ましょうか」

「そ、そうだね。おやすみなさい」

小唄はそそくさと自分の部屋に戻ろうとしたが、間髪入れずに腕を掴まれる。力では到底敵わない。小唄はヴェルローズの手で再びベッドに引きずり込まれた。

「どこにいくのよ？」

「どこって……自分の部屋に」

それを聞いたヴェルローズの紅い瞳が、捕食者の如く妖しく煌く。
小唄は、既に嫌な予感しかなかった。

「貴方の寝る場所はここよ。後は“思慕石”に任せて、ってさつき

言ったでしょう？ “死舞人形との契り”は成立すると、“思慕石”に認識されるわ。けれど、私達の“情報”を書き換えるまでに約半日掛かるのよ。だから、今日はここで寝なさい」

（本当は離れていても問題ないのだけどね、ふふふ）

「うー……分かったよ」

そう言われては反論のしようもない。小唄は観念してヴェルローズの隣に寝転んだ。

「そう、それでいいのよ。電気消すわね」

ヴェルローズが手元のスイッチを操作すると、無機質な灯りは消え、代わりにカーテンの隙間から入り込む月の光が二人を暖かく照らす。小唄にも掛かるように上掛けをばさっと広げて、彼女もまた小唄の隣に寝る。

少しの間、小唄は所なさげに体をもぞもぞとさせていたが余程疲れていたのだろう。すぐさま寝息を立て始める。

「今日は色々あったものね。おやすみなさい、小唄。良い夢を」

ヴェルローズは小唄の頬にそっと口付け、暫く寝顔を楽しんだ後に瞼を閉じた。

第十一話『昔語りと真相への道』 Part. 3 (後書き)

第十一話をお届けしました。第二章の舞台確定です。

なんか、今回は現代FTっぽくなくてすみません(汗

フルツカミヨに関しては、このような背景があった程度に留めておいていただければ…。

“死舞人形との契り”には、“正室の契り”と“側室の契り”の二種類があります。ヴェルと小唄が交わしたのは、一人としか交わせない“正室の契り”です。

おまけ

主要登場キャラクターの一人称

小唄 ↓ 僕^{ぼく}

ヴェルローズ ↓ 私^{わたし}

アルトリリイ ↓ 私^{わたし}

サファイエ ↓ わたし

ティーカ ↓ ボク^{わたくし}

リリム ↓ 私^{わたし}

祐治 ↓ 僕^{ぼく}

由梨 ↓ あたし

ベリティエ ↓ アタシ

ルナテラ ↓ ルナ

白衣の人形殺し ↓ 私^{わたし}

今は未だ遠き未来の夢（前書き）

サイドストーリーです。本編にはあまり影響ありませんので、先を読みたい方は飛ばしてください。

この話には以下の内容が含まれます。苦手な方はご注意ください。
キスシーン

時系列・・・

今は未だ遠き未来の夢

死舞人形と主人が“死舞人形の契り”を交わした夜に、主人は未来の夢を見るとき言う――。

「――課長、織部課長！」

突然、耳から聞こえてきた声に小唄は瞼を開いた。まだはつきりしない視界で辺りを見回すと、無機質なデスクに書類を置いて仕事に勤しむ社員達の姿が見える。どうやら、一時的に意識が飛んでいたようだ、と小唄は頭を軽く振った。

「課長、大丈夫ですか？」

「あ、ああ……すまない。何か少しばかり夢を見ていたみたいだ」

小唄は、目の前で心配している部下を安心させるように笑みを浮かべて言った。

（もう、あれから六年か……）

死舞人形を巡る全ての争いをヴェルローズ達と共に終結させた小唄は、十八歳になると同時に『黎明』傘下の商社に入社し、十九歳で課長に抜擢された。それに対し一時は一部の者からやっかみを受けていたが、『黎明』は基本的に実力主義であり、コネだけで昇進

出来る場所ではなく、全て小唄の実力の賜物——それらはすぐに払拭された。今は妻と娘の三人で幸せに暮らしている。

「あ、課長あれっしょ？」

「ん、何だ？」

小唄が顔を上げると、先程の部下がニヤニヤ笑いながら、

「昨日、奥さんと頑張りすぎたんでしょ？ いやー課長の奥さんってすごい美人って噂っすからねえ。昨夜はお楽しみでしたね！」

「ば、馬鹿っ！ さっさと仕事に戻れっ！！」

「はい、失礼しましたー！」

小唄が怒鳴ったにも関わらず、飄々と自分のデスクに戻る部下。これ以上彼に怒鳴ったところで暖簾に腕押し豆腐に鏝、かすがい小唄は重く溜息を吐く。

「全く、あいつは……」

普段はおちゃらけた人間だが、仕事になれば一流の手腕を発揮する、彼の一の部下である。故に小唄も強くは言わないのだ。

「さて、と——」

視線を自分のデスクに向けると、決して少ないとは言えない量の書類が積まれている。

残業はご免、と小唄はデスク・ワークに集中し始めた。

——午後五時になり、残業のない者は帰り支度をし、タイムカードに打刻して職場を後にする。

「課長、お先に失礼しますー」

「ああ、お疲れさま。……よし、これで終わり、と」

その日の仕事を終わらせた小唄もまた帰り支度をしていると、目の先に革靴が見えた。

正体が分かると彼は顔を上げ、慌てて姿勢を正した。

「五十嵐部長に立花部次長、お疲れさまです！」

「ありがとう。織部君、君も今日の仕事は終わりかね？」

五十嵐部長と呼ばれた、五十代近くの男性が柔和な表情で小唄に聞いた。

「ええ。今から帰るところです」

「それは良かった。これから立花君と一杯飲みに行くんだが君も付き合わんか？」

五十嵐が手で猪口を傾ける動作をする。それに合わせて、立花と呼ばれた中年の男性も小唄を飲みに誘う。

上司との飲みは重要なことであり、上司と仲良くなることで普段は聞けない色々な話を聞けたりする。しかし――

「すみません。お誘いは嬉しいのですが妻と娘が待ってますので……」

小唄はやんわりと断り、丁寧にお辞儀する。

「そういえば、君は愛妻家だったな。はは、気にしなくても良いよ。また今度付き合ってくれたまえ」

と、特に気分を害することなく、五十嵐と立花は世間話をしながら去っていった。

二人の姿が見えなくなったのを確認してから小唄は帰り支度を終え、帰路に着いた。

「――ただいまー」

家に着いた小唄がドアを開けて玄関に入ると同時に、騒がしい音が二階から響いてくる。続いてドタドタと急いで階段を降りてくる人影が見え、小さな人影はそのまま小唄に抱きついた。

「おかえりっ、お父さま」

「ただいま、アリス。いい子にしてたかい？」

「うんっ！」

「そうかそうか」

「えへへっ♪」

小唄はアリスを抱いたまま片手でマロン・ブロンドの髪を撫ぜ、その感触が気持ちいいアリスは笑いながら小唄にぎゅっと抱きついて気持ちを伝えた。

少女の名前は織部アリス、彼と彼の妻の間に出来た子供だ。彼の妻は人間ではないので、夫婦の営みによって産まれてきた子ではないが、二人の愛娘には変わりなく、小唄と彼の妻は娘を寵愛し育ててきた。

アリス自身も人間ではないが、外見は人間と変わらないので近所

からあれこれ言われることもない。現在の年齢は五歳で、普通の子供であれば幼稚園に通っている年だが、不特定多数の人間と関わりせるのは危険、と暇な時に彼の妻が勉強やマナー等について教えるに留めている。

暫くアリスの髪を優しく撫でていた小唄だが、そろそろ腕が疲れてきたのかアリスを抱っこして降ろそうと思った時、台所から大人らしい赤と黒の服の上からエプロンを掛けた、長いブロンドの少女が姿を見せ、小唄に微笑んだ。

「おかえりなさい、小唄。ご飯もうすぐ出来るけど、お風呂も沸かしてあるから先に入る？」

「ただいま、ヴェル」

そう言って、小唄はヴェルと呼んだ少女に笑顔を見せる。

小唄とヴェルローズは争いを終結させてすぐに結婚した。二人の薬指にはその時の金のペアリングが輝いている。当たり前だが、小唄とヴェルローズは人間同士ではないので婚姻届は出せない。しかし、『鈴鳴』の命を受けた『黎明』の手によってヴェルローズは表面上は人間ということになり、婚姻届は無事受理された。無論、アリスも表面上は人間ということになっている。

「そうだね。先にお風呂入ろうかな」

「分かったわ。バスタオル出しておくわね。アリス、貴女も一緒に入ってしまいなさい」

「はーい！ お母さま、お風呂あがりにアイス食べてもいいーい？」

「いいけど、すぐご飯だからその後になさいね？」

「わーい♪」

全身で喜びを表すアリスと、それを見ながら母性の笑みで微笑むヴェルローズ。その横で小唄はこの幸せを一生守っていく、と改め

て誓った。

——午後九時。遊び疲れたアリスは早々に眠りに付き、リビングで小唄とヴェルローズは赤ワインの味を楽しんでいた。

「小唄、今日もお疲れ様」

「ありがとう、ヴェル。コネで入ったようなものだし、他の人達と比べると大分気楽だよ」

「ふふ、そうね」

小唄の返しに軽く笑いながら、ヴェルローズはグラスに口を付ける。小唄も同じようにグラスの中の液体を喉で転がし嚥下した。

「ふう……このワイン美味しいね」

「でしょう？ 安物の割には中々美味だと思うわ」

自分のことのように嬉しそうに笑い、ヴェルローズは先日、『黎明』経由で『鈴鳴』から届いたゴルゴンゾーラのカッティング・チーズを口に入れる。

暫く飲食の音だけがそう広くもない部屋に響く。外の鈴虫の鳴き声がピークに達しようとした時、ヴェルローズは唐突に口を開いた。

「ねえ、小唄……」

「ん、何？」

やや言いにくそうにするヴェルローズの言葉を、小唄は静かに待つ。

「あの子……アリスのことなんだけど、六歳になったら小学校に行かせたいのよ。何かいい方法はないかしら……？」

「そうだね……一度、曾お祖母さんに相談してみるよ」

小唄も六歳になったらアリスを学校に行かせようと思っていた。しかし、普通の子供ではないアリスが通常の方法で学校に通うのは非常に困難だ。小唄の曾祖母であると同時に魔術結社『鈴鳴』の祭祀でもある玲歌ならば良いアイディアを提案するに違いない。

「お願いね。私もあの子に触れ合いというものを覚えてほしいから」
「ああ。僕もだよ」

相槌を打ちながら小唄は大人らしい優雅な仕草でグラスを口に運ぶヴェルローズを見る。

あの時と比べて、随分と大人っぽい顔つきになった、と小唄は思う。正装は変わらないが私服も以前のゴシックローリータ・パンクスタイルではなく、大人の女性をイメージさせる洗練されたカジユアルな服を着るようになり、母性を得た少女は女になった。

同時に、小唄の視界にあの日のヴェルローズの姿が浮かび上がる。その意味を漠然と理解した小唄は、恐る恐る口を開いた。

「ねえ、ヴェル……これは、夢だよね？」

「……」

ヴェルローズはすぐには答えず、一呼吸置いて悲しそうな表情を浮かべながら、

「そうね……これは夢よ。でも――」

グラスを置いて静かに立ち上がり、小唄のすぐ目の前に立つ。そ

して、小唄の顔を両手で優しく包み込み――

「きっと、遠くない未来の夢だわ」

彼女は小唄に口付けた。

アルコールの魔力が二人を加速させ、湿っぽい音が部屋に拡がる。お互いの味を堪能した二人はどちらからともなく唇を離し、濡れた二人の唇が蛍光灯の光で妖しく煌いた。

「ヴェル……」

惚けながら見上げる小唄の視界が急激に歪んでいく。全てが白に染まりゆく中で、小唄は彼女の愛に満ちた声を聞いた気がした。

「キス、上手くなったわね――」

今は未だ遠き未来の夢（後書き）

未来の夢です。それ以上でもそれ以下でもありません。
正夢になるかどうかは後のお楽しみということで。

第十二話『追走の使者達』 Part. 1 (前書き)

この話には多少の拷問系描写が含まれます。苦手な方はご注意ください。

内容..

変形の水責め

第十二話『追走の使者達』 Part. 1

「——んんう……？」

突如、カーテンの隙間から入ってきた日差しに小唄は目を覚ました。振り向いた途端に直撃した日差しに思わず目を細める。目が慣れ始めた頃に机の置き時計を確かめると既に十一時を回っていた。

「ん……半日以上寝てたのかな？」

こんなに寝たのは久しぶりだ、と小唄はかぶりを振って起き上がろうとした。だが、金縛りにでもあったかのように体が動かないことに気づく。

（あれ……？）

眠気が覚めた今になって首筋に暖かく柔らかいものが感じられる。同時に頬を極細の筆で撫でられるような感触と、鼻腔をくすぐ擦る花の香り。小唄が首を左に振り向けると、世にも整った寝顔がすぐ目の前にあった。

「すう、すう……」

その正体——ヴェルローズ——は小唄の首に抱きつきながら、静かな寝息を立てていた。

（寝顔可愛いなあ……——じゃなくて！）

暫く寝顔を眺めていた小唄だったが、はっと我に返る。やっていることは昨夜のヴェルローズと同じ、案外似た者同士な二人だった。

（いけないいけない、このままだとまずいから起こそう）

「ヴェル、起きて」

小唄は目の前で幸せそうに眠る彼女に声を掛けてみたが、安らかな寝息が返ってきただけで起きる様子はない。

「起きてってば」

「んん……」

今度は少し強目に肩を揺すってみる小唄。僅かに身じろぎはしたがそれでも起きはしない――が、小唄はその一瞬の変化を見逃さなかった。

「……………えい」

「ひゃっ!？」

小唄は脇腹を人差し指で突付いただけだが効果は抜群。予想もしてなかった衝撃に彼女は思わず小唄の首から両手を離して飛び起きた。

「おはよう、ヴェル」

笑顔で挨拶する小唄に対して、ヴェルローズはやや不機嫌な表情で小唄を睨む。

「……おはよう、小唄。まさかこんな起こし方をされるとは思っ

もいなかったわ」

「ヴェルが起きてるの分かってたからね。眠りながら笑える人なんて普通いないでしょ？」

「気づいてたのね……」

ヴェルローズは眠気を払うように頭を軽く振った。

「それで、もう一度寝る？」

からかうような笑みを浮かべながら言う小唄。彼女としても、ここから二度寝をする気にはならない。そのまま起きることにする。

「いえ、起きるわ……ちよつと手を貸しなさい」

「ん……こう？　ちよ、ヴェル！？」

「いいから、ちよつと静かになさい……」

ヴェルローズの行動に慌てて手を離そうとする小唄に、彼女は取り合わないまま手を自分の胸に押し付けながら瞼を閉じる。数秒の後、瞼を開けて彼の手を離れたヴェルローズは納得したような笑顔を小唄に向けた。

「うん。ちゃんと繋がったみたいね」

「繋がった、って？」

ヴェルローズは人差し指を立てて、小唄に分かりやすいように説明する。

「簡単に言えば、私の“思慕石”が小唄を認識したということよ。実際に貴方は今“思慕石”と見えない糸で繋がっているわ。さっきの行動はそれを確かめるためのもの。“死舞人形との契り”は無事

成功したわ」

「し、失敗する時もあるの？」

「極稀にだけど、“思慕石”自身が主人を認めないこともあるらしいわ」

「そうなんだ……。そういえば、“死舞人形の契り”を交わしても何も変わったように思えないんだけど……」

小唄の質問にヴェルローズは首を横に振る。

「いえ、ちゃんと変わったわ。詳しいことは後で教えるとして、少し魔力を放出してみなさい」

「こ、こうかな？」

言われた通りに右手に魔力を集中させる小唄。普段の鍛錬時ほどの魔力を放出したつもりだったが、彼の意味とは裏腹に右手の魔力は激しい光を発しながら輝きを強める。急激に高まってゆく魔力に悪寒を感じた小唄は慌てて魔力を霧散させた。

「な、何これ……。いつも通りに魔力を放出しただけなのに……」

「驚いたでしょう？　これが、“死舞人形の契り”を交わした主人に与えられた力の一部よ。小唄の魔力資質は以前と比べて、単純計算で約二倍は上昇した。勿論、私も以前と比べて格段に強くなっているわ」

「に、二倍も……」

『鈴鳴』の直系である小唄の魔力資質や量は元々人外の代物であり、それが二倍になったとなれば小唄は十分に戦う力を得たことになる。これから彼女達に関わっていく以上、小唄自身が戦闘に参加することもあるだろう。それは小唄にとって奮起することと同時に己の強大な魔力に恐怖することでもあり、彼の体は無意識の内に震

えていた。

そんな小唄の手を、一回り小さな手が優しく握る。

「怖いのは分かるわ。貴方のその魔力は普通の人間の手には到底扱えない。それを暴走させてしまった時、私達に襲い掛かるかもしれない……そう考えているのでしょうか？　けれど、それは貴方のものよ。恐れてはいけないわ」

「ヴェル……。うん、分かったよ」

諭すような言葉に恐怖を払拭した小唄の力強い頷きに、ヴェルローズは微笑み返す。

「良い子ね。ところで小唄……寝ている間に何か夢を見なかったかしら？」

「夢？　うーん……」

小唄は首を傾げながら思い出そうとしてみた。しかし何か幸せな夢を見ていた気はするのだが、その内容までは思い出せなかった。

「いい夢を見た気がするんだけど、思い出せないや」

「そう……」

（流石にまだ“正室の契り”だけで精一杯のようね。“死舞人形との契り”は交わした後も主人の媒体源パワーソースと精神力をコストとして、私……いえ“思慕石”に定期的に渡す必要がある。今の状態で“側室の契り”を交わさせることは出来ないわ……）

「変なことを聞いたわね。大したことではないから、気にしなくて良いわ。さて、私は着替えて下に行くわね」

「うん。じゃあ、僕も自分の部屋に戻るね」

部屋に戻ろうとする小唄に、ヴェルローズは妖艶な笑みを零しながら手招きをする。

「あら、別に見ても構わないのよ？ 私はもう貴方の“妻”なんだし、“妻”が“夫”に裸を見せるのは別に可笑しいことではないでしょ？」

「つつつ妻っ!？」

慣れない言葉に狼狽する小唄を見て、ヴェルローズはますます笑みを深めた。彼の様子を楽しみながら、紅い瞳が少しずつ捕食者のものに変化していく。

（やっぱり可愛いわねー。もう襲っちゃおうかしら？）

「ふふふ……」

「ちょ……ヴェル、その獲物を見つけた蛇のような目は何か……？」

正に“蛇に睨まれた蛙”状態の小唄が一步後ずさりする。一気にベッドに引きずり込もうとヴェルローズが邪な手を伸ばそうとした時だった。

「ねええー！ーさまあー！ー！ー」

「この声は……」

部屋の外から聞こえてきた大声は階下からだろう。続いて急いで階段を登ってくるような音が聞こえ、バンと大きな音を立ててドアが開かれ銀髪に蒼い瞳の少女が姿を見せた。

「姉様っ！ 小唄くんっ！」

二人の姿を認めた途端、少女は何を思ったのか助走を付けて疾走する。態勢の取れてないヴェルローズと小唄に向かって――

「ちょっと待ちなさいアルト――ごふう！！」

「うわぁ！！」

暴走する妹を諫めようとしたヴェルローズだが時既に遅し。乱入してきた少女――アルトリイ――のダイビング抱きつきによって三人は纏^{もつ}れるようにしてベッドに倒れこんだ。

「あははっ！ 姉様だ♪ 久しぶりだねーっ」

「こらアルト。いきなり飛び込んできたら危ないでしょ。全く、相変わらず落ち着きがないわね」

無邪気な妹の行動を軽く叱るヴェルローズ。しかしアルトリイには効果がない様子で、そのまま姉に抱きつき頬擦りをする。一方の小唄は、

（この子どうして僕の名前を？ いや、それより……この子がヴェルの妹さんかな？）

置いてけぼりにされた気分だったが、今は何も言わずにじゃれ合う姉妹の姿をただ見ていた。その視線に気づいたアルトリイが小唄のほうを振り向き、満面の笑顔を見せる。

「あなたが小唄くんね？ 私は“月の光”アルトリイ。姉様の妹です。アルトって呼んでね♪」

（うーん、こうして見ると髪色と目の色以外はヴェルにそっくりだなあ。まあ、双子らしいし当たり前か。性格のほうは大分違うみたいだけどね）

「うん。僕は織部小唄って言います、よろしくね、アルト。ところで、アルトはどうして僕の名前を知ってるの？ 初対面のはずなんだけど」

その質問にヴェルローズが横から口を挟む。

「私達は双子の死舞人形。ある程度お互いの記憶を共有出来るわ。従って、アルトが小唄の名前を知っていても不思議ではないわ」

「うんうん。姉様の言うとおりでけど、ティーカから小唄くんのこととは聞いていたから今回は別ね」

なるほど、と小唄は頷き、それ以上の追求をしないことにした。

「ところでアルト。もう動いても平気なの？ リリムは、最低一週間は安静にしている必要があると言ってたのだけど……」

姉の心配そうな声を払拭させるかのように、アルトリリイは力強くガッツポーズをしてみせる。

「もう平気だよ！ お洋服はもうすっかり元通りになったし、ベリティエにやられた傷もほぼ塞がったしね！」

アルトリリイの言った通り——檻縷切れ寸前だった正装はすっかり元通りになっており、卸し立てと寸分の違いもない青と白の衣装がそれを誇示していた。酷く痛めつけられた首の傷だけはまだ癒えてないのか、彼女は黒いチョーカーを着けて隠していた。だが、そ

れも間もなく消え去るのだろう。

「そいえば姉様。もう小唄くんと“死舞人形の契り”は交わしたの？」

今度はアルトリリイが姉に質問をした。

「ええ、昨日の夜に……」

言いながら、嫌な予感を感じたヴェルローズはアルトリリイの首筋に思わず手を伸ばす。その行動は正解だった。

「じゃあ私も——ぐええ」

何を考えたのか、いきなり小唄に抱きつこうとしたアルトリリイを後襟部分を掴んだヴェルローズの手が止める。結果、アルトリリイの首が軽く絞まって彼女に潰れた蛙のような声を上げさせた。

「ね、姉様……くび、くびしまってるぅー！」

「貴女……今、何をしようとしたのかしら？」

そのまま強引に振り向かせてからヴェルローズは後襟から手を離す。開放されたアルトリリイが大きく息を吐きながら、やや睨みを効かせた目で姉を見る。

「はあはあ……首の傷はまだ完全には治ってないんだから気をつけてよね！ それと姉様っ、どうして止めたのっ!？」

「あら、ごめんなさいね。貴女がまた無鉄砲な行動に出ようとしていたからつい止めてしまったわ」

ヴェルローズは悪びれた様子もなく平然と言い、そして密かに姉妹専用の通信回線を開き妹に語りかけた。

『小唄の資質ではまだ“側室の契り”を交わすことは出来ないわ。今は我慢なさい』

頭に直接聞こえてくる言葉を聞いたアルトリリイは、渋々と言った様子の子のアイ・コンタクトを姉に送り返した。

『そつかあ……それじゃあ仕方ないね。また今度の機会にするー』

『ええ、そうなさい』

「???」

端から見れば目で会話しているようにしか見えない。どんな会話が為されているのか、それを知る術は今の小唄にはない。ドール・マスターならば強引に割り込むことも出来るのだが、それだけの技量のみならず知識も今の小唄は持ち合わせてはいなかった。

姉との会話を終えたアルトリリイは、再び小唄を振り返る。

「それじゃあ、私はそろそろ下に行くねー。あっ……リリムがそろそろご飯出来るから起きてるなら下においてきなさい、って言うってたから姉様と小唄くんも着替えたら降りてきてね。それと――」

アルトリリイは悪戯っ子のような笑みを小唄に向ける。

「小唄くん、このあいだ姉様とデートしたんだよね？ 今度は私としようねっ♪」

「え、えええ！？」

先日のことを思い出したのか、頬を赤く染めてわたわたと両手を

振る小唄。その横でヴェルローズは何か言おうとしていたが、既にアルトリリーの姿はなかった。

思わず顔を見合わせる二人だが、首まで真っ赤にした唄は慌てて部屋を出ていった。

部屋に一人残されたヴェルローズは苦笑しながらおもむろに服を脱ぎ始める。下着姿になった彼女が精神を集中させると、瞬く間に彼女の体は赤と黒のアンティーク・ワンピースに。絹糸の如き金髪ブラチナ・ブロンドはワンピースと同じデザインのヘッドドレスにそれぞれ着飾られていた。

(……この感覚は何かしら?)

正装した直後にヴェルローズは違和感を覚える。その違和感の元であるワンピースの右ポケットを探ると、中から一枚のタロット・カードだったものが出てきた。

「――これは……そう、そういうことだったのね」

元は綺麗な絵柄だったであろう、大アルカナの第十六番『塔』ザ・タワー。今は絵柄の運命と同じく紙の所々が焼け焦げ、朽ち果てようとしていた。それを見て瞬時に理解したヴェルローズは万感を込めて、役目を終えたカードを両手で包み込んだ。

「ありがとう……玲歌」

ヴェルローズはカードをそっと机の上に置き、自分を呼ぶ一階へと降りていった。

第十二話『追走の使者達』 Part. 2

強い日差しが照りつける、その日の午後――。

「模擬戦に付き合うのはいいんだけど、どうしてボクを選んだのさ？」

準備体操代わりの屈伸をしながらヴェルローズに笑い掛けるティーカ。

昼食後――彼女達は模擬戦を行うために外の庭に出ていた。もつとも実際に戦うのはヴェルローズとティーカだけで、他は審判役とギャラリーである。

「貴女が一番硬そうだったから、かしら」

「あははっ、ひっどいなあ！ やる気マンマンってことじゃん！」

言葉とは裏腹にティーカは楽しそうな表情で、地面に刺した手斧を引き抜き構える。彼女もまた、久々の戦闘――模擬戦ではあるが――に滾^{たぎ}っているのだ。

今回はティーカも完全正装をしていた。濃い目の栗色の髪にいつものリボンはなく、左右に細いリボンを着けている。魅せるための小道具ではない、れっきとした死舞人形の装備だ。

「では、模擬戦のルールを説明します」

二人が準備を整え終えたのを確認し、今回審判役を買って出たり

リムが一步前に出て説明を始める。庭には既にリリムや小唄達のいる一帯を除いて彼女による強固な結界が張られており、この中の出来事が外から見られることはない。また、小唄達の一帯にも不可視の結界が張られているのでこちらも問題はない。

「戦闘範囲は結果内の全域です。模擬戦用に魔力・霊力を調整しているはずですので、ハイエント・エレメンティカ上位精霊魔術以上及びそれに準ずる霊術のみ禁止とさせていただきます。よろしいですね？」

ティーカの手斧にも魔力によるコーティングが施され、刃が相手に届かないようになっていた。二人揃って頷いたのを見て、リリムは先を続ける。

「お互いの体力は千ポイントです。これを先にゼロにしたほうを勝者とします。現体力の判定はこの魔力球で行います」

リリムを境にしてお互いの領域に魔力球が出現する。

「この魔力球はお二人を“探査”して作成したものです。お互いの残り体力に合わせて緑、青、黄、赤と色が変化していき、体力がゼロになると消滅する仕組みになっています。何か質問はありますか？」

返事の代わりにヴェルローズは右手に拳銃を想造し、ティーカは両手で手斧を構え直した。それを試合開始の合図と受け止めたリリムは静かに手を上げる。

「それでは——始め!!」

勢い良く手が振り下ろされ、模擬戦が始まった。

「ティーカ。本番のつもりで掛かってきなさい。でないとすぐに終わってしまうわよ？」

「ふ……ヴェルこそ余裕かましてると足元を掬われる——よっ！！」

先手を仕掛けたティーカは手斧の腹で体を庇いながら、ヴェルローズに向かって突進する。対するヴェルローズはフルオートの手銃で応戦するが、ティーカの手斧には傷一つ付かない。

「そんなヘロヘロ弾でなんとかなるような武器じゃないよ！ てえいっ！！」

「ちっ！ やっぱり拳銃程度じゃ駄目ね——！？」

振り下ろしの一撃をかわしたヴェルローズが拳銃を粒子に分解し、新たな武器を想造しようとした途端——地面の数箇所が隆起していることに気づき、急いでその場から離れる。直後——隆起した地面から強靱な蔓が生え、獲物を束縛しようとする襲い掛かった。しかし、獲物は既にその場から移動していたため空撃ちとなった。

「あれ？ かわされちゃったかあ……残念」

「着地点を予測して更に“大地の束縛”を掛けておくなんてやるじゃない」

お互い笑みを浮かべて牽制し合う。初撃は互角——まだどちらの魔力球にも変化はない。

二人が第二ラウンドに移ろうとしている中で、完全なギャラリと化しているリリムと祐治は、

「祐治さん」

「ん？ なんだい、リリム」

「どちらが勝つか賭けをしませんか？ 私はヴェルローズさんに一せんえん

本を賭けますわ」

「ずるいなあ。僕も彼女に賭けるつもりだったのに……じゃあティ
ワン・コイン
ーカに半本」

小唄達の隣で大人の遊びを始めていた。

当然それに混ざる気はない小唄は、戦いの行方を見守っているアルトリリイに話しかける。

「そういえば、アルトはどんな想像能力を持ってるの？」

隣からの声に気づいたアルトリリイが振り返る。

「私？ 私は——これね」

百聞は一見に如かず。アルトリリイが利き手に精神を集中させると、彼女の手にダガーを長くした刃物——ショート・ソード——が現れた。

「剣？」

「うん。私の想像能力は“刀剣類想像”。ちょっと持ってみる？」

小唄が頷いたので、アルトリリイは慎重を払って彼の手に短めの剣を持たせる。

「うわ、それなりに重いんだね」

死舞人形達が想像した物の精度は、その死舞人形の熟練度に依存する。ずっしりとした手応えが小唄に伝わってきた。

「まあ、実際の短剣と同じだからね。その気になれば日本刀とかも
サムライ・ブレード

想造出来るけど、今の私では完全なものは無理かな……」

『これって、伝説の武器……例えばエクスカリバーとかも想造出来るの？』

それまで小唄の肩の上で黙っていたサファイエが興味津々の様子でアルトリイに聞く。

「うーん……それは無理かな……。成長したら出来るようになるかもしれないけどー」
レベルアップ

アルトリイはサファイエに答えて小唄から受け取った短剣を粒子に分解し、再び二人の戦いに目を向ける。その反対ではリリムと祐治が相変わらず意味不明な話をしているので、小唄達もアルトリイに倣うことにした。

模擬戦は佳境に近づきつつあった。それぞれの魔力球を見ればヴェルローズのは青、ティーカのは緑。体力上はティーカが押していたが彼女は攻め疲れの様相を示し、肩で大きく息をしている。一方のヴェルローズはまだまだ余裕なのか、新たに想造した散弾銃をチエックしていた。

（はあっ、はあっ……！ やっぱり、コウタと“死舞人形の契り”を交わしたヴェルは強い。霊力・魔力共に違いがありすぎるよ……。体力だけでいえばボクのほうが有利だけど、ヴェルもそろそろ決着を着けに来るはず……。だったら、ここで決めるっ！！）

「――“鍾乳石の投擲槍”！！」

ティーカは溜め込んでいた地の魔力を周囲に放出した。尖った数本の鍾乳石の槍に変化した魔力がヴェルローズに殺到する。しかし、彼女は焦ることなく散弾銃を分解、回避態勢を取った。

（！？ 武器を消したっ！？）

「勝ちを焦ったわねティーカ！ その魔術は確かに高威力で速度も申し分ない。けれど、その魔術には一つ欠点があるわ。それは――」

鍾乳石の槍は全てヴェルローズの右を通過し、奥の結界に当たって消滅した。

「唱えた後に大きな隙が出来ることよ！ “闇の一条” ！！」

（――速い！ 避け切れないっ！！）

ヴェルローズの左手から放たれた黒の光線に気づいたティーカは咄嗟に手斧を盾にするが僅かに遅く、超高速の光線は彼女の右肩に命中した。激しい衝撃がティーカの体中を走る。

「つぁ……っ」

ティーカの右手から手斧が地面に転がる。未だ衝撃に揺らめいている彼女の視線の先には、右手を地面に着けているヴェルローズの姿があった。

（あの構えは“煉獄の円柱群” ！！ いや、アレは上位精霊魔術だから使えないはず。じゃあ何を――！？）

その表情にヴェルローズは笑みを浮かべる。

「安心なさい。これは“煉獄の円柱群” ではないわ。噴出せよ――“煉獄の間欠泉” ！！」

「――!?!」

直後、ティーカの足元から夥しい量の水が噴き出した。それは彼女を持ち上げてしまう程の勢いで暫くの間、望みもしない空中遊泳を彼女は味わうことになった。

「う、うわあああああああ!?! とーめーてーえー!!」

地面の間欠泉からはまだ水が噴き出しており、ティーカの体が下に揺れる。端から見ると間欠泉が彼女でお手玉をしているかのようだ。やがて噴出も収まり、支えを失ったティーカが地面に落下する。地面への落下衝撃は模擬戦外。ヴェルローズは間一髪で彼女を抱きとめた。

静かにティーカを降ろしたヴェルローズは魔力球を確認する。“

煉獄の間欠泉”によって、ティーカの魔力球は消滅していた。

――これが実戦であれば、“煉獄の間欠泉”から噴き出る二百度近い湯を直接浴びたティーカは重度の火傷を負っていただろう。

「勝負あり、ですね。ヴェルローズさんの勝利です」

魔力球を確認したりリムが宣言する。

「あーあ、負けちゃった。やっぱり、ヴェルには敵わないや」

「貴女も十分強かったわよ。“死舞人形の契り”前なら負けていたのは私のほうかもしれないわ」

お互いの健闘を称え合うヴェルローズとティーカ。皆揃って家の中に入ろうとする中、リムはヴェルローズだけを引き止めた。

「……?」

それに違和感を覚えて小唄だったが、アルトリイとティーカに押されるようにして家に入ってしまった。

残されたヴェルローズとリリムは石畳を挟んで対峙。ある種の嫌な空気が二人の間に流れる。

「それで、何かしら？」

理由は分かっていたが、ヴェルローズは威嚇の意味も含めてリリムに一步詰め寄る。相對するリリムも一步も引かずに口を開く。

「“闇の一条”に“散弾銃想造”、そして“煉獄の間欠泉”……これらは別に良いのです。“死舞人形の契り”による覚醒の賜物ですから。ですが……アレはどうするのですか？」

「アレとは？ 何のことかしら……」

「とぼけないでください！」

普段温厚なりリムが声を張り上げることは、彼女が本気で怒っていることを意味する。それに、既に結界は解かれている。誰がこの近くを通るかも分からない。ヴェルローズは表情を切り替え、真正面からリリムを見つめる。

「冗談よ。ファンタズマゴリア“幻想世界”のことでしょう？」

その名前を直接聞いたリリムの額から汗が流れ落ちる。

「……ええ。一部の例外を除けば“正室の契り”を交わした“原初の死舞人形”だけが扱える秘術。その行使には魔力・霊力・精神力の全てが必要になります。そうなれば、貴女は小唄君から魔力を供給して貰わざるを得ないでしょう」

静かに言うリリムにヴェルローズは肯定する。

「確かにそうね……私が貯蓄出来る魔力だけでは“幻象世界”の行使には足りない。小唄から足りない分を供給してもらえないでしょうね。でも、大丈夫よ」

「大丈夫、とは？」

「あのベリティエとは早々に決着をつけなければならない。けれど、覚醒した私でもあいつを倒し切ることには出来ないと思うわ。そこで、“幻象世界”を使ってあいつの戦意を喪失させる。私の霊力を魔力に変換して出来るだけ小唄の負担を減らすわ」

ヴェルローズは自分の髪を飾るヘッドドレスを指差す。彼女のヘッドドレスには魔力を貯蓄する他に、低効率ではあるが霊力を魔力に変換する機能もあった。

「そうですか……まあ、止めたところで聞かないでしょうね。それではもう一つだけ……小唄君の現在の状態で“側室の契り”は可能ですか？」

それに対してヴェルローズは即座に否定する。

「まだ無理ね。資質が全然足りてないわ」

予め予想していた答えだったのか、リリムは落胆の表情を軽く見せながらも優しく微笑みを返した。

「なるほど……分かりました。それでは、ご武運をお祈りしております」

「ありがとう、お姉様。それと――」

「? 何でしょう?」

ヴェルローズはリリムがゾツとするくらいニッコリ笑って手を差し出す。

「人が真面目に戦っている間にくだらない賭け事なんかしてんじやないわよ。はい、没収」

「……なんてこったいManma mia」

「……伊太利亚語で言っても何も変わらないわよ? お姉様」

リリムは渋々とヴェルローズに千五百円を差し出した。この後、リリムと祐治は賭け金のみならずペナルティ分まで取られたことは言うまでもない。

第十二話『追走の使者達』 Part. 3

「――アルトの具合はどう？」

「大したことではないわ。ただ、まだ精神と身体のバランスが戻りきってない状態で騒ぎすぎたから……今は部屋で眠っているわ」

部屋に戻ってきたヴェルローズの報告を聞いて、小唄は胸を撫で下ろした。

事の起こりは一時間前。階段を登って自分の部屋に戻ろうとしたアルトリイが突然バランスを崩してその場に倒れたのだ。

激しい音を聞いて駆け込んだリムがすぐさま診察した結果、疲労が回復していない中での騒ぎ疲れと判明。彼女はリムに抱えられて自分の部屋のベッドに直行した。その際には小唄とヴェルローズも付き添っていたが自分が出る幕ではない、と思った小唄は自分の部屋に戻ろうとした。しかし、ヴェルローズに部屋で待っているように、と言われて今に至る。

ヴェルローズは隣に小唄を誘い、彼がベッドに腰掛けたのを見計らってから口を開いた。

「……小唄。明後日の夜にベリティエと決着をつけるわ。勿論、貴方とサファイも連れてね」

それを聞いた小唄の表情は一瞬で引き締まったものになる。しかし顔に出してしまう不安は、どう頑張っても隠せないものだった。

「うん、分かった。僕達の力を必要としてくれるのは嬉しいよ。け

ど、僕達に何が出来るのかな……」

小唄とサファイエにとっては、これが初の本格的な実戦となるのだ。不安なのは当たり前のことだろう。そんな小唄の不安を払拭するように、ヴェルローズは優しく彼の手を取った。

「決着は一瞬でつくから大丈夫よ。けれど、それには私の魔力だけでは足りない……小唄からも魔力を供給してもらう必要があるわ。でも、私の霊力を出来るだけ魔力に変換して負担を減らすから、貴方が心配する必要は何もないわ」

「うん……」

それでもまだ不安が残るのか、小唄が俯いたとき――

『なーんだ。そういうことならわたしの出番だね!』

彼の中で休んでいたサファイエが元気よく飛び出てきた。

「サファイ、貴女の出番とはどういう意味かしら？」

訝しげな表情をするヴェルローズに、サファイエは朗らかに答える。

『んーとね、ヴェル姉様。わたしはご主人さまの魔力を増幅することができるの。そうすれば、ご主人さまがヴェル姉様に渡す魔力の量も半分からそれより少し多めくらいで済むんじゃないかなー』

つまりは小唄とヴェルローズの間にサファイエという名の増幅装置ブースを挟むことで、小唄がヴェルローズに渡す魔力は通常の半分で済むということだ。

「なるほどね。それはとても良い考えだわ、サファイ」

『えへへ、ヴェル姉様にほめられちゃった!』

ヴェルローズの膝の上に座るサファイエは頭を撫でられて嬉しうに笑った。

「そうだね。僕も頑張ってみるよ!」

ようやく顔を上げた小唄も握り拳を作って戦意をアピールする。

「そうね。明後日、私達の強さをベリティエの奴に見せ付けてあげましょう」

『おーっ!!!』

氣勢を上げる三人。

気配を殺していたこともあり、ドア一枚の向こう側に誰かが立っていたことは最後まで気づかなかった。

「……姉様。私はまた姉様の力になれないの?」

寝間着姿のアルトリリイが無表情のままドアから遠ざかっていく。

「アルトリリイさん……」

一部始終を見守っていたリリムは、沈痛な面持ちで彼女を見送ることしか出来なかった。

一方その頃、一階のリビングでは――。

「うーん……」

「ティーカ？ さっきから唸ってばかりだが、どうしたんだい？」

「あ、ユウジ。いやーヴェル達に何か言い忘れてることがあるような気がするんだけど思い出せないだよねえ……」

「覚えてないなら大したことじゃないんじゃないか？」

「そうかもねー。ま、いいや。テレビ見よっと♪」

それはとても重要なことなのだが、思い出せないことを理由にテレビ番組を見ながら更に忘れていくティーカだった。

「――よし、これで準備万端ね」

明後日の夕食後。ドレッサーに座って身支度を整えていたヴェルローズは自分の両頬を軽く叩いて立ち上がった。状態は万全、後は小唄とサファイエを待つのみ。彼女は軽く瞼を閉じて精神を集中させながら時を待つ。

暫くして――

「開いてるわ。入りなさい」

ドアを開けて姿を見せたのは精悍な顔つきの小唄と、彼の肩の上で守護精霊に相応しい表情を見せるサファイエ。普段より頼もしく見える二人をヴェルローズは笑みを浮かべて出迎える。

「二人とも、準備は出来たかしら？」

「うん、魔力の調子も悪くないし体調も万全、問題なしだよ」

『わたしもお昼からずっとご主人さまの中で休んでたから万全だよ』

「ふふ、頼もしいわね。では、行きましょうか」

先頭に立つヴェルローズがドアを開けてそのまま固まる。目の前に完全正装したアルトリリイが立っていたからだ。

「アルト……そんな格好をしてどうしたのかしら？」

「姉様、私も姉様達についていくわ！」

そんなことだろう、と思っていたヴェルローズは軽く息を吐いて妹を見る。彼女の蒼い瞳は、確固たる意思を訴えるかのように揺らめいていた。

「私は別に構わないわ。でも、どう考えてもリリムに止められるわよ？」

（リリムさんそういうの厳しそうだからなあ。アルトの状態もまだ完璧とは言えなさそうだし……）

と、小唄は心の中で思った。

一歩も引き下らないアルトリリイが尚も姉に食い下がる。

「う……わ、私には姉様達についていく権利があります！」

「権利、ね。なら、その権利とやらを説明してご覧なさいな」

アルトリリイはやや溜めを作ってから、本来ティーカが伝えるべきだったことを語り始めた。それはヴェルローズを驚かせるには十分過ぎる程の『権利』だった。

「あの日、私を攫ったのはベリティエじゃなくて白い服に骨董人形アンティーク・ドールのような薄紫色の目をした誰かだったの……。その後の私はずっと責め続けられてたから考えることが出来なかったけど、あれはもしかしたら……」

「なんですって……!?!」

「いきなりどうしたの？ ヴェル」

掛けられた声を見無視して、ヴェルローズは厳しい表情で床を見つめる。

（白い服に薄紫色の目をした誰か……まさかあいつらがベリティエの一件に関わってるというの!?!）

ヴェルローズは心配そうな表情をする小唄とサファイエに気づくと、安心させるような口調で言った。

「なんでもないわ。それが本当なら貴女を連れていくしかないわね……好きになさい。ただし、無理な時は無理って正直に言うこと。隠したら許さないわよ?」

「はーい! 姉様大好きっ♪」

アルトリリイは、花を咲かせるような笑顔を見せて姉の腕に抱きついた。ヴェルローズは多少窮屈に思っむげてはいたが、妹の手を無碍に払うようなことはしなかった。

少しだけはらはらしていた小唄とサファイエも顔を見合わせて笑いあい、二人の後について階段を降りてゆく。

そして案の定、玄関の前でリリムが待ち構えていた。

「どこへ行くつもりですか？ アルトリリイさん」

リリムがアルトリリイにのみ厳しい目を向ける。目を向けられたアルトリリイも、多少はびくつきながらも気丈にリリムの目を見ながら答える。

「姉様達とベリティエとの決着をつけに。お願いリリム、私をこのまま行かせて！」

「……アルトリリイさん。貴女、ご自分が今どんな状態なのか分かってるのですか？」

「……」

責めるようなリリムの視線が向けられたがアルトリリイは何も言わない。

「言えないのでしたら私から言っておあげましょうか。身体的よりも精神的損傷のほうが酷く、“思慕石”による自動回復が追いついていない。首の傷から侵入したベリティエの毒もまだ完全に浄化されてません。それは事あるごとに、貴女に苦痛を与え続けているはずです。そんな状態で戦おうと？ そのようなこと、“主治医”^{わたくし}としては到底許可出来ません」

「……」

無言のままの妹を弁解するようにヴェルローズが口を挟む。

「リリム……この子の気持ちは、姉である私が一番分かっているわ。それに、この戦いに望んで良いだけの覚悟をこの子は持っている。決して無理はさせないわ。今回は見逃してくれないかしら？」

「ヴェルローズさん……どうやら、決心は固いようですね。分かりました、これで決めましょう」

溜息を吐きながらリリムは一枚の硬貨を取り出し、それを掌に乗

せて四人に見せた。

「十円玉？」

「ええ、そうです。アルトリリイさん、私と勝負をしてもらいます。ただし……貴女は表、私は裏にそれぞれ賭けます。よろしいですか？」

（あれ？ 普通コイン・トスといったらコインが空中にある間に裏か表か宣言するよね？ その権利がないなんて、何かおかしくないかな？）

リリムが提案した一風変わったコイン・トスについて小唄とサフアイエは殆ど同じことを思ったが、

（なるほど、そういうことね。ふふ、彼女の意地の悪さも大概だわ）

ヴェルローズの視線に気づいたリリムは楽しそうに微笑みながら片目を瞑った。

「うん、分かった。それでいいよ」

「では——スタート」

頷きと同時にリリムの右手がコインを弾く。コインは空中で回転しながら舞い、落ちてきたコインを左手の甲で受け右手で隠す。下手な小細工をしたような様子は一切ない。

「オープン——」

リリムがゆっくりと右手で隠した左手の甲を見せると、コインの向きは歴史的建築物が彫られている表——アルトリリイの勝ちだった。

た。

「あら、仕方ありませんね。今回は許可します。ただし！ 残りの四日間は大人しくしていてももらいますからね。よろしいですね？

アルトリリィさん！」

「うんっ、これが終わったら後は治るまで大人しくしてるねー。ありがとっ、リリム♪」

「ええ、それではお氣をつけて。いってらっしゃい」

わいわいがやがたと云った様子で外に出る三人。これから戦闘をしにいくようには到底見えないが、下手に気張るよりはこれくらい気楽なほうが良いのかもしれない。

すれ違いざま、ヴェルローズはリリムに向かって軽く頭を下げる。

「ありがとう、リリム。私からも礼を言わせてもらおうわ」

「いえ、お礼を言われるようなことはしておりませんわ。どの道、私では止められなかったでしょうし」

「ふふふ、それでもよ。あの十円玉、実は——なんででしょう？」

ヴェルローズは後ろに聞こえないように耳打ちをした。

「うふふ、それはどうでしょうね？」

リリムも味のある微笑みで返す。

「隠さなくてもいいわ。まあ、行ってくるわね」

「ええ。いってらっしゃい」

暫くの間リリムは手を振り続けていたが、リビングからティーカが覗き込んだのを察して後ろを振り返った。

「ありがとうございます、ティーカ。これ返しますね」

ティーカの掌に先程の十円玉が乗せられる。彼女がそれをひっくり返すと、裏であるはずの面にも歴史的建築物が彫られていたのだった。

「どういたしまして♪ いきなり偽造に失敗した硬貨を貸して欲しい、なんて言うからビックリしちゃったよ。あんな真似しなくても、どうせ見逃すつもりだったんでしょ？」

「あの子の覚悟が知りたかったの。でも、流石姉妹ね。性格は違うけど無茶をするところや芯の強いところはヴェルローズさんによく似ているわ」

さて、とりリムは笑みを浮かべながら、

「ティーカ、お風呂に入りましょう？ あの子達を見ていたら少し昔を思い出していましたわ」

「ん、そうだね。久しぶりに一緒に入ろっか♪」

少し前の思い出話に花を咲かせながらティーカと浴場に向かうのだった。

第十二話『追走の使者達』 Part. 4

「――あらあら、皆さんお揃いで。わざわざ遊びに来てくれたのかしら?」

夜の灯りに照らされる廃ビルの四階。

コンクリートの床や鉄柱には先日の死闘の跡がそのまま残されており、古い血が発する鉄錆のような匂いも消えてはいない。この場所を罅ねぐらにする主はアルトリイにとつて忌まわしい存在でしかない鮮血に染まった鉄柱に凭もたれ掛かり、煙草を吸いながら来訪者を出迎えた。

ベリティエの揶揄するような態度にヴェルローズは一步前に出て、それが挨拶と言わんばかりに散弾銃の銃口を向ける。

「知れたことを。この間の決着をつけに来たわ」

「フ……少しはイイ顔をするようになったみたいね。いいわ、またそこから落としてアゲル。それで? 今回は全員で掛かってくるのかしら?」

余裕に満ちたベリティエの態度にヴェルローズは嘲笑で応える。

「貴女馬鹿でしょ? この子達は見届け人。貴女が無様に、地べたに這い蹲うづくるところを見るためのね」

「フン……アタシを挑発するなんてね。なら、今一度この“月桂樹”の味を思い出させてあげるわ。アンタの妹共々ねエッ!」

ベリティエは鉄柱に立て掛けていた、血がこびり付いたままの“月桂樹”を手持って軽く振るう。二、三振りしただけで周りの小石は砕け散った。

「な、何あの鞭……鎖の部分に刃が付いてる……」

あんな凶悪な鞭で叩かれたらどうなるか、思わず想像してしまつた小唄が恐怖に身震いする。ヴェルローズは震えを静めるようにその手を強く取った。

「大丈夫よ、小唄。あれが貴方達に届くことは絶対にないわ。それより、打ち合わせ通りにお願いね」

「うん、分かった。気をつけてね……」

『大丈夫！ 必ず成功するよっ』

「姉様……頑張って！」

三者三様の声援を受けて、ヴェルローズはベリティエと対峙する。そしてそれが始まりの合図ということなのか、狙いを定めて即座に散弾銃の引き金を引いた。

「ハッハア！ そんなへろへろ弾にアタシが当たるとでも思つて！
？ ツシャアツ——！！」

周囲にばら撒かれる弾を難なくかわし、ヴェルローズに急接近するベリティエは容赦なく“月桂樹”を振り下ろす。ヴェルローズはそれをバックステップでかわして間合いを取り、散弾銃の腹で鉄鎖の先端だけを受けるように動く。

「こんなもので貴女を倒せるなんて最初^{はな}っから思つてないわ、よー
——！！」

“月桂樹”の間合いの外から散弾銃を二発撃ったが、それもベリティエに余裕綽々とかわされる。しかしこれはヴェルローズの予想通りであり、最も態勢が崩れやすい着地した瞬間を狙って闇属性最速の精霊魔術を放つ。

「――闇の一条”！！」

「っ！？　チイッ――」

ベリティエは咄嗟に“月桂樹”を盾にするが着地の瞬間を狙われたため、“闇の一条”の衝撃と相まって大きく態勢を崩した。そこに間髪いれず散弾銃の追撃が入る。これにはさしものベリティエも対応することが出来ずに散弾が体中にめり込み、思わずその場に膝を突いた。

「――フ……フフ……こんなモノじゃまだまだアタシは倒れなくてよ？　さっさと“憎悪”を開放したら如何？」

直撃を受けたにも関わらず、何事もなかったかのように立ち上がるベリティエ。挑発する余裕を見せつけながら、彼女は先日の戦いとは明らかに違うことを冷静に分析していた。

（明らかに牽制しながら戦っているわね……そしてどこから感じる、この魔力の高まり具合は――あのコ達ね。集中しているのは男のコとその側にいる妖精か。もし、妖精があのコの力を増幅もしくは橋渡しするような役目なら……放っておくワケにはいかないわね！！）

「悪いけど、貴女如きを倒すのに“憎悪”は必要ないわ。これで十分よ！」

ヴェルローズは散弾銃を分解して新たな武器を想造した。彼女の手に現れたのは銃剣付きの突撃銃^{アサルト・ライフル}。それをフルオートで一斉射し、ベリティエの行動を誘う。

「言ってくれるじゃないの——!!」

突撃銃の一斉射をかわしながらベリティエは再度間合いを詰める。フルオートは狙いが定まりにくく射線も読みやすい。かわすのはそう難しいことではなかった。

「ツアラァ——!!」

「くうっ!!」

銃剣と“月桂樹”が交差し、剣戟を立てる。ベリティエは立て続けに“月桂樹”を叩き付けながら一歩ずつ斜め前に、立つ位置を変えてゆく。打ち合いをしやすくするためにヴェルローズも自然と逆斜め前に位置を取ってしまう。しかし、これこそがベリティエの狙い——真横に小唄達が見える位置に來ると彼女はニヤリと笑い、

「掛かったわね! フッ——!!」

「くっ!? しまった!!」

まんまと乗せられたことに気づいたヴェルローズは急いで対処しようとしたが、時既に遅し。得体の知れない毒物は、小唄達を目掛けて放たれた後だった。

だが、計算高く行動していたベリティエにも誤算があった。それは、小唄達の側にいる彼女の能力を知らなかったことだ。

「——させないっ!! はあっ!!」

小唄達を庇うように一步前に出たアルトリイは想造した片手剣アインハンダーでベリティエの毒を切り払う。切り払われた毒は青い光に包まれて浄化されるように霧散した。

「私がいる限り、この子達には手出しさせない!!」

戦意の籠った鋭い切っ先がベリティエに向けられる。彼女の霊力を付与された片手剣は青白い光を放っていた。

「チッ! 浄化作用のある霊力か!! ハッ——」

ベリティエはヴェルローズの行動に気づいたが遅い。既に彼女の足は振り上げられた後だった。

「ッ!? クハッ——」

「戦闘中にどこを見てるのかしら!?!」

ヴェルローズの強烈な蹴りを腹部に受け、ベリティエは思わず体をくの字に曲げて胃液を吐き出した。その間にヴェルローズはベリティエとの距離を十分に取る。小唄から魔力を受け取り増幅させていたサファイエの体は十分すぎる程に光り輝き、ヴェルローズに魔力を供給し始めていた。

「ク……まだまだア!! アアアアアアア——!!」

苦痛を堪えながら態勢を整えたベリティエの気が爆発的に膨れ上がる。それは、ヴェルローズが“憎悪”を開放していた時に酷似していた。

本質である“狂気”を纏い、先程よりも遥かに速いスピードでベ

リティエはヴェルローズに接近する。だがヴェルローズは感情の読めない視線を向けるだけでその場から動かない。

「死ねェ！ 闇の薔薇アア——！！」

「本質を開放したのね……けれど、もう遅いわ。穿て——“闇の一条”！」

ベリティエが“月桂樹”を振り下ろすよりも先に、ヴェルローズの右手から放たれた“闇の一条”が無防備なベリティエに直撃する。ほぼ至近距離で放たれた“闇の一条”は凄まじい勢いでベリティエを吹き飛ばし、二人の距離を大きく開けさせた。

「ガアアッ！？」

「束縛せよ——“闇の束縛網”」

血走った翠の瞳で睨み付けるベリティエの周囲から黒い手が次々と彼女に巻きつき、きつく締め上げる。

「グアアアア——！！」

「これで終わりよ。降参するなら命だけは助けてあげるわ」

その言葉に我を取り戻したか、ベリティエは理性ある目でヴェルローズを睨み付けた。“月桂樹”を握る右手に毒物を想造し、それを鉄鎖鞭全体に伝わらせる。彼女は威嚇するように、咆哮にも似た叫び声を上げた。

「っ！？」

「このアタシをつっ！ “翠の毒牙” ベリティエをなめるなア——！！」

「ひっ——！！」

彼女達の背後で誰かが短い悲鳴を上げた。

ブチブチと繊維が千切れる、生理的嫌悪感を催す音を立ててベリティエの左腕が根元から千切れる。それと同時に束縛も消え、彼女はヴェルローズに向かって特攻した。所詮は下級精霊魔術。一箇所が解放されれば残り全てが解放されてしまう。毒と“月桂樹”の刃の同時攻撃——掠っただけでも致命傷は免れないだろう。しかしヴェルローズは冷静に魔力を貯め続け、そして莫大な魔力の全てが彼女に集まった——。

「その心意気に免じて、全力で迎え撃ってあげましょう。『ファンタズマ幻象世界・憎悪ノ煉獄庭園』——！！！」

遙か古に封印された“世界”の名を叫ぶヴェルローズから魔力・霊力・精神力の全てが開放され、ベリティエの視界は紅く染まった——。

第十二話『追走の使者達』 Part. 5

「——ココは？」

紅の衝撃に思わず目を瞑っていたベリティエが瞼を開けると、そこは正しく紅の世界だった。

紅い大地、紅い空、紅い湖——ベリティエの足元には紅い薔薇と黒い薔薇、そして本来は紅では在り得ない花々が咲き誇っている。その花々の全てがベリティエを見るようにして咲いていた。

（何なのコレ……気味が悪いっतरらないわ）

「V? l k o m m e n——」

「!?!」

今まで紅い空間だった所から聞こえてきた声にベリティエが振り向く。そこに漆黒の古風な椅子に座りながら足を組み、グラスに注がれた赤ワインを優雅に飲んでいるヴェルローズの姿があった。

「ようこそ、私の世界へ。歓迎するわ」

「な、何のマネかしら？ 魔王にでもなったつもり？」

声を震わせながらも気丈に振舞うベリティエを見下ろしながらヴェルローズは薄く笑う。紅と黒の支配者として、両脇を守るようにして咲く一際大きな黒薔薇を優しく撫でる。
スヴァート・ローサ

「魔王……そうね。確かにこの“世界”の中では私は魔王と言える

べき存在だわ。でも……残念ね」

「な、何がよ？」

ヴェルローズは憐憫の視線をベリティエに向けながら、一際大きな紅薔薇も黒薔薇と同じように優しく撫でた。

「貴女……この子達には歓迎されていないみたい。そうね……貴女の足元の花は全て『剣山』よ。気をつけなさいな」

「はあ？ 何を——」

言っている、と続けようとしたベリティエが即座にそこから離れた直後——彼女を貫かんとする鋭利な剣が次々と地面から生えた。気づかなければ彼女は確実に串刺しにされ、一步遅れただけでも体の一箇所は間違いなく貫かれていただろう。

（そんな馬鹿なことがッ！ さっきまで確かにただの花々だったはずだわ……！！）

「ふふふ、だから言ったでしょう？ まあ、勘は良いみたいね？ でも、油断していると……貴女の側に咲く向日葵が『紅い種を飛ばす』わよ？」

「なっ——！？」

ヴェルローズが指で差し示した通りにベリティエが目を向けると、何もなかったはずの場所には彼女の背よりも高く紅い向日葵が咲き聳え、種という名の弾丸を敵に向けて撃ち出した。

「クッ！ アアア……」

銃弾よりも遙かに速いその弾丸を全てかわすことは出来ず、体の

あちこちを穿たれたベリティエはその場に蹲る。不思議なことに何の傷痕もなく痛みだけが残っている状態だったが、それを考えるだけの余裕は今の彼女には皆無だった。

（ぐっ……花を見たらアイツの思う壺だわ。ここは空を——）

自分の考えを信じてベリティエは紅い空を見上げる。それを椅子に座りながら悠然と見下ろすヴェルローズが、ますます笑みを深める。彼女は空になったグラスを椅子と同じデザインの台の上に置き、肩肘を突いて左手の甲に頬をつけながら言った。

「愚かね。まだ分からないのかしら？　一つ予言をしてあげるわ。紅い空に輝く一番星の光が、今にも貴女の『左目を貫く』でしょう——」

「え？　ぎ、ギヤアアアアアアアア——！？」

紅い世界にベリティエの絶叫が響き渡る。通りに紅い空の一番星から降りてきた一筋の光が彼女の左目を貫き、焼いたのだ。痛みに耐えながらベリティエが恐る恐る左目を右手の指で触れると、右手にゼラチン質のような柔らかい感触が伝わる。

見えない左目は失われてはいない。しかし焼け付くような痛みはいつまで経っても消えない。

「グッ……なめるなッ——！？」

ベリティエは残された右手の腹で左目を押さえながら“狂気”を開放した。だが、何の変化も以前のような激しい気の放出も見られない。そこでようやく彼女はこの世界の特殊性に気付く。

（“狂気”が無効化された！？　この“世界”はまさか——）

「ふふ……ようやく気づいたみたいね？　褒美に私の“世界”について教えてあげるわ。まず一つ」

ヴェルローズは絶対的強者の視線で見下ろす、ある種の恍惚感を感しながら右手の人差し指を立てる。

「貴女が思った通り、この“世界”の中では私を対象とする以外の付与効果が全て無効化される。貴女の本質も例外ではないわ。そして二つ目——」

右手の中指を立てて説明を続ける。

「先程から貴女が体験しているように、この“世界”では私が言ったことが全て『真実』になるわ。勿論、制約もあるけれど……そこまで貴女に教えてあげる義理はないわね」

「クッ……！」

絶対的優位が向こうにあることを知ったベリティエは悔恨に齒軋りしながら立ち上がる。未だ痛みの消えない左目を押さえながら。

「これで分かったでしょう？　この“世界”にいる限り、貴女には一分の勝ち目もない。大人しく降参なさい。そうすれば、命までは取らないわ。私の質問に答えてくれたら、の話だけど」

「アンタの質問……？」

ベリティエは当然の如く、怪訝の表情をヴェルローズに向ける。

「貴女の背後関係を洗いざらい喋りなさい、それだけよ。単純でしよう？」

「ハッ！ 何を言うかと思えば……。今回ののはアタシが全部一人でやったことよ。背後関係なんてないわ」

喋る気など毛頭ない態度のベリティエにヴェルローズは口の端を吊り上げながら、いつのまにか満たされていたグラスを片手に赤い液体を転がしながら不敵に笑った。

「ふふ……さっさと吐いてしまったほうが楽になると思うけれど、それもまた良し。精々足搔いて見せて頂戴な。——ああ、そうだわ。貴女、喉が渴いてないかしら？」

「……っ」

ヴェルローズの的確な質問にベリティエは声を詰まらせる。先程から喉が猛烈な渴きを訴えていたのだ。

（喉が渴いた、喉が渴いた、喉が渴いた、喉が渴いた、ああ喉が渴いたわ——水が、欲しい……）

一度意識すれば、それは二度と離れない。ベリティエは左目の痛みも忘れて喉をしきりにさすり始める。愉悦の笑みを浮かべたヴェルローズが軽く右手を上げると、ベリティエの足元に赤い液体で満たされたワイン・グラスが現れた。

「……何のつもり？」

「貴女に与えるのは勿体無い程の極上の赤ワインよ。毒なんて入れてないから、安心してゆっくり味わいなさいな」

「フン！ 誰がこんなもの——」

敵に薦められたものを馬鹿正直に口にする者などいないだろう。しかし、ベリティエの意思とは裏腹に彼女の右手はワイン・グラス

を求めて勝手に動く。強固な意思で止めようと思っても、脳からの命令は喉の渴きを癒すことをベリティエに優先させた。

（飲みたい、飲みたい、飲みたい。あの赤いものが飲みたい……。ああ、もう少しで手が届くわ……）

「あ……ああ……もう我慢できないわっ！！」

右手がワイン・グラスを掴んだ途端、とうとう抗えなくなったベリティエは乱雑にそれを口元に運んだ。最低限のマナーも何もあったものではない。口元から零れた赤が彼女の翠のドレスを染め上げてゆく。

玲瓏^{れいろう}だがチーターの強靱な脚の如く、力強く引き締まった味がベリティエの口内を満たしてゆく。それは、どこか狂った果実を思わせる味でもあった。

あっという間にワイン・グラスが空になる。それまでベリティエの醜態を眺めていたヴェルローズが、これ以上愉快なことはないといった様子で彼女を絶望の釜底に突き落とす一言を言い放った――。

「ふふふ、美味しかったでしょう？ 美味しくないわけないわよね？ だって……それは自分自身の味なんですもの！」

「――なっ！ なんですって――ウグッ！？」

自分で自分を飲んでいる。禁忌を犯したことを無理やり突きつけられたベリティエは、体の奥底から込み上げてきた嘔吐感に耐え切れず、飲み干した赤い液体をその場に吐き出す。

汚物よりもおぞましい液体を全て吐き出させるように指を喉の奥に突っ込み、えずきながらも体に残っていた液体を胃液ごと吐き出したベリティエは自らが出した液体の上に倒れこんだ。

「はあ、はあ……っ！ あ、アンタ何を考えて――」

ヴェルローズを睨み付けようとしたベリティエが足元を見て絶句する。空にしたはずのワイン・グラスは、再び赤い液体に満たされていた。

吐き出したものが注がれたわけではない。それまで、表情だけは強気を保っていたベリティエの顔に明確な恐怖が浮かんだ。

（う、嘘よ……！ ア、アタシがさっき飲み干したはずじゃないッ！！
なんで……どうしてよッ！！）

「あらあら、折角極上のワインを飲ませてあげたのに全部吐き出すなんてとんだ無礼者ね。そんな子には罰が必要ね」

肘を付きながらヴェルローズが指を鳴らした。側の黒薔薇から伸びた茨がベリティエに巻きつき、彼女を無理矢理立たせる。体中の茨が容赦なく身体に食い込み、呻き声を上げさせる。

「く……あッ！ なっ――！？」

気づけばベリティエの側に、赤い液体に満たされたワイン・グラスを持った女が立っていた。格好が侍女のものということを除けば、ヴェルローズに瓜二つの少女だった。ヴェルローズ似の少女は無表情でワイン・グラスをベリティエの口元に持っていき、口を無理矢理開かせて赤い液体を流し込んだ。

「や、やめッ……ウブッ……ングッ……」

『……』

「水責めって通常の拷問で九リットル、特別な拷問だと十八リットルが基準だったそうよ。貴女はどこまで耐えられるかしらね？ ふ

ふふ……」

愉悅の表情でワイン・グラスを傾けるヴェルローズ。その間にも、ヴェルローズ似の少女が赤い液体をベリティエの体内に流し込んでいく。

水責めに使われた水は塩水だが水には違いない。だが、今ベリティエの体内を満たしつつあるものは水ではなくワインだ。酩酊感こそないものの、彼女の胃は早くも拒否反応を起こし始めていた。

「ウグッ……ゲエエエ……オムヴッ——」

『……』

ベリティエが嘔吐した赤い液体が彼女と彼女の翠のドレス、そしてヴェルローズ似の少女と侍女風の服を紅く染め上げる。顔を紅く染められながらも少女は一切の表情を変えず、ただ只管にワイン・グラスの中の赤い液体を流し込む。

「——！！」

ワイン・グラスに目を向けたベリティエがそれを目にする。そして、あまりの恐怖感に身体を激しく震わせる。先程から体内に注がれ続けているはずのワイン・グラスの中身が全く減っていなかった。

（そんな……これじゃいつまで経っても終わらない……！！）

水責めの水は大量ではあるが何れ終わるもの。だがこれは二十リットル、三十リットル注がれたとしても終わりではないのだ。

なぜなら——

「ようやく気づいたみたいね。そう、これが三つ目——」

ヴェルローズは右手の人差し指、中指に続いて薬指を立てた。

「私の“世界”では実体が傷つくことはない。その代わり、相手の精神を削り取る。そして削り取られた精神は赤ワインになり、このワイン・グラスを満たす。貴女が精神を削り取られている限り、このワイン・グラスの中身が減ることはないわ。それにしても――」

一旦言葉を切り、ヴェルローズは優雅な手付きで赤ワインを口に運ぶ。十分舌で転がした後に嚥下する彼女の表情は恍惚こうつこつとしていた。

「なんて素晴らしい味なのかしら。強靱な意思に混じり合う恐怖と憎悪と狂気の味。世界中のどんな赤ワインも、これには到底敵わないでしょう。ああ、飲んでいるだけで濡れてしまいそうだわ……」

「くっ！ この変態女がっ――あ、や、やめっ……フゴォ……ウブウゴッ……」

激昂しようとしたベリティエの言葉は続かなかった。それまで無表情に赤い液体を注いでいたヴェルローズ似の少女の顔に明らかな怒りが浮かび、更にワイン・グラスを傾けたからだ。同時に開いている手でベリティエの鼻を掴み、彼女の呼吸を阻害させる少女。急な角度に傾けられたため、赤い液体が注がれる速度も当然速まる。彼女の腹部が見る間に膨れていく。

「言葉を慎みなさい。その子――ニルヴィス・ローザリイ闇薔薇の姫――は、どんなに小さなものでも私への悪口は決して許さないわ。ふふ………何そのお腹？ まるで妊婦みたいよ？ 今、蹴りを入れたらどうなるのかしらね？」

恐ろしいことを言いながら静かに椅子から立ち上がるヴェルロー

ズは、ベリティエの恐怖を煽るようにゆっくりと彼女に近づく。最早、ベリティエに抵抗する術は一つたりとも残されてはいなかった。死舞人形だルナティックだと言ってもベースとなっている身体は、元の主人の精神情報から創ったもの。一部分だけを除けば、人間の構造と何ら変わりはない。今の状態で腹をサッカーボールのように蹴られたらどうなるか、それはどんな馬鹿でも分かるであろう簡単なことだ。

（これが“^{オリジン}原初の死舞人形”の力……！　アタシ達にはない“思慕石”を持ちし八体が内の一体ッ！！　“模倣”如きが敵うような相手ではなかったということね……）

悟ったベリティエは、僅かに自由が残された右手で地面を叩くような動作を見せた。それを降参と受け止めたヴェルローズは今まさに彼女の腹部を蹴り抜こうとしていた足を降ろし、闇薔薇の姫に視線を送る。

『……』

視線の意味を汲み取った闇薔薇の姫はベリティエの口元からワイン・グラスを外し、ヴェルローズに一礼すると音もなく姿を消した。茨による拘束も解かれ、開放されたベリティエが自らが撒き散らした液体に濡れた地面に崩れ落ちる。地面に落ちた衝撃で彼女は座り込んだまま、何リットル注がれたかも分からないワインを滝の勢いで嘔吐する。

赤い液体で自分が汚れるのも構わずに嘔吐し続ける。ベリティエのドレスの前半分は完全に赤く染まっていた。否、染めただけでは終わらず染み切れてない液体がドレスの膝部分に小さな泉を作っていた。

やがて全ての赤い液体を吐き終えた後には、それによって出来た

深紅の池の中で虚ろな目を中空を向けるベリティエがいただけだった。

「う……あ……ああ」

「さあ、話してもらおうよ。貴女の背後にいる奴らのことを」

ヴェルローズはベリティエの背後に紅い向日葵を展開させる。精神を極限近くまで削り取られたベリティエに抵抗する力など残されてはいない。恐怖と畏怖の楔^{くさび}を打ち込まれた彼女は震えながら、虚ろな目をヴェルローズに向けたまま少しずつ語り始めた。

第十二話『追走の使者達』 Part. 5 (後書き)

V i k o m m e n ↓ ようこそ

第十二話『追走の使者達』 Part. 6

——今から一ヶ月前。その者達は前触れもなくベリティエの前に現れた。

「……何よ、アンタ達」

その日、ベリティエは鉄柱に凭れかかりながら夕陽を眺め煙草を吸っていた。夕陽が沈めばルナティックとして狩りに出掛ける時間である。不機嫌を隠さずに睨み付けるベリティエに、訪問者のうちの一人が一步前に出て会釈をする。

「あなたが“翠の毒牙”ベリティエですね？ お騒がせして申し訳ありません。私は“白衣の人形殺し”と申します。そして、この子は“幼き宙”そら。以後、お見知りおきを……」

白衣の少女はフリル付のスカートの端を手で抓み、優雅に挨拶した。“幼き宙”と呼ばれた子供らしい服装の幼い少女もベリティエにニコニコと笑顔で手を振る。

（……聞いたことがない名前だけど、とりあえず敵意はなさそうね）

相手が敵ではないと知ると、ベリティエは鉄柱の裏の“月桂樹”に伸ばしていた左手を元に戻した。しかし警戒を完全に解いてはならず、依然として目は睨み付けたまま紫煙を吐き出す。

「アンタ達の名前は分かったわ。一つ聞きたいのだけど、アンタ達

は死舞人形なのかしら？」

決して良いとは言えない煙のにおいが“白衣の人形殺し”と“幼き宙”に流れる。人間ならば大半が不快に思う行為だが、二人は咳き込むこともなく平然としている。薄紫色の瞳で無表情にベリティエを見つめながら“白衣の人形殺し”が口を開いた。

「そうですね。一応私達は死舞人形と言えるでしょう。あなた方からしてみれば紛い物かもしれませんが」

（なるほど、“アート”ってことね。それにしても……コイツ、感情が全然読めないわ……）

ベリティエの翠の瞳が“白衣の人形殺し”のみに向けられる。

先程から一切の変化もない表情。更に無機質とも言うべき薄紫色の双眸が感情を読みにくくさせている。少女の身体を飾っている純白の衣装にも意味があった。白や黒といった原色には視線を惑わせる効果がある。“白衣の人形殺し”がそれを知っていてこのような姿をしているのかどうかは定かではない。だが無表情と無機質と原色の白が混じり合い、彼女の感情を読みにくくさせているのは紛れもない事実だった。

一方の“幼き宙”はというと、こちらはどこにでもいるような近所の子供達を思わせる今時の格好をした少女に近い少女だ。感情も非常に分かりやすく、今も辺りを物珍しそうに赤紫色の瞳をキョロキョロさせている。ベリティエは“幼き宙”への注意を解き、“白衣の人形殺し”にのみ注意を向けることにした。

「分かったわ。それで、“アート”のお二人がアタシに何の用？」

“アート”という言葉に“白衣の人形殺し”の片眉がピクリと動

いたが、気のせいと見紛う一瞬のこと。平静を保ったまま、“白衣の人形殺し”は用件を切り出した。

「近いうちに私が連れてくる死舞人形を徹底的に甚振^{いたぶ}っていたきたいのです。名前は“月の光”アルトリリイ。“原初^{オリギン}”と呼ばれる最上の死舞人形の一人です」

「! ! へえ……中々面白い話じゃない。もし、アタシが断ったとしたら?」

ベリティエにとっては願ってもない話。言葉では言っても断るつもりなど毛頭なかった。

「どうぞ、ご自由に。そうなれば別に最適な者を探すだけです。ですが、“墮落”したあなたにとってはまたとない機会では? あなた達では到底敵わない“原初”を好きなだけ甚振れるのですから……ふふふ」

「——っ! ! !」

（“原初”だけではなく“墮落”も……! コイツ、一体どこまで知っている——! ?）

「……いいでしょう。その依頼、引き受けてあげるわ」

ベリティエは“白衣の人形殺し”に得体の知れないものを覚えながらも、今は敵対しないほうが良いと依頼を承諾した。

“白衣の人形殺し”が優雅に一礼する。

「ありがとうございます。今後はこの子に連絡役を任せますので、宜しく願いますね。それでは、ごきげんよう」

「バイバーイ♪　べりちえのお姉ちゃんっ」

用事は済んだと言わんばかりに“白衣の人形殺し”は踵を返し、“幼き宙”もまた、ベリティエに手を振って白い後姿を追いかけていった。

一人残されたベリティエは先程の言葉を思い出して苦笑する。

「べりちえって……アタシの名前はベリティエなんだけどねえ……ま、いいわ。フフ……これから楽しくなりそうね」

夕陽は今落ちたばかり。狩りの時間にはまだ早い。

心底楽しそうな笑い声を漏らしながら、ベリティエは新しい煙草に火をつけて紫煙を燻らせた。

「——これがあの時にアイツらと交わした会話の全てよ……。後はアンタ達も知っての通り、アタシはアンタの妹を苛め散らかして最終的にアンタが覚醒するように仕向けた。結果はこのザマ——かは……っ!？」

パスという間抜けな音の後に急激な脱力感。後に来た灼ける痛みに目を向ければ、胸のやや左から血が零れて深紅の池に新たな彩りを添えていた。

霞みゆく目で前を見つめるベリティエ。ヴェルローズの右手には、消音装置の付いた拳銃が握られていた。

「な……ぜ……。命だけは……助ける……て……いったじゃな……い……」

「説明の途中で悪いのだけど時間がないのよ。貴女には一度死んで

もらうわ。目覚めた時には元の世界に戻っているはずだから安心なさい」

「フ……アンタ……嘘つき……ね——」

そう言っこたぐて小憎らしい笑みを浮かべたベリティエから目の光が消え、自らが流した血と赤ワインの池の中でそれきり動かなくなった。

「嘘つき、ね……」

屍と化したベリティエを見つめ、呟きながらヴェルローズは拳銃を分解する。

彼女は嘘を言ってはいない。何故なら“憎悪ノ煉獄庭園”から、招かれた敵が帰る術は『肉体的な死』を迎えるしかないからだ。『精神的な死』ではいけない。それは、死舞人形に関わる全てが忌避すべき事態。『精神的に死』によって還る場所は、次代への転生を許さない永遠の闇しかないのだ。

（何はともあれ、あいつらがこの件に関わっていることは確かね。急いで戻らなければ……）

“憎悪ノ煉獄庭園”に入ってから二十五分が経過しようとしていた。まだ時間が来ていなかったことにヴェルローズは安堵し、いつの間にか隣に立っていた“闇薔薇の姫”に視線を向ける。

「“門”を開いて頂戴」

『……』

刹那に悲哀と寂寥の表情を見せながらも“闇薔薇の姫”は確かに頷き、紅い空間に現世へと繋がる“門”を作り出した。宇宙空間にも似た、光の粒子が闇に輝く空間が顔を覗かせる。

門を潜る時にヴェルローズは“闇薔薇の姫”を振り返り、寂しくも優しい微笑みを浮かべた。

「ありがとう。そして、ごめんなさいね……。まだ、貴女達の側にいてあげることが出来ないわ」

闇の向こうに消えようとしているヴェルローズに、“闇薔薇の姫”はまなじり涙を浮かべて小さく首を横に振る。ヴェルローズの姿が完全に消えるまで彼女は手を振り続け、やがて後姿が闇の先に消えた。

『……』

ヴェルローズの姿が見えなくなってから“闇薔薇の姫”は暫く手を振っていた。彼女の表情は“門”を閉じる最後の最後まで晴れやかな笑顔だった。

「――終わったわ」

突然近くから聞こえてきた声に驚いて飛び上がる小唄とサファイエ。目を向けると五分ほど姿が見えなかったヴェルローズと、荒い息遣いの方向に視線を向ければ、ほぼ全身が紅く染まったベリティエの姿があった。

「くっ……」

「ヴェルっ!？」

「姉様っ!!!」

ぐらりと体が揺れ、苦悶に片膝を突いたヴェルローズに三人は急

いで駆け寄る。

（あの五分の間に一体何があったんだろう……それに、ベリティエの首元のあれは……）

ヴェルローズから視線を外してベリティエを見ながらも、彼の明晰な脳は早くも分析を開始していた。

彼の考えではないが、現実世界と幻想世界では時間の流れが違う。現実世界の一分は幻想世界の五分に等しい。

だが、原因はそれだけではない。幻想世界は、術者の精神の強さが最も問われる世界なのだ。そして、“憎悪ノ煉獄庭園”でヴェルローズがまだ時間が来ていないことに安堵した理由はここにあった。

“憎悪ノ煉獄庭園”発動後のコストは一切掛からない。一見すれば便利な能力だが、その裏には強烈な代償が隠されていた。術者の実力を超える時間を過ぎると“憎悪ノ煉獄庭園”に取り込まれてしまうのだ。そうなれば二度と現実世界へは戻れず、ヴェルローズという死舞人形は『死んだ』ことになる。今の彼女の実力では三十分の行使が限界。それ以上は、一分一秒過ぎるごとに取り込まれる可能性が急激に高まる。事実、二十五分の時点で彼女は既に取り込まれかけていたのだ。

（ベリティエの精神体^{ワイン}で回復しつつでもこれ程とはね……。今の私では多用は禁物、か）

「大丈夫、少しふらついただけよ。聞きたいことは全て聞いたわ。長居は無用よ、帰りましょう」

「……そうだね」

『……うん』

あの時に何があったのか、その答えを弾き出すことが出来ない小

唄はサファイエは頷くしかない。だが、それを理解しているアルトリイイは何かを考え込むように姉の顔を見つめたままだった。

（幻象世界・“憎悪ノ煉獄庭園”……ああいう強力な力が私にも使えれば……）

「アルト。どうしたのかしら？」

「えっ！？ あっ……な、なんでもないわ、姉様」

姉の呼び止めにアルトリイイは慌てて振り返り、三人の後ろ姿を追う。そのまま出口に向かうかと思われたが、突然ヴェルローズが足を止める。背後の十分過ぎる程に感じ慣れた気配に彼女が振り向けば、気絶していたベリティエが立ち上がろうと片膝を突いていた。

「ま、待ちなさい……」

「……何？ まだやるというなら相手になるわよ？」

ヴェルローズは睨みを利かせながら右手に拳銃を想造した。精神力こそ底を尽きかけているが、魔力・霊力ともに十分だということ存外に見せ付ける。ゆっくりとした動作で立ち上がったベリティエは、只の鉄柱に凭れかかりながら口に咥えた煙草に火を付けて静かに首を横に振った。

「フン……誰かさんが全部吸い取ってくれたお陰でそんな力は残されてないわよ。ただ、ひとつ聞いておきたくてね。アンタ……何故アタシを殺さないのよ？ アタシはアンタの妹を散々黽つたのよ？」

自虐のようなベリティエの言葉に辺りが静まり返る。沈黙を破るようにヴェルローズは、ベリティエのある一点を指で差した。

「え……?」

「確かに、私には貴女を殺す権利があるわ。貴女はそれだけのことをアルトにした。だけど……そのペンダントから誰かの想いを感じる気がするわ。そうでしょう――?」

言い切ってヴェルローズは小唄を見た。突然向けられた視線に戸惑いながらも小唄は小さく頷く。

「ハア……流石にドール・マスターサマ相手には隠し通せないわね。そう……これはアタシが一番大切に使っていたヒトから贈られた宝物よ。でも、それがアンタに何の関係があって?」

彼女のそれは理由が弱い。ここにいる他の皆も思っていることだ。それを知ってか知らないでか、ヴェルローズは周りの三人が騒然とすることを平然と言った。

「馬鹿ね。もう一度その人のために生きてみても良いんじゃない? っって言っているのよ」

「姉様っ!?!」

アルトリリイは一人、声を上げたが恨みを晴らさないと言う彼女を嗜めるためではなかった。

ベリティエへの恨みや憎しみを忘れたわけではないが、アルトリイもまたベリティエが今までと同じようなルナティックではないことに漠然とだが気づいていた。故にこれは、憐憫や同情といった感情から出た声だった。

「――っ!!! アンタ……正気? アタシはもうルナティックなのよ? どの面^{ツラ}下げて今更“模倣”に戻れっのよ!?!」

「貴女が狂気のみで生きているルナティックなら、そのペンダント

はとうの昔に塵と化しているはずよ。ルナティックに残されるのは狂気のみ。なら、貴女は違うわね」

笑みを浮かべながら諭すように言うヴェルローズに、ベリティエは呆れたような、諦めたような溜息を一つ吐く。

「ハッ！ とんだ甘ちゃんもいたものだわ。ハア……もう、さっさとアタシの前から消えなさいよ。アンタの説教なんて聞きたくもないわ」

彼女は掌で両目を覆いながら、ハイヒールの踵でコンクリートの床を鳴らした。左手がないベリティエの、『さっさと去れ』という意思表示だろう。掌で隠された彼女の両目からは、止まらない涙が頬を伝って流れ落ちていった。

「そうね。小唄、アルト、サファイ。今度こそ帰りましょう」

ベリティエの様子にヴェルローズは満足したように微笑んで踵を返した。呼び掛けられたアルトリイとサファイエもそれに倣って背を向ける。ただ一人、小唄だけは何か懸念事があるかのようにベリティエを見ていたが、

「小唄？ 何をしているの？」

「あ、うん……何でもないよ」

振り返いたヴェルローズに声を掛けられ、彼もまた踵を返した。全員が後姿を見せた後にベリティエは鉄柱から離れ、新しい煙草を口に咥えて火を付ける。紫煙を吐き出した彼女の顔は、暗雲を払った空の如く晴れやかなものだった。

（ルナティックに堕ちたアタシを助ける、か。ホント、どいつもこいつも甘ちゃんばっかだわ。でも、まあ……悪い気はしないわね。フフ——）

——そして、今度こそあのコのために生きよう。
そう続けようとしたベリティエの思考が止まる。

「——!? ガハッ……!!」

何かが自分に突き刺さる鈍い音。遅れて来た激痛と共に大量の鮮血が吐き出される。

何が起こったのか、自分の胸元に視線を落とすベリティエ。彼女の右肺がある箇所からは無骨な剣先が生えていた。

「っ!? 馬鹿な……!!」

「あ、あれは……あの子はっ!!」

『そんな……今の今まで気配に——違う! まさか……気配そのものがない……!?!』

突然発生した異常な事態に小唄達四人も振り返る。その惨状を目にしてそれぞれ感じたことを口にした。

小唄の目に、背中から剣で胸を貫かれたベリティエの背後に夜の闇を背にして二つの人影が映る。

「あ……ああっ……!!」

そのうちの一つの姿を認めたアルトリイが震えて立ち竦む。フルルのみで装飾されたシンプルな純白の衣装に無機質な薄紫色の瞳。あの日、彼女を攫った者の姿に他ならなかったからだ。

「今後、この世界にあなたの生きる場所など何処にもありはしませんよ。何故なら、あなたはここで私に処理されるからです。“翠の毒牙”」

「ぐ……ア……アアアっ!!」

塵でも扱うかのように引き抜かれた歪な剣の刃が傷を更に深く拡げる。奔る激痛に彼女はのた打ち回り、その度にコンクリートの床を灰から赤へと染めてゆく。

「“白衣の人形殺し” サクリファイス……っ!!」

ヴェルローズが純白の少女の名前を叫ぶ。奇しくも暗雲に隠されていた月が廢ビルの中までも照らし上げた。

不釣り合いな剣を手に、返り血を浴びて白を赤に染める“白衣の人形殺し” サクリファイスが感情の読めない瞳を光らせる。そして、何時もと変わらぬ笑顔を見せる“幼き宙” ルナテラが、沈黙するビルを背に小唄達に視線を向けていた。

第十二話『追走の使者達』 Part. 6 (後書き)

Part. 6をお送りしました。これで第十二話は終了となります。次回の第十三話で第一章は完結ですが、物語はまだまだ続きますのでお付き合いいただければ嬉しいです。

おまけ

スキル解説

幻象世界・憎悪ノ煉獄庭園

一定以上の魔力と同じ量の霊力、精神力を消費する最上位結界術『世界召喚術』の一種。ファンタズマゴリアに封印された世界の一つを現実にも召喚し、自身と招いたものをその世界に隔離する。

(≠固有結界)

主な効果は以下の三つ。

1. 術者及び術者が認識した味方以外に対する全ての付与効果を無効化する
2. 術者が言った『言葉』が実際に実行される
3. 2でダメージを与えた敵の精神体を削り取り、ワインにする。味方の場合、それを飲用することで魔力、霊力等(精神力以外)が回復する。敵の場合は更なる精神的損傷を与える

デメリットは以下の通り。

1. 術者の実力以上の時間を過ぎて行使し続けると、憎悪ノ煉獄庭

園に取り込まれる（現実的には死と同義）

2. より上位の幻象世界若しくは儀式結界術によって上書きされる

一度招かれた敵が現実に戻る方法は、術者を倒すか肉体的な死を迎えるかである。

第十三話『旅立つ者、残される者』 Part. 1

――承前――

――畳二畳分程の闇を挟んで対峙するヴェルローズ達とサクリフアイス、ルナテラの間^{けんのん}に剣呑な雰囲気^{けんのん}が流れていた。

『ご主人さまっ!?!』

その中でサファイエは小唄の変化にいち早く気づき、声を掛けた。突然声を上げた少女に反応して、ヴェルローズとアルトリイも小唄に視線を向ける。彼は一点を凝視したまま、身体を小刻みに震わせていた。

「どうしたのかしら？ 小唄？」

「聞こえないんだ……」

小唄はヴェルローズの声に漸く^{ようや}振り返り、唇を震わせながら言った。

「え？」

「ヴェルやアルトの声はよく聞こえる。でも……あの二人からは何も聞こえないんだ。あの子達は何者なの……?」
「っ!?!」

小唄の異常——否、この場合は変化又は進化といっても良いだろう——に気づいたヴェルローズとアルトリイは、すぐさま姉妹回線を開いた。

『姉様、これはもしかして……』

『……ええ、間違いないわね。人形の心を読む能力に磨きがかかってきているわ』

会話中に、ヴェルローズの背中に冷や汗が流れる。

卓越したドール・マスターは全ての人形の心を“声”として読むことが出来る。未熟な小唄はその能力を限定状況でしか使うことが出来なかった。だが、今この場でそれをやってのけたのだ。戦闘経験によって彼の才覚が鋭敏になってきているとでもいうべきか。

二人はそのまま会話を続ける。

『完全に能力を扱えるようになったのか、それとも無意識下でなのか……それはまだ分からないわね。一先ず様子を見ることにするわ』
『うん、そうだね。分かった——』

ヴェルローズとアルトリイは回線を閉じてサクリファイス達と向き合った。サファイエは先程から変わらずに小唄の様子の変化を見守っている。偶然か、はたまた必然か——それまで倒れ伏すベリティエに注意を払っていたサクリファイスが話しかけてきたのは、二人の会話が終わった直後だった。

「——ふむ。社長ファルからの命令ですし、先に“翠の毒牙”の処理をと思っていました、すっきりさせるために自己紹介を先にしておいたほうが良さそうですね」

言うところサクリファイスとルナテラは佇まいを直し、改めてヴェル

ローズ達と向き合うとスカートの端を摘んで優雅に一礼した。

「初めまして、織部小唄さん。そして、その守護精霊であるサファイエさん。私は“白衣の人形殺し”サクリファイスと申します。以後、お見知り置きを」

「ルナは“幼き宙”ルナテラって言うんだよっ♪ よろしくねっ！
おりべのお兄ちゃん、さふいえちゃん♪ べるろーずのお姉ちゃんとおとりりーのお姉ちゃんは久しぶりだねっ♪」

『……え！？』

サクリファイスに続いたルナテラの自己紹介に小唄とサファイエは目を見開く。幼女の一風変わった自己紹介に、ではない。サファイエの驚愕を小唄が心内で代弁した。

（サファイの誕生はヴェル以外には見られてない。それに、その後も表立って敵には出会ってなかった。もしかして、この子達は……ずっと前から僕達を見張っていた——！？）

「ええ、お久しぶり。今回の件、やはり貴女達が絡んでいたのね」

ヴェルローズが鋭い視線でサクリファイスを見る。見られたサクリファイスは何のこともないような表情で、

「その通りです。あの時に言ったでしょう？ 過去からは決して逃れられませんよ——っ」と

無機質な薄紫色の瞳で彼女を見ながら懷から紙のようなものを取り出そうとしたが、しかしルナテラと共に右へと避ける。二人が立っていた地面に鉄刃の鎖鞭が叩き付けられた。見れば、先程まで倒れ伏していたベリティエが荒く息を吐きながらも確かな足で地面を

踏みしめていた。背中から右肺ごと胸を貫かれていた傷は既に塞がっている。

「ハアハア……チッ！ “アート” 風情が、生意気に避けてんじやないわよ——っ！！」

「流石は死舞人形でありながらルナティック。あれだけの傷がもう塞がってしまいましたか。——っ」と

再び振り下ろされた“月桂樹”を今度は歪な剣の腹で受け流す。ベリティエから距離を取ったサクリファイスは、得物を構えて戦闘態勢を取った。

安易に介入するわけにもいかず、小唄達は見^{ケン}に徹する。

「“アート” って何のこと……？」

平静を取り戻しつつある小唄の呟きにヴェルローズは静かに答える。

「……“アート” とは“人工^{オールト}”。言うなれば、あの二人は“人工”の死舞人形よ。けれど、“人工”は人間が勝手に定めたもの……私達は認めてはいない。人間を生体改造して紛い物の“思慕石”を埋め込んだだけの代物を、死舞人形などと呼べるはずもないわ」

『生体改造』という言葉聞いて、小唄は思わず手で口を押さえる。そう言われれば、目の先にいる二人が急におどましく見えた。人間の形をした人間ではない存在——それは、大半の人間に恐怖を与えるモノだ。

しかし、ヴェルローズの言葉をサクリファイスは真っ向から否定する。

「失礼ですね。私達をあんな木偶人形と一緒にしなないでください。たとえ“人工”^{オールド}でも、あなた達“原初”^{オリギン}に一步も引けを取らないことを見せて差し上げましょう——」

「おおー、めずらしくお姉ちゃんがやる気になってるねー。ま、ルナティックに堕ちた死舞人形ごときに負けるお姉ちゃんじゃないしい、適当に頑張れーっ♪」

剣を構え直すサクリファイスを応援しながら、ルナテラはポーチから取り出した渦巻き状のペロペロキャンディを美味しそうに舐めながら目を笑わせる。言葉共々に明らかな挑発行為が見え見えだったが、ベリティエはいよいよ睚眦^{がいき}にルナテラを見た。

「フン、そこで見てなさいな！ 今すぐアンタのお姉ちゃんをズタズタに引き裂いてあげる！！ ツシャアア——！！」

吐き捨てて、ベリティエは先程の戦闘で瀕死にされたとは思えない程の速さでサクリファイスに肉薄する。剣を持つ手とは逆の肩口を狙って鎖鞭を一閃——鋭角な鉄の刃が肩口に食い込み、そのまま縦に引き裂く。

「アハハッ！ 油断したわねっ！！ その左腕はもう使えないわよ——っ！？」

声高に勝利の笑い声を上げていたベリティエだが、引き裂かれたサクリファイスの腕の付け根からは血の一滴も流れない。言葉を詰まらせた彼女の前で、その姿が掻き消える。

「なっ——」

「油断？ これは余裕というものですよ」

掻き消えたサクリファイスとは全く別の方向から冷静な声。舌打ちをしながらベリティエが振り向くと、五体満足な少女の姿がそこにあった。

「クッ!!」

ベリティエは三度^{みたひ}“月桂樹”を振り下ろし、サクリファイスを捉えようとするが当たらない。移動先を狙って振り下ろすも、これもまた空振るばかり。移動する、振り下ろす、かわす。移動する、振り下ろす、かわす――ベリティエの翠眼には映されていなかったが、少女が高速移動を繰り返す内に彼女の周囲を複数の少女が取り囲んでいるように見えてくる。変化に気づいた小唄が驚いたように呟いた。

「ぶ、分身……!?!」

『違うよ、ご主人さま……。あれは分身じゃなくて残像……』

小唄の肩の上に乗っているサファイエが答える。

「残像だって!?! あんなはっきりとした残像なんて見たことないよ……っ!?!」

「そうだね。サファイちゃんの言うとおり、あれは残像。一見、分身とも思えるくらいはっきりとしているのはサクリファイスがそれだけ速く移動しているってこと。悔しいけれど、わたしじゃ目で追うのが精一杯……」

アルトリリイが戦いの行方を見つつ冷静に返す横で、ヴェルローズは面白くもなさそうに真実を口にする。

「げに恐ろしきは人間の底力ね。小唄……これが、私達“原初”と“人工”の最も違う点よ。“原初”は元から完成された存在。個々の術や技を昇華させることは出来ても、全く新しいものを扱うことは出来ない。でも、“人工”は人間が手を入れることで様々なものを扱うことが出来る。たとえば、それが下種^{タウ}な方法によるものでもね……」

「……」

突如に吹いた生暖かい夜風が、淡々と話すヴェルローズの金糸と、赤と黒のワンピースを僅かに靡かせては吹き抜けてゆく。小唄は何も返すことが出来なかった。

“原初”と“人工”。この関係をPCに例えれば分かりやすいだろうか。ヴェルローズ達はメーカー製のPC。完成されてはいるが拡張性に乏しい。一方のサクリファイス達は自作のPC。一から組み立てなければならぬが拡張性には優れている。どちらが真に優れているかは一概には言えないが、将来性が高いのは間違いなく自作のPC——サクリファイス達のほうだろう。

「以前戦った時も結局決着はつかなかったわ。今の私達でも完全に打ち倒すのは無理でしょうね。未だお会いしたことがないお姉様方ならどうにか……って所かしら——」

「はい、おしゃべりはそこまでにしてねーっ！ これから最高のショーが見られるんだからあゝ はむっ——」

呟くヴェルローズの言葉を遮るようにルナテラが言葉を挟む。

既に棒しかなかったペロペロキャンディを放り投げて、今度はチョコチップ・クッキーの箱を取り出す。いそいそと袋を破って、それを口に放り込んだルナテラは満面の笑みを見せた。

「んーっ！ おいしいーっ♪ あ、おりべのお兄ちゃんたちも食べる

うゝ？」

「い、いや……遠慮しておくよ」

「えーっ、美味しいのにいゝ……はむっ、もぐもぐ……」

小唄は独特の雰囲気流されそうになりながらも辞退する。投げ渡そうとしていたクッキーの袋を破り、ルナテラは少し残念そうにそれを口に運んだ。

流れを感じ取ったサクリファイスは、一際大きく距離を取りベリティエを対峙する。二人の差は一目瞭然だった。あれだけ激しく攻められていたにも関わらず、少女の衣装は最初の一撃を除いては汚れてすらない。逆にベリティエは攻め疲れの様相を示し、何度も床に叩き付けたせいで鉄の刃の所々が欠けてきていた。

「ギャラリィも望んでいるようですし、そろそろ終わりにしましょうか」

「フン……そうね。この一撃で仕留めてあげるっ——！！　ハアアアアア——！！」

前傾姿勢のまま構えを取るサクリファイスに、ベリティエは残された力を振り絞って“月桂樹”に“毒”を伝わらせる。渾身の力を込めて驚異的な速度で振り下ろされた“月桂樹”は完全に少女を捉えたかに見えた。

だが――

「な、に……！！！」

ベリティエの目には、サクリファイスが左にスライドしたようにしか見えなかった。ステップではない、完全なスライドだ。真横で見ていた小唄達の目には見えなかっただろう。そのまま、流れるような動作でベリティエの背後に着地したサクリファイスは彼女の足

首を水平に薙いだ。

「うぎっ——！！」

足首を斬られたベリティエが短い悲鳴を上げ、その場に倒れ込む。悪い切れ味が幸いしてか切断にまでは至らなかったが、サクリファイスの一撃は両足の腱と神経を完全に断ち切っていた。こうなればもう立ち上がることは出来ない。ルナティックの再生力を以ってしても神経を再接続させるのは長い時間が必要だった。

ルナテラは、勝者であるサクリファイスを拍手で出迎えた。

「うんうんっ、さっすがお姉ちゃん♪ 最高のショーだったよう♪」
「ありがとう、ルナ。次はあなたの番ですよ。さっさとこの塵を消し去ってくださいね」

「は〜いっ♪」

ルナテラが褒めたのにも関わらずに、無表情のまま暴言としか思えない言葉を吐くサクリファイス。しかしルナテラは笑顔で返事をすると、神経を断ち切られた痛みにもたもた悶えるベリティエの前に立つ。

——揺れる視界に幼女の笑顔が映る。

（あの子は何をする気なんだ……？）

笑顔すぎて逆に不気味に見えた小唄は、それを見た時から冷や汗が止まらない。これから起こるであろうことに彼は嫌な予感しかしなかった。

「う〜ん、べりちえのお姉ちゃんもキライじゃなかったんだけどお……パパとお姉ちゃんが望んでいるし、仕方ないよねっ♪ えーとお……霊素開放〜っ！」

気の抜けるような言葉と共にルナテラの周囲が変質する。小さな身体は白い光の如き靄に覆われ、そして背中に集中していく。光が凝縮し、変化が収まった時——その背中には緻密で機械質な一對の羽が生えていた。

『——!!』

不気味な力の流れをいち早く察知したサファイエは、小唄達の周囲に外部からの干渉を遮断する結果を展開する。少女の目には、ルナテラの羽から右手に集約されていく霊素の流れが視^みえていた。

「んーとお……この霊素とルナの力を合わせてつと——出来たあ♪」

おもちゃを組み立て終わった子供のように、ルナテラが嬉しそうに右手を掲げる。それは黒に塗られたボールのようなものだったが、ルナテラがそれをベリティエの頭上やや後方に投げつけた途端、強大な力を以って爆発的に拡がった。

「——!! 小唄くんっ!!」

「え? うぶっ——!?」

小唄の一番近くにいたアルトリイが彼を強制的に振り返らせて目を塞ぎ、耳をも塞ぐように胸に抱いた。これから起こる惨劇を見せない、聞かせないための最低限の配慮だった。サファイエはもとより気丈なヴェルローズさえも黒い空間の恐怖に身を震わせていたのだ——。

ベリティエはその場から逃げ出そうと必死でもがくが、臍を切られた両足では立つことすらままならない。せめてもの抵抗に、と想造した毒物をルナテラに放ってみたが障壁によって阻まれ、間もな

く消滅した。

「それじゃあー、バイバイ♪」

「あ……あああっ————」

（なんて勘違い……ッ！ ルナとは心を通わせていたと、少しでも思ってた……！！ でもコイツらは、コイツらは……アタシなんか足元にも及ばない程の、タダの——狂人ッ……——！！）

「————っっっ！！」

黒い空間から発せられる急激に引力によって身体が骨が軋む。読解不明の叫び声を上げながら、潰れかける眼球で彼女が見た最期の光景は、ターコイズの瞳を三日月型に噛わみながら手を振るルナテラと、無表情に見えて口元を歪ませながら嗤わらうサクリファイスの姿だった。

『あっ……』

「サファイー！！」

異常な引力によってひしゃげる頭部、身体からはみ出す臓物、体内の穴という穴から噴き出る血液——映画のワンシーンでしか起こり得ないような凄惨な光景を見て気絶したサファイエを、ヴェルローズは両手で受け止める。

「な、何これ……。一体、何があったの……？」

アルトリリイから開放された小唄が呆然と呟く。

饅すえた臭いを含んだ夜風が吹き抜ける——それだけが、先程まで“翠の毒牙” ベリティエがそこに居たという証明だった。

第十三話『旅立つ者、残される者』 Part. 2

「ベリティエが、消えた……」

アルトリリイが呻くように呟く。

呟きと共に、今思い出したかのようにベリティエの首に掛けられていたペンダントのトップが乾いた音を立てた。

「んゝっ……ま、こんなものかなっ？ 転がって範囲を外れたせいでひとつ痕跡が残っちゃったけどお」

「上出来ですよ、ルナ。塵に相応しい墓標です。何の問題もありません」

流し目で血と付着物に塗れたペンダントのトップを見ながら、サクリファイスは辛辣な言葉^{しんらつ}を吐く。少女の薄紫色の瞳は何の感情も映してはいない。しかし口元は未だに歪んだまま。ルナテラが戦闘形態を解除したのを見計らって、サクリファイスはヴェルローズに視線を向けた。

「さて――」

月夜を背にして歩き来るサクリファイスに対して、ヴェルローズ達はそれぞれの得物を想造して戦闘態勢を取る。先刻まで激戦を繰り広げていたヴェルローズはベリティエのワインで霊力と魔力はほぼ全快状態。片手剣の想造にしか霊力を使っていないアルトリリイ共々まだ十二分に戦う力が残されている。たとえ敵わなくとも小唄に危害が及ぶくらいならば――二人は刺し違える覚悟で望んでいた。

しかし、それを見たサクリファイスは、心外と言わんばかりの態度を見せる。貼り付けたような無表情のまま――。

「随分と嫌われたものですね……ご安心くださいな。今日の私達は“翠の毒牙”を処理しに来ただけで、あなた達をどうこうしようとしにきたわけではありません。ですが、社長ファルからの伝言を受け取ってもらいます」

――この頃から、小唄に新たな変化が生まれようとしていた。

「伝言？」／『536&3#7』

（――っ！？ 何だ、今の声……？）

ヴェルローズの声に重なって何を言っているのかも分からない言葉聞いた小唄は、思わず辺りを見回した。だが、周囲には彼の認める者の姿しかない。

（空耳かな？ いや、それにしてはヴェルの声にそっくりだったけど……分からない）

『ご主人さま？ どうしたの？』

「ああ、いや……なんでもないよサファイ。少しだけ疲れてるのかもね」

小唄は、意識を取り戻したサファイエに余計な心配を掛けないように努めて明るい声を掛け返す。視線を戻すと、代表として一步前に出たヴェルローズとサクリファイスが対峙していた。

「ええ、それではお受け取りください。社長ファル――ルードヴィグ・ヴ

「アンゲルードからの招待状です」

ヴェルローズは静かに差し出されたそれを乱暴に受け取り、即座に中身を検める。『親愛なる“闇の薔薇”ヴェルローズ殿下へ』と瑞典語^{スウェーデン}で書かれた封筒の中には、一枚の手紙とチケットのようなものが入っていた。

手紙は、時候や季節の挨拶の他は文字通りの招待状でそれ以外の余計なことは一切書かれていなかった。適当に流し読みしたヴェルローズはチケットのようなものをまじまじと見つめる。それは、通称で『ブラック・チケット』と呼ばれるVIP専用の航空券だった。一体どこまで見通していると言うのか、チケットは一枚で六人まで搭乗可能な代物だった。

「用意周到なことね……いいわ。ヴァンゲルードに伝えなさい。精々首を綺麗に洗って待ってなさい、とね」／『24A562632\$——43|>36R826&4423D50|265265G98L&3\$'3#5F』

再び、小唄の耳に二つの音声が届いてくる。今回は長めであった為か、人間の耳には酷いノイズにしか聞こえないその言葉は、より小唄を苛^{さいな}ませるだけだった。

「うう……あ、頭が……」

『ど、どうしたのっ!? ご主人さま!!』

ヴェルローズはサクリファイスと睨み合い。アルトリイはルナテラの動きに目を光らせており、唯一小唄の様子に気を配っていたサファイエは、頭を手で押さえながら顔を顰^{しか}める小唄にすぐさま駆け寄る。小唄は心配要らないよ、と目で語りかけながら、小声でサファイエに言った。

「う……サファイには、この変なノイズのような音が聞こえなかったの……？」

『変なノイズ？ ううん、何も聞こえなかったけど……』

「そ、そう……じゃあ気のせいかもね……」

サファイエに言いながら、小唄は内心では正反対のことを考えていた。

（気のせいでも、空耳でもない。この声は確かにヴェルから聞こえてきてるんだ……でも、一体誰の声なんだ……？）

「分かりました。その言葉、確かに伝えましょう。——ルナ、帰りますよ。それでは——God N a t t」

「あ、はい。お姉ちゃん♪ バイバイ、まったあとでねっ♪」

出会った時の無表情のままヴェルローズの横を歩き去ろうとするサクリファイスに、ルナテラも対照的な笑顔で手を振りながら続く。そのサクリファイスは小唄の横で立ち止まり、未だ手で頭を押さえている彼に無機質な薄紫色の瞳を向けた。

「な、何かな……？」

「私がわざわざ言うことでもないのですが、織部小唄さん……真実を知りたくば、あなたも“闇の薔薇”達と共に来たほうがよろしいでしょう」

「え、それってどういう——」

「詳しいことは“闇の薔薇”からでも聞いてくださいな」

小唄の驚きに素っ気なく答えたサクリファイスは軽く会釈をして、ルナテラと共に闇の向こうへと消えていった。そこで小唄の様子に

ようやく気づいたヴェルローズが声を掛ける。

「小唄、どうしたのかしら？」

「ん……大したことじゃないんだけど、少し頭が痛くて——あれ？」
「……あれ？」

（今度はあの声が聞こえなかった。どうして……？）

小唄はヴェルローズを見て、僅かに顔を顰めながらも笑顔を作った。

「小唄くん、本当に大丈夫？　なんだか顔色が悪いよ？」

（ん……アルトからはあの声が聞こえてこない。もしかして、ヴェールと目を合わせている時にだけ聞こえるのか？）

「う、うん……大丈夫だから。心配させてごめんね。それよりも、ヴェール……さつきサクリファイスが言った言葉、あれは一体どういうこと？」

「そうね……じきしやうぞう時期尚早だけど、もう隠し通しても仕方ないわね。小唄の家に戻りましょう。これ以上、ここにいても意味がないわ——」

この時、小唄はヴェルローズから目を逸らせていた——。

——そして、現在。

「——小唄？　聞いているのかしら……？」

ヴェルローズの鋭い声に、あらぬ方向に向けられていた小唄の意識は無理矢理覚醒させられた。

小唄は不審に辺りを見回す。織部家のリビングにはリリムを除く皆が集まっていた。

（そうだ。今は今後について話をしている途中だった）

「だ、大丈夫……聞いてたよ。僕の母さんが実は『鈴鳴』という凄い魔力を持った家系の人で、僕はその血を引いてるから魔力を扱えるってことだね？　もう、何に驚いたらいいのか分からないよ……」

小唄はヴェルローズを見ながら、しかし時々視線を外しながら言った。あの声が、彼女と目を合わせながら会話している時にのみ聞こえてくるものと気づいた小唄の対処法だった。ヴェルローズもまた、会話の所々で目を逸らす小唄に不審と軽い苛立ちを覚えていたが、今は何も言わずに会話に合わせていた。

「まあまあ。小唄君もお疲れなのでしょう。はい、どうぞ」

台所から人数分のお茶を淹れてきたリリムが小唄の前にコップを置く。

「ありがとうございます、リリムさん」

軽く礼を言って小唄は冷たい麦茶を口にする。冷えた液体が喉を通るたび、ぼんやりしていた意識が覚醒していく。その様子にリリムは微笑みながら、それぞれの席にコップを置いて自分の席に座った。

「驚いたのは私も同じよ。『鈴鳴』の名前は瑞典にも聞こえてきていたわ。小唄の出生には何かある、とは前から思っていたけれど……まさか『鈴鳴』の直系に連なる者とは思わなかったわ」／『Σ 3 6 T 4 \$. . . 5 S 4 D 6 8 & . . . C 0 3 4 9 6 # ' . . . - Σ \$ Λ Δ Ω 5 5 2 . . . & 9 8 3 S 3 A . . . 』

聞こえてくる二重音声の片方を、小唄は時折目を逸らして負担を減らす。音声が途切れ途切れになるが、元々読解出来ない言葉を聞き取れなくなろうとも何の問題もない。

「話は分かったよ。それで、ヴェルはどうするの？」

それまで、話に耳を傾けながらテレビを観ていたティーカが聞く。ヴェルローズは軽く頷いて、テーブルの上の封筒を開けようとして、突如その手を止めた。音はない、だが確かに感じられた動く者の気配。ヴェルローズは気配のした窓に向かって叫ぼうとしたが、気配察知能力は妹であるアルトリリイのほうが上だった。

「――誰っ!？」

鋭い声を上げて、窓のカーテンを開くアルトリリイ。しかし、そこには夜の闇があるだけで人影はおろか、人がいた形跡の一つもなかった。

「あれ？ 今、誰かがいた気がしたんだけどなあ……気のせいかな？」

「いえ、気のせいではありませんね。私も確かに感じました」

「私もよ。ただ……死舞人形でもルナティックでもない感じだったわね。多分、只の人間だわ」／『5 6 H | 4 . . . R 8 4 3 Y . . . & E 3 3 0 9 # 5 . . . Π 7 ' 3 B 3 B 6 4 5 \$. . . 』

三人が察知した気配について話をしている中、ティーカだけは何があったのか分からないのか首を傾げていた。

小唄は頭痛と格闘中。祐治は考え事をしているのか無言だった。そしてサファイエは――

『大丈夫。誰もいなかったよー』

いち早く外を確認して戻ってきた。ただの通りすがりだったのかもしれない、そう結論付けた三人はそれぞれの席に戻る。しかし、心当たりがあるヴェルローズは晴れない顔つきを崩さない。

（ヴァンゲルーデの手の者か、色々話してしまったし『黎明』の手の者とも考えられるわね。まあ、この家にいるうちは強引な手段に出ることはないでしょう……）

一度周囲を見回したヴェルローズは、封筒の中からブラック・チケットを取り出してテーブルの中央に置いた。

「話を続けるわね。このチケットは一枚で六人まで使えるわ。期限は明日から二週間以内よ。当然、私とアルトは行く。あいつらと決着をつけないければ先には進めないわ」／『>645C\$・・・OT653X・・・|T2↓14#V・・・V3T99A・・・F4N325¥E・・・⇒N#』

向けられた視線にアルトリリイは頷き返す。コップの中の麦茶を一口飲んでリリムは軽く溜息――いつも通りに優しく微笑みながら小さく手を上げた。

「私達も付いていきますわ。ね、ティーカ？」

「うんうん♪ ボク達も一緒に行くよっ！」

「良いのかしら。これは貴女達には関係のないことなのよ？」／『5G66#7|・・・2Y33&N5T・・・5#7』

片眉を上げながら聞くヴェルローズに、リリムは微笑みを絶やさないまま答える。

「前もってティーカと決めていたことですし。それに――」

「それに？」

「可愛い妹達が困っていたら、それを手助けするのが姉の役目ですよ。うふふ」

「ふふ、そうね。ありがとうリリム、ティーカ」／『5H6F, 5\$・・・39T6H・・・L3A&, T2E』

癖とも言える、口元に指を当てて微笑むリリム。実に彼女らしい、とヴェルローズは思い、笑みを返した。

「祐治さんはどうするのかしら？」／『3M57R, Y・・・85W4#7』

それまで無言でいた祐治だったが少し考えてから、

「……話を聞く限りだと、ヴァンゲル―デ製薬というのはかなり大きい組織みたいだな。少し気になることもあるし、僕は日本に残ることにするよ」

と、言ってコップを手を取った。

当然、祐治の言葉を批判する者はいなかった。彼は、有事の際に一役買ってくれると言っているのだから。

「分かったわ。勿論、小唄は付いてきてくれるのよね？」／「OK
| 4 6 2 \$. . . 3 S 5 5 X ⇒ V # 7」

「……」

ヴェルローズの言葉に、皆の視線が未だ頭を手で押さえている小唄に集まる。視線に気づいた小唄は慌てて姿勢を直し、皆と向き合う。その表情は、何かを決心した時のように引き締まっていた。

（もう、考えるのはやめよう。それに……何故か、この“言葉”もだんだん分かってきたし……ここで逃げてでも仕方ない――！）

「先に祐治さんの話を聞いて、ヴェルとアルトの目的と僕の目的は繋がっていることが分かった。それなら、終着点も同じということ。自惚れるわけじゃないけど、ヴェル達にはドール・マスターである僕が必要だろうし、当然ヴェル達に付いていくよ」

言い切って小唄はヴェルローズの目を見た。先程までのように時折逸らしたりすることもない。

赤い瞳で小唄を見つめ返すヴェルローズ。彼の意志には一点の濁りも感じられなかった。

「そうね。ありがとう、小唄」／『5 2 S 0 4 \$ N | 2 T 3 3 H 8
K, C O U T A』

ヴェルローズは彼女らしい、そして一番の笑顔を見せて小唄に笑いかけた。

もしかしたら、小唄は付いてきてくれないかもしれない――それを最も恐れていたのは彼女自身に他ならなかった。“死舞人形との契り”を交わした時点でそのようなことはありえないと分かっている

ながらも、心は不安だったのだ。

——その後の話し合いで、出発はアルトリリィが全快してからと決まった。

もう深夜とも言える時間。皆、寝る仕度をしてそれぞれ割り当てられた部屋に戻っていく。

話はこれで終わりのはずだった。だが——この二人に限っては、まだやるべきことが残っていたのだ。

皆と同じように、小唄も自分の部屋に戻ろうとした時のことだった——。

第十三話『旅立つ者、残される者』 Part. 2 (後書き)

God N a t t ↓ おやすみなさい

第十三話『旅立つ者、残される者』 Part. 3

「小唄、ちょっと来なさい」

「え、ヴェル？ ちょっと――」

部屋のドアノブに手を掛けようとした小唄の手をヴェルローズは無理矢理取って、自分の部屋に引きずっていく。がっしりと掴まれた手を振りほどくことも出来ずに、小唄はベッドへと放り込まれた。なおも逃げようとする小唄にヴェルローズは派手な音がする勢いで両手をつく。そのあまりの剣幕にサファイエは既に小唄の中に避難していた。

「小唄、いい加減になさい！ どうして、さっきからちゃんと私の目を見て話さないのっ!？」／『C O U T A , 5 6 8 R 3 D \$ 2 # 1 | 6 D Π 7 , 4 S 5 4 \$ V 8 T 4 ⊕ 9 2 E 5 3 & F 3 \$ ∙ X # 1 # 7 』

「お、お願いだからそんな近くで話さないで……あ、頭が……!」

顔を両腕の間に挟まれていては動かすことも出来ない。小唄はその声を真正面から聞くことになり、苦痛に顔を顰めさせた。

「頭が？ だからその理由を説明っ――!？」／『5 3 H # 7 | 8 2 W 6 3 \$ 2 G 4 5 & ― # 1 # 7 』

（ちょっと待って……この子もしかしたら――）

ヴェルローズは小唄の変化に気づいてはいたが先程までは常に他に誰かいて、彼に集中することは出来なかった。しかし、今は二人きり。精神を集中させて波長を合わせれば、その理由が手に取るように分かった。

怯える小唄を前にヴェルローズは視線を外さずに、魔力の籠った紅い瞳で彼の目を見る。目で行使する魅了^{チャーム}魔術の応用で小唄の波長を合わせ、同調させようとしているのだ。やがて、小唄の表情も大分落ち着いたものになってきたのを見計らってヴェルローズは彼に一つの問いを出した。

「小唄、私が今から言う言葉を貴方の言葉で言ってみなさい」／『
——VG，5TOP——』

「う、うん……分かった」

「行くわよ……。『37C329\$2|42&90L\$|COU+
4&N0\$—3A—<A—3A—<A#1』」

「——!」

「さあ、小唄。これを貴方の言葉で言ってみなさい」

ヴェルローズが言った言葉は紛れもなくあの言葉だった。だが今までと違って酷いノイズのような二重音声の片割れではなく、読解しにくくはあるが言葉として聞き取れるものだった。怯えも震えも消えた小唄はそれを冷静に一つずつ答えていく。

「んーと……『おはよう。こんばんは。小唄のバーカバーカ!』?
……って誰が馬鹿だよ!——あれ? いつの間にか頭痛いのが
治ってる……どうして?」

「やっぱり、こういうことだったのね。小唄、貴方……“フルツカ
ミヨ”の言葉が理解^{わか}るのね?」

「“フルツカミヨ”? この前ヴェルが話してくれた昔話の?」

小唄は以前の昔話の内容を脳裏に思い浮かべる。

「そう。先程の戦いの中で貴方は更に覚醒した。それが『人形の心をより高度に読解する能力』と『フルツカミヨ』の言葉を理解する能力』。そして、小唄の頭痛の原因……それは貴方が“フルツカミヨ”の言葉を拒絶していたからよ」

「拒絶……していたつもりはないんだけどな……」

確かに小唄は“フルツカミヨ”の言葉を拒絶していたわけではなかった。そう、身体は理解しようとしていたが心は――

「ええ、きっとそうなのでしょうね。でも身体が理解しようが、たとえ心の一片でもそれを拒めば抵抗として跳ね返るわ。今は形亡き“フルツカミヨ”は言わば精神にのみ存在する世界。人間には受け入れがたい抵抗が小唄の脳に負担を掛けていたのよ。だから私は貴方に一種の魔術を掛けて受け入れやすい状態にした」

そこまで言ってヴェルローズは一つ息を吐くと、瞼を閉じて静謐せいひつする。すると彼女の体から赤と黒の光が溢れ、辺りに拡がり始めた。

「――“憎悪”の思慕石が管理者“闇薔薇の姫”。マスター小唄とヤバンスカの日本語での直接会話を許可するわ」

凜としたよく通る声でヴェルローズは言った。すると、小唄の頭に彼女に瓜二つといって良い程に酷似した声が直接聞こえてきた。

『了解しました。今よりマスター小唄との直接会話を解禁します』

「ええ、ええ……！？」

小唄はどこからか聞こえてくる声に周囲を見回すがそれで何か分

かろうはずもない。当然だろう、その声はヴェルローズの体内に在る思慕石から聞こえてきているのだから。しかしヴェルローズはそれを説明することもなく、眠気をアピールするかのよう^{あくび}に欠伸をする。

「詳しいことは明日“闇薔薇の姫”に聞きなさい。それと、小唄。明日あの子に暫しの別れを告げてきなさい」

「あの子……二色野さんのこと？」

「ええ、そうよ。ふああ……何か今日は戦闘のしすぎで疲れた……わ。おやすみ……なさい……」

「ちょ——ヴェル!？」

ヴェルローズは狼狽する小唄を余所に、彼を押し倒した状態で早くも寝息を立てていた。その理由を知っている“闇薔薇の姫”は目には見えないがやや瞼を伏せながら、穏やかに呟いた。

『無理ありません。ヴェルローズ様が行使された“幻象世界”……あれは術者の精神に多大な負担を強いるのです』

「“幻象世界”……？」

『それも含めて明日お話ししましょう。マスター小唄も私の言葉の影響で大分精神がお疲れでしょう。早くお休みになられてください。それと、私との会話は直接声に出さなくとも大丈夫です』

小唄の投げ掛けた疑問には答えずに“闇薔薇の姫”は彼にも就寝を促す。

「う、うん……分かった。おやすみ」

『おやすみなさい。良い夢を』

そう言うのと部屋の灯りが消える。種がないマジックを思わせる変

化だが、“闇薔薇の姫”が魔術か何かを行使したのだろう、そう思った小唄は眠気を己に誘うように瞼を閉じた。

（二色野さんになんて言って納得してもらおうか。多分……何を言っても納得しないんだろうな。……今考えても仕方ないか。早く寝よう）

しかし――

（とは言ってもこれじゃなかなか眠れないよ……誰か助けてー）

「ヴェルローズ闇の薔薇」と「ニルヴィス・ローザリイ闇薔薇の姫」――二人のヴェルローズに抱かれているような気がして悶々としていた小唄が寝付いたのは、それから二時間程後のことだった。

――翌日の午後。

夏らしい陽光を照りつける太陽の下、小唄は炎天下で今にも陽炎が立ち昇りそうな道路を歩いていた。その横を通り過ぎていく人々が玉汗を流す中、彼の額には汗が滲んでいる程度。それもそのはずで、小唄は秘密裏に魔力で自分の周囲に冷気を作って冷房代わりにしていた。

彼の首元では、昨日まではなかった紫と黒の不気味な宝玉が飾られたペンダントが煌いている。いつもは小唄の側を飛び回っているサファイアエはと言うと、暑いのは嫌らしく小唄の中で昼寝中だった。

『まず始めにですが、ここでの会話をヴェルローズ様に聞かれることは一切ありません』

『分かった。それじゃあ、まずは自己紹介から始めようか』

小唄は就寝前に“闇薔薇の姫”が言ったとおりに直接語りかけるように言う。

『そうですね。それでは――私はヴェルローズ様の“憎悪の思慕石”を管理し、統括する核的存在。名を“ニルヴィス・ローザリイ 闇薔薇の姫”と申します。とは言っても便宜上付けられた名前ですので好きにお呼びください』
『ニルヴィス・ローザリイかあ……呼ぶならニルがいいかな？ それともローザがいいかな？ うーん……ローザリイのほうが名前っぽいからローザって呼ぶね。僕は織部小唄。小唄って呼んでいいよ。よろしくね、ローザ』

近くにヴェルローズがいなくとも小唄の頭に直接響く“闇薔薇の姫”の声は澄んで聞こえる。それは小唄と“闇薔薇の姫”が一本の見えない、切れない、ほぼ無限に伸び縮む精神体の糸で繋がっているからだった。

『それでは小唄様と呼ばさせていただきます。こちらこそよろしくお願い致します、小唄様』

『こ、小唄様って……なんかこそばゆいから呼び捨てじゃ駄目？』
『はい。マスターを呼び捨てにすることなど出来ませんので』

小唄は人差し指で頬を掻きながら言ったが、これには“闇薔薇の姫”としての矜持きやうじがあるらしく頑なにして譲らない。何度か同じやり取りをする二人だが結果は同じ。小唄は諦めて様付けに慣れることにした。

『うーん……分かったよ。それで、ローザは普段どんなことをしてるの？』

『何をしているのかと聞かれますと少し困りますね……。先程も申

し上げた通り、ヴェルローズ様の思慕石を管理、統括するのが私の仕事です。ですがこれらは思慕石そのものがやってくださいますので、私の仕事といえば思慕石では解決し得ない想定外イレギュラーの出来事の解決と、ヴェルローズ様の魔力や霊力等が枯渇しそうになった時に警報アラートを出すくらいですね。何もない時はお茶を飲んでいたりしています』

今の小唄はどんなに小さなことでも聞き逃さない。そこで彼はすかさず疑問を投げ掛ける。

『お茶？　もしかして、思慕石の中にも家とかあったりする？』
『その通りです。ああ、そういえば今の状態では声しか聞こえないのでしたね。分かりやすいように魔術で幻影ヴァイジョンを投影致しますね』

“闇薔薇の姫”がそう言うと、小唄の脳裏に給仕風の服装以外はヴェルローズに酷似した少女と大理石の家——というよりは東屋に近い——が映し出された。そして背景には大理石の柱に茨を巻きつけて咲く薔薇と、赤土のような紅い空があった。

『うわぁ……予想はしてたけど本当にヴェルそっくりなんだねー』

精巧な人形の如く整った顔、流れるような金糸、紅い瞳——服装が同じであれば、知っている者は十人が十人ヴェルローズ本人と見紛うに違いない。

『それはそうです。ヴェルローズ様と私は元々同じ存在なのですから。ヴェルローズ様とは性格のほうは大分違われますけれど、この服も私の趣味で作ったものですし』

と、少しはにかみながら微笑む“闇薔薇の姫”。彼女にもそれな

りの感情があることに良い意味での溜息を吐いた小唄は、歩行者用の信号が青に変わるのを待ちながら気になっていた事について問い掛けた。

『背後に見える空……何か紅く見えるんだけど、ローザのいるそこはどんな場所なの？』

『……やはり、気になりますか。そうですね、そろそろ“幻象世界”について説明をと思っておりまし、良い機会ですのでお話致します』

『うん、お願い。ローザ』

信号が青になる。小唄は横断歩道を渡りながら、“闇薔薇の姫”が話し始めるのを待った。

ファンタズマゴリア

『——“幻象世界”とは、“フルツカミヨ”に“白き神々の宮”と共に封印された十の世界のことです。実体は既に無く、顕界からでは如何なる手段を以ってしても確認することは出来ません。私が居る場所は“幻象世界”の一つである“憎悪の煉獄庭園”ですが、この“幻象世界”は本物に似せて造った模造品です』

『え？ それじゃあ……ヴェルが行使したっていう“幻象世界”は一体……』

“闇薔薇の姫”の説明を聞いて小唄は息を軽く詰まらせて思わず立ち止まる。街中を道行く人が彼に不審の目を向けるがそれも一瞬のこと——我関せずと通り過ぎてゆく。

『はい。ヴェルローズ様が行使された“幻象世界・憎悪の煉獄庭園”は、とある次元の奥深くに封印されている本物です。顕界では如何なる手段を以ってしても確認できない、と申し上げましたが、“死舞人形との契り”——それも“正室の契り”を交わした“オリジン原初”

だけが例外的に『世界召喚術』という形で行使することが出来るのです』

『世界召喚術……そんな大掛かりな術だからヴェルはあれだけの事前準備をしてたんだね』

小唄は小さく頷きながら再び歩を進める。目的地まではあと五分以内といったところだろうか。その看板だけは遠くに見えてきていた。

『小唄様の仰る通りです。“原初の八体”によって行使出来る“幻象世界”はそれぞれ異なりますが、その何れもが膨大な魔力、霊力、精神力の消費、そして強大な代償^{ペナルティ}が付きますといいます。気軽に扱って良い物ではありません』

『なるほど……確かに恐ろしい……——っ!?!?』

(ちよつと待って……何か、数が合わない……?)

小唄は“闇薔薇の姫”の会話を続けながら空いている脳内で思考^{マルチタスク}を並列処理する。答えを弾き出した小唄はすぐさま“闇薔薇の姫”に疑問を返す。

『あのさ、ローザ。“原初の八体”が“幻象世界”を行使出来るのは分かったよ。けど、それだと残り二つの“幻象世界”は一体何なの?』

小唄の問いに“闇薔薇の姫”は困惑の表情を見せて静かに答えた。

『……分からないのです』

『え?』

『“原初”が全部八体居るのも、“幻象世界”が十あるのにも間違

いはございません。ですが、“幻象世界”の内の九番と十番については私の記憶は勿論、他の誰の記憶にも刻まれていないのです……」

『全く正体不明な、誰も知らない世界ということ？』

『はい。恐らくそれを知るのは唯一人でしょう』

それを知るのは唯一人——小唄はその言葉を内心で反芻する。その一人について心当たりがある小唄だったが、言葉にすることは出来なかった。良く知りもしないでその名前を口にするのは、ある種の無礼に相当する気がしたからだ。

『あの、小唄様……』

突如“闇薔薇の姫”は悲しみを浮かべた表情になり、言い辛そうに小唄を見る。

『どうしたの？ ローザ』

優しく言葉を掛ける小唄に“闇薔薇の姫”は、何かを決心した表情を見せてはつきりとした口調で言った。

『お願いがあります。ヴェルローズ様にこれ以上“幻象世界・憎悪の煉獄庭園”を使わせないでいただきたいのです』

『え、それはどうい——』

驚きと共に小唄の足は目的地の前で止まる。詳しく話したくないのか、それともまだ話せないことなのか、小唄が問い掛けてもそれ以上の反応は返ってこなかった。

「……」

やがて脳裏に映し出されていた“闇薔薇の姫”の姿もその背景も見えなくなり、追究を諦めた小唄は目的地を見上げた。

これ見よがしに装飾された看板には、この場所がアクセサリー・ショップであることを示している絵が描かれていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8344t/>

死舞人形・零

2011年11月14日19時28分発行